四国横断自動車道建設に伴う

埋蔵文化財発掘調査報告

第四十三冊

樋端遺跡

2002. 12

香川県教育委員会
財団法人香川県埋蔵文化財調査センター
日本道路公団
香川県土木部

四国横断自動車道建設に伴う

埋蔵文化財発掘調査報告

第四十三冊

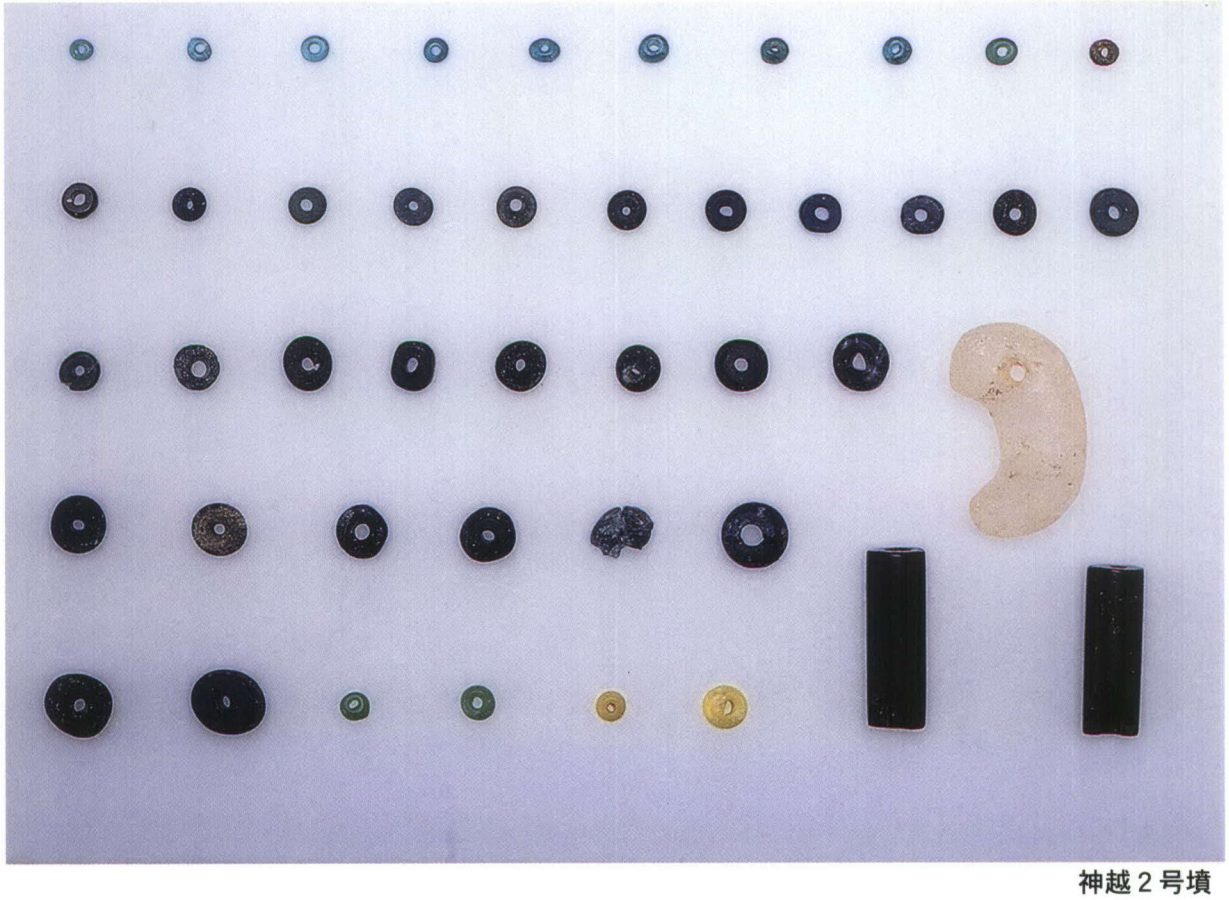
樋端遺跡

2002. 12

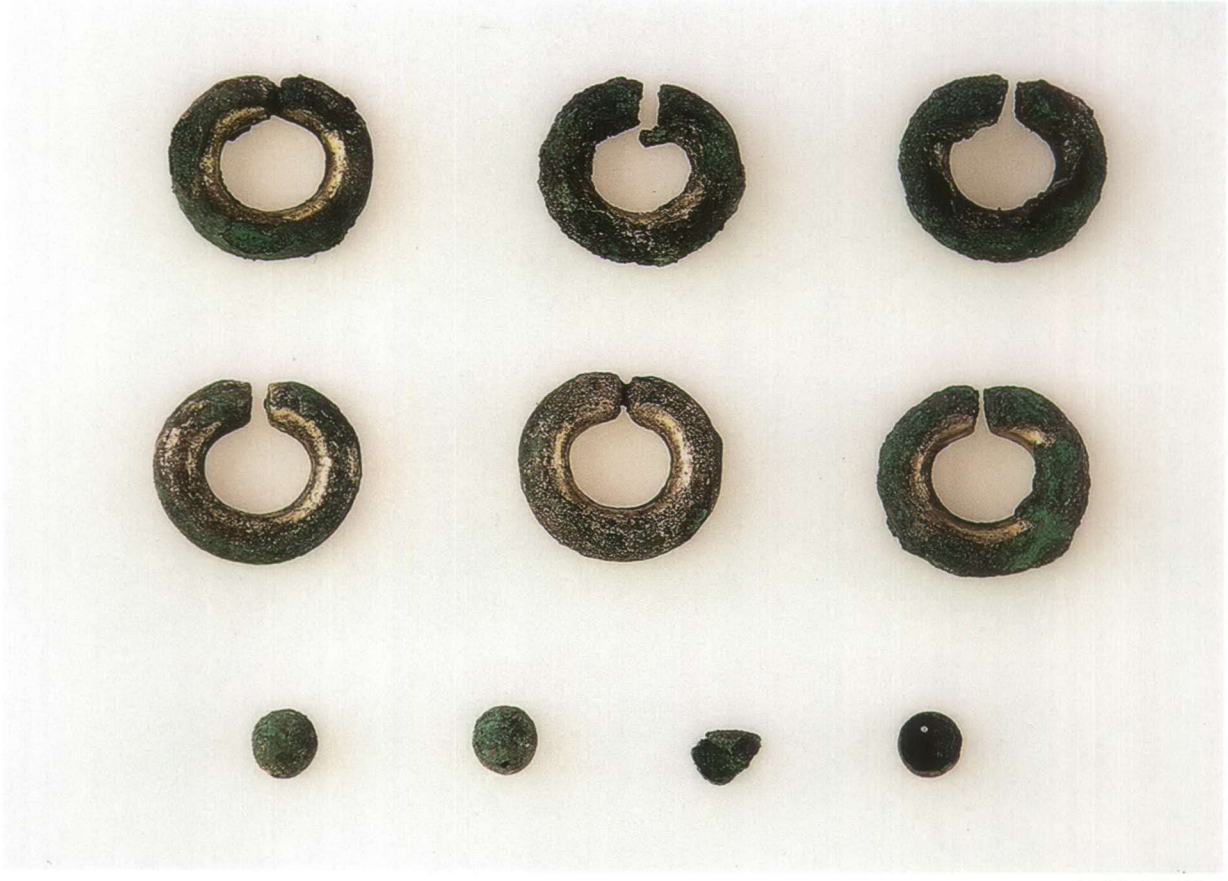
香川県教育委員会
財団法人香川県埋蔵文化財調査センター
日本道路公団
香川県土木部

巻頭図版 1

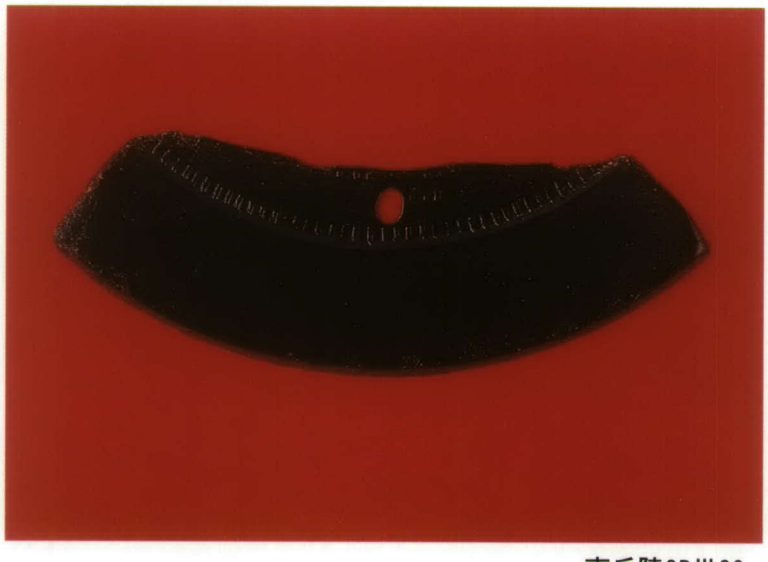
神越 2 号墳



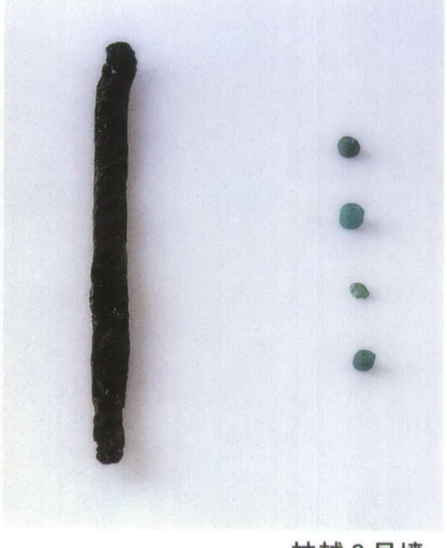
神越 2 号墳



神越 2 号墳



南丘陵SP III 06



神越 3 号墳

序　　文

四国横断自動車道（津田～引田）は、県内の高速道路網の完成を目指して、平成５年度の施工命令以後、継続して進められ、平成13年春に完成いたしました。

この道路の建設に先立ち、財団法人香川県埋蔵文化財調査センターでは、香川県教育委員会の委託を受け、平成８年度から埋蔵文化財の発掘調査を実施してまいりました。また、発掘調査と並行して、平成11年度からは出土品の整理を実施しております。

このたび「四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告　第四十三冊　樋端遺跡」として刊行いたしますのは、大川郡白鳥町西藤井・寺前に所在する樋端遺跡についてであります。

樋端遺跡では、土器棺墓41基、土壙墓28基、台状墓が検出されるなど、大内町と白鳥町の両町境にある当該丘陵は弥生時代から古墳時代にかけて墓域として利用され、この地域の歴史を知る上で重要な遺跡であることが解りました。

本報告書が香川県の歴史研究の資料として広く活用されますとともに、埋蔵文化財に対する理解と関心が一層深められる一助となれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査から出土品の整理・報告にいたるまでの間、香川県教育委員会、日本道路公団及び関係諸機関並びに地元関係各位には多大な御援助と御協力をいただきました。ここに深く感謝の意を表しますとともに、今後とも御支援を賜りますようお願い申し上げます。

平成14年12月

㈶香川県埋蔵文化財調査センター
所長　小原　克己

例　　言

1．本報告書は四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書の第四十三冊で、香川県大川郡白鳥町西藤井・寺前に所在する樋端遺跡（といばな　いせき）の報告を収録した。

2．発掘調査は香川県教育委員会が日本道路公団から委託され、香川県教育委員会が調査主体、財団法人香川県埋蔵文化財調査センターが調査担当者として実施した。

3．発掘調査の期間及び担当は以下のとおりである。

樋端遺跡

予備調査　期間　平成10年

担当　片桐孝浩、松岡宏一、多田　歩

本調査　期間　平成10年12月１日～平成11年３月31日

担当　片桐孝浩、松岡宏一、森澤千尋

期間　平成11年９月１日～平成11年10月31日

担当　長元茂樹、松岡宏一、中山尚子

4．調査にあたって、下記の関係諸機関の協力を得た。記して謝意を表したい。（順不同、敬称略）

香川県土木部横断自動車道対策総室、同長尾土木事務所横断道対策課、大内町横断道対策室、大内町教育委員会、白鳥町教育委員会、地元自治会

5．本報告書の作成は、財団法人香川県埋蔵文化財調査センターが実施した。

本報告書の執筆・編集は片桐孝浩が担当した。

6．本報告書で用いる方位の北は、国土座標系第Ⅳ系の北であり、標高はＴ．Ｐ．を基準としている。また、遺構は下記の略号により表示している。

ＳＨ…竪穴住居　　ＳＴ…土壙墓　　ＳＦ…炭竈　　ＳＫ…土坑　　ＳＤ…溝状遺構

ＳＸ…不明遺構　　ＳＰ…柱穴

7．石器実測図中、薄く黒く表現している部分は摩滅痕を、輪郭線の回りの実線は潰れを、同じく破線は顕著な研磨あるいは摩滅を、同じく点線はあまり顕著でない研磨あるいは摩滅をそれぞれ表す。なお、現代の欠損は濃く黒で潰している。石器石材は特に表記がない限り、サヌカイトである。

8．挿図の一部に国土地理院地形図　三本松（1/25,000）、大内町・白鳥町全図（1/10,000）、大内町都市計画図（1/2,500）を使用した。

9．本遺跡の報告にあたっては、下記の機関等に分析を依頼・委託した。

須恵器の胎土分析……大谷女子大学　三辻利一

遺物の写真撮影……有限会社　ウェーブ

鏡の分析……㈶元興寺文化財研究所、東京国立文化財研究所保存科学部

10．遺構断面図の水平線上の数値は、水平線の標高値（単位m）である。

11．土器観察表の中の色調は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修『新版標準土色帖　1992年度版』を使用して表す。また、残存率は遺物の図下部分に占める割合であり、完形品に対する割合ではない。

第１図　遺跡位置図

本文目次

第１章　調査の経緯…… 1
　第１節　調査にいたる経過…… 1
　第２節　調査の経過と体制…… 2
　　１　調査の経過…… 2
　　２　発掘調査及び整理作業の体制…… 2

第２章　樋端遺跡の調査…… 5
　第１節　予備調査…… 5
　第２節　本調査区の確定と調査の方法…… 11
　第３節　調査の成果…… 13
　　第Ⅰ調査区…… 13
　　１　樋端古墳について…… 13
　　２　樋端１号墳…… 13
　　３　樋端２号墳…… 18
　　第Ⅱ調査区…… 26
　　１　樋端遺跡…… 26
　　２　北側丘陵樋端遺跡…… 26
　　３　神越２号墳…… 48
　　第Ⅲ調査区…… 71
　　１　南丘陵樋端遺跡…… 71
　　２　神越３号墳…… 149
　　３　包含層出土遺物…… 158

第３章　自然科学分析の結果…… 159
　第１節　樋端遺跡・金毘羅山遺跡出土遺物の分析について…… 159
　　１　調査対象…… 159
　　２　調査手順…… 159
　　３　使用機器及び測定条件…… 159
　　４　結果…… 159
　第２節　香川県樋端遺跡および金毘羅山遺跡から出土した破鏡についての鉛同位体比…… 167
　　１　はじめに…… 167
　　２　資料…… 167
　　１）　樋端遺跡出土破鏡…… 167
　　２）　金毘羅山遺跡出土破鏡…… 167

3　分析法…… 167
1）　鉛同位体比法による青銅原料の産地推定…… 167
2）　鉛同位対比の測定…… 168
4　鉛同位対比の結果と考察…… 168
1）　鉛同位体比法測値…… 168
2）　考察…… 168
5　引用文献…… 169

第４章　まとめ…… 171
第１節　樋端遺跡の土坑墓・土器棺墓について…… 171
1　造墓意識の違い…… 171
2　土坑墓・土器棺墓の主軸方位について…… 171
第２節　原間地区・樋端地区の中期古墳について…… 173
1　古墳築造順序と築造場所…… 173
2　埋葬形態について…… 176
3　東西主軸の形骸化…… 176
4　大内町・白鳥町の中期古墳について…… 176
第３節　須恵器出現前後の土師器について…… 182
1　各期の様相…… 182
Ⅰ期…… 185
Ⅱ期…… 185
Ⅲ期…… 186
Ⅳ期…… 187
Ⅴ期…… 188
Ⅵ期…… 190
2　土師器高杯の様相…… 190
3　土師器高杯の形態・法量変化…… 191
4　土師器高杯Ｂの系譜…… 191
5　７世紀（ＴＫ２１７型式併行期）に盛行する土師器高杯までの系譜…… 193

挿図目次

第１図　遺跡位置図
第２図　周辺遺跡位置図…… 4
第３図　樋端遺跡予備調査トレンチ配置図…… 6
第４図　樋端地区予備調査
　トレンチ土層断面図①(1/40，1/80)…… 7
第５図　樋端地区予備調査
　トレンチ土層断面図②(1/40)…… 8
第６図　樋端地区予備調査
　トレンチ土層断面図③(1/40)…… 9
第７図　樋端地区予備調査
　トレンチ土層断面図④(1/80)…… 10
第８図　樋端遺跡調査区配置図…… 12
第９図　樋端第Ⅰ調査区地形測量図(1/300)…… 14
第10図　樋端１号墳・２号墳土層断面図(1/40) …… 15～16
第11図　樋端第Ⅰ調査区遺構配置図(1/300)…… 17
第12図　樋端１号墳平面図(1/100)…… 18
第13図　樋端２号墳平面図(1/100)…… 19
第14図　樋端２号墳南側周溝遺物出土状況図(1/30) …… 21
第15図　樋端２号墳主体部平・断面図(1/20)・
　出土遺物実測図(1/2)…… 22
第16図　樋端２号墳出土遺物実測図(1/3)…… 23
第17図　樋端第Ⅱ調査区地形測量図(1/150)…… 27～28
第18図　樋端第Ⅱ調査区土層断面(1/40) …… 29～30
第19図　樋端第Ⅱ調査区遺構配置図(1/150)…… 31～32
第20図　台状墓遺構配置図(1/100)…… 33
第21図　STⅡ01平・断面図(1/40)・
　出土遺物実測図(1/4)…… 36
第22図　STⅡ02平・断面図(1/40)…… 36
第23図　STⅡ03平・断面図(1/40)…… 33
第24図　STⅡ03出土遺物実測図(1/3)…… 33
第25図　STⅡ04平・断面図(1/40)…… 33
第26図　STⅡ05平・断面図(1/40)…… 37
第27図　STⅡ06平・断面図(1/20)…… 38
第28図　STⅡ07平・断面図(1/20)・
　出土遺物実測図(1/4)…… 37
第29図　STⅡ08平・断面図(1/10)…… 39
第30図　STⅡ08出土遺物実測図(1/4)…… 40
第31図　STⅡ09平・断面図(1/10)・
　周溝土層断面図(1/20) …… 41
第32図　STⅡ09出土遺物実測図(1/4)…… 42
第33図　STⅡ10・11出土遺物実測図(1/4)…… 44
第34図　STⅡ12平・断面図(1/10)・
　出土遺物実測図(1/4)…… 45
第35図　STⅡ13出土遺物実測図(1/4)…… 46
第36図　樋端第Ⅱ調査区土壙墓・土器棺墓位置図・
　土器片出土位置図(1/400)…… 47
第37図　神越２号墳平面図(1/100)…… 49
第38図　神越２号墳土層断面図(1/40) …… 51～52
第39図　神越２号墳玄室羨道部平・立面図(1/40)…… 53～54
第40図　神越２号墳玄室土層断面(1/40) …… 55～56
第41図　神越２号墳玄室内遺物出土状況図(1/20) …… 57
第42図　神越２号墳基底石・床石検出状況図(1/40) …… 58
第43図　神越２号墳玄室内遺物出土位置図・
　木棺推定復元図(1/20) …… 60
第44図　神越２号墳出土遺物実測図その①(1/2)…… 61
第45図　神越２号墳出土遺物実測図その②(1/1)…… 62
第46図　神越２号墳出土遺物実測図その③(1/3)…… 63
第47図　神越２号墳出土遺物実測図その④(1/3)…… 64
第48図　神越２号墳築造過程図その①(1/80) …… 66
第49図　神越２号墳築造過程図その②(1/80) …… 67
第50図　神越２号墳第１～第３被葬者副葬品 …… 70
第51図　SHⅢ01平・断面図(1/60)・
　出土遺物実測図(1/3)…… 72
第52図　樋端第Ⅲ調査区地形測量図(1/300)…… 73～74
第53図　樋端第Ⅲ調査区土層断面図(1/40) …… 75～76
第54図　樋端第Ⅲ調査区土層断面図(1/40) …… 77～78
第55図　樋端第Ⅲ調査区遺構配置図(1/300)…… 79～80
第56図　STⅢ01平・断面図(1/30)…… 82
第57図　STⅢ02平・断面図(1/30)…… 82
第58図　STⅢ03平・断面図(1/30)…… 83
第59図　STⅢ04・STⅢ05平・断面図(1/30)…… 84
第60図　STⅢ06平・断面図(1/30)…… 83
第61図　STⅢ05内・SPⅢ06平・断面図(1/10)・
　出土遺物実測図(1/2)(1/4) …… 85
第62図　STⅢ07平・断面図(1/30)…… 86
第63図　STⅢ08・09平・断面図(1/30)・
　出土遺物実測図(1/4)…… 87
第64図　STⅢ10平・断面図(1/30)…… 88
第65図　STⅢ11平・断面図(1/30)…… 88
第66図　STⅢ12平・断面図(1/30)…… 90
第67図　STⅢ13平・断面図(1/30)…… 90
第68図　STⅢ14平・断面図(1/30)…… 91

第69図　STⅢ15平・断面図(1/30)…… 92
第70図　STⅢ16平・断面図(1/30)・
出土遺物実測図(1/2)…… 94
第71図　STⅢ17平・断面図(1/30)・
出土遺物実測図(1/4)…… 94
第72図　STⅢ18平・断面図(1/30)…… 95
第73図　STⅢ18平・断面図(1/30)・
出土遺物実測図(1/2)…… 96
第74図　STⅢ19平・断面図(1/30)…… 97
第75図　STⅢ20平・断面図(1/30)…… 99
第76図　STⅢ21平・断面図(1/30)・
出土遺物実測図(1/2)…… 99
第77図　STⅢ22平・断面図(1/30)…… 99
第78図　STⅢ23平・断面図(1/30)…… 100
第79図　STⅢ24平・断面図(1/30)…… 100
第80図　STⅢ25平・断面図(1/30)…… 101
第81図　STⅢ26平・断面図(1/30)・
出土遺物実測図(1/4)…… 103
第82図　STⅢ27平・断面図(1/30)…… 103
第83図　STⅢ28平・断面図(1/30)・
出土遺物実測図(1/4) …… 104
第84図　STⅢ29平・断面図(1/30)…… 104
第85図　STⅢ30平・断面図(1/30)…… 104
第86図　STⅢ31平・断面図(1/30)…… 104
第87図　STⅢ32平・断面図(1/30)…… 107
第88図　STⅢ33・34平・断面図(1/30)…… 106
第89図　STⅢ35平・断面図(1/30)…… 107
第90図　STⅢ36出土遺物実測図(1/4) …… 108
第91図　STⅢ37平・断面図(1/10)…… 109
第92図　STⅢ37出土遺物実測図(1/4) …… 110
第93図　STⅢ38平・断面図(1/10)・
出土遺物実測図(1/4) …… 111
第94図　STⅢ39平・断面図(1/10) …… 112
第95図　STⅢ39出土遺物実測図(1/4) …… 113
第96図　STⅢ40平・断面図(1/10)・
出土遺物実測図(1/4) …… 114
第97図　STⅢ41平・断面図①(1/10)…… 115
第98図　STⅢ41平・断面図②(1/10)…… 116
第99図　STⅢ41出土遺物実測図(1/4) …… 117
第100図　STⅢ42平・断面図(1/10)・
出土遺物実測図(1/4)…… 118
第101図　STⅢ43平・断面図(1/10)…… 119
第102図　STⅢ43出土遺物実測図(1/4)…… 120
第103図　STⅢ44平・断面図(1/10)…… 121
第104図　STⅢ45平・断面図(1/10)・
出土遺物実測図(1/4)…… 122
第105図　STⅢ46平・断面図①(1/10)…… 123
第106図　STⅢ46平・断面図②(1/10)…… 124
第107図　STⅢ46出土遺物実測図(1/4)…… 125
第108図　STⅢ47平・断面図①(1/10)…… 126
第109図　STⅢ47平・断面図②(1/10)…… 127
第110図　STⅢ47出土遺物実測図(1/4)…… 128
第111図　STⅢ48平・断面図(1/10)…… 129
第112図　STⅢ48出土遺物実測図(1/4)…… 130
第113図　STⅢ49平・断面図(1/10)…… 131
第114図　STⅢ49出土遺物実測図(1/4)…… 132
第115図　STⅢ50平・断面図(1/10)…… 133
第116図　STⅢ51平・断面図(1/10)…… 134
第117図　STⅢ51出土遺物実測図(1/4)…… 135
第118図　STⅢ52平・断面図(1/10)…… 136
第119図　STⅢ52出土遺物実測図(1/4)…… 137
第120図　STⅢ53平・断面図(1/10)…… 138
第121図　STⅢ54平・断面図①(1/10)…… 139
第122図　STⅢ54平・断面図②(1/10)…… 140
第123図　STⅢ54出土遺物実測図(1/4)…… 141
第124図　STⅢ55平・断面図(1/10)…… 142
第125図　STⅢ55出土遺物実測図(1/4)…… 143
第126図　STⅢ56平・断面図(1/10)…… 144
第127図　STⅢ56出土遺物実測図(1/4)…… 143
第128図　樋端第Ⅲ調査区土壙墓・
土器棺墓位置図、土器片出土位置図(1/400)… 145
第129図　SDⅢ01～03土層断面図(1/20)・
出土遺物実測図(1/4)(1/2) …… 146
第130図　SDⅢ01～03平面図(1/100)…… 147
第131図　SXⅢ01平・断面図(1/20)・
出土遺物実測図(1/4)…… 149
第132図　SXⅢ02平・断面図(1/20)…… 150
第133図　SXⅢ03平・断面図(1/20)…… 151
第134図　神越３号墳主体部平・断面図(1/40)
出土遺物実測図(1/1)(1/2) …… 154
第135図　神越３号墳平・断面図(1/100)(1/40)…… 155～156
第136図　樋端第Ⅲ調査区包含層(1/4)(1/2) …… 158
第137図　No,1鏡1　①のXRFスペクトル …… 160
第138図　No,1鏡1　②のXRFスペクトル …… 161
第139図　No,1鏡1　③からの採取試料の
XRFスペクトル…… 162
第140図　No,2鏡2　①のXRFスペクトル …… 163
第141図　No,2鏡2　②のXRFスペクトル …… 164

第142図　No,2鏡2　③からの採取試料の
XRFスペクトル…… 165
第143図　樋端・金毘羅山遺跡から出土した
破鏡の鉛同位体比 …… 170
第144図　樋端遺跡土壙墓・土器棺墓主軸方向模式図 … 172
第145図　原間地区・樋端地区中期古墳築造順序 …… 175
第146図　大内町・白鳥町内中期古墳位置図 …… 177
第147図　大内町前山丘陵・
白鳥町内出土遺物実測図(1/3) ……178
第148図　県道原間遺跡(H13)
出土遺物実測図(1/3) …… 180
第149図　高坏形土器の分類 …… 182
第150図　古墳時代中期の土師器編年(試案)…… 183～184
第151図　大庭寺遺跡ＴＧ232号窯出土須恵器…… 186
第152図　川上古墳出土遺物実測図(1/3)…… 188
第153図　太田下・須川遺跡SH02　出土遺物 …… 189

表目次

第１表　調査の体制…… 3
第２表　香川県樋端遺跡・
金毘羅山遺跡から出土した破鏡の鉛同位体比… 169
第３表　原間地区・樋端地区　古墳詳細一覧表…… 174
第４表　土師器高坏消長表…… 191
第５表　各期高坏形土器法量…… 192
第６表　樋端遺跡土器観察表…… 195
第７表　樋端遺跡鉄器・金属観察表…… 198
第８表　樋端遺跡石器観察表…… 198
第９表　樋端遺跡玉類観察表…… 199

図版目次

図版１①　樋端１・２号墳調査前風景（西より）
②　樋端１・２号墳調査前風景（北西より）
図版２①　樋端１・２号墳完掘状況（西より）
②　樋端１・２号墳完掘状況（北西より）
図版３　樋端１・２号墳完掘状況（真上より）
図版４①　樋端２号墳Ｄ-Ｄ′土層断面（北より）
②　樋端２号墳Ｃ-Ｃ′土層断面（北東より）
図版５①　樋端２号墳完掘状況（北より）
②　樋端２号墳主体部土層断面（東より）
図版６①　樋端２号墳主体部完掘状況（東より）
②　樋端２号墳主体部遺物出土状況（北より）
図版７①　樋端２号墳主体部遺物出土状況拡大（北より）
②　樋端２号墳主体部完掘状況（北より）
図版８①　樋端２号墳南側周溝遺物出土状況（北より）
②　樋端２号墳南側周溝鋤・鍬先出土状況（南より）
図版９①　樋端２号墳周溝遺物出土状況（南より）
②　樋端２号墳周溝土師器出土状況（南より）
図版10①　樋端２号墳Ｅ′-Ｅ土層断面（北より）
②　樋端１・２号墳、原間５・６号墳遠景（東より）
図版11①　第Ⅱ調査区Ｂ－Ｂ′北側土層断面（北西より）
②　第Ⅱ調査区Ｂ-Ｂ′土層断面（北より）
図版12①　第Ⅱ調査区Ｂ-Ｂ′中央土層断面（北西より）
②　第Ⅱ調査区Ｂ-Ｂ′南西側土層断面（北西より）
図版13　第Ⅱ調査区完掘状況（真上より）
図版14①　STⅡ01土層断面（北東より）
②　STⅡ01土層断面（北西より）
図版15①　STⅡ01完掘状況（北東より）
②　STⅡ01西側小口痕跡拡大（北東より）
図版16①　STⅡ02・09完掘状況（南東より）
②　STⅡ03・04（台状墓）完掘状況（北より）
図版17①　STⅡ03・04完掘状況（北より）
②　STⅡ03・04完掘状況（東より）
図版18①　STⅡ04完掘状況（東より）
②　STⅡ04土層断面（西より）
図版19①　STⅡ03完掘状況（東より）
②　STⅡ03土層断面（南東より）
図版20①　STⅡ03土層断面（東より）
②　台状墓周溝土層断面（南より）
図版21①　STⅡ05検出状況（西より）
②　STⅡ05完掘状況（西より）
図版22①　STⅡ06完掘状況（東より）
②　STⅡ06完掘状況（西より）
図版23①　STⅡ07 完掘状況（北東より）
②　STⅡ07土層断面（南西より）
図版24①　STⅡ08検出状況（南東より）
②　STⅡ08検出状況（南東より）
図版25①　STⅡ09土層断面（南西より）
②　STⅡ09検出状況（南より）

図版26① STⅡ09完掘状況（南より）
② STⅡ12土層断面（西より）
図版27① STⅡ12検出状況（西より）
② STⅡ12完掘状況（西より）
図版28① 第Ⅱ調査区調査前遠景（西より）
② 神越２号墳完掘状況（南より）
図版29① 神越２号墳上部地神塔検出状況（南東より）
② 神越２号墳土層断面C-C′（北西より）
図版30① 神越２号墳土層断面D-D′南東側（西より）
② 神越２号墳土層断面E-E′東側（北西より）
図版31① 神越２号墳土層断面（北より）
② 神越２号墳周溝土層断面（南西より）
図版32① 第Ⅱ調査区遠景（南西より）
② 神越２号墳完掘状況（北西より）
図版33① 神越２号墳玄室内堆積土層断面C-C′（南より）
② 神越２号墳玄室内堆積土層断面F-F′（南より）
図版34① 神越２号墳玄室内堆積土層断面H-H′（南より）
② 神越２号墳左側壁（南東より）
図版35① 神越２号墳右側壁（南西より）
② 神越２号墳右側壁（北西より）
図版36① 神越２号墳右側壁（西より）
② 神越２号墳玄室内堆積土層断面H-H′（南より）
図版37① 神越２号墳玄室遺物出土状況（南より）
② 神越２号墳玄室遺物出土状況（北より）
図版38① 神越２号墳玄室遺物出土状況（南より）
② 神越２号墳玄室奥遺物出土状況（西より）
図版39① 神越２号墳玄室奥遺物・人骨出土状況（南西より）
② 神越２号墳玄室奥遺物出土状況（南東より）
図版40① 神越２号墳玄室遺物出土状況（南より）
② 神越２号墳玄室遺物出土状況（北東より）
図版41① 神越２号墳玄室遺物出土状況（南東より）
② 神越２号墳玄室遺物出土状況（南東より）
図版42① 神越２号墳玄室床面完掘状況（北より）
② 神越２号墳奥壁（南より）
図版43① 神越２号墳奥壁・右側壁（北西より）
② 神越２号墳右側壁（西より）
図版44① 神越２号墳右側壁（北西より）
② 神越２号墳奥壁・左側（南東より）
図版45① 神越２号墳左側壁（東より）
② 神越２号墳左側壁（北東より）
図版46① 神越２号墳羨道左側壁（南東より）
② 神越２号墳玄室左側壁（南東より）
図版47① 神越２号墳墳丘土層断面Ⅰ-Ⅰ′（南西より）
② 神越２号墳墳丘土層断面Ⅰ-Ⅰ′西側（南より）
図版48① 神越２号墳墳丘土層断面Ⅰ-Ⅰ′西側拡大（南より）
② 神越２号墳墳丘土層断面Ⅰ-Ⅰ′東側（南より）
図版49① 神越２号墳墳丘土層断面G-G′（南より）
② 神越２号墳墳丘土層断面G-G′西側（南より）
図版50① 神越２号墳墳丘土層断面G-G′東側（南より）
② 神越２号墳墳丘土層断面K′-K北側（東より）
図版51① 神越２号墳羨道部墳丘土層断面Ｊ-Ｊ′（南西より）
② 神越２号墳羨道部墳丘土層断面Ｊ-Ｊ′西側(南より)
図版52① 神越２号墳羨道部土層断面J-J′東側（南より）
② 神越２号墳完掘状況（北西より）
図版53① 神越２号墳完掘状況全景（南より）
② 神越２号墳完掘状況（南より）
図版54① 神越２号墳完掘状況玄室拡大（南より）
② 神越２号墳完掘状況（南より）
図版55① 神越２号墳基底石検出状況（南より）
② 神越２号墳基底石検出状況（北より）
図版56① 神越２号墳基底石奥検出状況（南より）
② 神越２号墳玄門立柱・仕切石検出状況（北西より）
図版57① 神越２号墳基底石奥側検出状況（南東より）
② 神越２号墳基底石奥側検出状況（北西より）
図版58① 樋端遺跡遠景（東より）
② 樋端遺跡遠景（西より）
図版59① 第Ⅲ調査区調査前風景（北より）
② 第Ⅲ調査区調査前風景（北より）
図版60① 第Ⅲ調査区北部完掘状況（真上より）
② 第Ⅲ調査区南部完掘状況（真上より）
図版61① 第Ⅲ調査区土層断面B′-B北東側（北西より）
② 第Ⅲ調査区土層断面B-B′北東側（南より）
図版62① SHⅢ01土層断面（東より）
② SHⅢ01中央土坑検出状況（西より）
図版63① 第Ⅲ調査区南部土壙墓群完掘状況（北より）
② 第Ⅲ調査区南部土壙墓群完掘状況（北東より）
図版64① 第Ⅲ調査区南部土壙墓群完掘状況（東より）
② 第Ⅲ調査区南部土壙墓群完掘状況（北東より）
図版65① 第Ⅲ調査区南部南斜面土壙墓検出状況（東より）
② 第Ⅲ調査区南部南斜面土壙墓検出状況（東より）
図版66① STⅢ01検出状況（東より）
② STⅢ01検出状況（北より）
図版67① STⅢ01西小口（東より）
② STⅢ01東小口（西より）
図版68① STⅢ01南側辺（北より）
② STⅢ01完掘状況（東より）
図版69① STⅢ02土層断面（東より）
② STⅢ02完掘状況（北より）

図版70① STⅢ03完掘状況（西より）
② STⅢ04土層断面（北東より）
図版71① STⅢ04 検出状況（南西より）
② STⅢ04検出状況（北東より）
図版72① STⅢ05検出状況（南より）
② STⅢ04・05検出状況（南より）
図版73① STⅢ05土層断面（東より）
② STⅢ05土層断面（東より）
図版74① STⅢ05土層断面（南より）
② STⅢ05完掘状況（南より）
図版75① SPⅢ06土層断面（東より）
② SPⅢ06破鏡出土状況（東より）
図版76① SPⅢ06土層断面,破鏡出土状況（東より）
② SPⅢ06完掘状況（東より）
図版77① STⅢ06土層断面（西より）
② STⅢ06完掘状況（西より）
図版78① STⅢ07短軸土層断面（西より）
② STⅢ07長軸土層断面（南より）
③ STⅢ07完掘状況（西より）
図版79① STⅢ08遺物出土状況（南西より）
② STⅢ08短軸土層断面（南より）
図版80① STⅢ08長軸土層断面北側（西より）
② STⅢ08長軸土層断面南側（西より）
図版81① STⅢ09土層断面（南東より）
② STⅢ09完掘状況（東より）
図版82① STⅢ10長軸土層断面（南より）
② STⅢ10短軸土層断面（東より）
③ STⅢ10完掘状況（北東より）
図版83① STⅢ11短軸土層断面（西より）
② STⅢ11完掘状況（東より）
図版84① STⅢ12短軸土層断面（西より）
② STⅢ12西小口板痕跡拡大（東より）
図版85① STⅢ13短軸土層断面（西より）
② STⅢ13完掘状況（東より）
③ STⅢ13西小口板痕跡」拡大（東より）
図版86① STⅢ14検出状況（北東より）
② STⅢ14短軸土層断面（南西より）
図版87① STⅢ14南西小口（北東より）
② STⅢ14北東小口（南西より）
図版88① STⅢ14・15検出状況（北西より）
② STⅢ15検出状況（北より）
図版89① STⅢ15長軸土層断面南側（東より）
② STⅢ15長軸土層断面北側（東より）
図版90① STⅢ15短軸土層断面（北より）
② STⅢ15完掘状況（北より）
図版91① STⅢ16短軸土層断面（東より）
② STⅢ16完掘状況（東より）
図版92① STⅢ17短軸土層断面（西より）
② STⅢ17完掘状況（西より）
図版93① STⅢ18完掘状況（西より）
② STⅢ18完掘状況（東より）
図版94① STⅢ18西小口拡大（東より）
② STⅢ18東小口拡大（西より）
図版95① STⅢ19短軸土層断面（東より）
② STⅢ19完掘状況（西より）
図版96① STⅢ19床面拡大（東より）
② STⅢ19床面拡大（西より）
図版97① STⅢ21短軸土層断面（東より）
② STⅢ21完掘状況（西より）
③ STⅢ21遺物出土状況（南より）
図版98① STⅢ23木棺痕跡検出状況（北より）
② STⅢ23東小口木棺痕跡検出状況（北東より）
図版99① STⅢ23東小口検出状況（南東より）
② STⅢ23長軸土層断面西側（南より）
図版100① STⅢ23長軸土層断面東側（南より）
② STⅢ23長軸土層断面（南東より）
図版101① STⅢ23長軸土層断面東側（南より）
② STⅢ23短軸土層断面（東より）
図版102① STⅢ23木棺部分掘削状況（東より）
② STⅢ23完掘状況（東より）
図版103① STⅢ24掘り方検出状況（東より）
② STⅢ24長軸土層断面東側（南東より）
図版104① STⅢ24短軸土層断面（東より）
② STⅢ24完掘状況（西より）
図版105① STⅢ24～27完掘状況（西より）
② STⅢ25短軸土層断面（東より）
図版106① STⅢ25完掘状況（西より）
② STⅢ25南西隅部拡大（西より）
③ STⅢ25北西隅部拡大（東より）
図版107① STⅢ26短軸土層断面（西より）
② STⅢ26完掘状況（西より）
図版108① STⅢ27土層断面（東より）
② STⅢ27完掘状況（西より）
図版109① STⅢ28短軸土層断面（西より）
② STⅢ28完掘状況（東より）
図版110① STⅢ31土層断面（北西より）
② STⅢ31完掘状況（西より）
図版111① STⅢ32短軸土層断面（西より）

② STⅢ33長軸土層断面西側（南より）
図版112① STⅢ33短軸土層断面（東より）
② STⅢ33長軸土層断面東側（南より）
図版113① STⅢ34長軸土層断面西側（南より）
② STⅢ34短軸土層断面（東より）
図版114① STⅢ33・34検出状況（東より）
② STⅢ33・34完掘状況（東より）
図版115① STⅢ35長軸土層断面（北より）
② STⅢ35完掘状況（東より）
図版116① 第Ⅲ調査区土壙墓群検出状況（西より）
② STⅢ23～27検出状況（東より）
図版117① STⅢ36検出状況（西より）
② STⅢ37土層断面（西より）
図版118① STⅢ37検出状況（南西より）
② STⅢ37完掘状況（西より）
図版119① STⅢ38土層断面（北西より）
② STⅢ38検出状況（北より）
図版120① STⅢ39土層断面（北西より）
② STⅢ39検出状況（北西より）
図版121① STⅢ39検出状況（北東より）
② STⅢ39完掘状況（北東より）
図版122① STⅢ40土層断面（南東より）
② STⅢ40検出状況（北西より）
図版123① STⅢ41検出状況（北東より）
② STⅢ41検出状況（南西より）
図版124① STⅢ41棺蓋除去後（北東より）
② STⅢ41棺身内土層断面（北東より）
図版125① STⅢ39～41検出状況（北東より）
② STⅢ39～41完掘状況（北東より）
図版126① STⅢ42土層断面（東より）
② STⅢ44検出状況（北より）
図版127① STⅢ43土層断面（南より）
② STⅢ43検出状況（東より）
図版128① STⅢ43完掘状況（東より）
② STⅢ43完掘状況（西より）
図版129① STⅢ45土層断面（南西より）
② STⅢ45検出状況（北より）
図版130① STⅢ46土層断面（南より）
② STⅢ46検出状況（西より）
図版131① STⅢ46完掘状況（西より）
② STⅢ46土器棺除去後（西より）
図版132① STⅢ47土層断面（南より）
② STⅢ47検出状況（西より）
図版133① STⅢ47完掘状況（北西より）
② STⅢ47土器棺除去後（西より）
図版134① STⅢ48土層断面（南より）
② STⅢ48完掘状況（東より）
図版135① STⅢ49掘り方検出状況（北より）
② STⅢ49土層断面（東より）
図版136① STⅢ49検出状況（北より）
② STⅢ49完掘状況（北より）
図版137① STⅢ50土層断面（南より）
② STⅢ50検出状況（西より）
図版138① STⅢ51検出状況（北より）
② STⅢ51完掘状況（北東より）
図版139① STⅢ52掘り方検出状況（東より）
② STⅢ52土層断面（西より）
図版140① STⅢ52検出状況（北より）
② STⅢ52完掘状況（西より）
図版141① STⅢ53完掘状況（南より）
② STⅢ54掘り方検出状況（南より）
図版142① STⅢ54土層断面（西より）
② STⅢ54検出状況（西より）
図版143① STⅢ55掘り方検出状況（東より）
② STⅢ55土層断面（南西より）
図版144① STⅢ55検出状況（南より）
② STⅢ55棺蓋除去後（南より）
図版145① STⅢ55完掘状況（西より）
② STⅢ55掘り方底面検出状況（南より）
図版146① SDⅢ01土層断面（西より）
② SDⅢ02完掘状況（西より）
図版147① SXⅢ01検出状況（南より）
② SXⅢ01検出状況（東より）
図版148① SXⅢ01短軸土層断面（東より）
② SXⅢ01石列検出状況（北東より）
図版149① SXⅢ01完掘状況（東より）
② SXⅢ02検出状況（南より）
図版150① SXⅢ02検出状況（東より）
⑵ SXⅢ02土層断面（東より）
図版151① SXⅢ02床面検出状況（北東より）
② SXⅢ02完掘状況（東より）
図版152① SXⅢ03検出状況（南より）
② SXⅢ03完掘状況（南より）
図版153① 神越３号墳検出状況（北東より）
② 神越３号墳検出状況（南東より）
図版154① 神越３号墳土層①～⑤除去後（北西より）
② 神越３号墳土層①～⑤除去後拡大（北西より）
図版155① 神越３号墳土層⑦被覆粘土除去後（北西より）

② 神越３号墳土層⑦被覆粘土除去後（南東より）
図版156① 神越３号墳南東側土層⑪・⑫木棺痕跡層断割り（北西より）
② 神越３号墳北西側土層⑪・⑫木棺痕跡層断割り（西より）
図版157① 神越３号墳棺床粘土検出状況（南東より）
② 神越３号墳棺床粘土検出状況（北西より）
図版158① 神越３号墳棺床粘土土層断面（北西より）
② 神越３号墳完掘状況（北西より）
図版159① 樋端遺跡遠景（北西より）
② 樋端遺跡予備調査トレンチ⑬全景（南西より）
図版160① 樋端遺跡予備調査トレンチ⑬全景（北西より）
② 樋端遺跡予備調査トレンチ⑬北側（西より）
図版161① 樋端遺跡予備調査トレンチ⑬北側（西より）
② 樋端遺跡予備調査トレンチ⑬中央（西より）
図版162① 樋端遺跡予備調査トレンチ南側（西より）
② 樋端遺跡予備調査トレンチ⑬南側（西より）
図版163① 樋端Ｅ地区予備調査トレンチ（南より）
② 樋端Ｅ地区予備調査トレンチ（南より）
図版164～180 出土遺物写真

第１章　調査の経緯

第１節　調査にいたる経過

四国横断自動車道津田～引田間の建設については、平成５年度に建設大臣から日本道路公団総裁に対して建設の施工命令が下され、平成６年度に路線の中心杭の打設が行われた。

これに伴う埋蔵文化財保護については、平成４年度から県教育委員会と日本道路公団高松建設局とで事前協議が開始された。平成７年６・７月には県教育委員会が国庫補助事業として分布調査を行い、津田～引田間については22地区について埋蔵文化財の保護に配慮する必要があることを日本道路公団に通知した。日本道路公団は県教育委員会の意見を踏まえ、平成７年10月文化庁と協議を行い、平成８年１月文化庁から「工事の施工に先立って発掘調査を実施すること」等の回答がなされた。これにより、平成４年度からの事前協議は終了し、平成８年４月、県教育委員会と日本道路公団とで埋蔵文化財発掘調査についての委託契約が締結され、さらに県教育委員会と財団法人香川県埋蔵文化財センターとで発掘調査の委託契約が締結された。

一方、県教育委員会では明石大橋開通にあわせた津田～引田間の高速道路の整備は香川県の緊急かつ重要な課題であることから、平成８年度及び９年度に文化財専門職員を新規採用し、調査体制の充実を図ることで対応した。

津田～引田間22地区の調査対象地区のうち、大内町町内には11地区がある。平成８年度からは、この調査対象地区の具体的な遺跡の内容を把握するため、用地買収の進捗にあわせて、予備調査を実施し、随時本調査の範囲を確定した。

平成13年度現在の遺跡位置及び遺跡内容は第１図及び第１・２表のとおりである。

樋端遺跡は平成７年度の県教育委員会による22地区のうち、白鳥町樋端地区にあたり、平成10年度に予備調査を実施し、本調査の範囲を確定した。本調査は予備調査に引き続き平成10年度と平成11年度に実施した。

なお整理作業については、平成13年度10月より開始し、平成14年３月31日に終了した。

参考文献

『埋蔵文化財試掘調査報告Ⅸ　国道バイパス等事業予定地内の調査』香川県教育委員会　1996.3

『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概報　平成８年度』香川県教育委員会他　1997.3

『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概報　平成９年度』香川県教育委員会他　1998.3

『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概報　平成10年度』香川県教育委員会他　1999.3

山下平重『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告　第三十六冊　金毘羅山遺跡・塔の山南遺跡・庵の谷遺跡』香川県教育委員会、財団法人香川県埋蔵文化財調査センター他　2000.8

第２節　調査の経過と体制

１　調査の経過

樋端遺跡は平成８年に現地踏査を中心とした予備調査を開始し、平成10・11年度に全調査対象面積8,608㎡を対象に予備調査を実施した後、平成10年度に3,590㎡が、平成11年度に1,647㎡が本調査面積となり、本調査を実施した。

当初未買収部分・宅地部分等で予備調査を実施できなかった部分については、平成10・11年度の本調査面積に並行して予備調査を実施した。

発掘調査は平成10・11年度とも１班体制の調査員３名で、直営方式で実施した。

整理作業は平成13年10月～平成14年３月で、調査員１名、整理作業員８名で行った。

今回の整理報告は「樋端遺跡」として平成14年度に刊行する。

２　発掘調査及び整理作業の体制

発掘調査及び整理作業の体制は第３表のとおりである。

その他、日々雇用職員として発掘調査に携わった方々は以下のとおりである。

現場整理作業員　川畑妙子、五十嵐由美、渡辺富美恵

現場事務員　大嶋見芳子

普通作業員　荒川義行、入谷慶博、上枝貞義、遠藤増雄、金香　勝、川原武夫、国方　剛、倉本一也、佐々木勇、杉原章哲、清水信由、砂川正澄、十河　創、高木輝雄、瀧　武士、多田英明、遠山泰男、富岡晴美、中川浩二、中川　恒夫、中川弘美、前田千太郎、間島健吉、松木正勝、三宅恒義、六車静夫、芳田司

軽作業員　池田佳苗、泉千代子、遠藤トミ子、遠藤マサ子、太田政栄、鎌田敬子、鎌田敏子、金香栄子、川田安子、川越マユミ、木村育子、日下弘恵、楠木美和子、河野ミチ子、高本マス子、小坂葉子、小島直美、酒井俊子、佐廣志保、白井久美子、杉本範子、鈴江由香、十河美枝子、高木ミチ子、谷口美智子、谷次義子、千代田高子、筒井圭子、寺元文代、土居キミエ、中川真理子、中山和子、中山美智子、蓮井シゲミ、濱　明子、濱野いづみ、百村幸子、平川勤美、古川静子、前田功江、松本　環、三木ひとみ、百生亨子、六車ふみ子、村尾マサエ、元山富子、矢木和子、矢木トヨ子、矢野時子、山崎美津子、山田君子、山本ゆか、米田武子、和田悦子

整理作業に携わった方々は以下のとおりである。

整理員　西桶右子

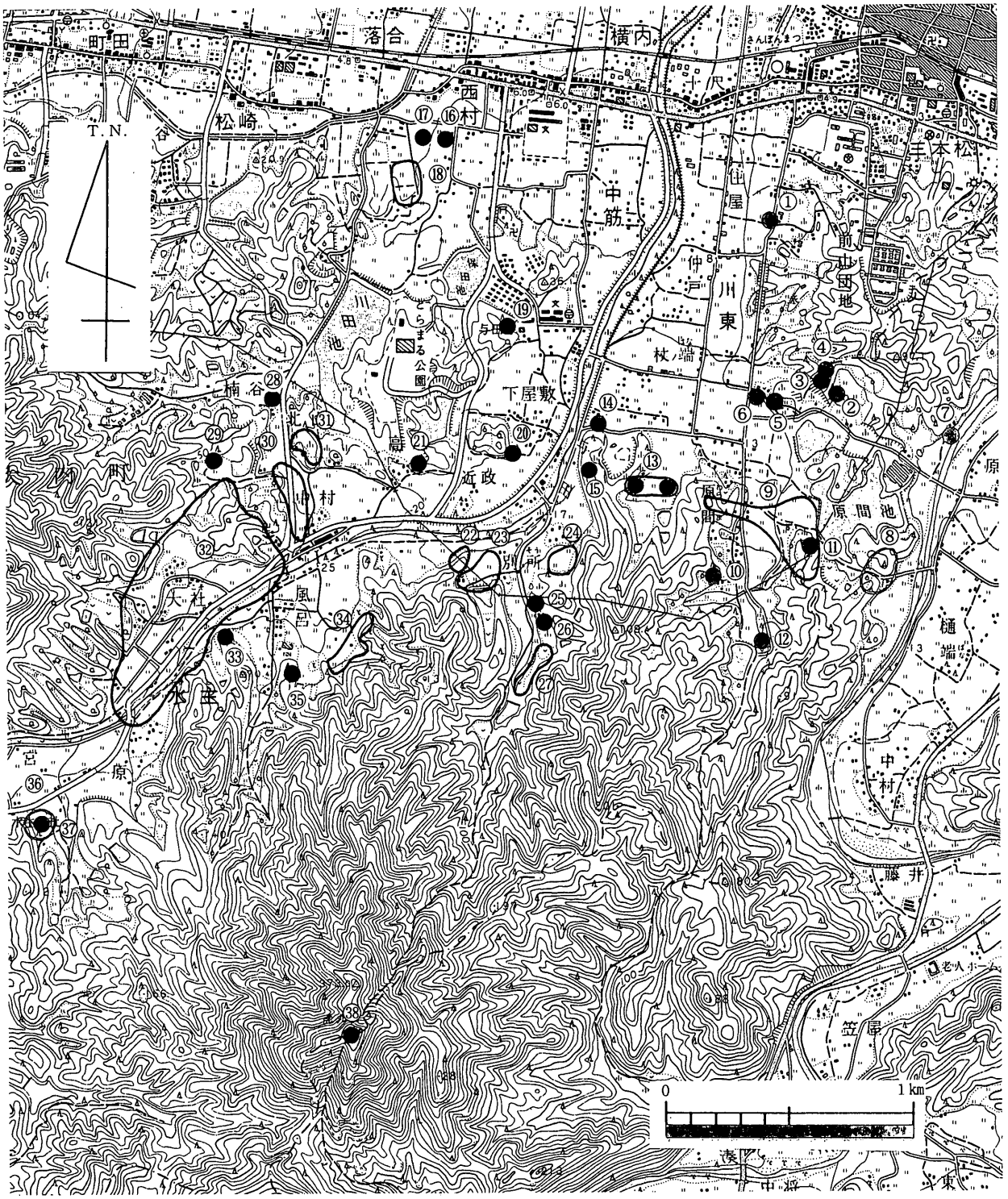
整理補助員　若山淳子、青屋真理

整理作業員　池内妙子、加藤恵子、藤澤明子、森川理恵、塩崎真由美

香川県教育委員会　文化行政課			
	平成10年度	平成11年度	平成13年度
総括	課長 小原 克己	課長 小原 克己	課長 北原 和利
	課長補佐 北原 和利	課長補佐 小国 史郎	課長補佐 小国 史郎
総務	副主幹兼係長 西村 隆史	副主幹兼係長 増田 宏	副主幹 中村 禎伸
	係長 中村 禎伸	係長 中村 禎伸	主査 須崎 陽子
	主査 三宅 陽子	主査 三宅 陽子	主事 亀田 幸一
	松村 崇史	松村 崇史	
埋蔵文化財	副主幹 渡部 明夫	副主幹 廣瀬 常雄	副主幹 大山 眞充
	係長 西村 尋文	係長 西村 尋文	主任 西岡 達哉
	主任技師 塩崎 誠司	文化財専門員 森 格也	文化財専門員 古野 徳久
		主任技師 塩崎 誠司	文化財専門員 宮崎 哲治

財団法人香川県埋蔵文化財調査センター			
	平成10年度	平成11年度	平成13年度
総括	所長 菅原 良弘	所長 菅原 良弘	所長 小原 克己
	次長 小野 善範	次長 川原 裕章	次長 川原 裕章
総務	副主幹兼係長 田中 秀文	副主幹兼係長 田中 秀文	副主幹 大西 誠治
	主査 新 一郎 (6.1～)	主査 新 一郎	係長 多田 敏弘
	主任主事 西川 大 (～5.31)		
調査	主任文化財専門員 大山 眞充	主任文化財専門員 大山 眞充	主任文化財専門員 真鍋 昌宏
	文化財専門員 片桐 孝浩	文化財専門員 長元 茂樹	
	樋本 清輝	主任技師 松岡 宏一	文化財専門員 片桐 孝浩
	主任技師 松岡 宏一		
	佐々木正之	調査技術員 中山 尚子	
	調査技術員 多田 歩		
	東条 貴美		
	森澤 千尋		
	佐々木明子		

第１表　調査の体制



①住屋遺跡
②高松廃寺（平安時代）
③大日山１号古墳（古墳時代）
④大日山２号古墳（古墳時代）
⑤大日山３号古墳（古墳時代）
⑥小僧遺跡
⑦樋端遺跡
⑧神越古墳（古墳時代）
⑨原間遺跡（弥生～平安時代）
⑩原間１号墳（古墳時代）
⑪原間２号墳（古墳時代）
⑫幸代池西遺跡（弥生時代）
⑬西谷遺跡（弥生～室町時代）
⑭杖の端遺跡（古墳時代）
⑮塔の山南遺跡
⑯西村古墳（古墳時代）
⑰清塚古墳（古墳時代）
⑱落合遺跡（弥生時代）
⑲与田寺山古墳（古墳時代）
⑳金毘羅山遺跡（縄文～中近世）
㉑高原遺跡（弥生時代）
㉒笠塚遺跡（弥生時代）
㉓城の内遺跡（弥生～平安時代）
㉔別所池田遺跡（弥生～中世）
㉕別所古墳（古墳時代）
㉖別所遺跡（弥生時代）
㉗飛谷遺跡（弥生時代）
㉘楠谷遺跡
㉙楠谷古墳（古墳時代）
㉚仲善寺遺跡（古墳時代）
㉛北山遺跡（奈良時代）
㉜大社遺跡（旧石器～弥生時代）
㉝長尾山遺跡（古墳時代）
㉞風呂遺跡（弥生時代）
㉟岩瀬庵古墳（古墳時代）
㊱水主神社古墳（古墳時代）
㊲水主神社遺跡（弥生時代～中世）
㊳虎丸城跡（室町時代）

第２図　周辺遺跡位置図

第２章　樋端遺跡の調査

第１節　予備調査

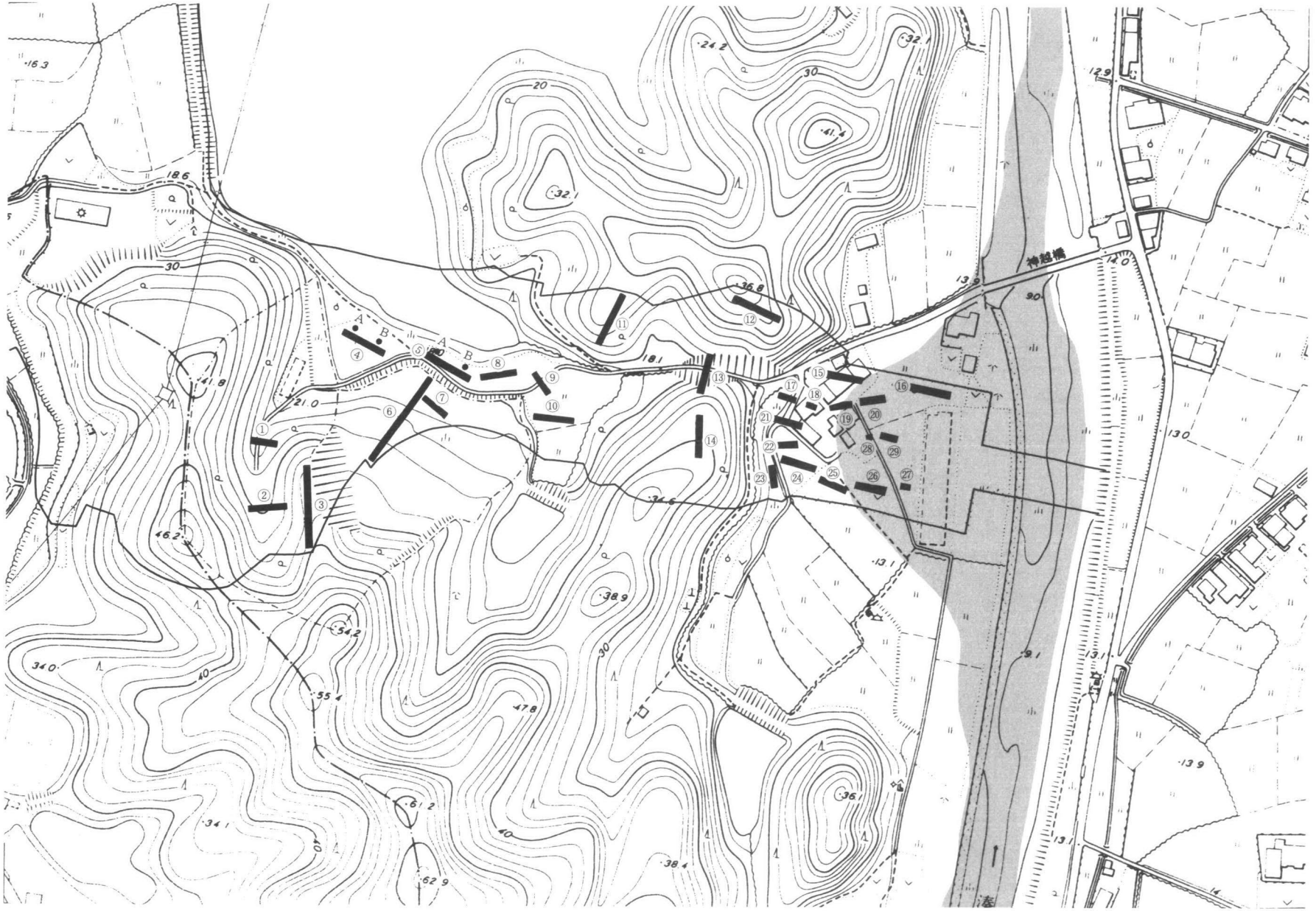
樋端遺跡は四国横断自動車道（津田～引田）建設に伴い事業対象地となった区間で、香川県教育委員会が分布調査を行い埋蔵文化財の保護に配慮する必要があるとした22地区のうち、大川郡白鳥町西藤井・寺前に所在する遺跡である。

樋端地区の予備調査は主に樋端Ａ地区、Ｂ地区、Ｃ地区、Ｄ地区の丘陵部と丘陵と湊川に挟まれたＥ地区の計５ヶ所が対象地として平成10年度と平成11年度に実施した。

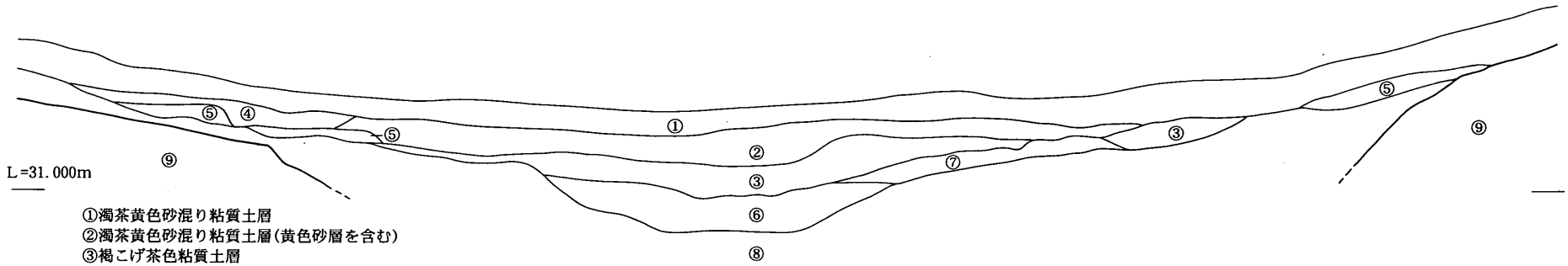
予備調査トレンチは原間遺跡東丘陵部と樋端Ａ地区の丘陵間谷筋に３本、Ａ地区に１本、Ａ地区からＣ地区間の傾斜部及び平地部分に６本、Ｂ地区に１本、Ｃ地区に１本、Ｄ地区に１本、Ｃ地区とＤ地区丘陵間の鞍部（現町道として使用部分）に１本、Ｅ地区に15本の計29本を設定し、調査した（第３図）。

その結果、原間遺跡東丘陵部と樋端Ａ地区の丘陵間谷筋に設定した３本トレンチでは遺構は検出されず、現状より深い谷筋を検出した（第４図）。また遺物もほとんど出土しておらず、谷筋埋没の明確な時期は不明である。樋端Ａ地区に設定した１本のトレンチでは丘陵先端部がかなり後世の開墾により削平を受けていることが解った。しかし丘陵傾斜側（南側）ではあまり削平を受けておらず、長方形の主体部と周溝を持つ古墳を１基検出した。Ａ地区からＣ地区間の傾斜部及び平地部分に設定した６本のトレンチでは傾斜部は削平を受け、遺構は検出できなかった（第３図）。また平地部分はかなり包含層の堆積が確認でき、近世の遺物が出土しており、近世に耕地を拡大することにより水田化されていることが解る。遺構は検出していない。トレンチ⑨（第３・５図）は現在町道として使用されている部分に設定したもので、ここは古代南海道推定地であることから道路状の施設を期待したが、現道下位にはトレンチ⑩と同様な谷筋部分の砂層を中心とした堆積層が確認でき、道路状の遺構は検出できなかった。Ｂ地区に設定した１本のトレンチでは腐葉土直下花崗土（地山）層が確認でき、遺構は検出できなかった。Ｃ地区に設定した１本のトレンチでは腐葉土直下、若干の包含層があり、その下位（地山面）で土器棺、横穴式石室を持つ古墳を検出した。Ｄ地区に設定した１本のトレンチでは腐葉土直下、若干の包含層があり、その下位（地山）で土器棺、土壙墓を検出した。Ｃ地区とＤ地区丘陵間の鞍部（現町道として使用部分）に設定した１本のトレンチ⑬（第３・７図）はトレンチ⑨と同様に現在町道として使用されている部分に当たる。この鞍部土層断面の北側に現道が、南側に湊川から原間池に導水する溝があり、かなり掘り返されている状況が確認できる。北側の現道は北側斜面部にある堆積土を切り込むように平坦面が造られており、現道部分の下位に土層上面が硬化した３面が確認できる。上部から第１～３面とすると、土層⑳上面が第１面に当たり、土層㉑上面が第２面に当たり、土層⑫・㉘上面が第３面に当たる。土層⑳、第１面に当たる土層は古代と考えられる遺物を包含する土層⑥・⑧・⑨を切っており、古代以降の道路と考えられる。詳細な時期は不明であるが、トレンチ調査の結果、明らかに古代にはこの部分が道路として使用されていたことを裏付ける資料となった。しかしこの部分を古代南海道とするのには根拠が薄く、依然発掘調査からは疑問が残る。Ｅ地区に設定した15本のトレンチ（第３図）では耕作土・床土直下砂礫層となり、旧湊川の氾濫源であったことが判明し、遺構は検出できなかった。

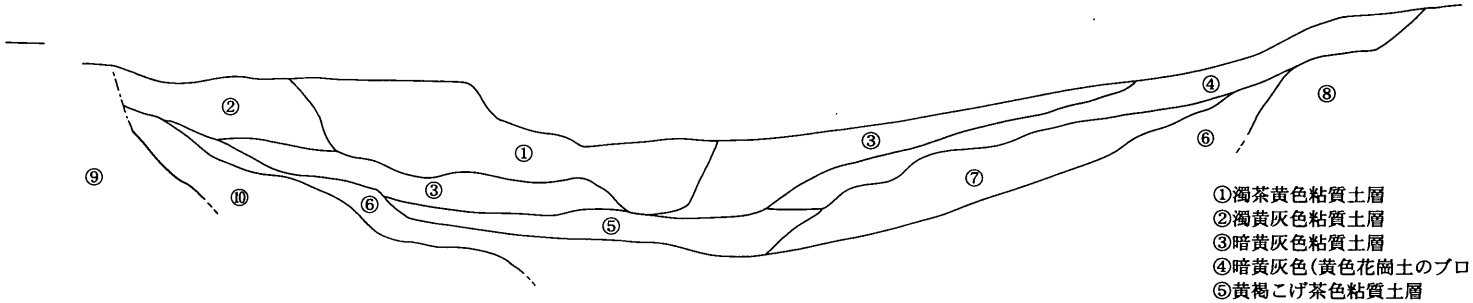
この結果を基に丘陵部の調査対象地区及び面積を確定した（第８図）



第３図　樋端遺跡予備調査トレンチ配置図

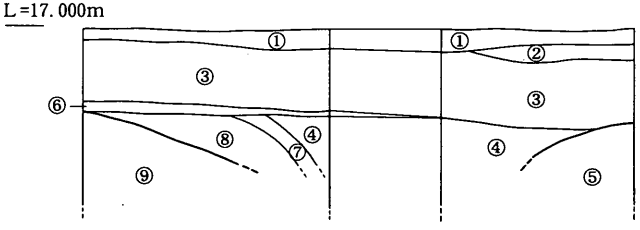


トレンチ②



トレンチ①

①濁茶黄色粘質土層
②濁黄灰色粘質土層
③暗黄灰色粘質土層
④暗黄灰色(黄色花崗土のブロックを少量含む)
⑤黄褐こげ茶色粘質土層
⑥褐茶色粘質土層
⑦褐こげ茶黄色粘質土層
⑧花崗土バイラン土
⑨花崗土
⑩濁黄色粘質土層



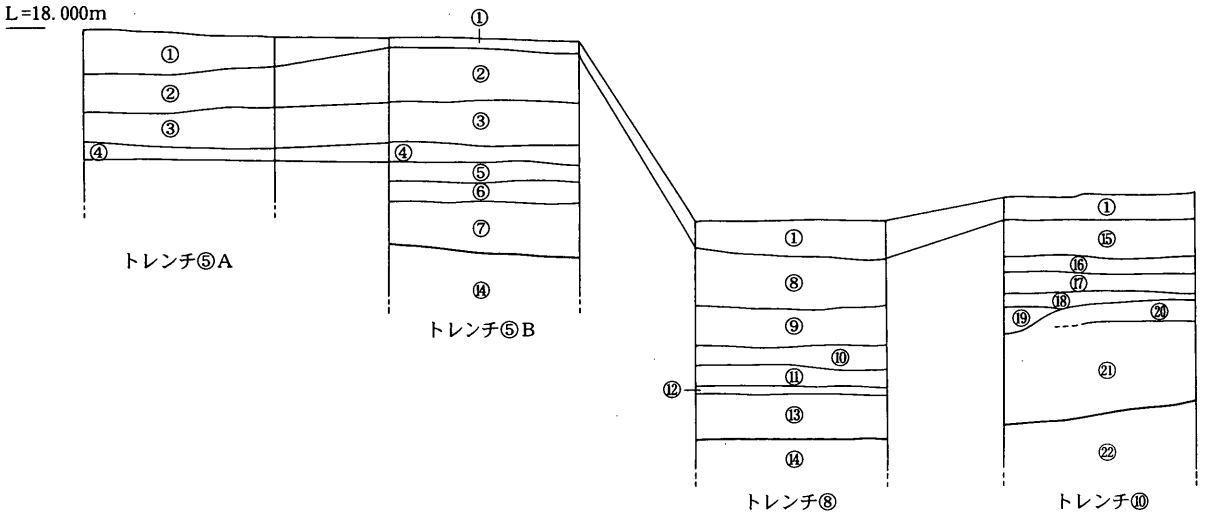
トレンチ④A　　トレンチ④B

①耕作土
②　①と茶色砂混り粘質土の混った土層
③淡茶黄色砂層とこげ茶灰色粘質土の混った土層
④花崗土のバイラン土（柔らかい土）
⑤花崗土
⑥茶色砂混り粘質土層
⑦濁灰色砂質土層
⑧こげ茶灰色砂質土層
⑨褐茶色粘質土層

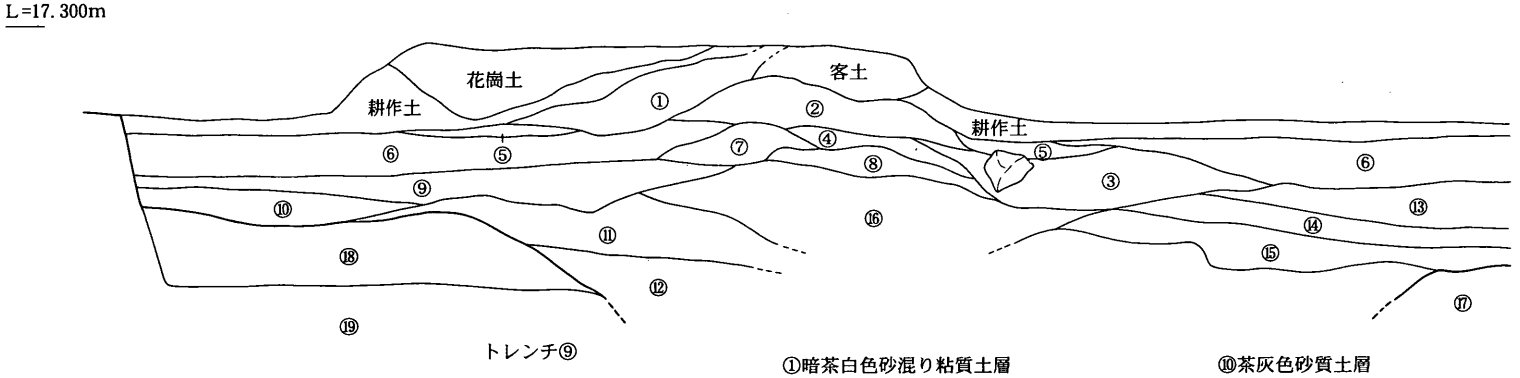
0　1m

0　2m

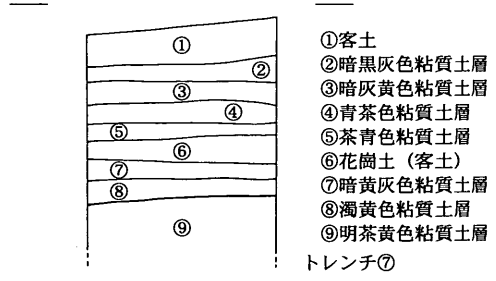
第４図　樋端地区予備調査トレンチ土層断面図①(1/40，1/80)



①耕作土
②客土(花崗土＋地山)
③客土(花崗土＋地山)
④暗茶灰色砂混り粘質土層
⑤茶黄色シルト層と淡茶色砂層の互層
⑥　④より茶色の強い土層
⑦淡灰こげ茶色砂層
⑧茶黄色砂層
⑨暗黄灰色粘質土層
⑩茶灰色砂層
⑪黄色砂混り粘質土層
⑫灰色砂質土層
⑬灰こげ茶色砂質土層
⑭茶黄色粘質土層
⑮淡黄茶色砂質土層(谷節の洪水砂)
⑯客土
⑰こげ茶灰色砂混り粘質土層(旧耕土)
⑱淡茶黄色砂混り粘質土層
⑲暗こげ茶灰色粘質土層
⑳淡黄茶色砂混り粘質土層
㉑白灰色砂質土層
㉒灰青色粘質土層(地山)

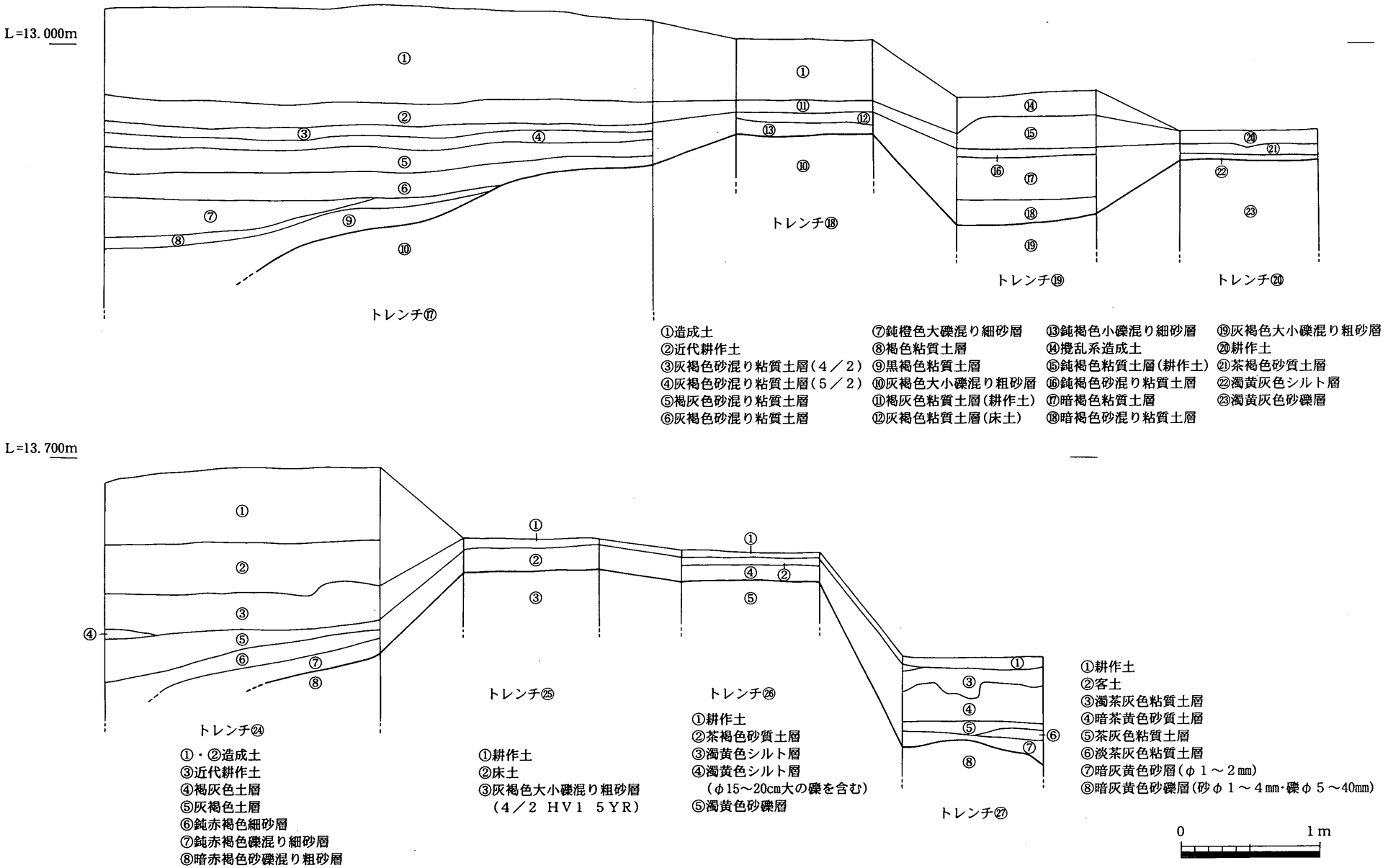


①暗茶白色砂混り粘質土層
②濁灰色と茶色砂層の互層(客土)
③こげ茶灰色砂質土層
④花崗土(客土)
⑤灰こげ茶色砂混り粘質土層
⑥茶灰色シルト層と白灰色砂層の互層
⑦暗灰色砂混り粘質土層
⑧　②とほぼ同じ
⑨灰色砂混り粘質土と花崗土のバイラン土の互層
⑩茶灰色砂質土層
⑪こげ茶灰色砂質土層
⑫黄灰色砂混り粘質土層
⑬茶色砂質土層と白灰色砂層の互層
⑭灰色砂混り粘質土層(旧耕土)
⑮茶黄色砂混り粘質土層
⑯淡こげ茶色砂層
⑰こげ茶色砂質土層
⑱淡黄茶色粘質土層
⑲灰色粘土層

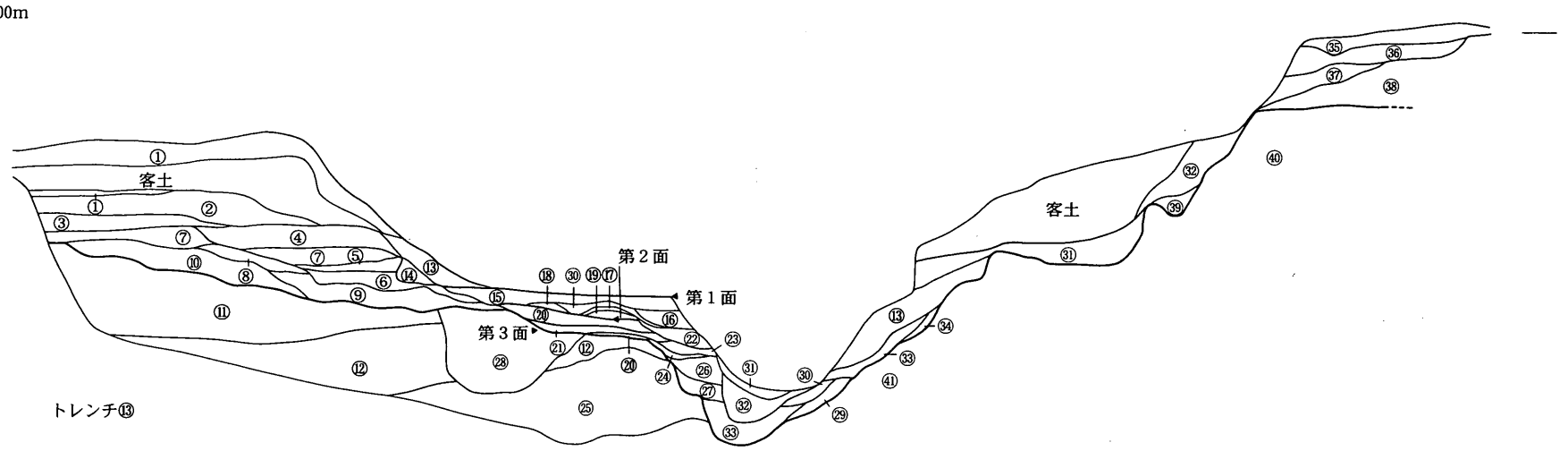


①客土
②暗黒灰色粘質土層
③暗灰黄色粘質土層
④青茶色粘質土層
⑤茶青色粘質土層
⑥花崗土（客土）
⑦暗黄灰色粘質土層
⑧濁黄色粘質土層
⑨明茶黄色粘質土層

第５図　樋端地区予備調査トレンチ土層断面図②(1/40)



第6図　樋端地区予備調査トレンチ土層断面図③(1/40)



①暗こげ茶灰色粘質土層
②暗やまぶき色粘質土層(花崗岩のブロックを含む)
③暗灰やまぶき色粘質土層
④暗やまぶき黄色粘質土層(花崗岩のブロックを少量含む)
⑤暗褐やまぶき色粘質土層
⑥やまぶき茶褐色粘質土層
⑦暗茶やまぶき色粘質土層
⑧黄こげ茶色砂混り粘質土層
⑨こげ茶褐色砂混り粘質土層
⑩茶黄色砂混り粘質土層
⑪淡茶青色砂混り粘質土層
⑫淡青茶色粘質土層
⑬暗やまぶき色砂混り粘質土層(花崗岩のブロックを含む)
⑭こげ茶色砂混り粘質土層
⑮淡灰茶色砂混り粘質土層(客土)硬く締まる
⑯暗黒灰色粘質土層
⑰緑黄色シルト層(水路のかき上げ土層)
⑱淡青茶黄色砂混り粘質土層
⑲淡茶色砂層(φ１～５㎜)
⑳青こげ茶色砂混り粘質土層(硬く締まる)
㉑灰黄こげ茶色砂混り粘質土層
㉒黄茶色砂混り粘質土層
㉓暗灰茶色砂混り粘質土層
㉔暗灰やまぶき色粘質土層
㉕白灰色砂質土層(φ１㎜以上)水路の土
㉖暗灰茶やまぶき色粘質土層
㉗濁灰茶やまぶき色粘質土層(⑫のブロックを少量含む)
㉘こげ茶褐色粘質土層
㉙明灰茶色粘質土層
㉚茶灰色砂質土層(水路の土)
㉛栗石層
㉜暗灰やまぶき色砂質土層
㉝暗灰色砂混り粘質土層
㉞暗茶灰色粘質土層(花崗岩の小ブロックを少量含む)
㉟黒色粘質土層(耕土)
㊱灰やまぶき色砂混り粘質土層
㊲濁褐灰やまぶき色砂混り粘質土層
㊳褐灰やまぶき色砂混り粘質土層
㊴暗灰色粘質土層
㊵暗やまぶき茶色粘質土層
㊶花崗岩

0　2m

第７図　樋端地区予備調査トレンチ土層断面図④(1/80)

第２節　本調査区の確定と調査の方法

調査地は樋端Ａ地区、樋端Ｃ地区、樋端Ｄ地区で遺構を検出したことから、本調査を平成10年度から開始した。

遺構番号はそれぞれの調査区で１から始まる番号を使用した。

遺構の測量については平面図はおもに航空測量で行い、その他は手書きで実施した。

整理報告に当たっては横断道部分の樋端遺跡について本調査時とは別にＡ地区を第Ⅰ調査区、Ｄ地区を第Ⅱ調査区、Ｃ地区を第Ⅲ調査区として報告する。

また整理報告での遺構番号はそれぞれの調査区で１から始まる番号を使用し、例えばSHⅠ01（第Ⅰ調査区　竪穴住居の１番目）と呼称する。

第８図　樋端遺跡調査区配置図

第３節　調査の成果

第Ⅰ調査区

１．樋端古墳について

樋端古墳が所在する丘陵は原間遺跡東丘陵の東側に位置する。この丘陵は調査時点まで放牧場として利用されており、地山が至るところで露出し、かなり削平を受けていた。

原間遺跡を挟んで東西に虎丸山から北方向に派生する丘陵があり、その内東丘陵は標高419.8mの虎丸山から北方向に派生した丘陵の一つで、白鳥町内を北上する湊川の西側に延びる丘陵である。この丘陵は調査区から南の部分、標高61.2m部分で２つに分岐し、一方は原間遺跡東丘陵に、もう一方は神越２・３号墳が所在する丘陵となる。東丘陵は途中の頂部、標高55.4m部分でさらに小丘陵が北方向に分岐し、この小丘陵上で検出したのが樋端１・２号墳である。

この小丘陵は北方向に傾斜し、短く延びる。その稜線上傾斜面に樋端２号墳が、丘陵傾斜面が平坦面へと変わる屈曲部に樋端１号墳が位置する。この樋端１号墳から丘陵先端部まではかなり削平を受けているものと考えられ、遺構はほとんど検出できなかった。

この樋端１・２号墳と関連する古墳は原間遺跡の東西の丘陵があり、西丘陵に６基（土壙墓３基）、東丘陵に３基が所在する。

西丘陵に所在する古墳は原間３・４・10号墳が丘陵それぞれの頂部に所在し、７・８・９号墳が稜線傾斜部や斜面部に造られているように、その立地が様々である。また築造時期も田辺編年のＴＫ23～ＭＴ15型式併行期（５世紀後半～６世紀前半）であることが解った。一方東丘陵に所在する古墳は丘陵頂部のみで、斜面部といった立地条件の悪い場所には築造されていない。また時期も田辺編年のＴＫ216・ＴＫ208（５世紀中葉）と古く、明らかに西丘陵と東丘陵で古墳の築造差が認められることが解っている。

今回確認された樋端１・２号墳はこの東西丘陵との関係が注目される古墳である。

２．樋端１号墳

(1)立地

樋端古墳が所在する小丘陵の西側には原間５号墳、原間６号墳が所在する東丘陵があり、東側には神越２号墳、神越３号墳が所在する丘陵がある。また北方へは標高97.1mの秋葉山があることからさらに視界が悪い場所である。

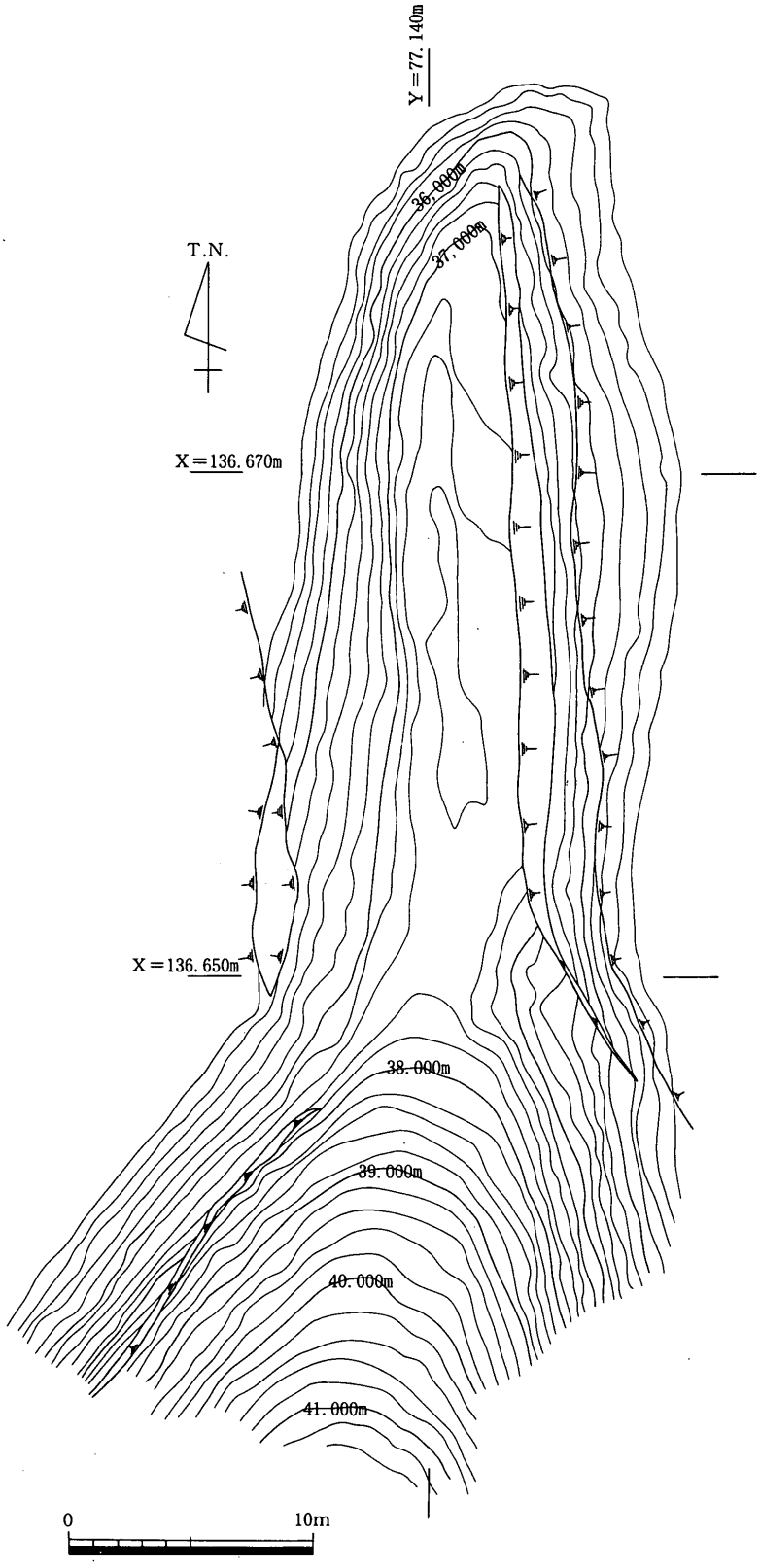
樋端１号墳は丘陵傾斜面が平坦面へと変わる屈曲部、標高約37.5mで検出した。

丘陵部は調査区前、西側に雑木林が生い茂り、東側はかなり人為的な削平をおけており、調査前の踏査や調査前の地形測量を実施しても地形的に墳丘らしきものは確認できなかった（第９図）。しかもこの古墳を検出した位置は調査前の地形測量でちょうど丘陵のくびれ部に位置し、調査前での確認は困難である。

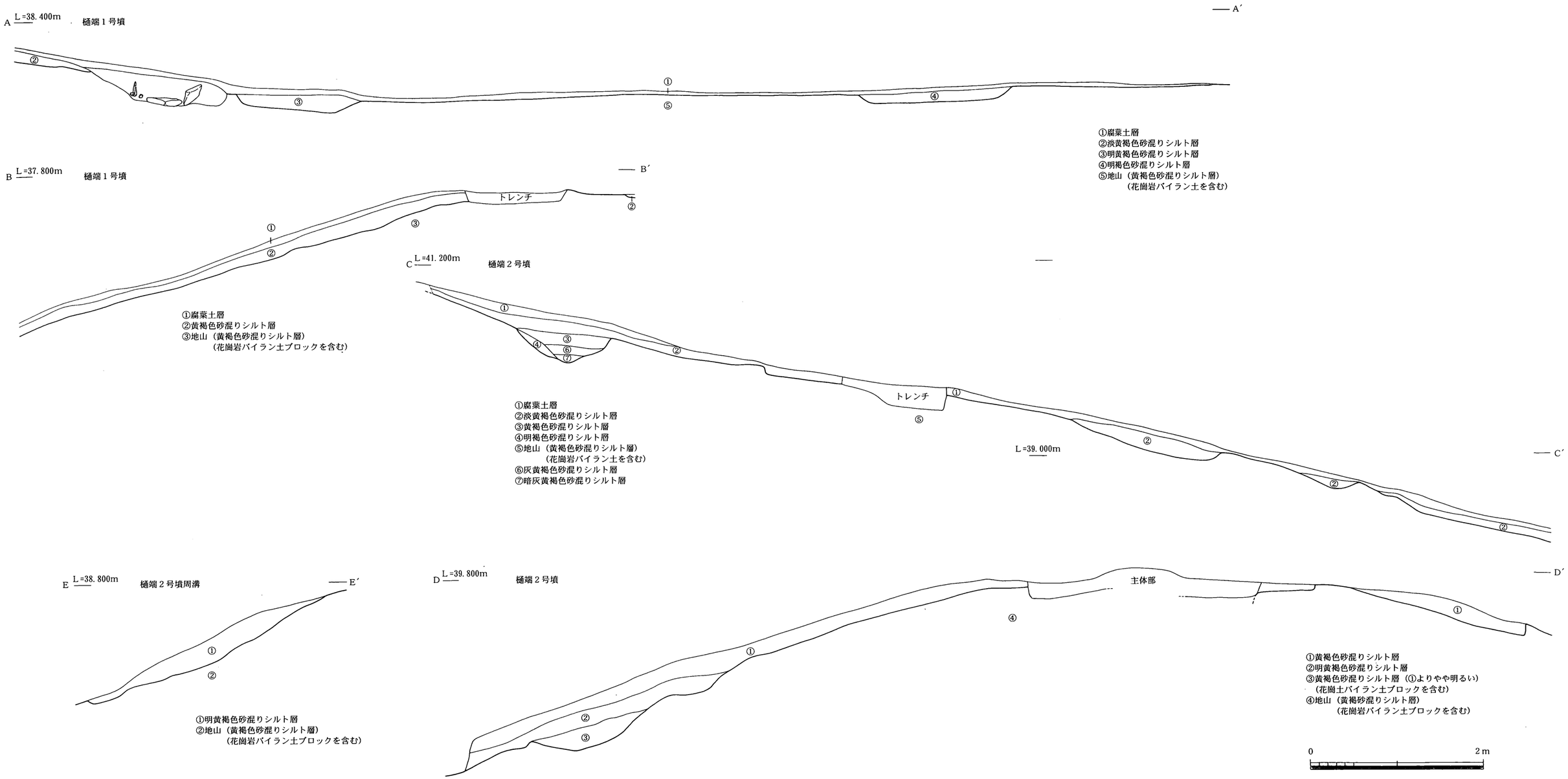
この状況下で平成10年度の予備調査の結果、周溝を持つ古墳であることを確認した。

(2)墳丘

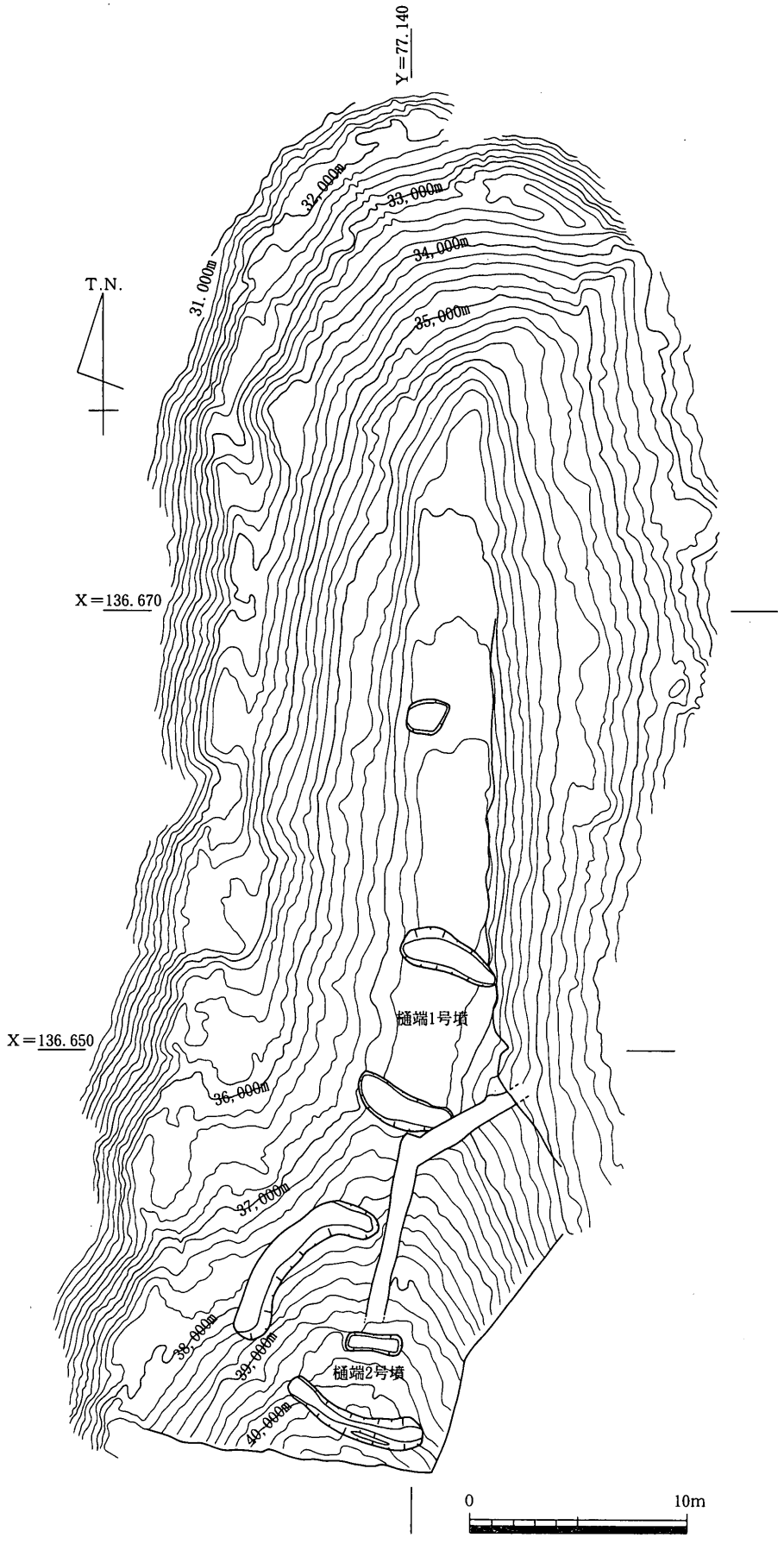
この小丘陵はかなり削平を受けているものと思われ、検出した遺構は周溝のみである（第11・12図）。



第９図　樋端第Ｉ調査区地形測量図(1/300)



第10図　樋端1号墳・2号墳土層断面図(1/40)

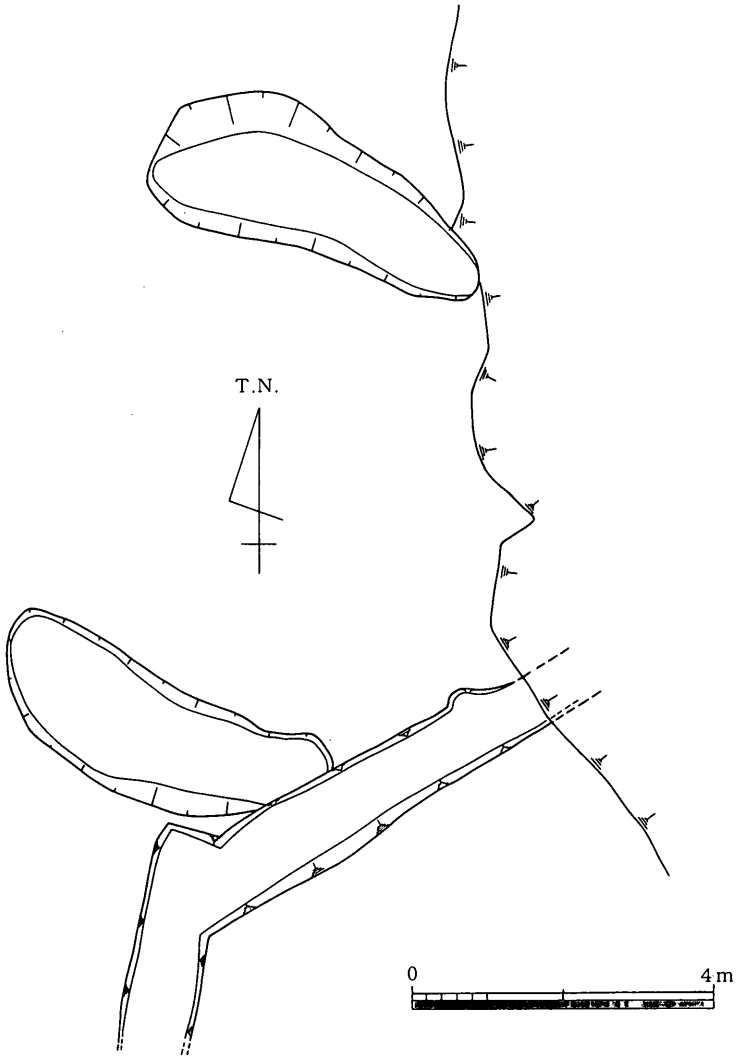


第11図　樋端第Ⅰ調査区遺構配置図(1/300)

周溝は丘陵稜線上の高所側（南側）と平坦部側（北側）で検出した。周溝はこの丘陵自体削平のためもあるが現状でかなり丘陵の幅が狭く、痩せ尾根を呈しており、当初から周溝が全周していたかどうかは不明である。

墳丘は丘陵稜線上に残る周溝がやや弧を描いていることより円墳と考えられ、墳丘部から周溝最下部への変換点を墳裾とした場合に直径約6.3m、墳丘高は周溝最下部から約0.2mを測る小振りな古墳である。墳丘はかなり削平を受けているものと考えられ、明確な盛土はなく、腐葉土直下で花崗土を基盤とする地山が全面で検出できる（第10図）。

周溝は検出状況から北側で検出長約4.6m、最大幅約1.9m、土層断面から幅約1.77m、深さ約0.13m、南側で検出長約4.57m、最大幅約1.58m、土層断面から幅約1.9m、深さ約0.2mを測る。



第12図　樋端１号墳平面図(1/100)

(3)埋葬主体

かなりの削平を受けているために埋葬主体は検出していない。

(4)出土遺物

遺物は出土していない。そのため時期も不明である。

３．樋端２号墳

(1)立地

樋端２号墳は丘陵上傾斜面、標高39.8m（主体部位置）で検出した。周溝間でみると樋端２号墳は樋端１号墳の約４m南側にある。

丘陵斜面部は調査区前、雑木林が生い茂っており、調査前の踏査や調査前の地形測量を実施しても地形的に墳丘らしきものは確認できなかった（第９図）。

平成10年度の予備調査の結果、周溝と埋葬主体を持つ古墳であることを確認した。

(2)墳丘

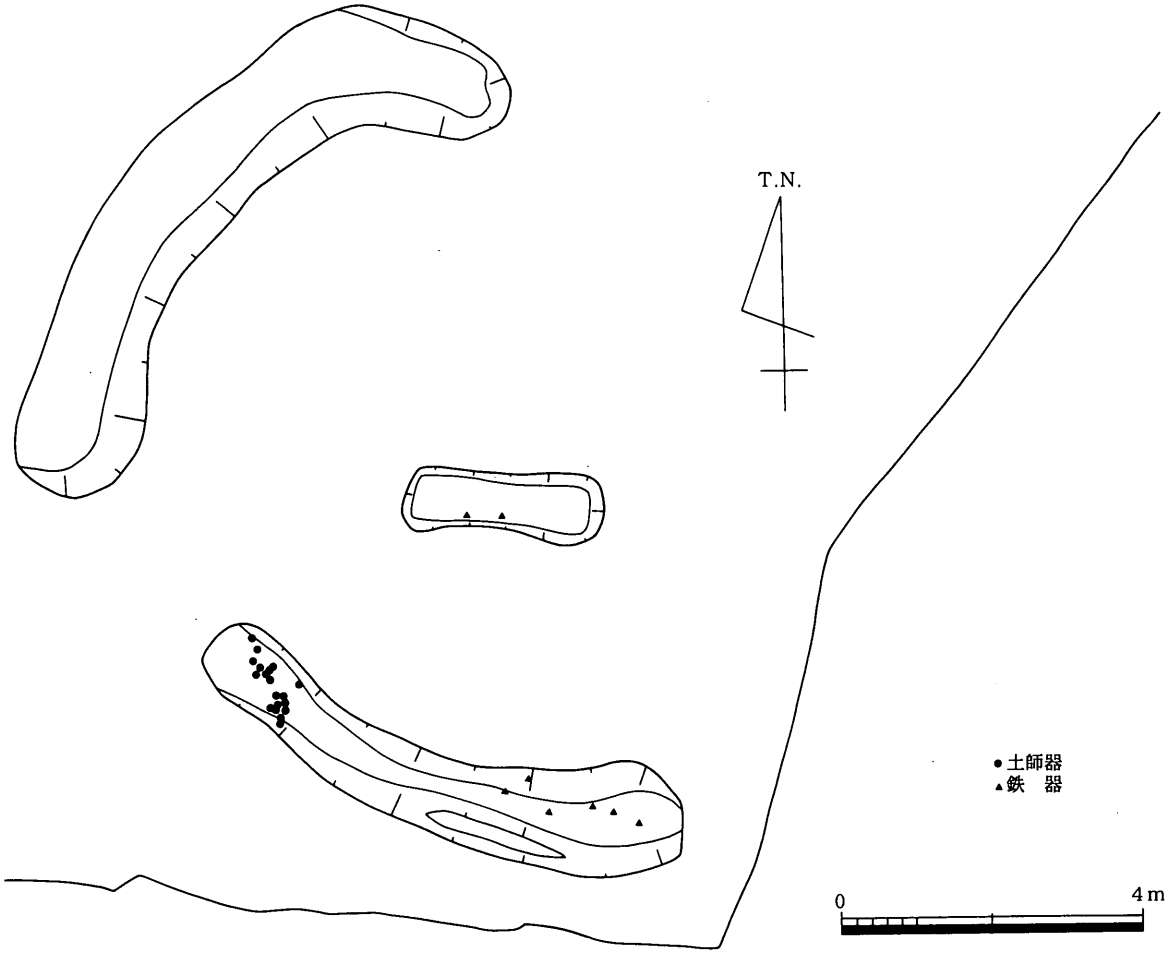
この古墳を検出した部分は丘陵上傾斜面であることから土砂の流失はあったと考えられるが、あまり人為的な削平は受けていないようである。

検出した遺構は周溝及び埋葬主体である（第13図）。

周溝は丘陵稜線上の高所側（南側）と丘陵西斜面側（北西側）で検出した。しかし尾根線上に設定した土層断面にも僅かに周溝の痕跡が確認できること及び周溝が築造当初に造られていたと考えれば、土砂の流失等で本来は検出されにくい丘陵斜面部、樋端２号墳では丘陵西斜面側で検出していることから全周していたと考えられ、その他の部分は削平されたものと考える。

現状で丘陵上傾斜面ということもあり、周溝底部の高低差は1.2mを測るが、北側尾根線上の周溝がかなり削平されていることから、築造当初はあまり高低差の無い、緩やかに傾斜する丘陵であった可能性が考えられる。

墳丘は周溝がやや弧を描いていることより円墳と考えられ、墳丘部から周溝最下部への変換点を墳裾とした場合に直径約8.7m、墳丘高は北西側周溝最下部から約1.8m、北側周溝最下部から約0.4m、南側周溝最下部から約0.3mを測る。南側・北側部分で墳丘高がほとんど無いことから、墳丘は土砂の流失等によりかなり削平を受けているものと考えられる。墳丘に明確な盛土はなく、腐葉土直下で花崗土を基盤とする地山が全面で検出できる。



第13図　樋端２号墳平面図(1/100)

周溝は検出状況から北西側で検出長約9.0m、最大幅約1.56m、土層断面から幅約1.4m、深さ約0.25m、南側で検出長約6.7m、最大幅約1.5m、土層断面から幅約1.08m、深さ約0.33mを測る。

南側周溝内から鉄製品と土師器が出土している（第14図）。

鉄製品は南側周溝の尾根筋部分（高所）に纏まって出土し、土師器は南側周溝が西側に傾斜する低所側で纏まって出土している。鉄製品は鉇1点、鏃1点、ヤス2点（1個体分）、鋤・鍬先1点が出土している。土師器は椀2点、高坏2点、壺1点が出土している。

鉄製品は出土状況をみると底面から2～3cmとほぼ底面出土と考えてもいいもの（土層⑦）と10cm程度浮いた状態のもの（土層⑥）があるが、この古墳に伴うものと考える。

土師器はほとんどが底面から5～10cm程度浮いた状態で出土していることから墳丘上かあるいは周溝高所（鉄製品集中部分）から転落し、堆積したものと考えられる。

(3)埋葬主体

墳丘ほぼ中央部に土壙墓を1基検出した。

主体部は平面形態が隅丸の長方形を呈する（第15図）。検出時での規模は長軸約2.59m、幅約0.7m、深さ約0.35mを測る。

堆積土層は4層に分けられ、褐色系の砂混りシルト層が堆積している。土層④は側壁面に沿って薄く確認でき、木棺痕跡の可能性がある。土層①～③は木棺が朽ちた後に堆積したものである。

底部はほぼ平らに成形されており、断面形状は箱形を呈する。この底部の南側側面に沿うようにほぼ中央部分で刀・鏃などの鉄製品が出土している。鉄刀は床面直上に水平に、切先を西方向に柄頭を東方向に、刃を南側（側壁側）に向けて出土している。鉄鏃は4点出土し、平面的には鉄刀の切先部分、鉄刀と側壁の間で刃部先端を西側に向けているが、断面的には鉄刀は床面直上であるのに対し、鉄鏃は床面から約10cm程度浮き、若干刃部先端より茎が高くなった状態で、ちょうど土層②と③の境部分から出土している。

この出土状況から鉄刀は棺内に納められていたものと考えられるが、鉄鏃については床面から浮いた状態であるために遺物が埋納された当時、棺内に鉄刀と共に副葬されたものが土層③の堆積に伴い浮いたとも、棺蓋上に置かれていたものが木棺が朽ち、土層③が堆積するのと同時に埋没したとも考えられる。しかし前者の考え方には無理があるためにここでは後者の考え方を取りたい。

従って鉄刀は棺内に、鉄鏃は棺蓋上に置かれていたものと考える。

長軸（東西）主軸はＥ－６°－Ｓを取り、ほぼ東西に向くが、丘陵にも直交することから主体部構築に際し、このどちらに主軸が規制されたものかは判断できない。

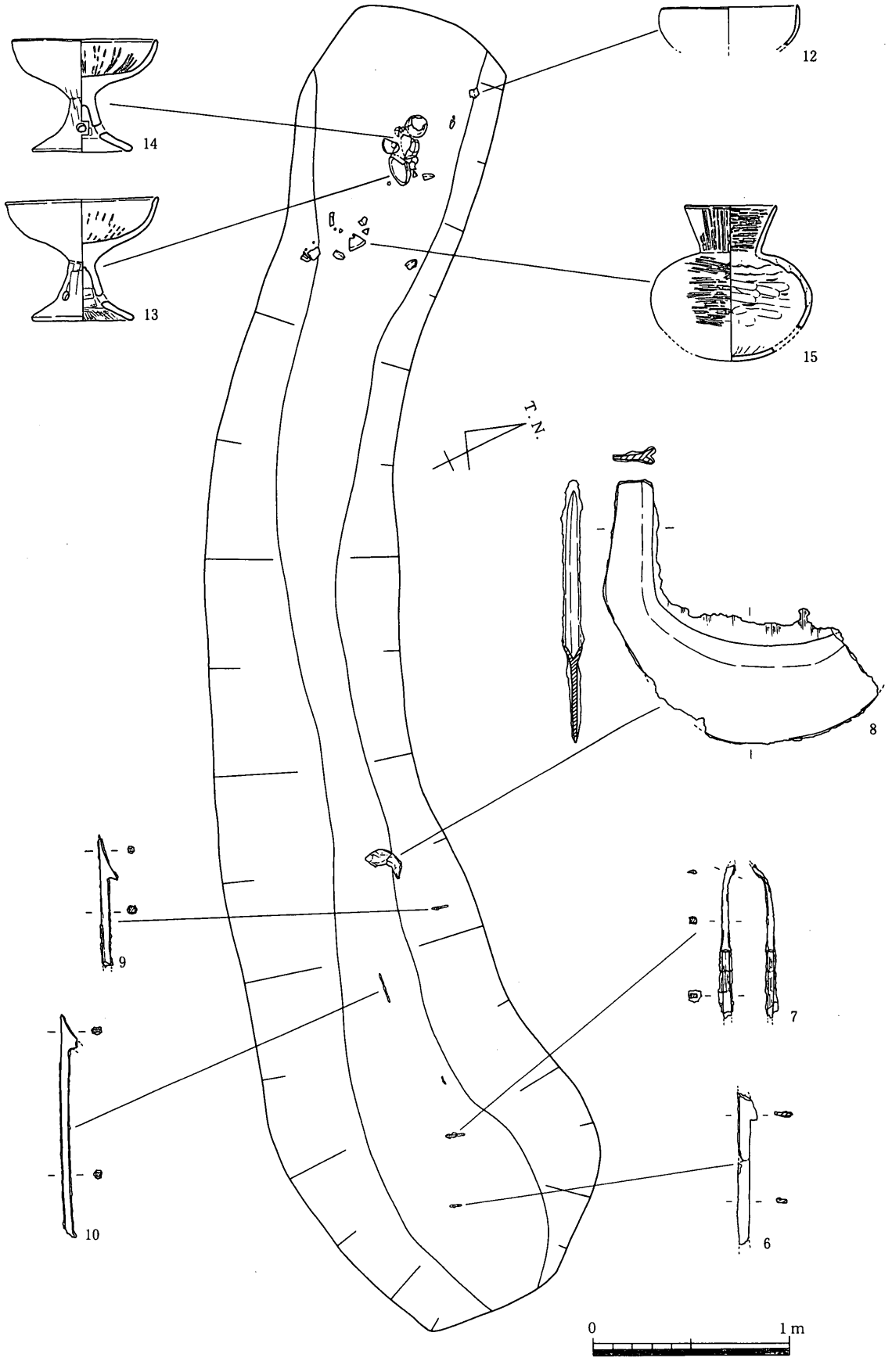
埋葬頭位は主体部から出土した鉄刀の柄が東側を向いていることから東と考える。

(4)出土遺物

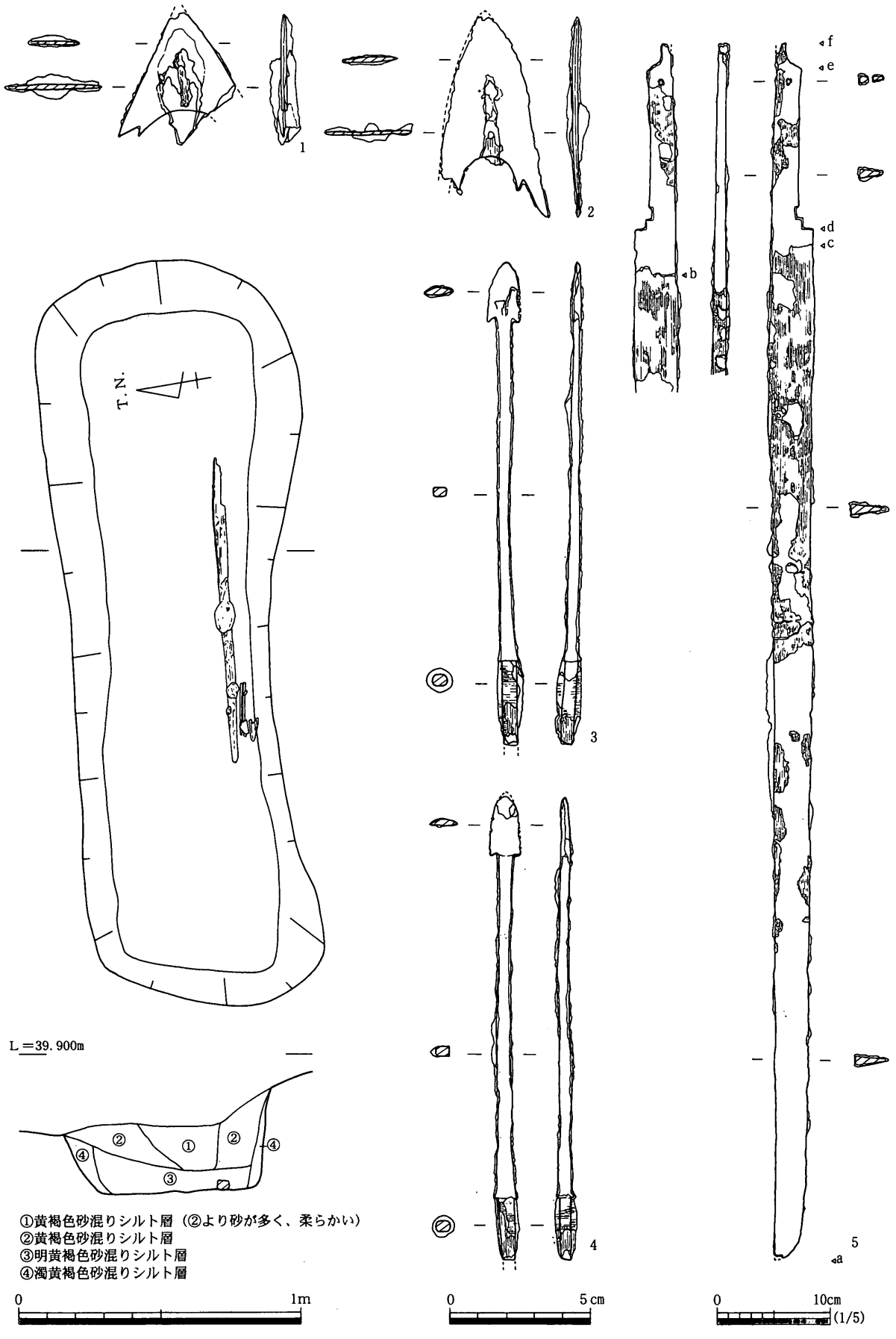
1～10は鉄製品で、1～5が主体部内、6～10が周溝内出土である（第15図）。

1～5は主体部内であるが、1～4が棺蓋上で、5が棺内出土である。

1～4は鉄鏃である。1は無頸鏃で、刃部が直線的なため鏃身が正三角形で、重抉りを呈する。鏃身部中央裏表には木質（竹か）痕とそれを固定した接着剤（？）の痕跡が確認できる。刃部長は現存4.2cm（推定4.5cm）、刃部幅現存4.1cm（推定4.6cm）、刃部厚0.15cmを測る。杉山分類の無頸・短頸鏃群

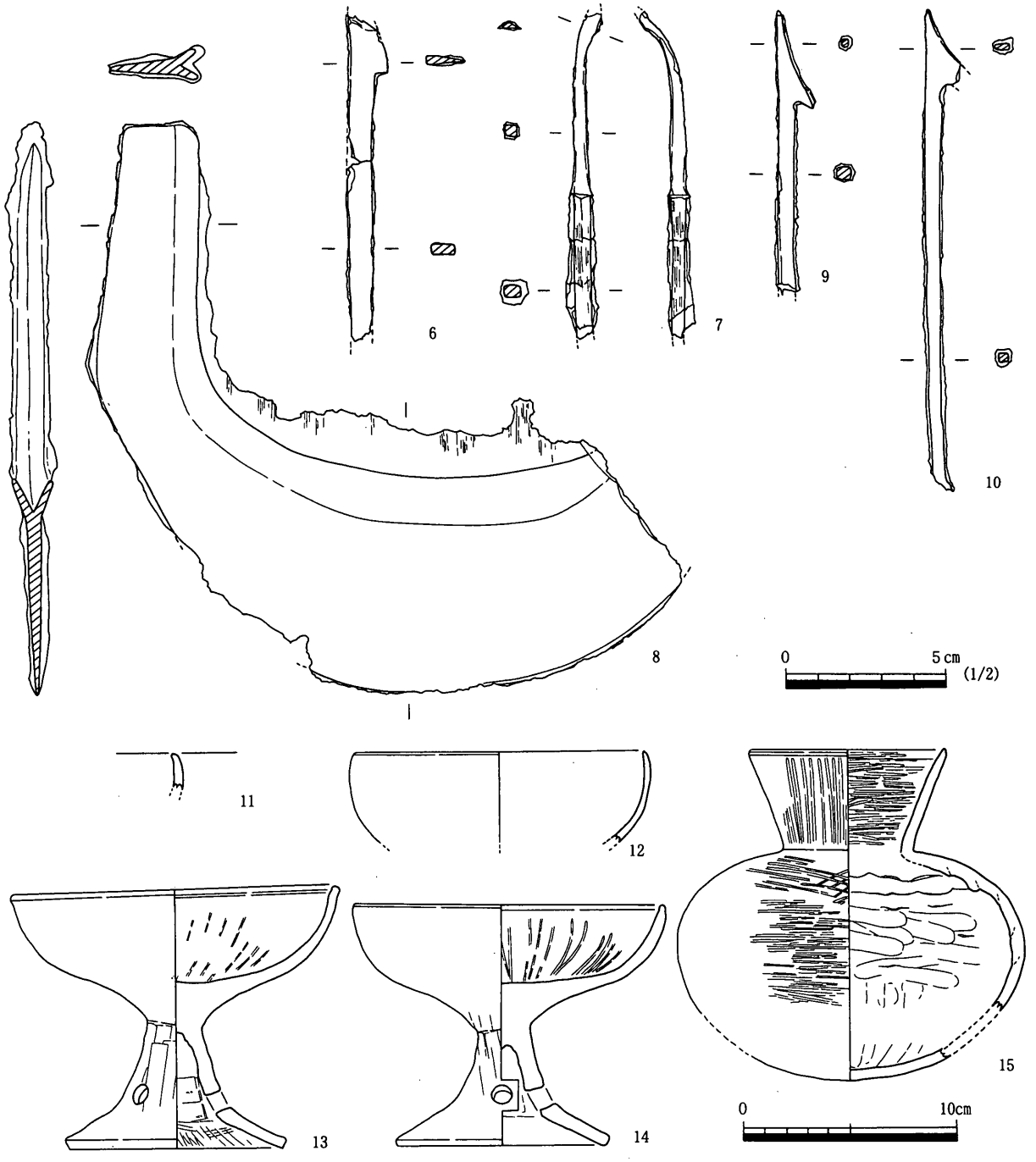


第14図　樋端２号墳南側周溝遺物出土状況図(1/30)



第15図　樋端２号墳主体部平・断面図(1/20)、出土遺物実測図(1/2)

A形式V形式Bで、Ⅲ期～Ⅷ期（前期末～中期）にかけて認められる。２は無頸鏃で、鋒よりややふくらを有して内湾した後、そのまま逆刺端に至る長三角形状を呈するものである。二重抉りで、深い逆刺を有する。鏃身部中央裏表には木質（竹か）痕とそれを固定した接着剤（？）の痕跡が確認できる。刃部長は現存6.9cm（推定7.2cm）、刃部幅現存長3.8cm（推定幅4.2cm）、刃部厚01～0.2cmを測る。杉山分類の無頸・短頸A形式Ⅱ形式D類で、Ⅴ期～Ⅷ期（中期前半～中期末）にかけて認められる。３は長頸鏃で、鏃身部が二等辺三角形状を呈し、逆刺を持ち、頸部は長く、台形関を持つ。茎には木質（竹か）痕が残り、その上部を桜の皮状のもので固定している痕跡が確認できる。現存長16.7cm、鏃身長



第16図　樋端２号墳出土遺物実測図(1/3)

2.0cm、幅1.2cm、厚さ0.3cm、頸部長11.8cm、幅0.45cm、厚さ0.35cmを測る。杉山分類の長頸鏃Ａ形式Ｖ形式で、Ⅶ期～ＸⅠ期（ＴＫ216～ＴＫ209）にかけて認められる。４は長頸鏃で、鏃身部が二等辺三角形状を呈し、僅かに逆刺を持ち、頸部は長く、台形関を持つ。茎には木質（竹か）痕が残り、その上部を桜の皮状のもので固定している痕跡が確認できる。現存長16.15cm、鏃身長2.0（推定2.2cm）cm、幅1.1cm、厚さ0.25cm、頸部長12.0cm、幅0.5cm、厚さ0.4cmを測る。杉山分類の長頸鏃Ａ形式Ｖ形式で、Ⅶ期～ＸⅠ期（ＴＫ216～ＴＫ209）にかけて認められる。

以上棺蓋上出土鉄製品から時期はＴＫ23・47型式併行期（５世紀後半）と考えられる。

５は直刀の大刀で、刀身は真っ直ぐ延びるが茎部分は緩やかに曲がる。かなり錆びているもののほぼ完存しており、部分的に柄材の痕跡や鞘材の痕跡が残存する。柄材の痕跡は茎側面において茎に併行する木質が残り、茎上面には茎に直交する革紐状の柄外表構造が残存する。また関の茎部分には鐔部分が木質痕跡の残存状況（トギレ）として確認でき、その幅６㎜を測る。刃部分には併行するように木質が部分的に残存する。

この大刀は全長104.4cm（推定104.7cm）で、ａ－ｄは刃部分で長さ88.5cm、ｄ－ｆは茎（なかご）で長さ25.9cmを測る。ａ－ｄは刀身で真っ直ぐ延び、鋒（切先）は刃部が曲線に終わらせている。刃ａ－ｄは断面形状が二等辺三角形を呈し、刃ｄ部分（関）で刃幅3.6cm、背幅1.0cmあり、別の断面部分で刃幅3.2cm、背幅0.9cmとなり、あまり幅は減じない。裏面のｂ－ｃ部分、2.7cmの幅で木質痕が確認できないことからこの部分が鎩（はばき）の痕跡と考えられる。また表面のｃ－ｄ部分、1.2cmの幅で木質痕が確認できないことからこの部分が切羽の痕跡と考えられる。

ｄ－ｆは茎で、緩やかに刃側に曲がり、茎尻で段を持つ。これは隅抉尻直刀と呼ばれるもので、ｄ－ｆ部分の曲線から隅抉尻までで原間遺跡Ⅱ第62図のような把装具の装着が復元できる。

まず茎ｄ－ｆは断面形状が長い逆台形状を呈し、長さ25.9cm、幅2.05cm、厚さ（背）0.8cm、0.25cmを測る。茎ｅ－ｆは柄尻部分で、断面形状が長方形を呈し、幅0.9cm、厚さ0.9cmを測る。茎ｄ－ｆ間に直径3～4㎜程度の目釘孔が約6.8cmの間隔をあけ、２個確認できる。また茎の関よりには幅1.1cm、0.35～0.7cmの深さで抉りが認められる。

６～15は南側周溝出土遺物である（第16図）。

６は鏃頸鏃で、鏃身部が現存1.75cm（推定2.4cm）と短く、頸部は現存長8.2cmと長い。鏃身部は片刃で、刃部側に直角の関を持つ。刃部幅1.15cm、背側厚0.25cm、茎幅0.75cm、茎厚0.3cmを測る。杉山分類の長頸鏃Ｃ形式Ⅲ形式第１型式で、Ⅷ期～ＸⅠ期（ＴＫ23～ＴＫ209）にかけて認められる。

７は　で、現存長10.0cmを測る小型のものである。刃部が鍔形を呈し、刃部と茎部の境には明瞭な関を持たない。ちょうど茎部分からスプーン状に屈曲するもので、古瀬分類(1977)のⅢ類に当たる。刃部断面は鏑等辺三角形を呈するが、錆のため刃部表に鎬は確認できない。刃部の現存長は1.3cm、幅0.7cm、厚さ0.2cmを測る。茎部分は全長4.3cmを測り、台形関部分から先端部にかけて徐々に幅が減じる。茎断面は長方形を呈し、断面で幅0.4cm、高さ0.35cmを測る。

この　Ⅲ類は４世紀末から５世紀中頃までの短期間に出土する。

８は鍬・鋤先で、片側耳部分が欠損しているが、復元すると耳部と刃部の境に屈曲部を持ち、刃部は緩やかなＵ字状を呈するが、全体的には凹字形を呈する。この鍬・鋤先は推定幅約22.0cm、長さ17.6cmと大型のもので、耳部は7.3cm、幅2.3～3.6（刃幅1.5～2.6cm）cm、厚さ0.4cm、刃部は幅22.0cm、最大6.7（刃幅5.3cm）、厚さ0.4cmを測る。断面はＹ字状を呈し、装着部分には木質痕が残る。松井氏分類

のＢ類に相当するものと考える。

９・10は刺突漁具のヤスである。９は角棒状の先端部を尖らせ、片側だけに逆刺を持つ。全長14.8cm、先端部幅0.5cm、厚さ0.2cm、基部0.3×0.3cmを測り、尻端部は複数本を接合させるように薄くなり屈曲させている。10は先端部の形状が若干９とは異なるが、ヤスと考えられる。現存長8.5cm、先端部0.25×0.25cm、基部幅0.45cm、厚さ0.4cmを測る。

11・12は土師器椀である。11は内湾する体部から口縁部に至り、端部が内方に屈曲するものである。12はかなり表面が摩滅しており、内湾する体部から口縁部に至り、端部がほぼ上方に延びるものである。

13・14は土師器高坏である。13は坏部がやや内湾しながら口縁部に延び、端部が外方に僅かに屈曲する。脚部はほぼ中位で僅かに外方に屈曲し、スカート状に広がり、端部は方形に終わらせる。坏部内面には放射状のヘラ磨きが、脚部外面には上下方向の板ナデ、内面にはヘラ削りと刷毛目が施されている。脚部屈曲部上位に３ヶ所の穿孔が認められる。14は坏部下半がやや水平に延び、体部がほぼ中位で緩やかに屈曲しながら上方に延び、口縁端部が小さく内方に屈曲する。脚部はほぼ中位で僅かに外方に屈曲し、スカート状に広がり、端部は方形に終わらせる。坏部内面には放射状のヘラ磨きが、脚部外面には上下方向の板ナデが施されている。脚部屈曲部分の上位に１ヶ所の穿孔が認められる。

15は土師器壺で、体部は倒卵形を呈し、頸部は直線的に外方に延び、口縁端部外面に僅かな段を持ち、終わらせる。体部外面には肩部に分割ヘラ磨きを、中位には横方向のヘラ磨きを密に、体部内面には下半部に縦方向の指ナデを、上半に横方向の指ナデを施している。頸部から口縁部にかけては外面に縦方向のヘラ磨きをやや粗く、内面には横方向のヘラ磨きを密に施している。

上記の出土遺物が全てこの古墳に伴うという前提で、主体部出土の遺物が５世紀後半で、周溝出土遺物が５世紀中葉頃であることから概ね５世紀中葉頃～後半（ＴＫ23形式併行期）にかけての時期が考えられる。

(5)まとめ

東丘陵の東側で北方に延びる小丘陵で検出した樋端１・２号墳は墳丘もなく両者ともかなり削平を受けているものの、樋端２号墳は主体部及び周溝が７割程度残存していた。これらの古墳は現地形的には樋端１号墳が丘陵傾斜面が平坦面へと変わる屈曲部、しかも調査前の地形では丘陵のくびれ部に位置し、樋端２号墳は丘陵傾斜面に位置している。樋端１号墳の削平状況と先端部の削平状況から推測すると古墳築造当初はあまり傾斜が無く、緩やかに若干傾斜する丘陵で、調査前に確認できるくびれ部もなかった可能性が考えられる。

おそらくこの２基の古墳は隣接して築造されていることからほぼ同時期の所産と考えられ、時期は樋端２号墳で確認したＴＫ23型式併行期（５世紀後半）頃と考える。

この時期は原間遺跡の東西丘陵で検出した古墳の築造時期と比べるとちょうど古墳の築造が東丘陵から西丘陵に築造位置が移動した時期と合致し、同時に墳丘規模縮小化・丘陵頂部単独築造意識の欠如傾向にも合致することが確認できる。

第Ⅱ調査区

1．樋端遺跡

原間遺跡を挟んで東西に虎丸山から北方向に派生する丘陵があり、その内東丘陵は標高419.8mの虎丸山から北方向に派生した丘陵の一つで、白鳥町内を北上する湊川の西側に延びる丘陵である。この丘陵は調査区から南の部分、標高61.2m部分で２つに分岐し、一方は原間遺跡東丘陵に、もう一方は湊川沿いに延び、多数の土器棺墓・土壙墓、神越２・３号墳が所在する丘陵となる。これらの遺構が所在する丘陵は３ヶ所程度の頂部を持ち、徐々に標高を減じ、現在白鳥町と大内町を結ぶ町道部分で収束するように見えるが、この町道北側で再度標高30～40mの丘陵（第17図）となり、標高36.8mの頂部で北西方向と北東方向に分岐し、延びる。一見町道北側の丘陵は独立丘陵状を呈するが、ちょうど町道部分で深い鞍部を有する一連の丘陵と考えられる。

この丘陵の町道を挟んだ北側と南側、分断しているようなそれぞれの丘陵で見ると北側にある丘陵では南端部が、南側にある丘陵で見れば北端部が今回の調査地区となった。ここでは便宜的に北側の丘陵部分の調査区を「北丘陵樋端遺跡」、南側の丘陵部分の調査区を「南丘陵樋端遺跡」として報告する。

この湊川沿いの丘陵で、町道より南の調査区内頂部（34.6m）に神越３号墳が所在し町道より北側の丘陵に神越２号墳が所在する。

2．北丘陵樋端遺跡

北丘陵樋端遺跡からは弥生時代後期後半から古墳時代初頭の台状墓１基（主体部土壙２基）、土壙墓５基、土器棺墓６基、古墳時代後期古墳１基を検出した（第19図）。また調査区外には古墳時代中期の古墳である神越１号墳が所在することから連綿とこの丘陵が墓域とされていたことが解る。

この北丘陵は後世の畑地化によりかなり削平を受けており、特に南西側斜面は調査前から３～４段の平らな部分が確認できた。調査の結果この平らな部分は地山（花崗岩）まで削平を受け、その削平土によって耕地を拡大していることが解る（第17・18図）。遺構は平らな部分には残存しておらず、主として削平土の堆積した旧斜面部分において検出した。またこの部分以外では腐葉土・若干の包含層直下地山となり、遺構を検出した。

①台状墓

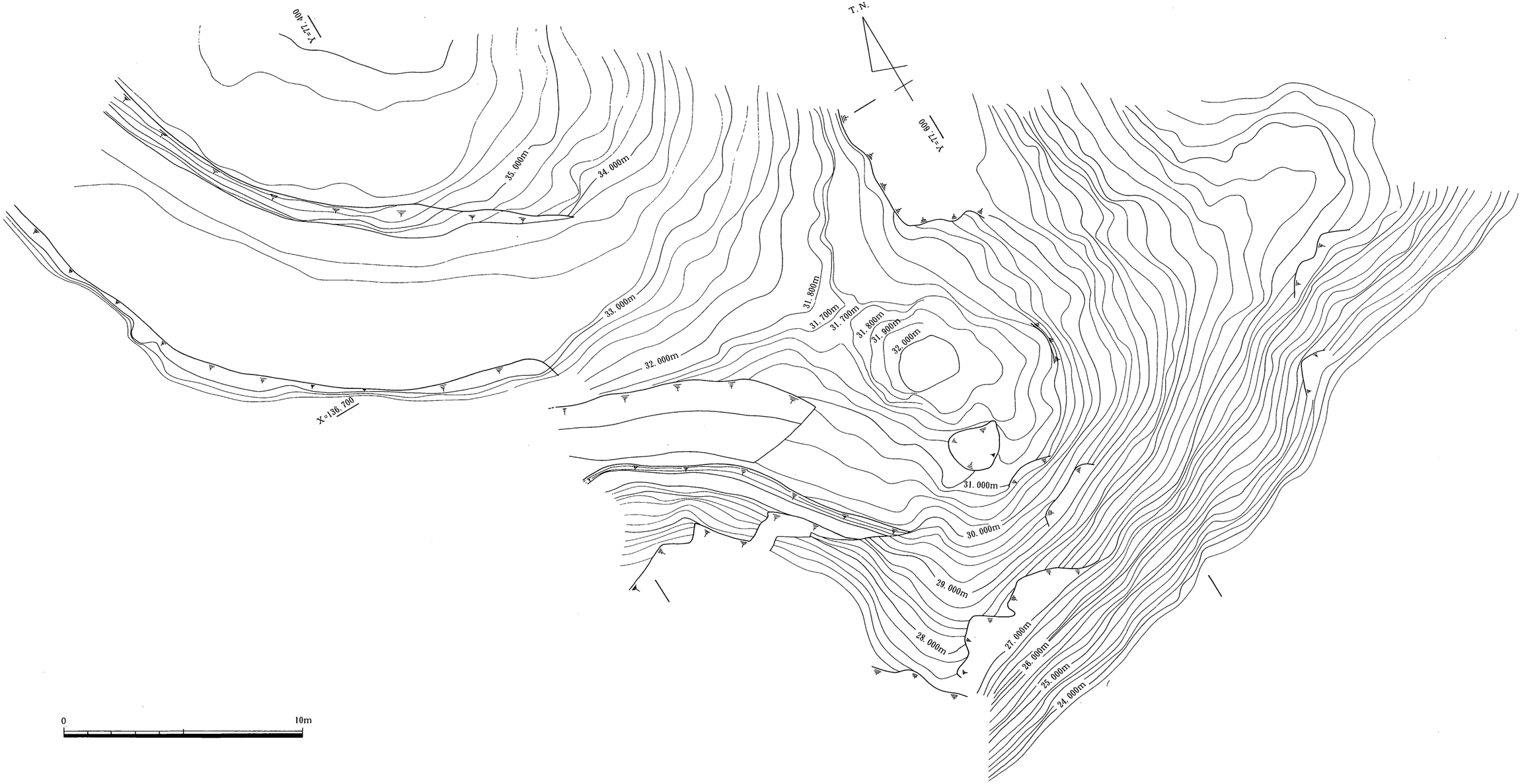
神越２号墳の墳丘の盛土を除去するとその整地面上で主体部として２基の土壙墓を、丘陵頂部側に周溝を持つ台状墓を検出した（第20図）。時期は検出面出土遺物から弥生時代後期後半のと考えられ、神越２号墳を除く土壙墓・土器棺墓の中では最も古いことが解る。

この台状墓は丘陵部先端、標高30.8mで検出した。

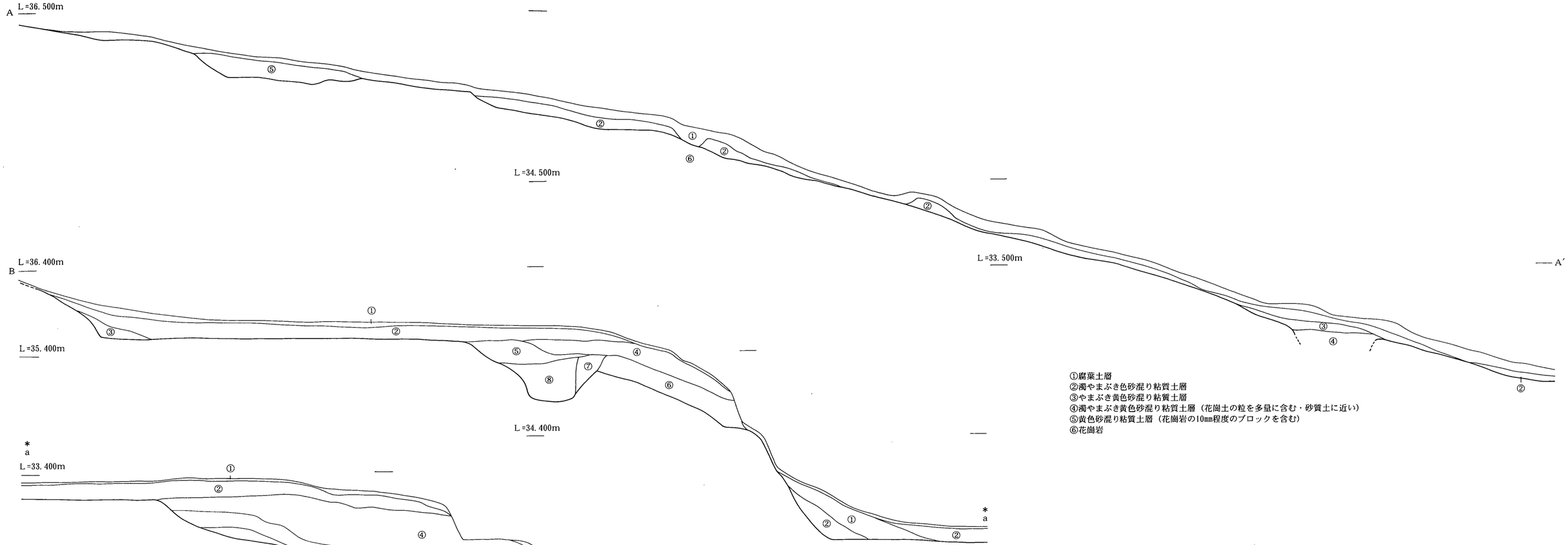
埋葬主体は平面形態が長方形を呈する土壙墓が２基並列するように検出した。それぞれの土壙墓は大小あり、北側の土壙墓をSTⅡ03とし、南側のものをSTⅡ04とした。

STⅡ03（第23図）

STⅡ03は標高30.8mで検出し、北西部が神越２号墳の墓壙掘り方によって切られているが、平面形態が長方形を呈する。断面は平らな底面と垂直に掘削された側面であるが、その境に角を持たず、緩やかに丸くなる箱形を呈している。土層は４層に細分され、土層①～③層が花崗土状を呈する砂混じり粘質土層であるのに対し、最下層土層④は黄褐色粘質土層と異なり、底面に厚さ約６cmでほぼ全面に認めら



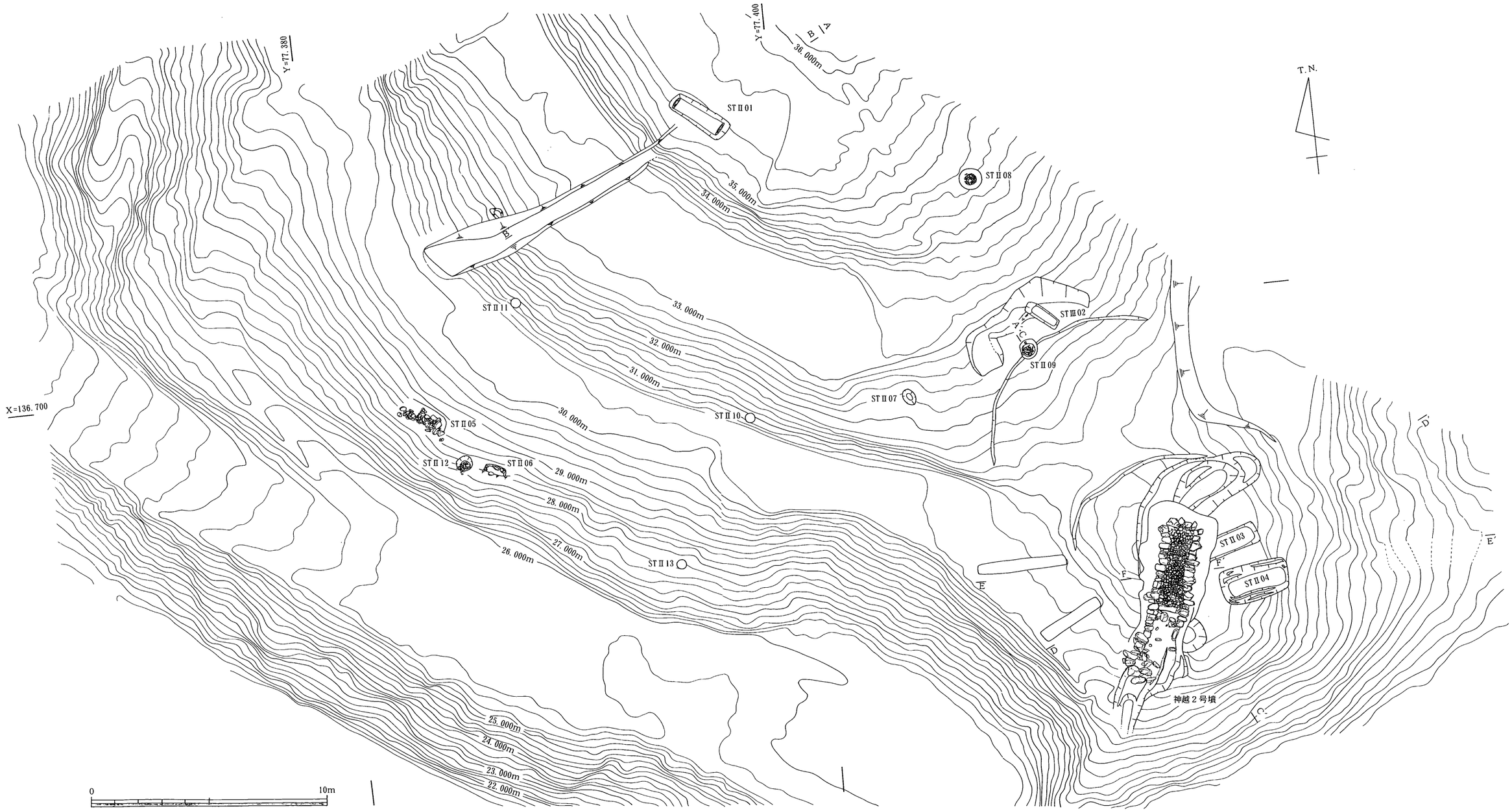
第17図　樋端第Ⅱ調査区地形測量図(1/150)



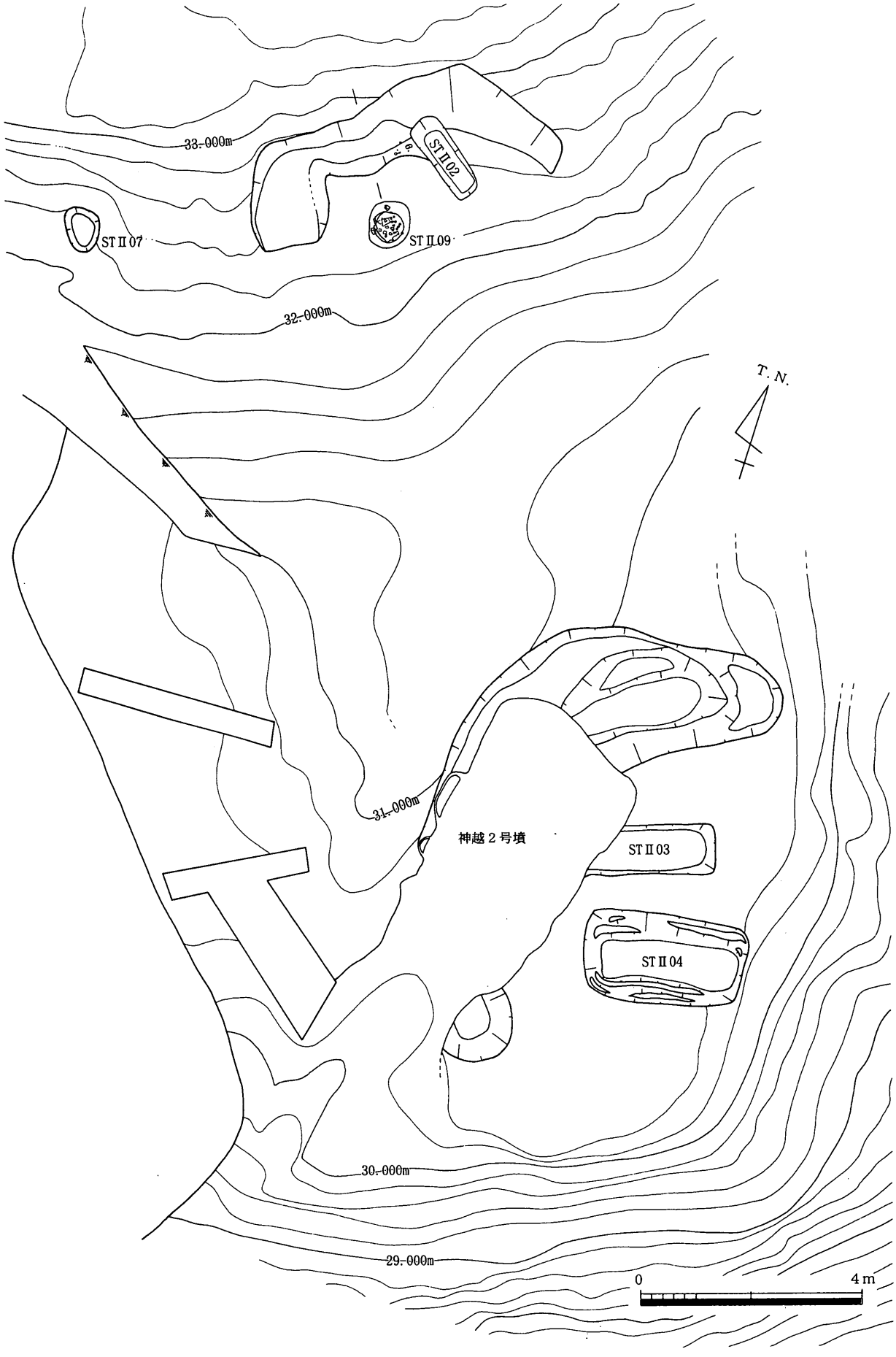
①腐葉土層
②濁やまぶき色砂混り粘質土層
③やまぶき黄色砂混り粘質土層
④濁やまぶき黄色砂混り粘質土層（花崗土の粒を多量に含む・砂質土に近い）
⑤黄色砂混り粘質土層（花崗岩の10㎜程度のブロックを含む）
⑥花崗岩

①腐葉土層
②濁黄色砂混り粘質土層（花崗岩のブロックを多量に含む）
③濁やまぶき黄色砂混り粘質土層（１～６㎜程度の花崗岩の風化砂粒）
④濁やまぶき黄色砂混り粘質土層（花崗岩のブロックを多量に含む）
⑤濁やまぶき色砂混り粘質土層
⑥暗やまぶき色砂混り粘質土層（花崗土のブロックφ10㎜程度を多量に含む）
⑦暗やまぶき色砂混り粘質土層（花崗土のブロックφ５㎜少量含む）
⑧暗やまぶき色砂混り粘質土層（土壙墓埋土）
⑨濁やまぶき黄色砂質土層（花崗土の小ブロックを少量含む）
⑩濁やまぶき黄色砂質土層
⑪濁やまぶき黄色砂質土層（５㎜程度の花崗土の砂粒を含む）
⑫暗やまぶき黄色砂質土層

第18図　樋端第Ⅱ調査区土層断面図(1/40)



第19図　樋端第Ⅱ調査区遺構配置図(1/150)



第20図　台状墓遺構配置図(1/100)

れ、中央部は若干窪む。この土層は棺床粘土と考えられ、中央部の窪みは棺底面の痕跡と考えられる。規模は長軸現存長約2.3m、短軸約0.9m、深さ0.59mを測る。長軸主軸方向E－18.5°－Nをとる。

この土壙墓に伴う遺物は土層①から底部に穿孔が認められる壺（第24図16）が出土した。この壺は底部に明瞭な平底を持ち、焼成後の穿孔が施されている。体部は体部最大径部分がかなり張る形態で、頸部は直線的にやや内径気味に延び、この頸部からほぼ水平に屈曲し、口縁部に至る。口縁端部は上方にほんの僅かに摘み上げ、口縁部外面には沈線が施されている。体部外面には下半に上下方向のヘラ磨きが、中位は横方向のヘラ磨きが、上半は４分割のヘラ磨きが密に施されている。内面は上半と下半に上下方向の指ナデが、中位には横方向の指ナデが施されている。時期は下川津Ⅰ・Ⅱ式併行期と考えられ、弥生時代後期中葉末～後半初と考えられる。

STⅡ04（第25図）

STⅡ04はSTⅡ03の南側、標高30.8mで検出した土壙墓で、平面形態は隅丸の長方形を呈する。断面は部分的に３段の掘り方を持つように見られるが、基本的には２段の掘り方を持つ。土層は４層に細分され、土層④が部分的にしか残存しない状況から、①～③層が主堆積層で、ほぼ水平堆積している。土層の堆積状況からは認められないが、断面から中央部に埋葬されたことが窺える。規模は長軸現存長約2.93m、短軸約1.61m、２段目約0.88m、深さ0.76mを測る。長軸主軸方向E－12°－Nをとる。

この土壙墓に伴う遺物は出土していない。

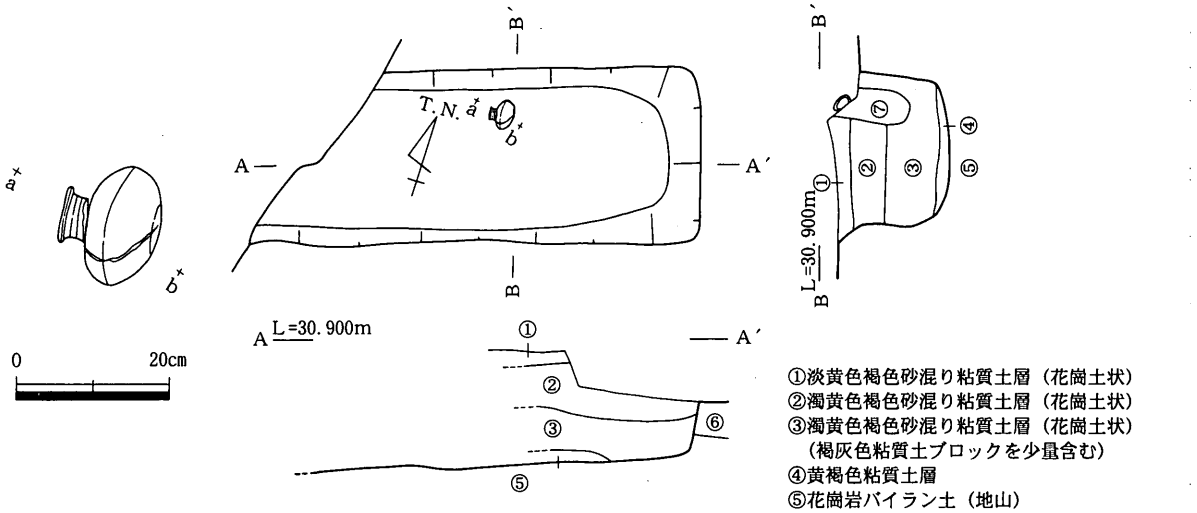
STⅡ03・04は約0.7mの間隔を開け、ほぼ並行して検出したことまたこれらの土壙墓の丘陵高所側（西側）で周溝（区画溝）を検出し、神越２号墳の墓壙によって切られているもののちょうど２基の土壙墓を区画するように緩やかに湾曲しするような平面形で検出したことから２基の土壙墓は同時期に掘削されたものと考えられ、STⅡ03と同時期の弥生時代後期中葉末～後半初と考える。

②土壙墓

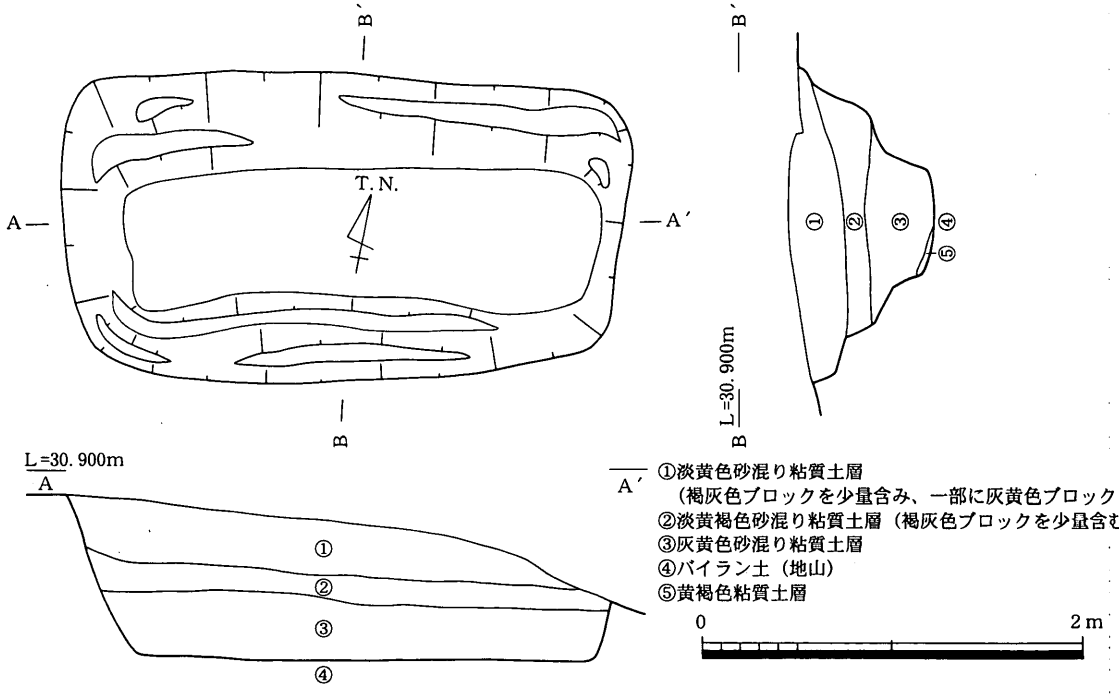
ここで土壙墓と分類したものにはSTⅡ05・06・07のように壁体を川原石によって構築するものを含んでいる。土壙墓は北側丘陵の南東方向に延びる丘陵の頂部に、壁体を川原石で構築するものは丘陵斜面部に位置することからそれぞれが選地での区分が認められる。しかし丘陵南斜面部は後世の畑地化により現状で４段の畑地が確認でき、土壙墓・土器棺を検出した部分は削平を受けていない部分で検出していることからこの選地の区分は現状での検出位置の状況である。

STⅡ01（第21図）

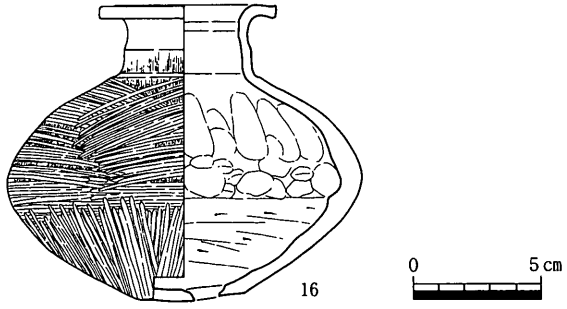
STⅡ01は調査区内頂部の南東側斜面部、標高35.3mで検出した土壙墓で、平面形態は隅丸の長方形を呈する。断面は底面と側面の境が緩やかに丸くなる箱形を呈している。完掘状況で底面にはちょうど両小口部分に小口板の痕跡が確認でき、北西側小口板の規模は幅７cm、長さ55cm、深さ３cm、南東側小口板の規模は幅10cm、長さ62cm、深さ３cmを測る。土層は４層に細分され、土層①～④層がやまぶき色系の砂混り粘質土で、花崗土の小ブロックを多量に含む。長軸土層断面では底面小口部分で検出した小口板の痕跡が土層断面でも確認でき、南東側では小口板の裏込め土も確認できる。短軸土層断面では土層③が木棺底面と考えられる形状を呈している。この土層から推測すると木棺底面はやや角の張るU字状を呈し、幅は約52cmを測る。規模は長軸長約2.78m、短軸約0.9m（北西小口部分約0.76m、南東小口部分0.97m）、深さ0.41mを測る。長軸主軸方向はN－52°－Wをとり、土壙墓はちょうど丘陵等高線に並行している。若干南東側小口部分の規模が大きいことから頭位は南東側と考える。



第23図　STⅡ03平・断面図(1/40)



第25図　STⅡ04平・断面図(1/40)



第24図　STⅡ03出土遺物実測図(1/3)

土壙内から弥生土器の底部が出土している（第21図17）。

時期は弥生時代後期後半と考えられる。

ST Ⅱ02（第22図）

ST Ⅱ02は調査区内頂部から南東方向に延びる丘陵のほぼ中位稜線上、標高32.7mで検出した土壙墓で、平面形態は隅丸の長方形を呈する。この土壙墓はST Ⅱ09（土器棺墓）の周溝と考えられる溝を切って掘り込まれている。断面は箱形を呈する。規模は長軸長約1.58m、短軸約0.55m、深さ約0.5mを測る。長軸主軸方向はN－52°－Wをとり、土壙墓はちょうど丘陵等高線に直交している。

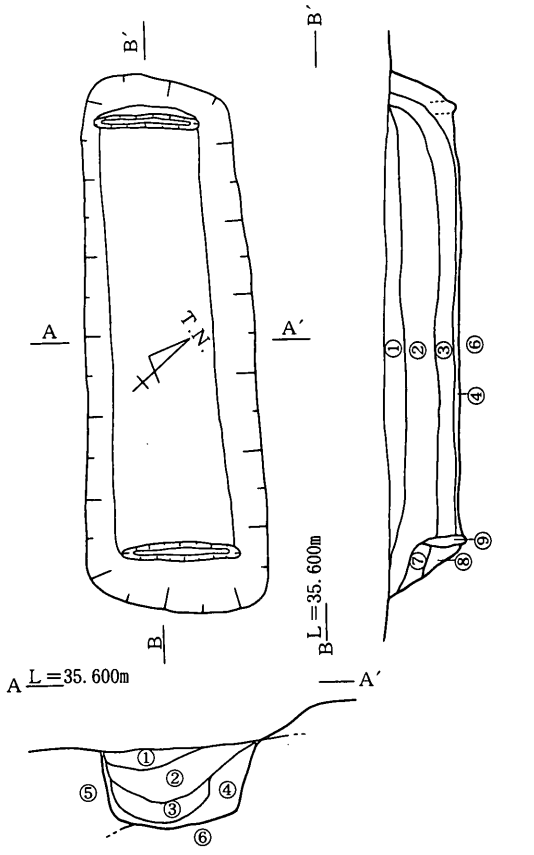
ST Ⅱ05（第26図）

ST Ⅱ05は調査区内頂部の南西側斜面部、標高28.9mで検出した土壙墓で、墓壙掘り方内面に川原石により竪穴状の石室を構築する。斜面部で検出しているために南西側が削平され、北東側のコーナー部を中心に残存する。墓壙掘り方は長方形を呈するものと考えられ、墓壙内には側壁に幅10×30cm、厚さ約10cm程度の川原石を直列状に約1.5m確認でき、現存する部分で３段積み上げている。一方小口部分も同様に幅約15×40cm、厚さ約10～15cm程度の川原石を直列状に約0.64m確認でき、現存する部分で２段積み上げている。側壁と小口は側壁が小口を挟み込むように造られている。南側側壁として一石確認しているが、前述した壁体の状況から確実ではない。底面には10～25cm程度、厚さ５～10cm程度の川原石を概ね上面を合わせているが、平面的には無秩序に敷いている。

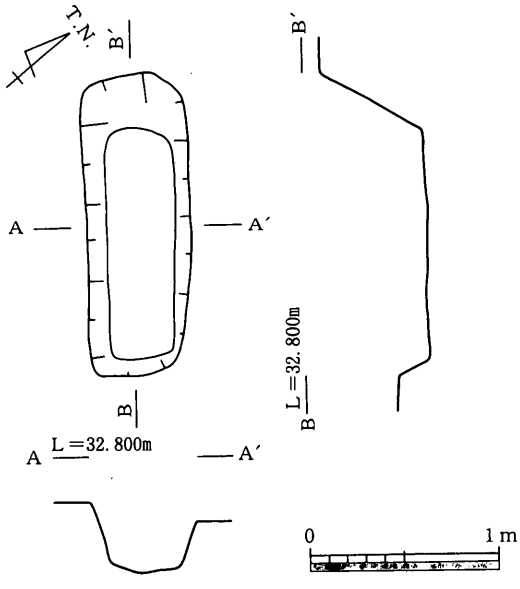
また土層②内には墓壙内石材と同様な石材が包含されているが、土層の切り合いからここでは無関係のものとする。長軸主軸方向はN－67°－Wをとり、土壙墓はちょうど丘陵等高線に並行している。

ST Ⅱ06（第27図）

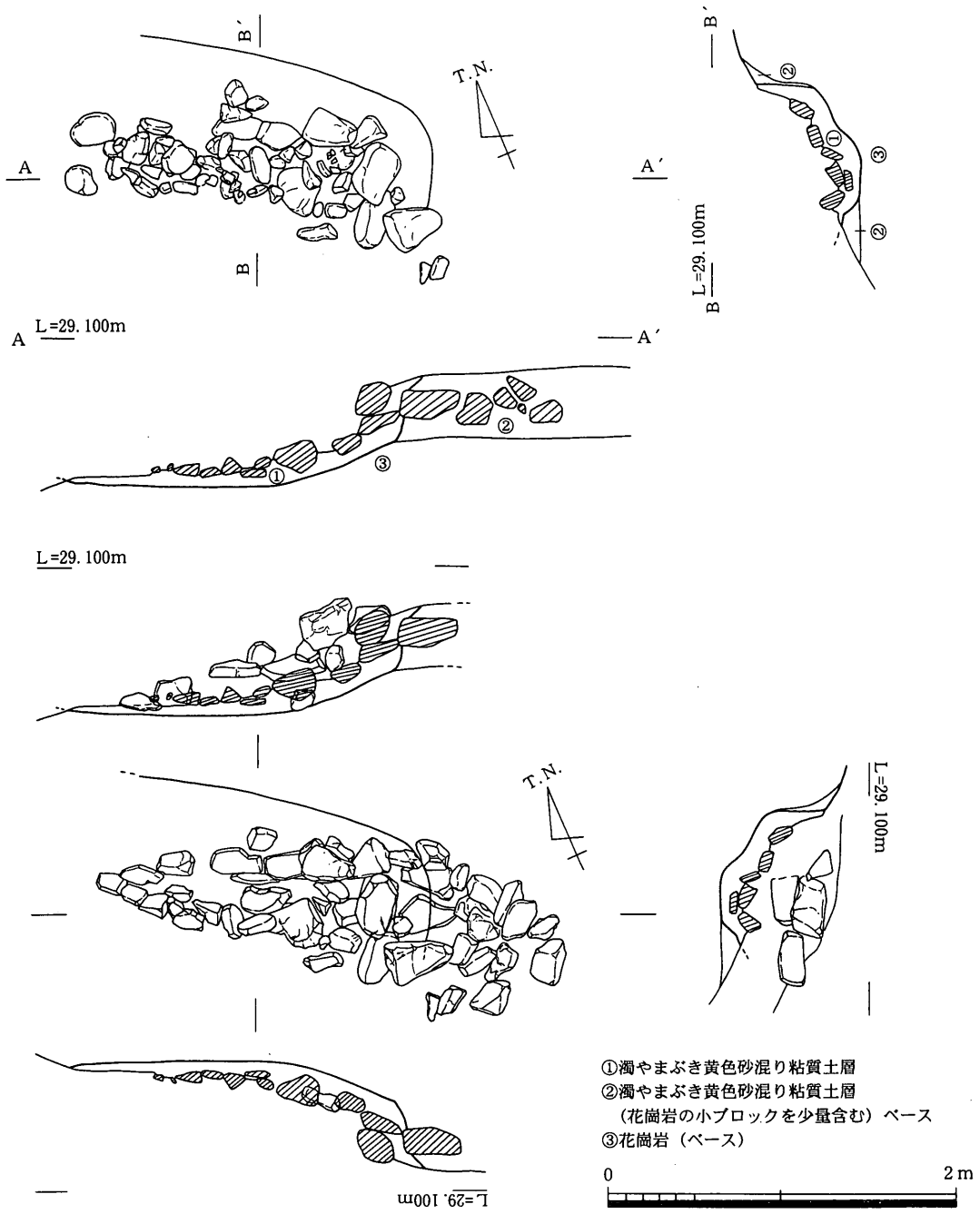
ST Ⅱ06は調査区内頂部の南西側斜面部、ST Ⅱ05から南東部へ2.5mの地点、標高28.6mで検出した土壙墓で、墓壙掘り方内面に川原石により小型の箱式石棺を構築する。斜面部で検出しているために南側



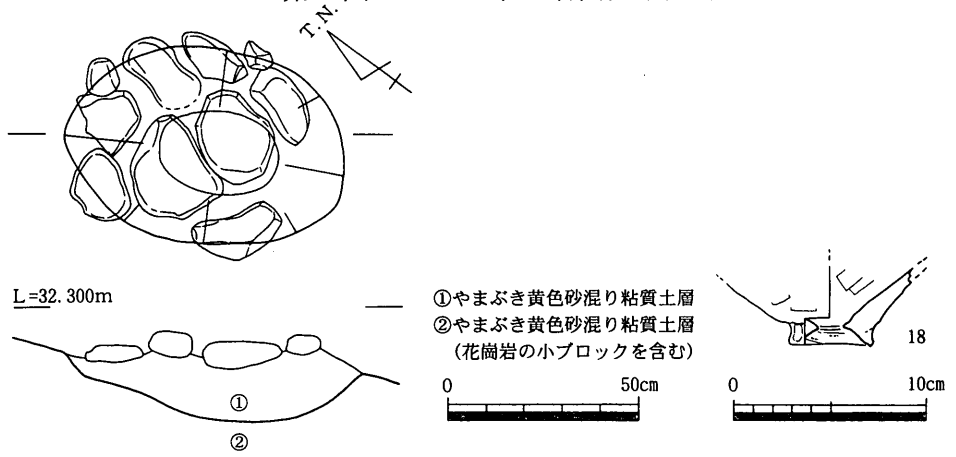
第21図　ST Ⅱ01平・断面図(1/40)
出土遺物実測図(1/4)



第22図　ST Ⅱ02平・断面図(1/40)



第26図　STⅡ05平・断面図(1/40)



第28図　STⅡ07平・断面図(1/20)、出土遺物実測図(1/4)

が削平され、西側小口と北側の側壁がかろうじて残存する。墓壙掘り方は長方形を呈するものと考えられ、墓壙内には側壁に幅15～20×20×30cm、厚さ約13cm程度の川原石を直立させ、直列状に現状で２石確認でき、隙間から当初は３石あったものと考えられる。一方西側小口部分には幅10×20cm、厚さ約７cm程度の川原石を直立させる。

土層断面で見ると側壁は土層②上に置かれており、これが棺床粘土と考えられる。

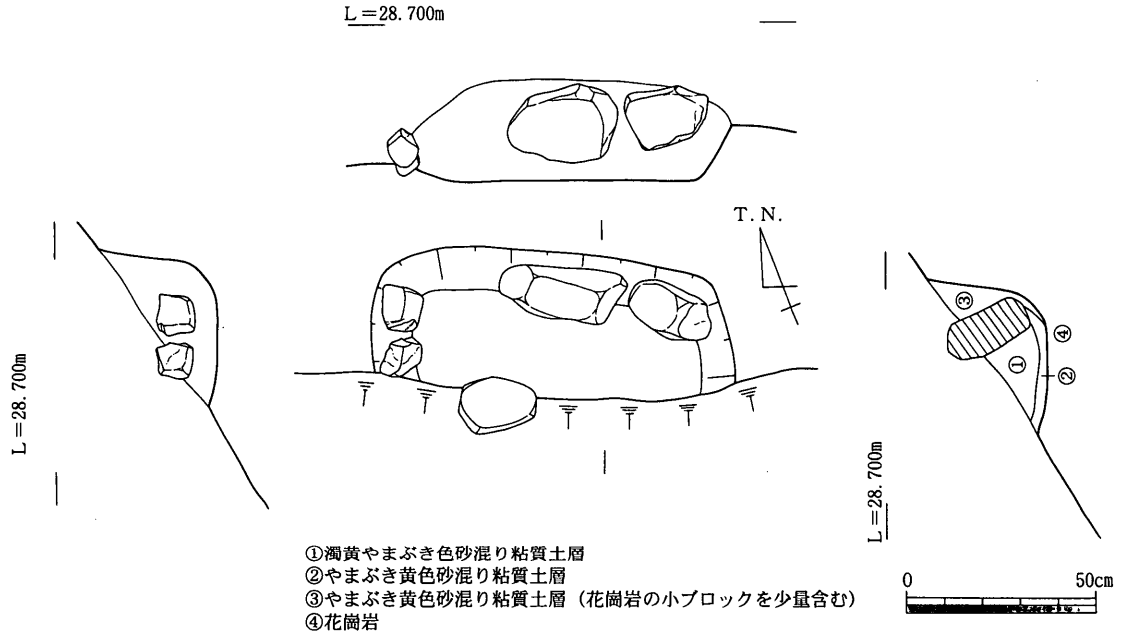
長軸主軸方向はＮ－65°－Ｗをとり、土壙墓はちょうど丘陵等高線に並行している。

ＳＴⅡ07（第28図）

ＳＴⅡ07は調査区内頂部の南西側斜面部東より、ＳＴⅡ08から西へ4.7ｍの地点、標高32.2ｍで検出した土壙墓で、平面形態が楕円形を呈し、断面形態が上開きのＵ字状を呈する土坑に土層①が堆積した後、その上面に10～20cm、厚さ５～12cm程度の川原石の上面を平らに敷き並べている。土坑の規模は長軸0.74ｍ、短軸0.51ｍ、深さ0.16ｍを測る。敷き並べられた川原石の範囲は土坑と同じような平面形態で、若干広い範囲である。

ここでは土壙墓として報告する。

18はＳＴⅡ07周辺から出土した甑である。元々は台付きの鉢と考えられ、その底部に穿孔が認められる。



第27図　ＳＴⅡ06平・断面図(1/20)

③土器棺墓

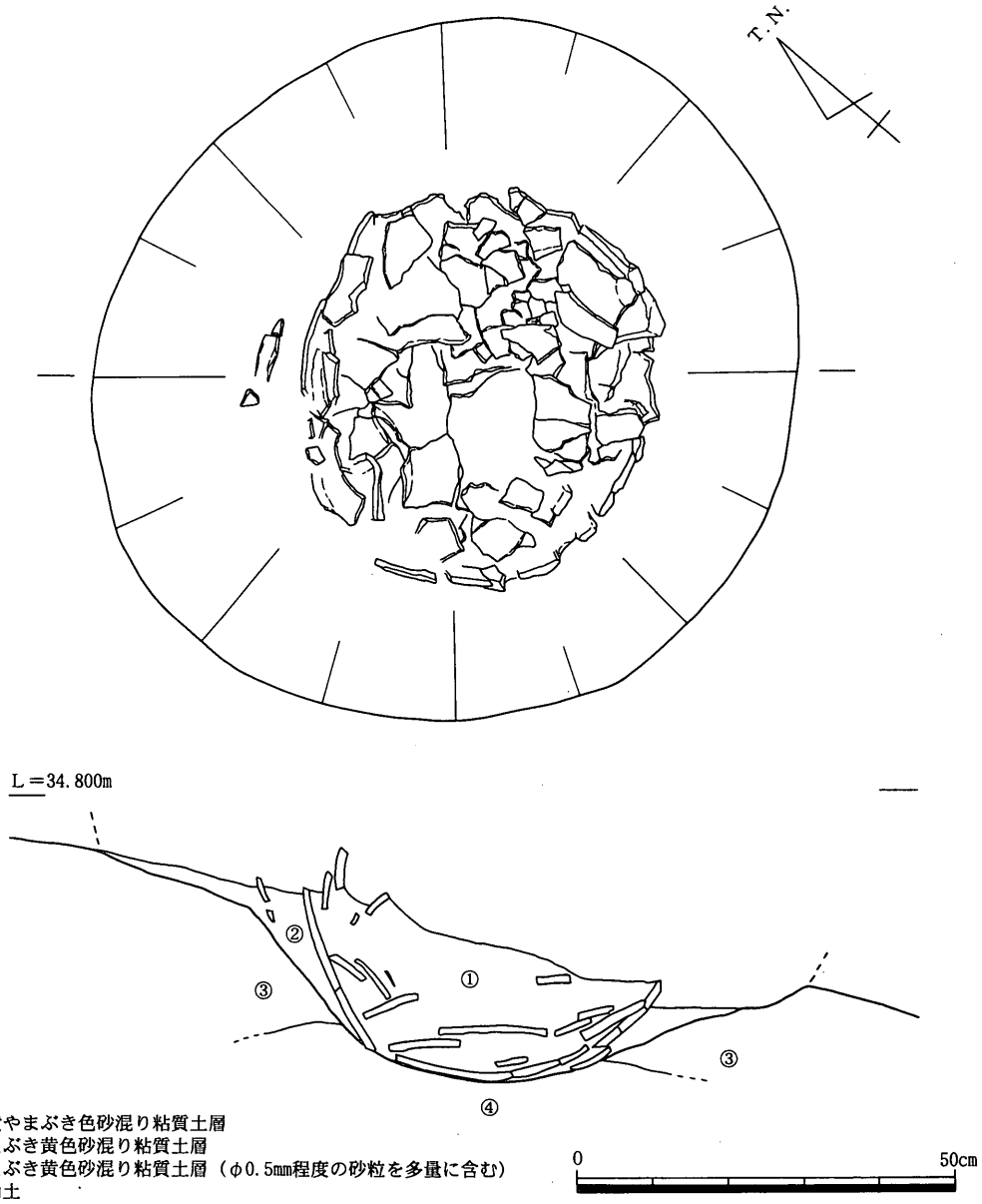
STⅡ08（第29・30図）

STⅡ08は調査区内頂部から南東方向に延びる稜線上、標高34.7mで検出した土器棺墓で、上部がかなり削平され、下部しか残存していない。

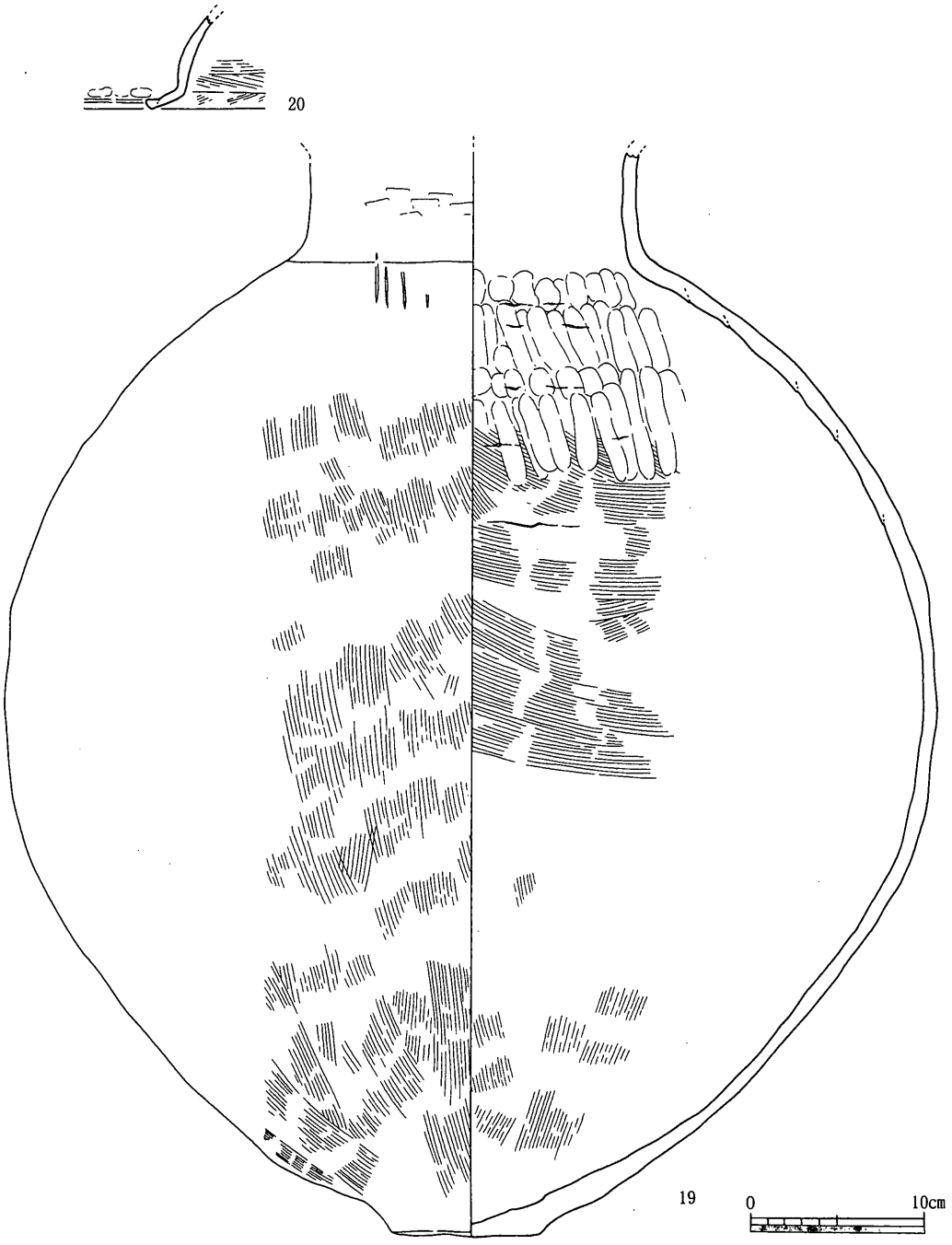
墓壙平面形態は直径約0.9mの円形を呈し、土層断面から中央が緩やかに窪み、深さは0.18mを測る。ほぼ中央部に棺身下半が残存する。棺内には上部の破片が多量に落ち込んでおり、この破片から壺の形状と蓋として鉢があったことが窺われる。

19は壺で底部に明瞭な平底を持ち、体部は内湾しながら延び、頸部は直線的に上方に延びる。体部最大径はほぼ中央部にある。体部外面には縦方向の刷毛目が、内面は下位に縦方向の刷毛目、中位に横方向の刷毛目、上位に縦方向の指ナデが施されている。

20は鉢で内湾する体部から口縁部は外方に屈曲する。小片しか残存しないが、壺とセットになるものと考えられる。



第29図　STⅡ08平・断面図(1/10)

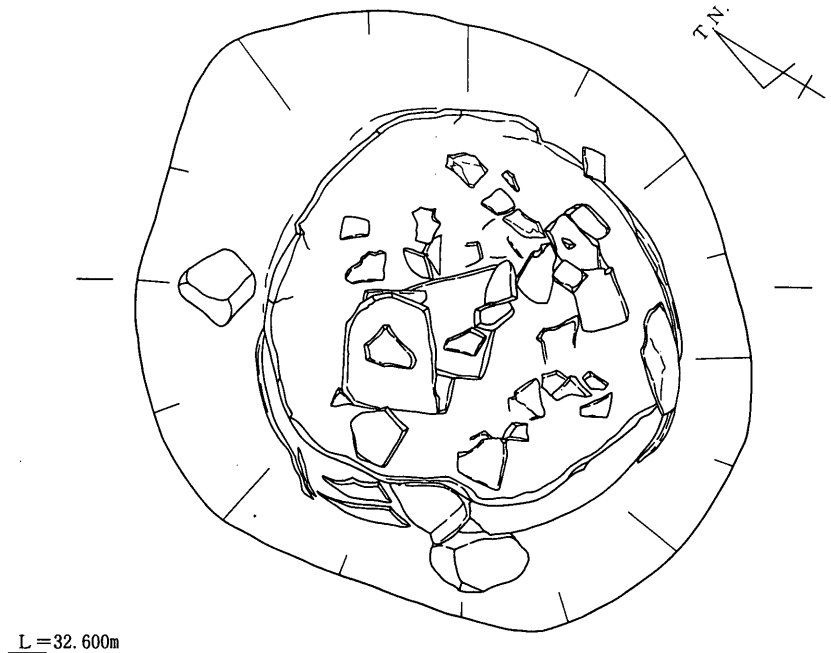


第30図　STⅡ08出土遺物実測図(1/4)

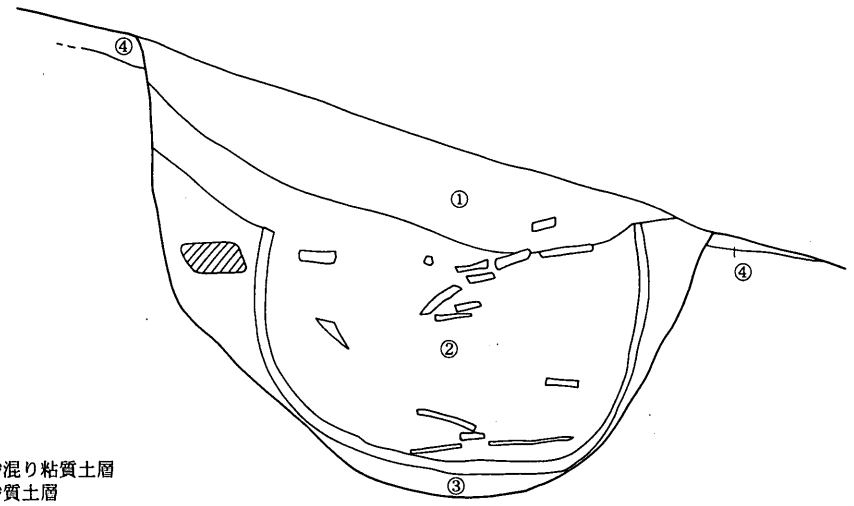
STⅡ09（第31・32図）

STⅡ09は調査区内頂部から南東方向に延びる稜線上、標高32.5mで検出した土器棺墓で、上部が削平され、下部しか残存していない。この土器棺墓の丘陵高所側で「コ」字状を呈する周溝を検出した。「コ」の字に屈曲する周溝のほぼ中央部で土器棺墓ST09を確認したことから土器棺に伴うものと考えた。周溝は幅1.3～1.6m、深さ0.34mを測り、断面は上部が緩やかに開くU字状を呈する。また周溝外幅は約5.7m、内幅は約2.3mを測る。

墓壙平面形態は直径約0.75～0.83mの歪な円形を呈し、土層断面から中央がU字状に窪み、深さは約0.47mを測る。ほぼ中央部に棺身が残存する。掘り方内には棺身である壺の底部を側壁際に向け、水平からの角度が49°を測る。口縁部は丘陵高所方向を、底部が丘陵低所方向を向いているため等高線に直



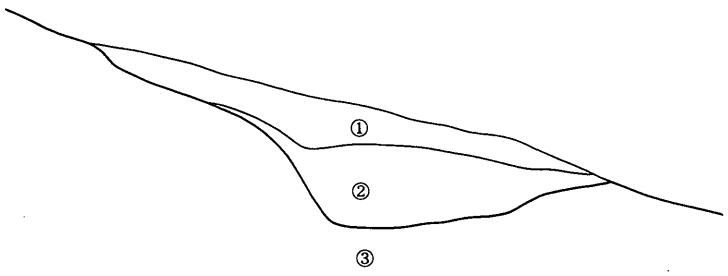
L＝32.600m



①灰やまぶき色砂混り粘質土層
②黄やまぶき色砂質土層
③濁灰やまぶき色砂混り粘質土層（花崗土の小ブロックを含む）
④濁黄やまぶき色砂混り粘質土層
⑤花崗土

0　50cm

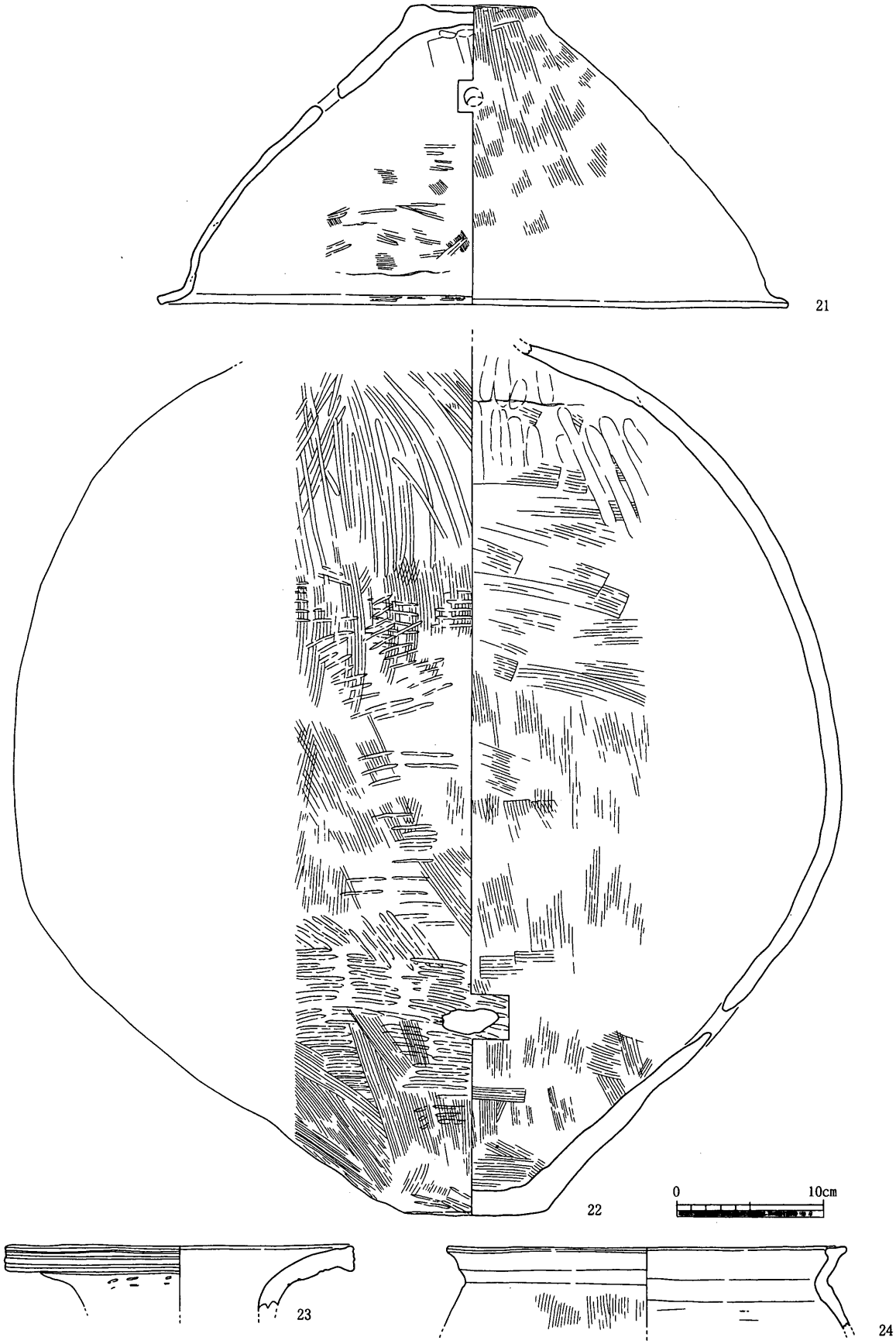
L＝33.200m



①濁黄やまぶき色砂混り粘質土層
②濁黄やまぶき色砂混り粘質土層
（花崗岩の小ブロックを含む）
③花崗岩（地山）

0　50cm

第31図　STⅡ09平・断面図(1/10)、STⅡ09周溝土層断面図(1/20)



第32図　STⅡ09出土遺物実測図(1/4)

交する。壺の体部下半には焼成後穿孔が認められ、穿孔は棺身を設置した状況で底面側に位置する。棺身と墓壙掘り方間には棺身を安定させるために詰め込まれたと考えられる拳大程度の砂岩が確認できる。

22は壺で底部に明瞭な平底を持ち、体部は内湾しながら延び、頸部は直線的に上方に延びる。体部最大径は中位よりやや下方にあり、下ぶくれの体部を持つ。頸部での打ち欠きは部分的に体部上半まで確認できる。体部外面には叩きの後縦方向の刷毛目が、上位には縦方向のヘラ磨きが施されている。内面は下位から中位にかけて縦方向の刷毛目が、上位は横方向の刷毛目、そして縦方向の指ナデが施されている。

21は鉢で底部にしっかりした平底を持ち、体部はほぼ直線的に外上方に延び、口縁部近くで内湾し、口縁部は外反する。体部内外面に刷毛目が施されている。

23・24はSTⅡ09周辺から出土したもので、23は22の口縁部と考えられる。

STⅡ10・11（第19・33図）

STⅡ10・11は調査区内頂部の南西斜面部、畑地化により削られた包含層から出土している。そのため遺構は検出されていないが、かなり纏まって出土していることからあまり原位置を移動していないという前提で土器棺墓とし、出土位置を平面図に落とした。両者とも標高30.6m当たりで検出した土器棺墓である。

25・26はSTⅡ10出土の土器で、壺は底部に明瞭な平底を持ち、体部は内湾しながら延びる。体部最大径はほぼ中位にある。体部外面には縦方向のヘラ磨きが、内面には板ナデが施されている。

27はSTⅡ11出土の壺で、底部に明瞭な平底を持ち、体部は下半部が直線的に外上方に延び、上部で方に張りを持ち、屈曲する。そのため体部最大径は上位にある。体部外面は摩滅が著しく調整が不明であるが、内面にはヘラ削り・刷毛目等が施されている。

STⅡ12（第34図）

STⅡ12は調査区内頂部の南西斜面部、標高28.5mで検出した土器棺墓で、傾斜角度45°で検出しているためにかなり上部が削平され、下部しか残存していない。

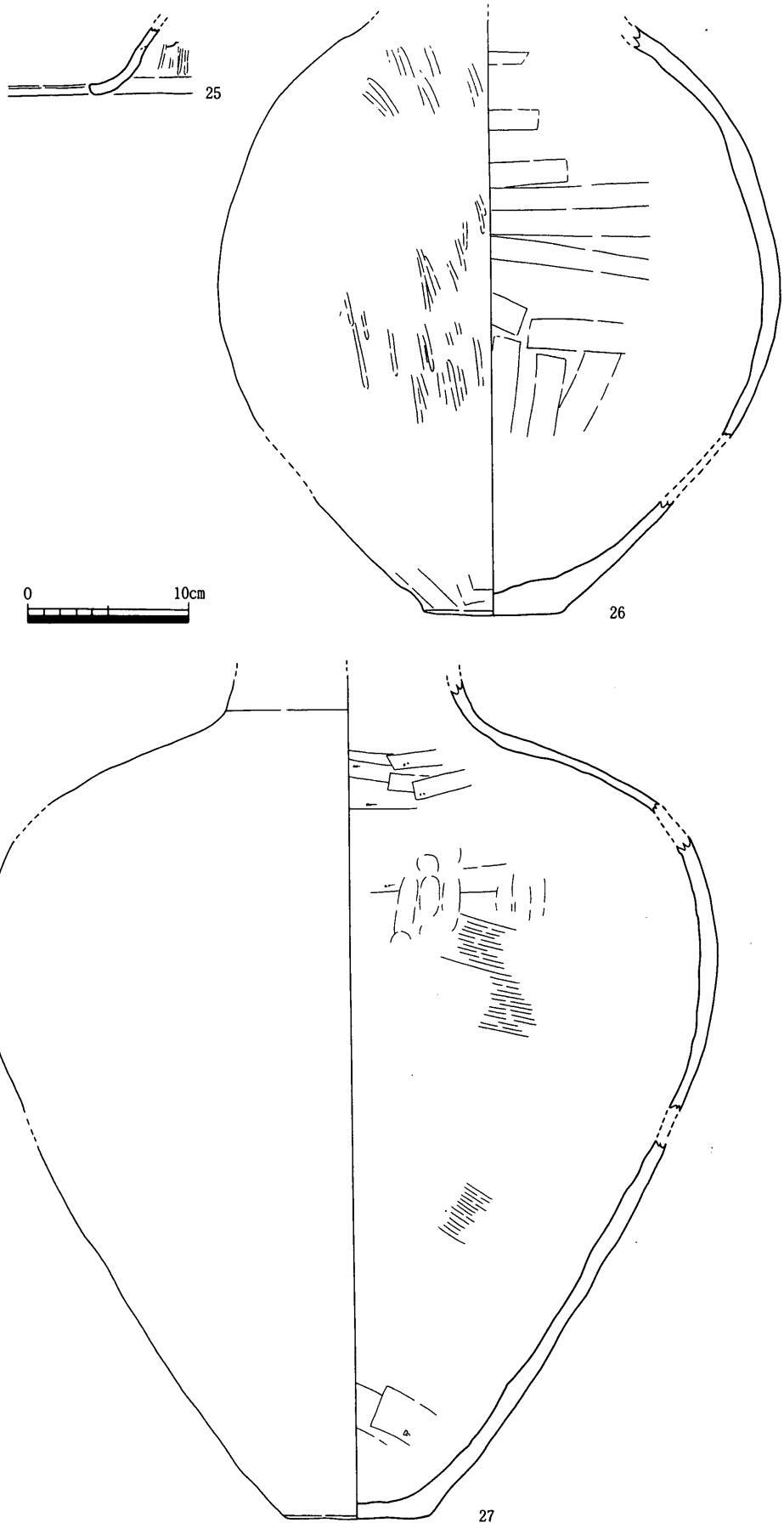
墓壙平面形態は直径約0.7mの円形を呈し、土層断面から中央がU字状に窪み、深さは中央部で約0.23mを測る。ほぼ中央部に棺身が残存し、上部の破片は下方に崩れた状態で出土した。掘り方内には棺身である壺の底部を東側壁際に向ける。口縁部は西方向を向いているため、等高線に並行に置かれている。壺の体部下半には焼成後穿孔が認められ、穿孔は棺身を設置した状況で底面側に位置する。

29は壺で底部に明瞭な平底を持ち、体部は内湾しながら延びる。頸部は直線的に上方に延び、外方に屈曲する。おそらく２重口縁壺になるものと考えられる。体部最大径は中位よりやや上方にあり、やや肩の張る形態である。頸部から口縁部に至る屈曲部分で打ち欠かれており、一部分は頸部まで至る。体部外面には下位に縦方向のヘラ磨きが、中位から上位には刷毛目が施されている。また体部上位から頸部にかけてヘラ描き沈線が施されている。内面は下位に斜め方向の刷毛目が、中位に縦方向の指ナデが、上位に横方向の刷毛目が施されている。

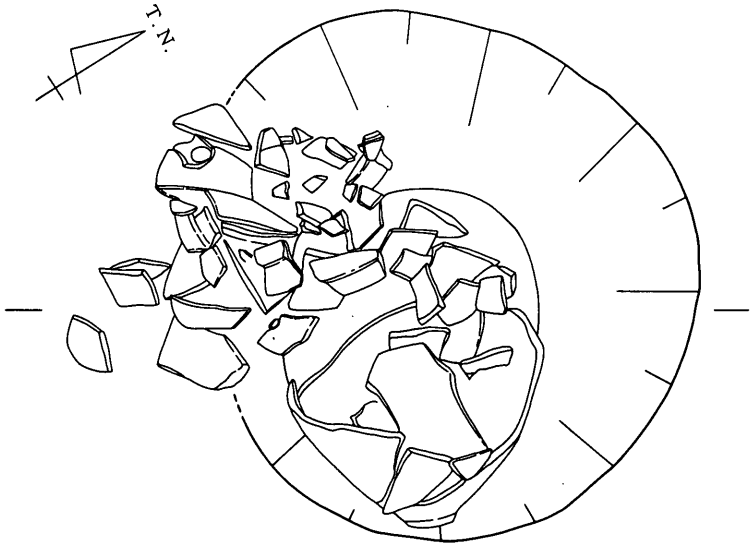
28は高坏で、この土器棺の棺蓋にはこの高坏が転用されたと考えられ、脚部は打ち欠かれている。

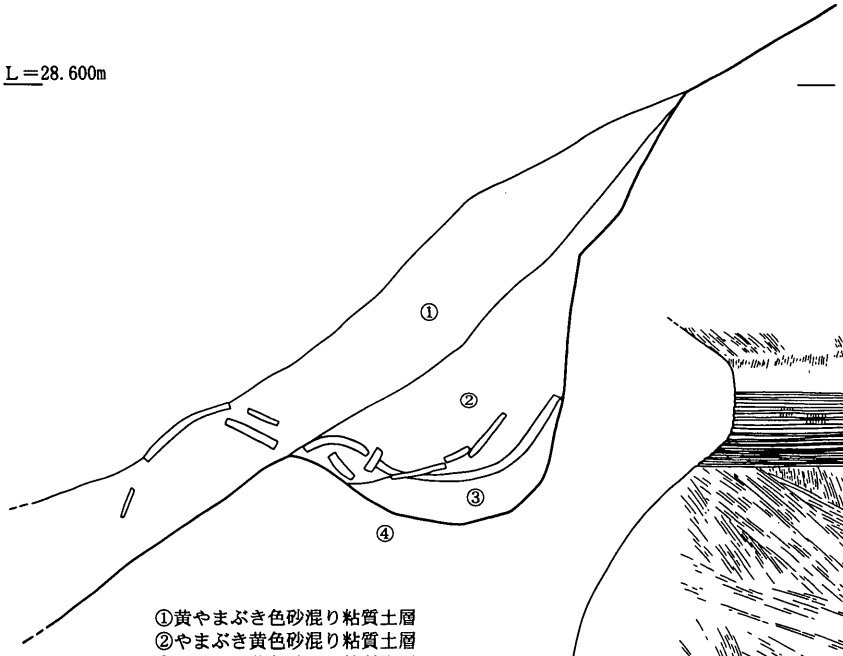
STⅡ13（第19・35図）

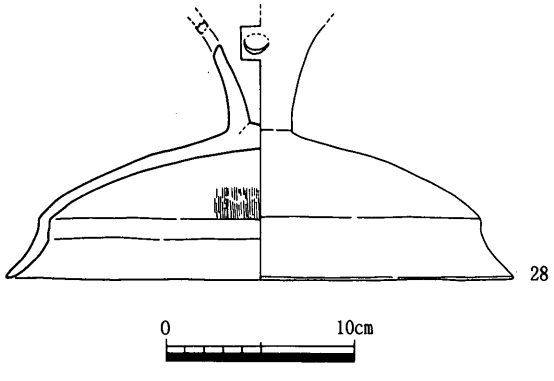
STⅡ13は調査区内頂部の南西斜面部、畑地化により削られた包含層から出土している。そのため遺構は検出されていないが、かなり纏まって出土していることからあまり原位置を移動していないという前

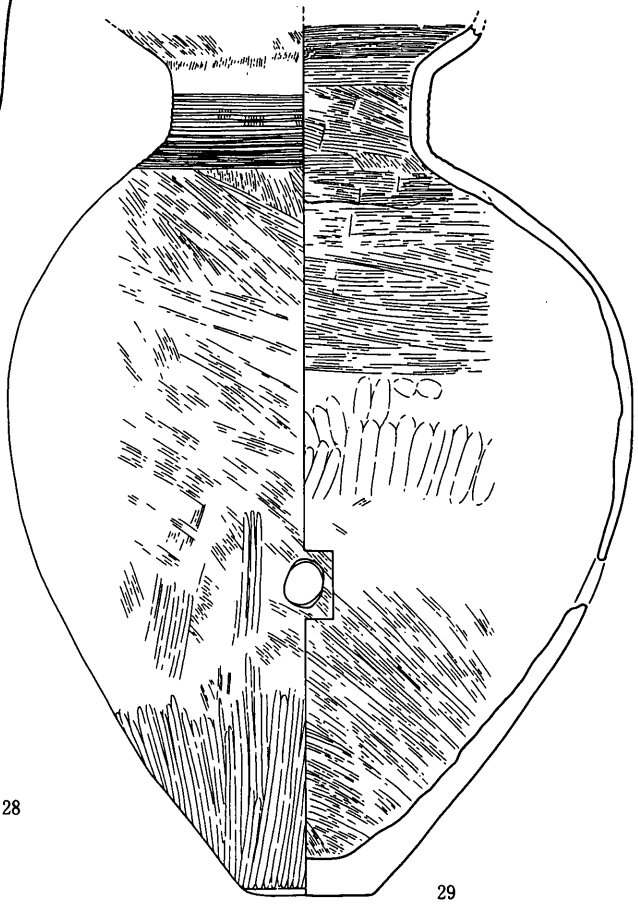


第33図　STⅡ10・11出土遺物実測図(1/4)







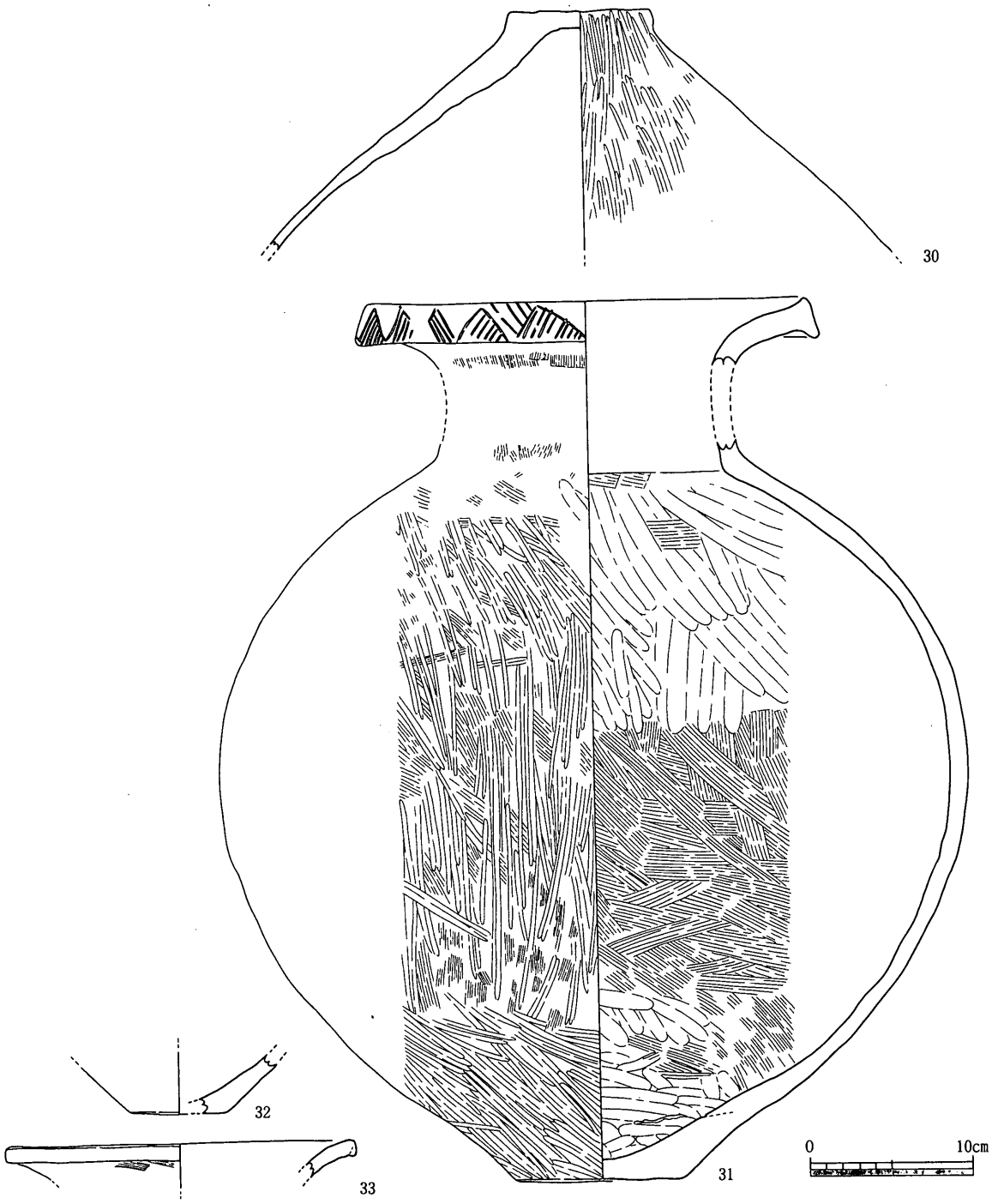


第34図　STⅡ12平・断面図(1/10)、出土遺物実測図(1/4)

提で土器棺墓とし、出土位置を平面図に落とした。標高27.2m当たりで検出した土器棺墓である。

31は壺で底部に明瞭な平底を持ち、体部は内湾しながら延びる。体部最大径はほぼ中位にある。体部外面には下位に斜め方向の、中位から上位にかけて刷毛目の後縦方向のヘラ磨きが、内面には下位に指ナデが、中位に横方向の刷毛目が、上位に指ナデが施されている。この壺には頸部が存在しないものの胎土から同一個体と考えられる口縁部があり、口縁端部を上下に拡張し、外面に鋸歯文が施されている。

棺蓋は（30）で、壺の底部の転用と考えられる。その他に壺の口縁部（33）と、甕の底部（32）が出土している。



第35図　STⅡ13出土遺物実測図(1/4)

これらの土器棺は棺身の時期は壺の形態により概ね４時期に分けられる。

その時期決定の根拠は壺の体部最大径の位置で、中位より上半に最大径があり、肩の張るものSTⅡ11（第33図27）、中位より上半にありやや肩の張るものSTⅡ12（第34図29）、中位にあるものあるものSTⅡ10・13（第33図26・31）、中位より下半にあり下ぶくれのものSTⅡ08・09（第30・32図19・22）に分類し、最大径が上位から下位に移行するものとした。

この結果築造順位はSTⅡ11→STⅡ12→STⅡ10・13→STⅡ08・09の順序となり、STⅡ12の棺蓋である高坏が下川津Ⅲ式併行期と考えられることから、時期は弥生時代後期後半から弥生時代終末にかけての時期とする。

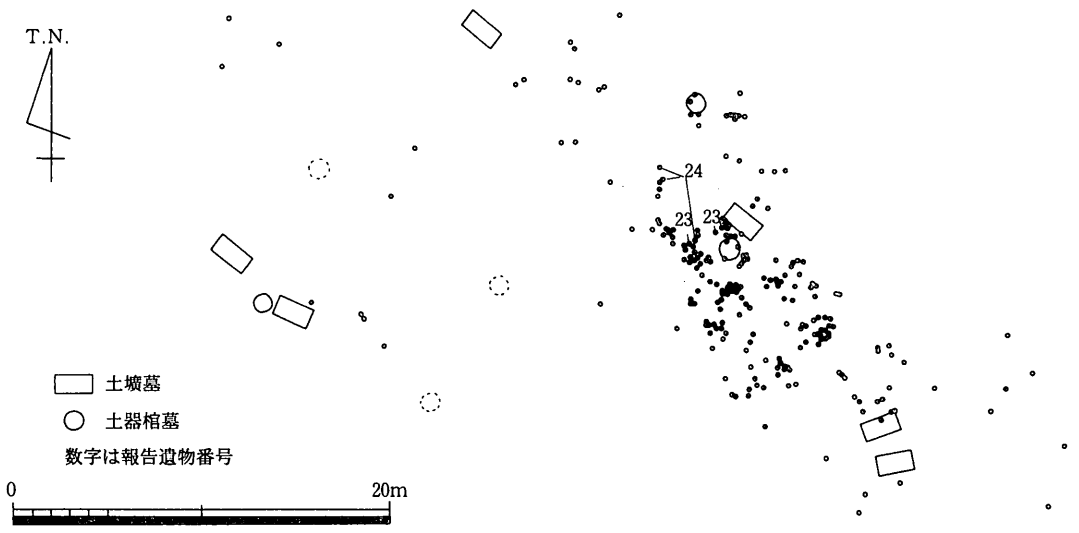
④まとめ

第Ⅱ調査区で検出した台状墓、土壙墓、土器棺墓を見ると概ね弥生時代後期後半から古墳時代前期初頭に造営されたもので、同時期に墳墓形態の異なるものが存在していることも判明した。

台状墓は主体部が土壙墓であるが、丘陵高所側に区画溝を持っており、明らかに他の土壙墓とは区別されている。土器棺にも丘陵高所側に区画溝を持つSTⅡ09もあり、またその立地にも丘陵稜線上と斜面部と土器棺内にも被葬者による格差があるものと考えられる。

第Ⅱ調査区で検出した土器棺の口縁部の方向はSTⅡ09が丘陵高所側、STⅡ12が西方向と一定しないが、おそらくこれは丘陵稜線上と斜面部というように立地の差によるものと考えられる。

土壙墓と土器棺の配置（第36図）にはあまり規則性は認められない。しかし主軸方向は丘陵稜線上にあるものは丘陵稜線に並行に、斜面部にあるものは等高線に並行にと規則性が認められる。また土器棺に使用された壺・鉢片の分布は土器を中心に約８ｍの範囲内に広がるようである。



第36図　樋端第Ⅱ調査区土壙墓・土器棺墓位置図、土器片出土位置図(1/400)

3．神越２号墳

(1)調査前の状況

神越２号墳は町道北側の丘陵で、標高36.8mの頂部（分岐部分）から南東方向に短く延びる丘陵先端部、標高34.6mに位置する（第19図）。

調査前の地形測量で、南東方向に延びる丘陵は先端部直前でくびれており、調査前から先端部では墳丘上の高まり及びその高まり中央部南東側に穿たれた盗掘坑から石室石材が露出していたことから周知の遺跡ではなかったものの古墳の可能性が指摘されていた。また調査前にこの高まり頂部には五角柱を呈する地神塔（倉稲魂命・大己貴命・埴安姫命・天照皇大神・少名彦命）があり、その基礎部分に方柱状の川原石が使用されていたことからも古墳の可能性が指摘できた。

この丘陵の南側（町道に面する側）は調査前の地形で畑地化された４段の平らな面が確認でき、後世の削平をかなり受けていることが確認されている。ちょうど最下段の畑地面がこの高まりの南側まで延びており、当初古墳がかなり破壊されていることが予想された。

平成10年度の予備調査の結果、周溝と埋葬施設（主体部）を持つ古墳であることが明確になった。ただしこの時点では竪穴式石室か横穴式石室かは不明であった。

調査にあたっては地形測量図及び予備調査の結果を踏まえ、現認出来る石室石材を基準に稜線上及び主体部に直交する計４本の畔を設定し、表土剥ぎから開始した。

(2)立地

神越２号墳は調査前に想定していたとおり、北側丘陵の先端部に所在する。ちょうど丘陵がくびれていた部分は周溝に当たり、上部（天井石）から盗掘を受けていたものの玄室側壁及び羨道部が残る横穴式石室であることが判明した。

この古墳の所在する丘陵が湊川に沿って延びていることから、眼下に湊川、そして湊川東側沿いに広がる白鳥町の平野、さらに海まで見渡せる位置にある。

(3)周溝・墳丘（第37図）

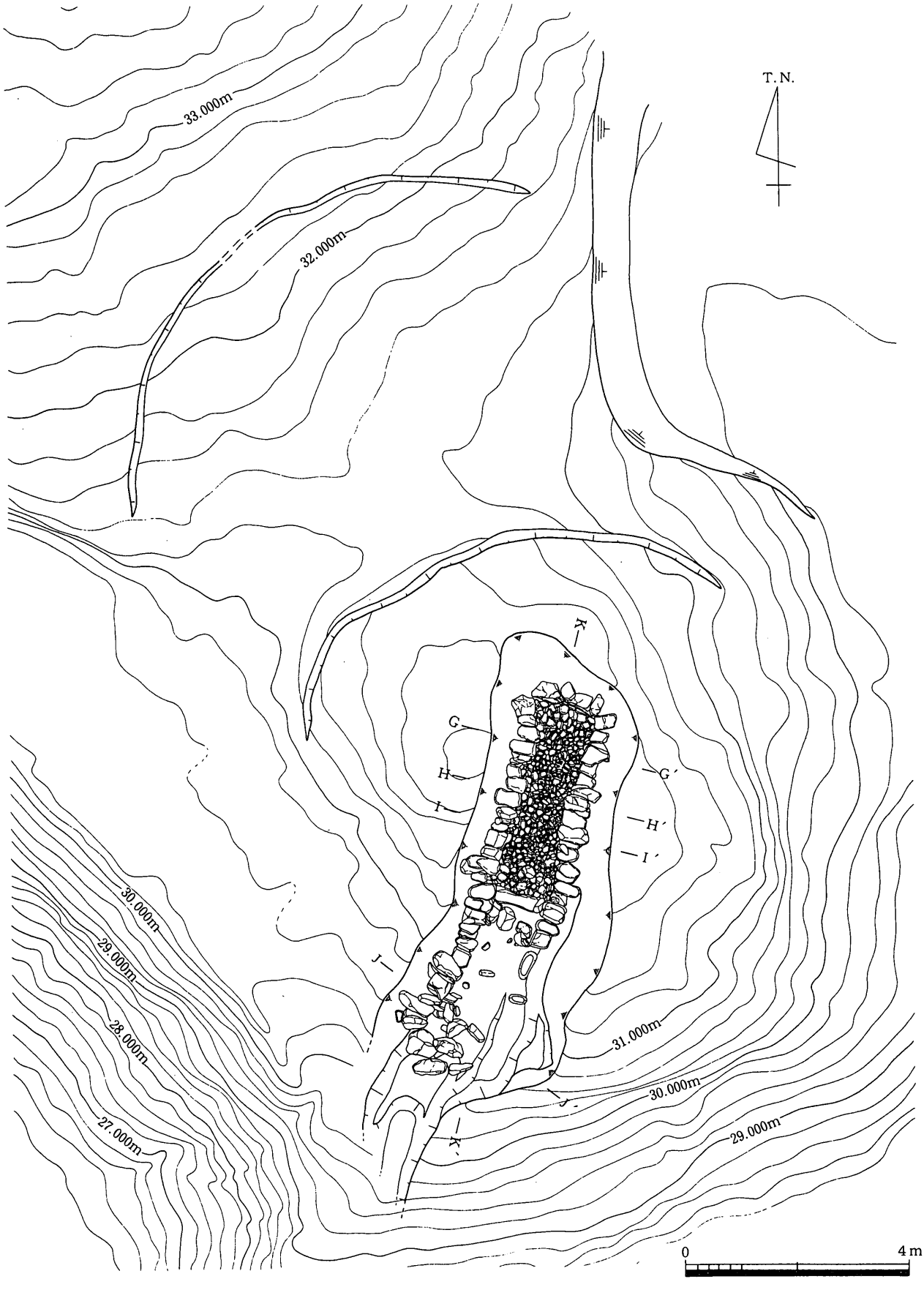
古墳は丘陵先端部、伐開後の墳丘検出面での標高32.0mで検出した。上部は盗掘と地神塔の建立により玄室と羨道部の形状に掘削・破壊されており、南西部墳裾は後世の畑地化による開墾で削平されていた。

周溝は丘陵稜線（北西側）を切断するように掘削されているだけで、それ以外に当初から存在したかどうかについては不明である。

検出状況から最大幅約7.0m、土層断面から幅約5.4m、深さ約0.47mを測る。

土層断面Ｃ－Ｃ′から高所側の地山を削りだし、墳丘側は版築で周溝が形成されていることが解る（第38図）。

墳丘は丘陵稜線に残る周溝がやや弧を描いていることより円墳と考えられ、墳丘部から周溝最下部への変換点を墳裾とした場合に直径約11.7m、墳丘高は丘陵稜線側で周溝最下部から約0.76mを、先端部側で現状の墳裾から1.14mを測る。墳丘はかなり削平されているが、断割りの結果、地山（花崗岩）上に盛土があり、かなり細かい版築の痕跡が確認できた。



第37図　神越２号墳平面図(1/100)

第40図土層断面Ｇ－Ｇ′、Ｈ－Ｈ′（玄室に直交）でみると版築土層は概ねやまぶき灰色系の砂混り粘質土と暗茶灰色系の砂混り粘質土の互層からなり、側壁際では花崗岩の崩れた土（花崗土）を多量に含むやまぶき茶色系の砂混り粘質土と主として墳丘を構築する土層は粘質土で、側壁を固定する土層は花崗土を多量に含むやや軟質の粘質土を呈していることが解る。

詳細は後述するが、石室構築と版築（盛土）との関係はまず築造前の腐葉土（所謂ブラックバンド）が確認できないことから地山（花崗岩）成形後墓壙を掘削し、墓壙内に石室基底石、さらに上部の側壁一石ごとに裏込め状に土層を突き固め、墓壙上面（標高31.0m）までを一連の流れで造られたものと考える。次に現墳丘裾部から一回り小さい墳裾を形成しながら、側壁一石ごとに盛土を行い、上部（標高31.7m）の側壁を構築する。さらに側壁を構築し、天井石までの盛土を行った後、墳丘の成形をするための盛土を行ったことが解る。

(4)埋葬主体（第39図）

主体部は横穴式石室で、長軸主軸がＮ－13°－Ｅを取り、概ね南に開口する。

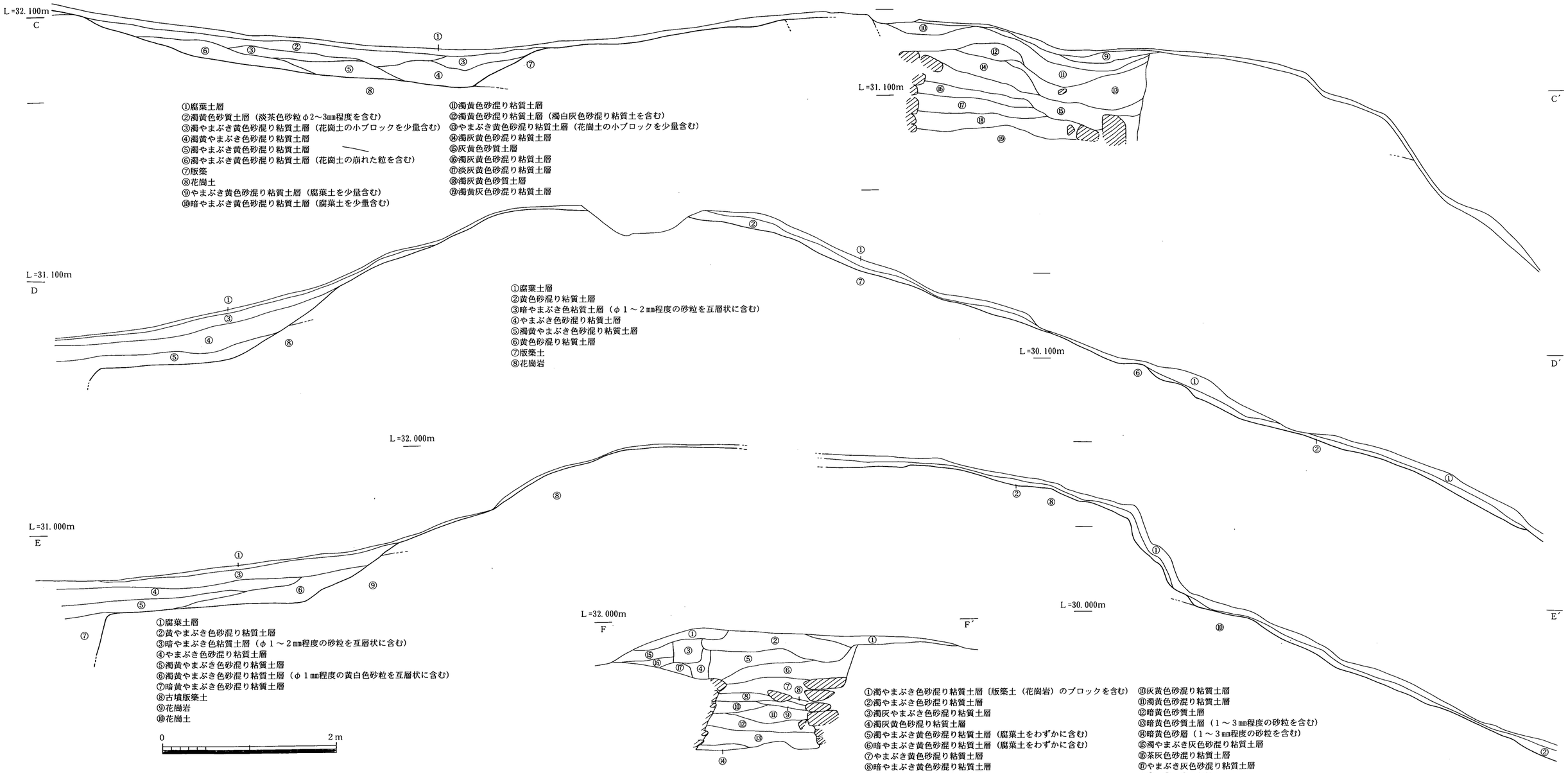
墓壙掘り方は石室の開口する南からみると平面形態が羽子板状を呈する。

玄室部掘り方は羽子板状を呈することから逆台形となり、断面は側面が垂直に、底面が平らな箱形を呈する。規模は奥壁側が約3.0m、玄門部側が約2.5m、長さ約4.4m、深さ約0.9mを測る。続く羨道部は玄門部から約1.5m真っ直ぐ延びた後に若干西側に緩やかに屈曲する。断面は西側が１段、東側が２段の掘り方を呈する箱形で、羨道底面中央部がやや窪み、その段になった部分に側壁を構築したものと考える。この羨道部掘り方の規模は玄門部側が幅約2.0m、墓道側は若干広く幅約2.5m、現存長は約3.3m、深さ0.41mを測る。羨道部に続く墓道は羨道部から真っ直ぐに南に延び、徐々に低くなり、断面はＵ字状を呈する。墓道規模は幅約1.3m、現存長2.3mを測り、深さは約0.48mを測る。

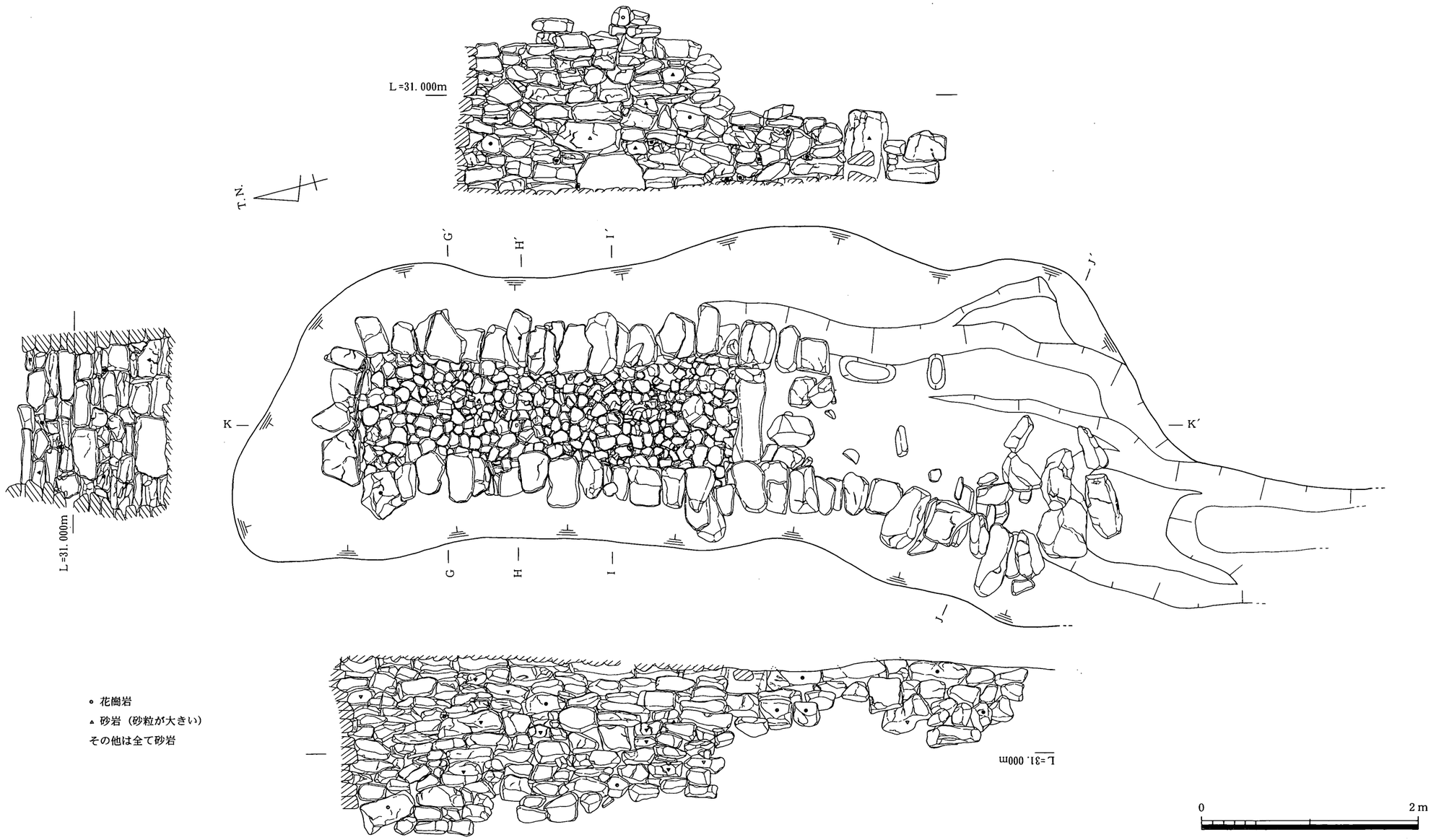
玄室は奥壁基底石の１石及び東側側壁基底石の１石を除き、幅0.2～0.4m、厚さ0.1～0.15mの平たい河原石を基底石内面が墓壙掘り方から西側で0.35～0.5m内側に、北側で0.35～0.48m内側に、東側で0.52～0.67m内側にと若干西側に寄った位置に基底石は面を揃えて据えられている。この基底石の中には方柱状の川原石も認められ、この方柱状の川原石は直列状に、奥壁と側壁は側壁が奥壁を挟み込むのではなく、それぞれのコーナー部を接するように据えられている。また東側側壁基底石にある他と異なる１石は厚さが異なるのみで、その他の基底石と幅は同規模であるが、奥壁基底石の１石は明らかに同規模の平らな石を直立させていることが解り、意図的である。

玄門部は玄室と羨道を仕切るように仕切石が据えられ、東側には約0.3×0.4×0.7mの玄門立柱石が据えられているが、西側には東側ほど大きくはなく約0.3×0.4×0.5mのやや大きい川原石が据えられている。これらによって玄室部分の基底石が構成され、側壁は直線的で、胴張りは認められない。この基底石内側での規模は奥壁側約1.56m、玄門部側約1.47、長さ約3.53mとほぼ長方形を呈する。玄室床面は墓壙底面の地山成形後、直上に幅５～25cm、厚さ３～５cmの平たい石を平らに敷き詰めている。この石床では若干中央部にやや小振りのものが認められるが、特に規則性は認められない。しかし東側壁際の北部をみると明らかに側壁に沿って一列だけではあるが長方形状の石を並べた痕跡が確認でき、石床の形成がこの北東隅から行われたことを窺わせる。この石床上面から人骨３体分、土器、鉄製品、装身具などが多量に出土している。

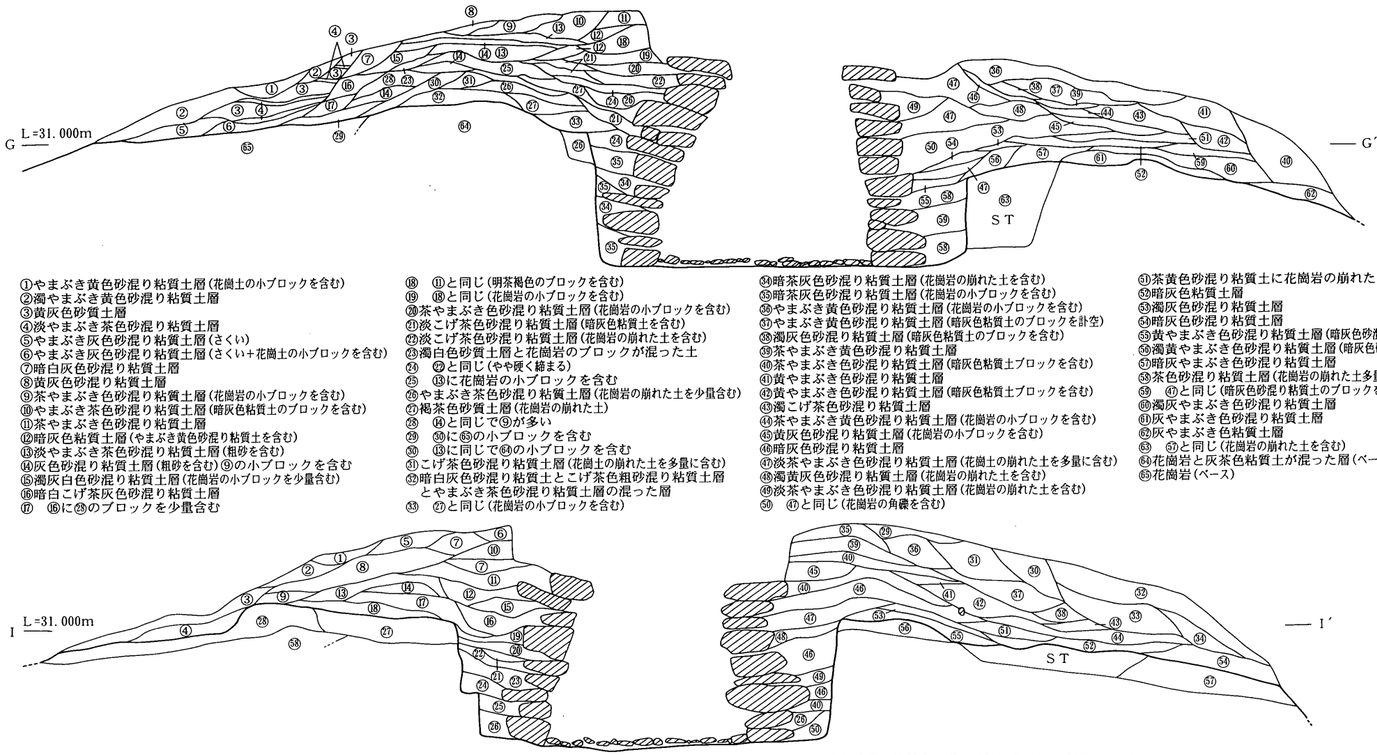
人骨には頭蓋骨・上腕骨・大腿骨が確認でき、上腕骨及び大腿骨はほぼ玄室長軸とほぼ並行して確認



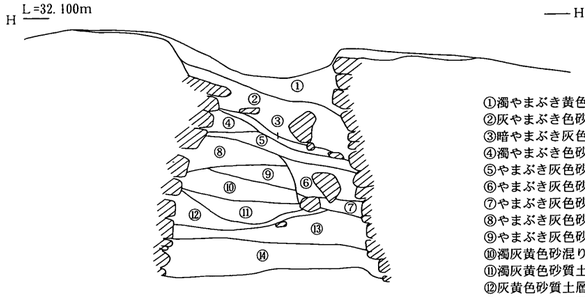
第38図　神越２号墳土層断面図(1/40)



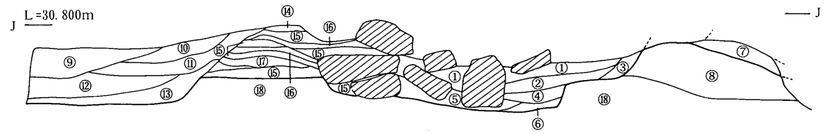
第39図　神越２号墳玄室・羨道部平・立面図(1/40)



①やまぶき黄色砂混り粘質土層(花崗土の小ブロックを含む)
②濁やまぶき黄色砂混り粘質土層
③黄灰色砂質土層
④淡やまぶき茶色砂混り粘質土層
⑤やまぶき灰色砂混り粘質土層(さくい)
⑥やまぶき灰色砂混り粘質土層(さくい+花崗土の小ブロックを含む)
⑦暗白灰色砂混り粘質土層
⑧黄灰色砂混り粘質土層
⑨茶やまぶき色砂混り粘質土層(花崗岩の小ブロックを含む)
⑩やまぶき茶色砂混り粘質土層(暗灰色粘質土のブロックを含む)
⑪茶やまぶき色砂混り粘質土層
⑫暗灰色粘質土層(やまぶき黄色砂混り粘質土を含む)
⑬淡やまぶき茶色砂混り粘質土層(粗砂を含む)
⑭灰色砂混り粘質土層(粗砂を含む)⑨の小ブロックを含む
⑮濁灰白色砂混り粘質土層(花崗岩の小ブロックを少量含む)
⑯暗白こげ茶灰色砂混り粘質土層
⑰　⑯に㉘のブロックを少量含む
⑱　⑪と同じ(明茶褐色のブロックを含む)
⑲　⑱と同じ(花崗岩の小ブロックを含む)
⑳茶やまぶき色砂混り粘質土層(花崗岩の小ブロックを含む)
㉑淡こげ茶色砂混り粘質土層(暗灰色粘質土を含む)
㉒淡こげ茶色砂混り粘質土層(花崗岩の崩れた土を含む)
㉓濁白色砂質土層と花崗岩のブロックが混った土
㉔　㉒と同じ(やや硬く締まる)
㉕　⑬に花崗岩の小ブロックを含む
㉖やまぶき茶色砂混り粘質土層(花崗岩の崩れた土を少量含む)
㉗褐茶色砂質土層(花崗岩の崩れた土)
㉘　⑭と同じで⑨が多い
㉙　⑩に⑮の小ブロックを含む
㉚　⑬に同じで⑮の小ブロックを含む
㉛こげ茶色砂混り粘質土層(花崗土の崩れた土を多量に含む)
㉜暗白灰色砂混り粘質土とこげ茶色粗砂混り粘質土層とやまぶき茶色砂混り粘質土層の混った層
㉝　㉗と同じ(花崗岩の小ブロックを含む)
㉞暗茶灰色砂混り粘質土層(花崗岩の崩れた土を含む)
㉟暗茶灰色砂混り粘質土層(花崗岩の小ブロックを含む)
㊱やまぶき黄色砂混り粘質土層(花崗岩の小ブロックを含む)
㊲やまぶき黄色砂混り粘質土層(暗灰色粘質土のブロックを計空)
㊳濁灰色砂混り粘質土層(暗灰色粘質土のブロックを含む)
㊴茶やまぶき黄色砂混り粘質土層
㊵茶やまぶき色砂混り粘質土層(暗灰色粘質土ブロックを含む)
㊶黄やまぶき色砂混り粘質土層(暗灰色粘質土ブロックを含む)
㊷黄やまぶき色砂混り粘質土層(暗灰色粘質土ブロックを含む)
㊸濁こげ茶色砂混り粘質土層
㊹茶やまぶき黄色砂混り粘質土層(花崗岩の小ブロックを含む)
㊺黄灰色砂混り粘質土層(花崗岩の小ブロックを含む)
㊻暗灰色砂混り粘質土層
㊼淡茶やまぶき色砂混り粘質土層(花崗土の崩れた土を多量に含む)
㊽濁黄灰色砂混り粘質土層(花崗岩の崩れた土を含む)
㊾淡茶やまぶき色砂混り粘質土層(花崗岩の崩れた土を含む)
㊿　㊼と同じ(花崗岩の角礫を含む)
(51)茶黄色砂混り粘質土に花崗岩の崩れた土を含む
(52)暗灰色粘質土層
(53)濁灰色砂混り粘質土層
(54)暗灰色砂混り粘質土層
(55)黄やまぶき色砂混り粘質土層(暗灰色砂混り粘質土を含む)
(56)濁黄やまぶき色砂混り粘質土層(暗灰色砂混り粘質土を含む)
(57)暗灰やまぶき色砂混り粘質土層
(58)茶色砂混り粘質土層(花崗岩の崩れた土多量に含む)
(59)　㊼と同じ(暗灰色砂混り粘質土のブロックを含む)
(60)濁灰やまぶき色砂混り粘質土層
(61)灰やまぶき色砂混り粘質土層
(62)灰やまぶき色粘質土層
(63)　㊲と同じ(花崗岩の崩れた土)
(64)花崗岩と灰茶色粘質土が混った層(ベース)
(65)花崗岩(ベース)

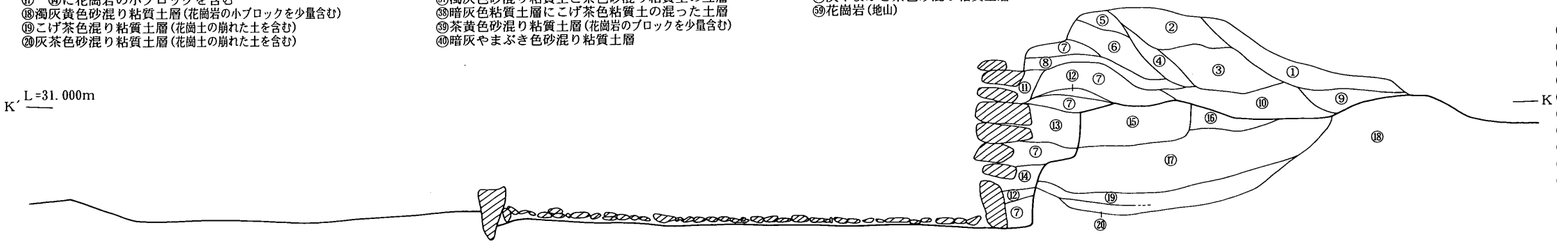


①濁やまぶき黄色砂混り粘質土層(版築ブロックを含む)
②灰やまぶき色砂混り粘質土層
③暗やまぶき灰色砂混り粘質土倉(炭を少量含む)
④濁やまぶき色砂混り粘質土層
⑤やまぶき灰色砂混り粘質土層
⑥やまぶき灰色砂混り粘質土層(版築ブロックを含む)
⑦やまぶき灰色砂質土層(最下位がシルト状になる)
⑧やまぶき灰色砂混り粘質土層(砂層が層状に入る)互層
⑨やまぶき灰色砂混り粘質土層(暗灰色粘質土を層状に含む)
⑩濁灰黄色砂混り粘質土層
⑪濁灰黄色砂質土層
⑫灰黄色砂質土層
⑬濁黄灰色砂礫層(φ1～5㎜程度の砂粒)
⑭暗灰黄色砂層(φ1㎜以下の砂粒)



閉塞石見通し図(墓道より)

①茶やまぶき色砂混り粘質土層(花崗岩の小ブロックを少量含む)
②やまぶき黄色砂混り粘質土層
③やまぶき黄色砂混り粘質土層(㊾のブロックを含む)
④濁やまぶき黄色粘質土層
⑤濁茶灰色砂混り粘質土層
⑥黄やまぶき色砂混り粘質土層(暗灰色粘質土ブロックを含む)
⑦黄やまぶき色砂混り粘質土と灰色砂混り粘質土の混った層
⑧やまぶき茶色砂混り粘質土層
⑨濁やまぶき黄色砂混り粘質土層
⑩灰色砂混り粘質土にやまぶき色砂混り粘質土のブロックを含む
⑪濁黄やまぶき色砂混り粘質土層
⑫淡やまぶき茶色砂混り粘質土に灰色砂混り粘質土が多く混る
⑬　⑪とこげ茶色粗砂層(花崗土の風化土)が混った土層
⑭　⑬で花崗土の風化土を少量含む
⑮茶色砂混り粘質土層(灰色砂混り粘質土を少量含む)
⑯暗灰色砂混り粘質土層
⑰　⑭に花崗岩の小ブロックを含む
⑱濁灰黄色砂混り粘質土層(花崗岩の小ブロックを少量含む)
⑲こげ茶色混り粘質土層(花崗土の崩れた土を含む)
⑳灰茶色砂混り粘質土層(花崗土の崩れた土を含む)
㉑茶色砂混り粘質土層(花崗土の崩れた土を含む)
㉒こげ茶灰色砂質土層(花崗岩の崩れた土を少量含む)
㉓こげ茶灰色砂質土層(花崗岩の崩れた土を多量に含む)
㉔暗やまぶき茶色砂質土層(花崗岩の崩れた土を多量に含む)
㉕暗やまぶき茶色砂質土層(㉔より多量に含む)
㉖カコウ土の崩れた土(さくい)
㉗こげ茶色粘質土層(上部全てに暗灰色の層を含む)
㉘濁やまぶき黄色粘質土と花崗岩の混った土層(地山)
㉙やまぶき黄色砂混り粘質土層(花崗岩の小ブロックを含む)
㉚こげ茶色砂混り粘質土とやまぶき色砂混り粘質土の互層
㉛やまぶき色砂混り粘質土と黄灰色混り粘質土の互層
㉜茶やまぶき黄色砂混り粘質土層
㉝やまぶき色砂混り粘質土層
㉞茶やまぶき黄色粘質土層
㉟明茶黄色砂混り粘質土層
㊱暗黒灰色粘質土と濁灰色砂混り粘質土の互層
㊲濁灰色砂混り粘質土と茶色砂混り粘質土の互層
㊳暗灰色粘質土層にこげ茶色粘質土の混った土層
㊴茶黄色砂混り粘質土層(花崗岩のブロックを少量含む)
㊵暗灰やまぶき色砂混り粘質土層
㊶茶色砂混り粘質土に濁白色砂混り粘質土が混った土層
㊷濁灰白色砂混り粘質土層
㊸濁茶灰色砂混り粘質土層
㊹濁茶灰色砂混り粘質土層(花崗岩のブロックを含む)
㊺　⑰と同じ(花崗土の崩れた土を少量含む)
㊻暗灰やまぶき色砂混り粘質土層(花崗土の崩れた土を含む)
㊼濁やまぶき色砂混り粘質土層(花崗岩のブロックを含む)
㊽暗灰色砂混り粘質土層
㊾暗灰やまぶき色砂混り粘質土層(花崗土の崩れた土を少量含む)
㊿花崗土
(51)花崗土(崩れた土)
(52)濁灰色砂質土層(花崗岩の小ブロックを少量含む)
(53)濁灰色砂質土層(さくい)
(54)茶やまぶき色砂混り粘質土層
(55)濁黄色砂混り粘質土層(花崗岩の小ブロックを少量含む)
(56)茶色砂混り粘質土層(花崗岩の小ブロックを少量含む)
(57)淡やまぶき茶色砂混り粘質土層
(58)花崗岩(地山)



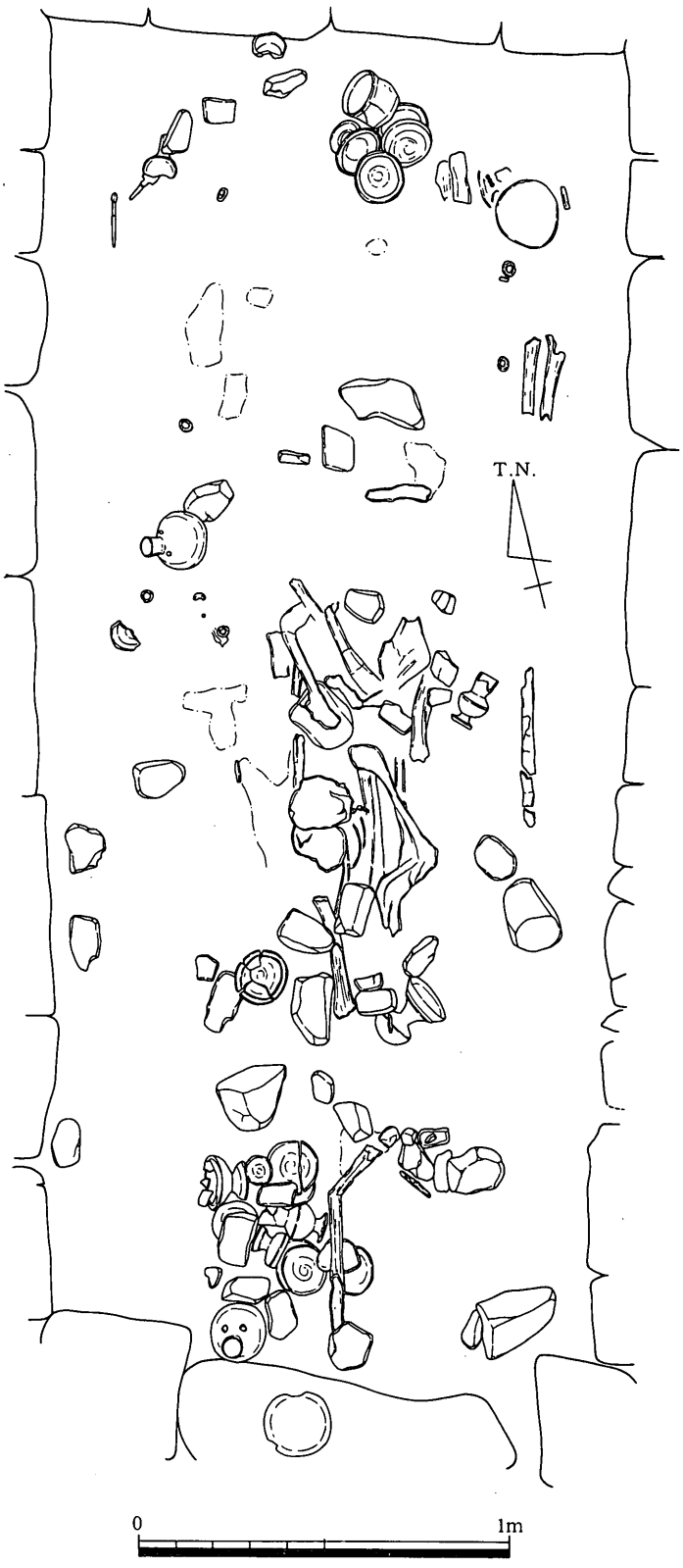
①やまぶき黄色砂混り粘質土層
②黄やまぶき色砂混り粘質土層
③濁やまぶき灰色砂混り粘質土層
④濁灰色砂混り粘質土層
⑤濁灰色砂混り粘質土層(花崗岩の小ブロックを含む)
⑥濁黄灰色砂混り粘質土層
⑦やまぶき茶色砂混り粘質土層(花崗岩の崩れた土を含む)
⑧暗灰色砂混り粘質土層
⑨濁灰やまぶき色砂混り粘質土層
⑩濁やまぶき灰色砂混り粘質土層
⑪淡茶色砂混り粘質土層
⑫暗灰色砂混り粘質土層
⑬　⑦と⑫の互層
⑭　⑦と⑫がブロックで混る
⑮暗黄灰色砂混り粘質土層(砂っぽい)
⑯濁灰黄やまぶき色砂混り粘質土層
⑰淡茶灰色砂質土層
⑱やまぶき黄色粘質土層(ベース)
⑲淡茶灰色砂質土層(花崗岩の小ブロックを含む)
⑳濁白茶色砂質土層(花崗岩の小ブロックを含む)

0　2m

第40図　神越２号墳玄室土層断面図(1/40)

できる。頭蓋骨も含めた人骨は概ね３ヶ所に纏まりがある。まず北西隅にほとんど腐朽した人骨が確認でき、東側側壁に沿ってまだ残りの良い頭蓋骨・上腕骨・大腿骨がほぼ一直線状に確認でき、ほぼ中央部から玄門部にかけてはかなり残りの良い頭蓋骨・上腕骨・大腿骨が一直線状に残る。この人骨分布で見ると概ね３体分の人骨が北西部、北東部、南側中心部に埋葬されたことが解り、腐朽状態でおそらく北西部人骨→北東部人骨→南側中央人骨の順に埋葬されたと思われる。ここでは埋葬順により便宜的に第１～３被葬者とする。

次に装飾品である耳環・玉類・空玉と鉄製品の分布を見ると北西部に耳環２点・空玉・鉄鏃・ガラス玉が出土し、北東部では耳環２点・管玉２点・ガラス玉・鉄製品が出土し、中央部では第３被葬者人骨頭部から約50cmほど距離があるものの耳環２点・ガラス玉多数・勾玉・馬具・刀子が出土しており、概ね人骨の位置と合致していることが解る。さらに土器類で見ると大きくは奥壁際中央に有蓋高坏と蓋のセットが２個体・土師質甕の計５点が纏まって出土している。また南西隅には須恵器坏身２点・坏蓋４点・有蓋高坏１点・無蓋高坏２点・台付き細頸壺１点・平瓶１点の計11点が纏まって出土している。前者の纏まりはちょうど第１被葬者と第２被葬者の頭部側の中間に位置することからどちらに共伴する土器類か不明であるが、後者の土器類の纏まりは第３被葬者に伴うものと考えられる。その他の土器類については破片となって散らばっているもの（114）や１～２個程度が出土しているが、近い被葬者人骨に伴うものと考える。



第41図　神越２号墳玄室内遺物出土状況図(1/20)

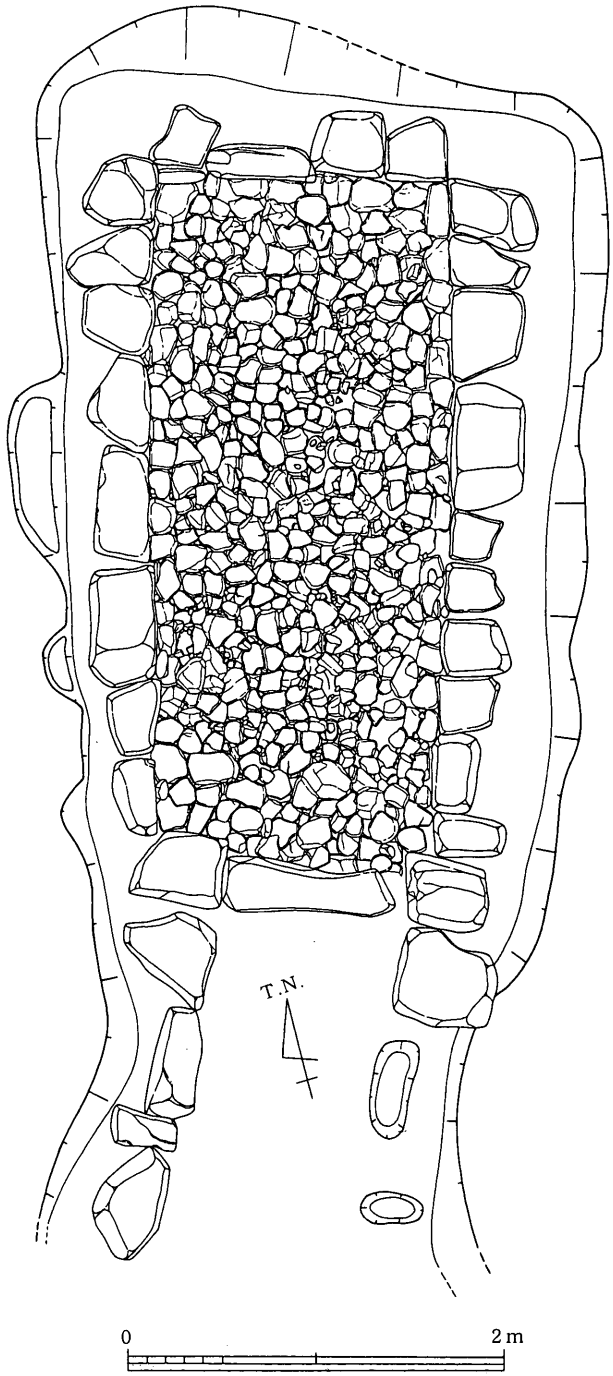
また第３被葬者人骨がある周囲には10～20cm程度の川原石が長方形状を呈するように規則的に配されていることが解る。おそらく棺台と考えられ、この配置から棺の配置及び規模が推定できる。

玄門部は東西の玄門石が張り出しており、玄門部幅は約1.0mを測る。

このことから玄室は両袖式の石室であることが解る。

玄室側壁は若干大きめの川原石もあるが、主としては基底石よりやや長い方柱状を呈する平らな石の小口面を内側に、持ち送りしながら積み上げており、現存で奥壁が約1.3m、西側側壁が約1.6m、東側側壁が1.7m残存していた。石室構築石材はほとんどが川原石であるが、部分的に花崗岩の角礫が認められる。しかしその箇所には規則性が認められない。西側側壁はかなり傾斜しており、天井石が取り除かれた結果、土圧によって内側に押されたものと考えられる。また上部でも基底石で確認できる奥壁と側壁のそれぞれの端部石材のコーナーを接するのみの構築は変わっていないことが確認できる。

それぞれの側壁には詳細に見ると一石ごとに目地が確認でき、墳丘盛土・裏込め土で検証したとおり、一石ごとに裏込め土・盛土１層が一連のものであるということを裏付けている。特に明瞭に認められるのは標高31.0mの地点で、これは墓壙掘り方上面の標高と同一である。



第42図　神越２号墳基底石・
床石検出状況図(1/40)

一方羨道部側壁は特に東側が破壊されており、そのため基底石は西側で４石、東側で１石が確認されたのみである。西側基底石は底面が一定しておらず玄室部分からすると緩やかに低くなる。そのためか玄室と同規模の川原石を使用しているがやや雑な感は否めない。東側は１石しか残存していないが、抜き取り穴及び墓壙掘り方から推測すると２段掘墓壙の段上に基底石を据えていたようで、明らかに西側と構築方法が異なる。側壁内面での幅は約1.0mを測る。羨道部側壁は玄室側壁に比べるとやや乱雑で、玄室同様方柱状の川原石の小口面を内側に構築していくが、裏込め土との関係は１石に対して１層ではなく５～10cmの細かい土層で版築されている。

羨道部床面は土層断面Ｊ－Ｊ′をみるとほぼ水平で、玄室部分に比べると石床上面と同じ高さで、地山面で見ると玄室部分の方が低いことが解る。これは墓壙掘削段階から玄室部・羨道部が分けられて掘削されたことを示している。

またこの羨道部には側壁に使用した川原石と同規模の川原石が纏まって２ヶ所で検出されている。１ヶ所は玄門部近くで検出したもので、床面から若干浮いた状態であったので盗掘時に転落した側壁石材と判断した。もう１ヶ所は羨道部南端で、側壁石材と同規模の纏まりを検出した。これらは乱雑ではあるが羨道部中央に床面直上から積まれていることから閉塞石の可能性がある。

羨道部から遺物は出土していない。

玄室内及び羨道内は盗掘時に天井石が抜き取られたために、かなりの流入土が堆積していた。その堆積状況を見ると中位から上位にかけては傾斜堆積も確認でき、攪乱を受けていることが解るが、下位については水平堆積し、また床面出土の遺物に攪乱の様子が認められなかったことから、盗掘前に堆積した土層（土層⑬・⑭）であることが解る。またそのことは中位から上位にかけてかなり側壁石材が混入しているにもかかわらず、下位層には含まれず、また中位・上位層が粘質土に対し、下位層が砂礫・砂であることからも解る。

(5)出土遺物

石室内から須恵器・土師器・瓦器・土師質土器などの土器類、馬具・刀子・鏃などの鉄製品、ガラス玉・管玉・勾玉などの装飾類が出土している。この内玄門部仕切石上面で出土した土師器皿（117）と玄室内包含層から出土した瓦器椀（116）については後世のものと考えられ、古墳の副葬品ではない。

34～40は鉄製品である。

34・35は鉸具で、縁金が一周し、その基部に鉄棒を巻き付けて、刺金とするものである。

34は縁金で、形態は中央下部でややくびれる。直径８㎜程度の鉄棒を曲げ、下部右隅で接合したものと考えられる。長さ8.3cm、幅4.4cmを測る。

35は刺金で、直径８㎜程度の鉄棒を全体的にやや反りぎみに、先端部は短く屈曲させ造られ、基部は縁金に巻き付けたことが解るような曲がり方をしている。長さ8.8cmを測る。

36～38は鉄鏃である。36は鏃身部が欠損しているがおそらく三角形鏃と考えられ、杉山分類のＣ形式ⅠあるいはⅡ形式に相当するものと考える。37・38は長頸鏃である。37は関が台形関を呈し、現存長10cmを測る。38は鏃身部が菱形を呈し、関が左右に突起状に短く延びるもので、現存長14.0cm、鏃身部2.5cm、頸部8.7cmを測る。

39は刀子で、刃部が欠損し、茎部分が出土している。表面には茎と平行する木質と茎に斜行するような紐状？の痕跡が残存している。現存長5.6cmを測る。

40はキャップ状を呈するが不明鉄製品で、先端が尖り、約２㎜程度の鉄板を曲げて造られている。

41～81はガラス製の臼玉である。

41～77は大きさにより①直径３㎜、高さ１～２㎜、②直径５㎜、高さ３㎜、③直径６㎜、高さ３～５㎜、④直径７㎜、高さ５～６㎜、⑤８㎜、高さ７㎜を測る５種類に分けられる。41～48が青色（空色）、49が青緑色、50～77が紺色である。78・79は緑色で、大きさは①・②に相当する。80・81は黄色で、大きさは①・②に相当する。

82・83は碧玉製の管玉で、84は水晶製に比べると透明度がないことから石英製の勾玉と考える。

85～90は耳環である。銅芯に渡金を施している。

91～93は銅製の空玉で、床面から８点出土しているが、残存状況がいいものはその内３点を図化した。

床面から出土した須恵器・土師質土器は纏まりを持って出土しているので、それごとに説明する。

94～104は玄室部の玄門部側から纏まって出土した一群で、第３被葬者の足下から出土した。第１群とする。

94～97は須恵器坏蓋で、天井部から緩やかに体部、そして口縁部となり、体部と口縁部の境が僅かなに屈曲する。天井部に粗いヘラ削りが認められる。98・99は須恵器坏身で、やや上方に屈曲する受け部と内傾し、細く延びる立ち上がりを持つ。器高が若干違うが、底部には粗いヘラ削りが施されている。

100・101は無蓋高坏で、脚部は下位で屈曲し、外面屈曲部分にシャープな稜を持つ。坏部は箱形を呈し、体部は真っ直ぐ上方に延び、口縁端部はやや外反する。

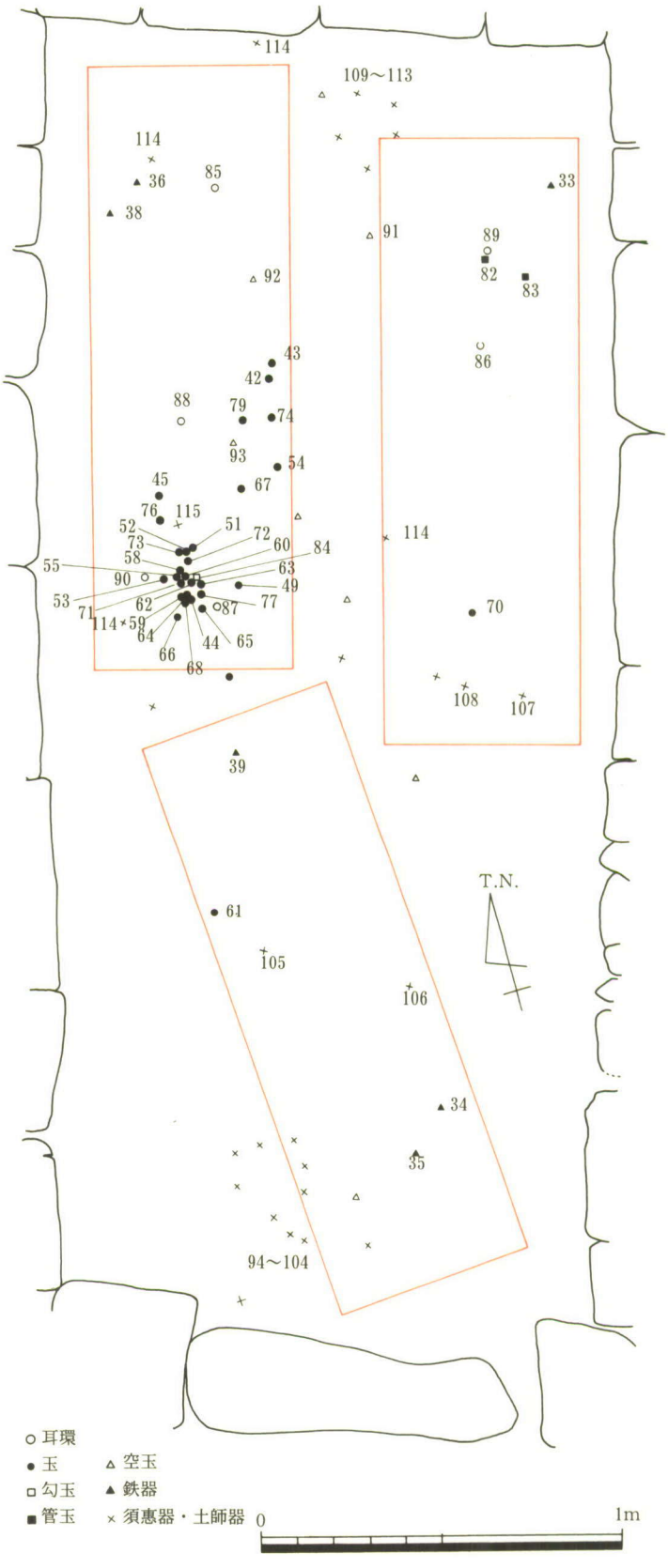
102は有蓋高坏で、脚部は下半部で緩やかに屈曲し、坏部は坏身と同様に上方に屈曲する受け部と内傾する細い立ち上がりを持つ。

103は台付きの細頸壺である。

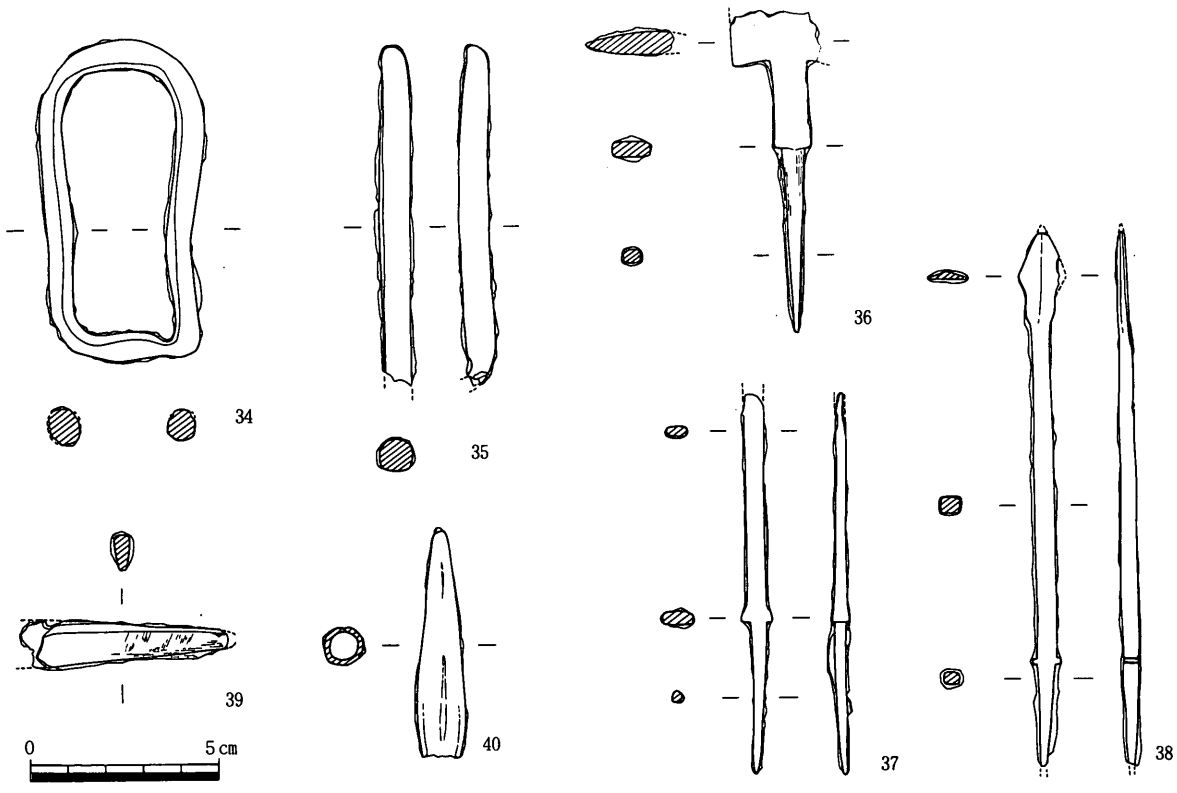
104は平瓶である。底部に平底を持ち、体部中位がやや肩の張る形態で、体部上面２箇所に粘土粒を粗く貼り付けている。

時期は田辺編年ＴＫ209型式併行期と考えられる。

105・106は第１群の北にあり、第３被葬者の中位から出土した。第２群とする。



第43図　神越2号墳玄室内遺物出土位置図、木棺推定復元図(1/20)



第44図　神越２号墳出土遺物実測図その①(1/2)

105は有蓋高坏で、脚の形態に若干差があるが、ほぼ102と同時期と考えられる。

106はハソウである。口縁部は上位で屈曲し、かなり開く。

107は第２群の下位から出土した壺の底部である。

以上第１群と第２群は第３被葬者に近接して出土していることから、第３被葬者に伴う副葬品と考えられる。

108は第２被葬者足下から出土した台付きの細頸壺である。103に比べると口縁部の形状に若干の差があり、時期差と考える。

109～113は玄室奥壁中央部、第２被葬者の頭部から出土した一群である。第３群とする。

109・110は須恵器坏蓋で、天井部から緩やかに体部、そして口縁部となり、体部と口縁部の境が僅かに屈曲する。天井部内面に当具痕が明瞭に残る。

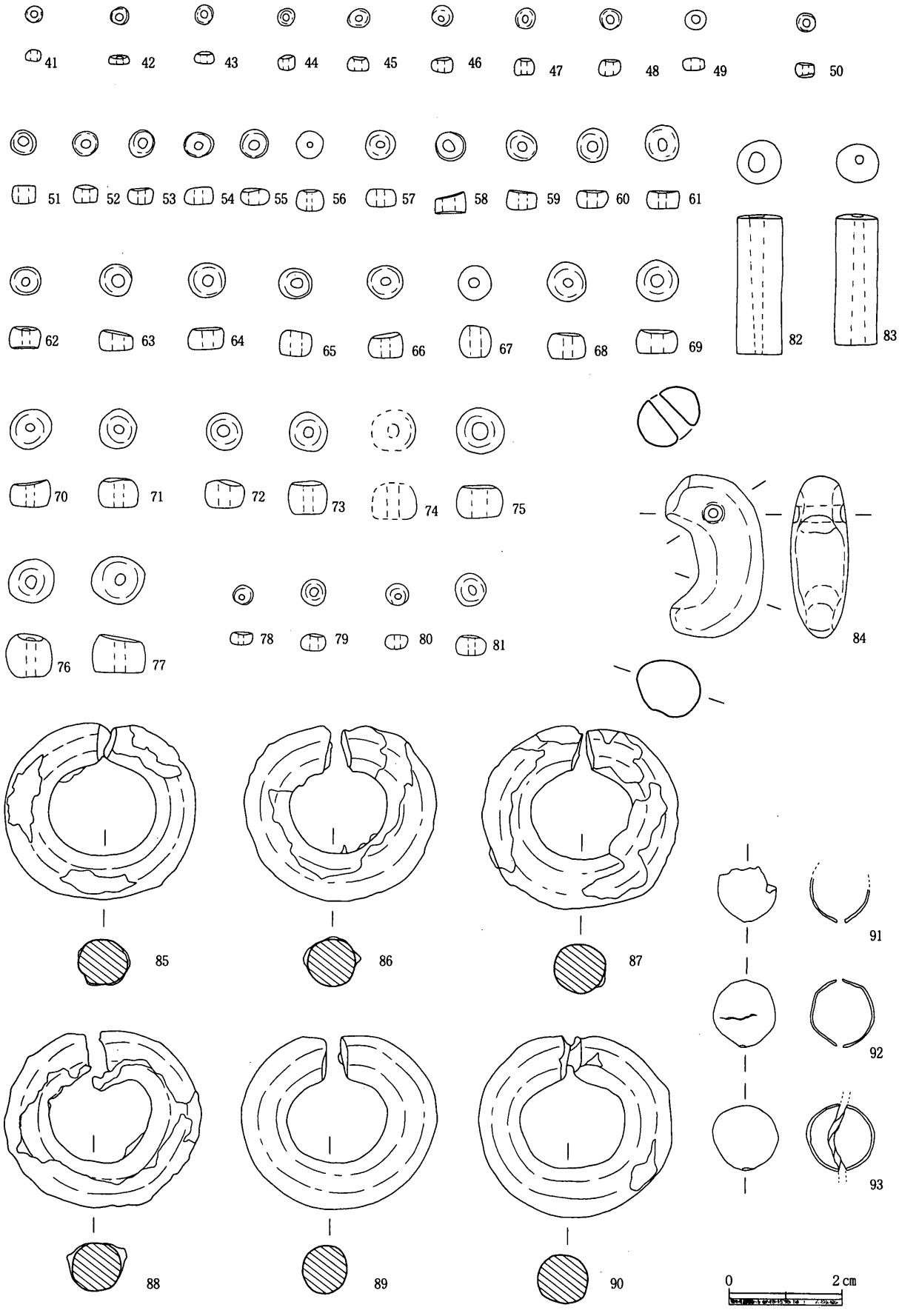
111・112は須恵器有蓋高坏である。脚部はスカート状に広がり、坏部はやや上方に屈曲する受け部と内傾し、短く延びる立ち上がりを持つ。内定面に坏蓋と同様な当具痕が残る。

113は土師質甕である。底部に平底を持ち、体部はやや内湾し、口縁部が僅かに外方に屈曲する。口縁部内面と外面に刷毛目が施されている。時期は田辺編年ＴＫ43型式併行期と考えられる。

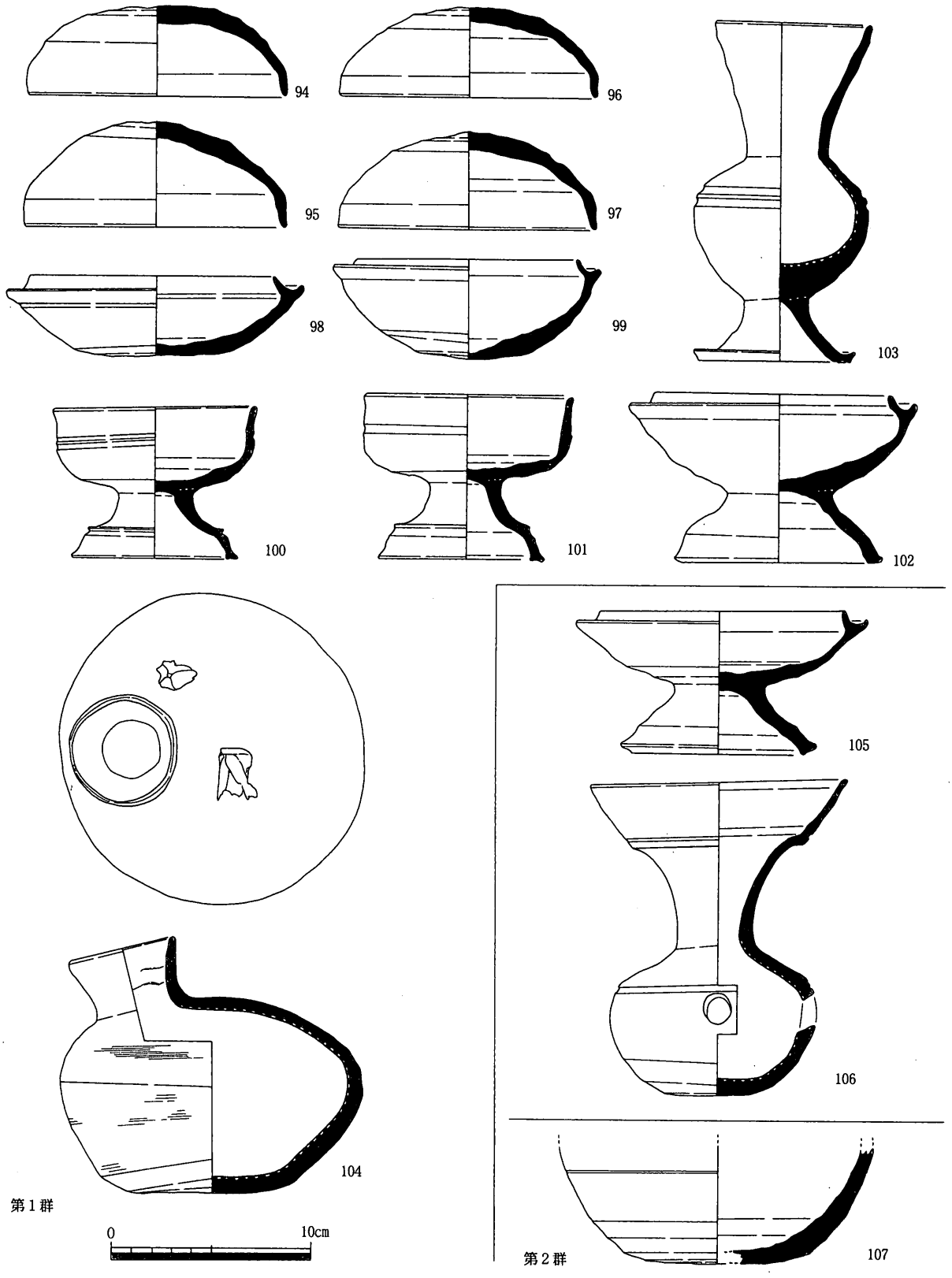
114・115は玄室北西部、第１被葬者に近接して出土した須恵器である。114は無蓋の長脚無蓋高坏である。115は平瓶である。104の平瓶に比べると底部が丸底で、体部の張りも弱い。体部上面にある円形の浮文も丸く、丁寧に貼り付けられている。

第３群とした須恵器・土師質土器は第２被葬者の頭部としたが第１被葬者との間で出土しているためにどちらの被葬者に伴うものかは不明である。

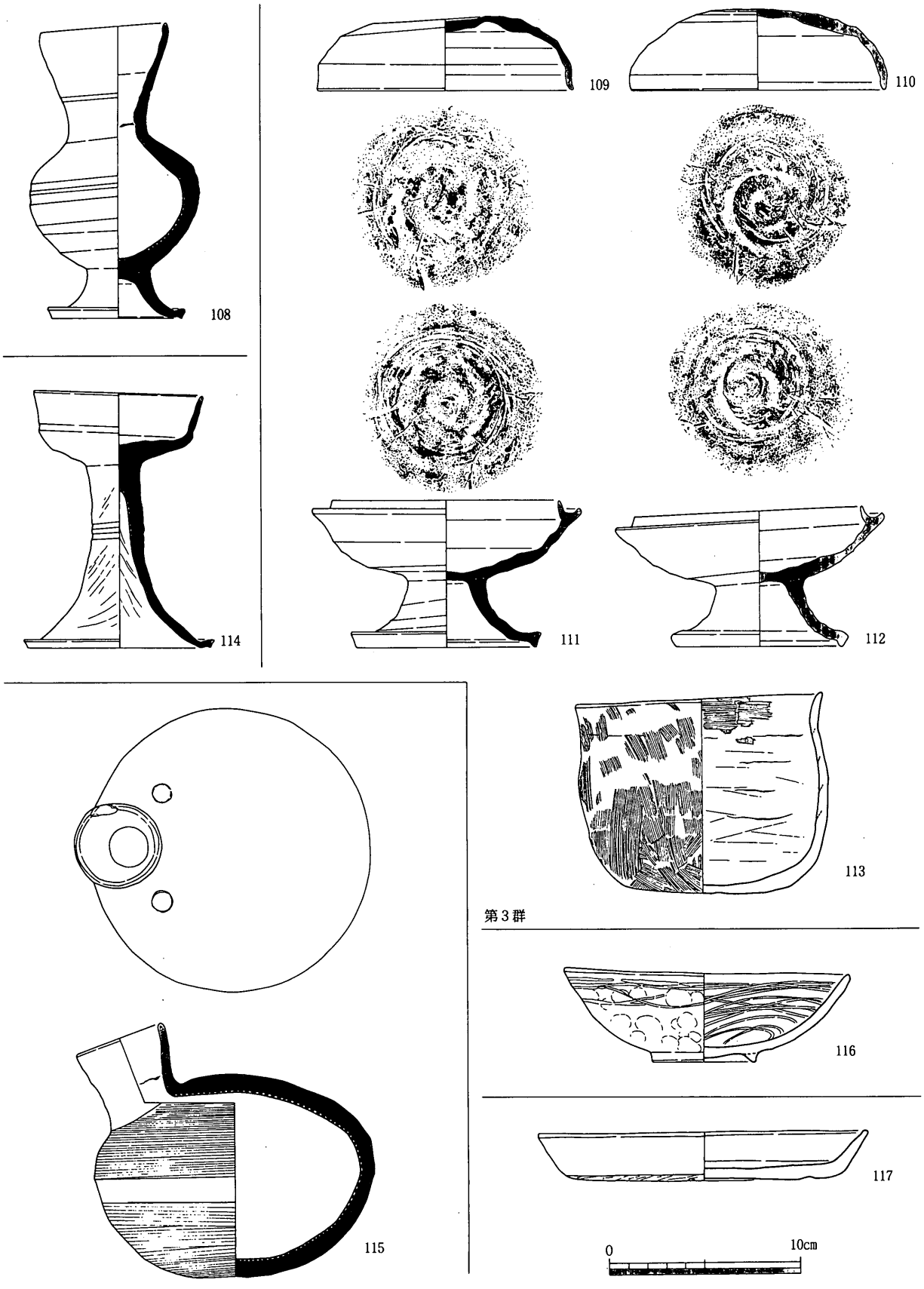
116は玄室内上部包含層から出土した瓦器椀で、底部に断面三角形に近い高台を、体部外面には指頭



第45図　神越２号墳出土遺物実測図その②(1/1)



第46図　神越２号墳出土遺物実測図その③(1/3)



第47図　神越２号墳出土遺物実測図その④(1/3)

痕の後口縁部外面にヘラ磨きが、内面に粗いヘラ磨きが施されている。和泉型の瓦器椀で、Ⅱ－３期と考えられる。

117は土師器皿である。玄門部の仕切石上面から出土している。底部が平底で、体部は直線的に外上方に延び、口縁端部は僅かにやや内方に屈曲させ、丸く収める。底部は手持ちヘラ削りが施されている。

(6)まとめ

神越２号墳築造過程（第48・49図）

今回検出した神越２号墳は玄室部分で天井石及び側壁の上部が、羨道部で天井石及び東側側壁がほとんど盗掘により破壊されていたが、以外に玄室部分側壁及び墳丘盛土の残りがよく、この古墳の築造過程を検討するのに十分な資料が得られた。

現在まで東讃地域、特に大内町以東では横穴式石室を完掘した事例はなく、神越２号墳の築造過程を復元することにより、今後の東讃地域における横穴式石室を主体部に持つ古墳の築造方法を検討する資料としたい。

この古墳の築造過程を検討するに当たり、資料とするのは第39図側壁実測図と第40図土層断面Ｇ－Ｇ′、Ｉ－Ｉ′、Ｋ－Ｋ′を参考とする。

本文中でも触れたが、玄室側壁実測図を見ると一定のラインで横目地が通る箇所が数条認められる。特に標高31.0mラインでは概ね両側壁及び奥壁でそれが確認できる。また３ヶ所の墳丘断ち割土層断面をみると明らかに土層の堆積状況に土層の堆積（版築）の単位が数回認められることが解る。

この側壁に残る横目地と墳丘盛土に認められる版築単位を基に神越２号墳の築造過程を復元したい。

①地山成形

まず神越２号墳が所在する位置は調査区内最高所、標高36.8mから南東方向に延びる尾根の先端部に造られている。この尾根の古墳築造前の地形はおそらく頂部から緩やかに高さを減じ、湊川に向かって低くなっていた傾斜面であったと考えられる。

そこで玄室に直交する２ヶ所の墳丘盛土断割り土層断面Ｇ－Ｇ′、Ｉ－Ｉ′及び玄室に並行する墳丘土層断割り断面Ｋ－Ｋ′を見るとを花崗岩（花崗土）を基盤層とする上部にやまぶき色系及び灰色系の砂混り粘質土層（墳丘築造以前に花崗岩に堆積した土層）の上面から墳丘盛土が確認できる。

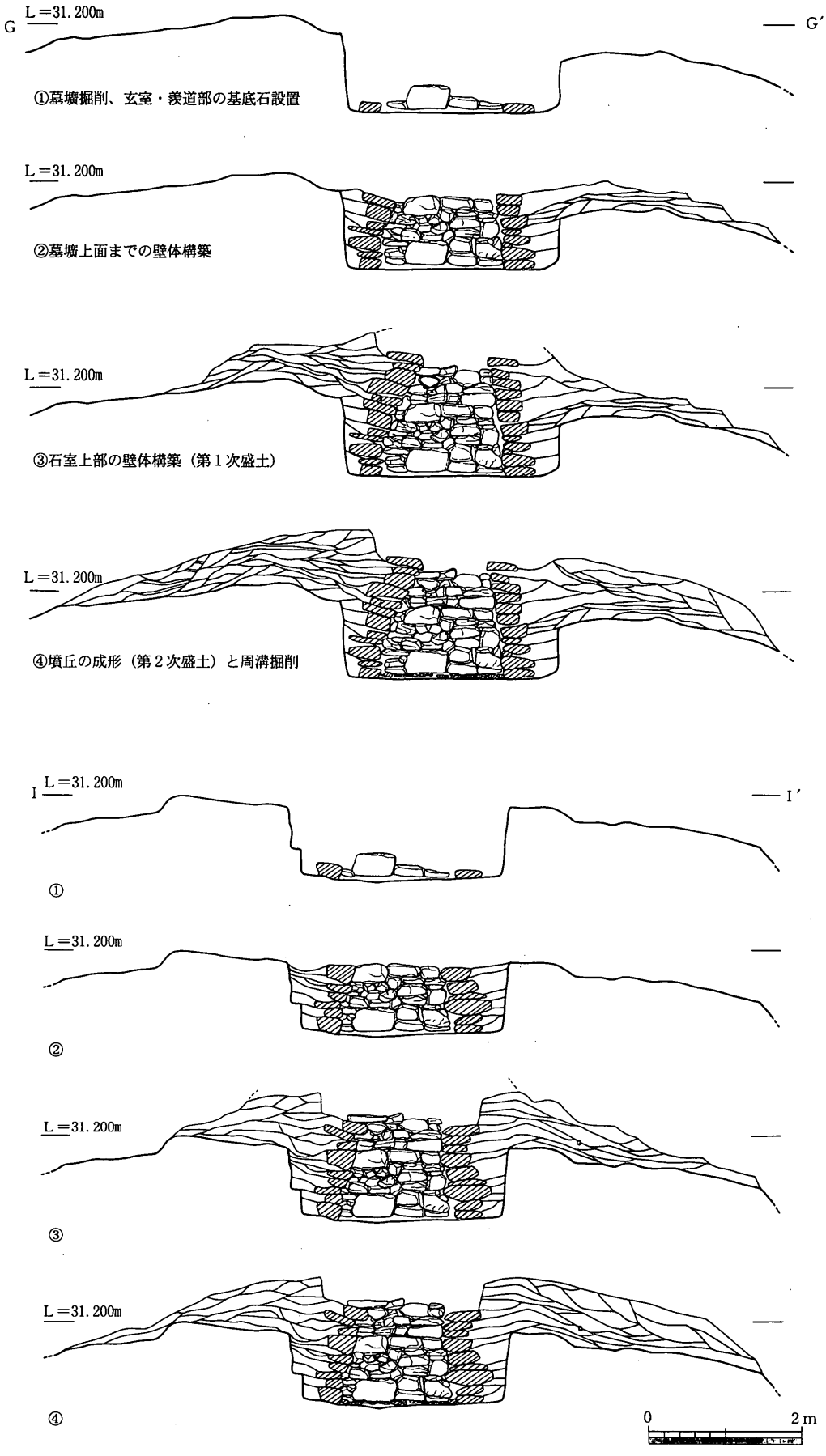
ちょうどその境に腐葉土層（所謂ブラックバンド）が確認できないこと、その上面がどの土層断面からもほぼ標高31.0mを前後する高さであること、また盛土を除去した状態が概ね平らであった状況から墳丘構築前におそらく尾根筋高所側を尾根筋断面がＬ字状を呈するように切断することで地山成形を行い、平らな面を造ったものと考える。

②墓壙掘削

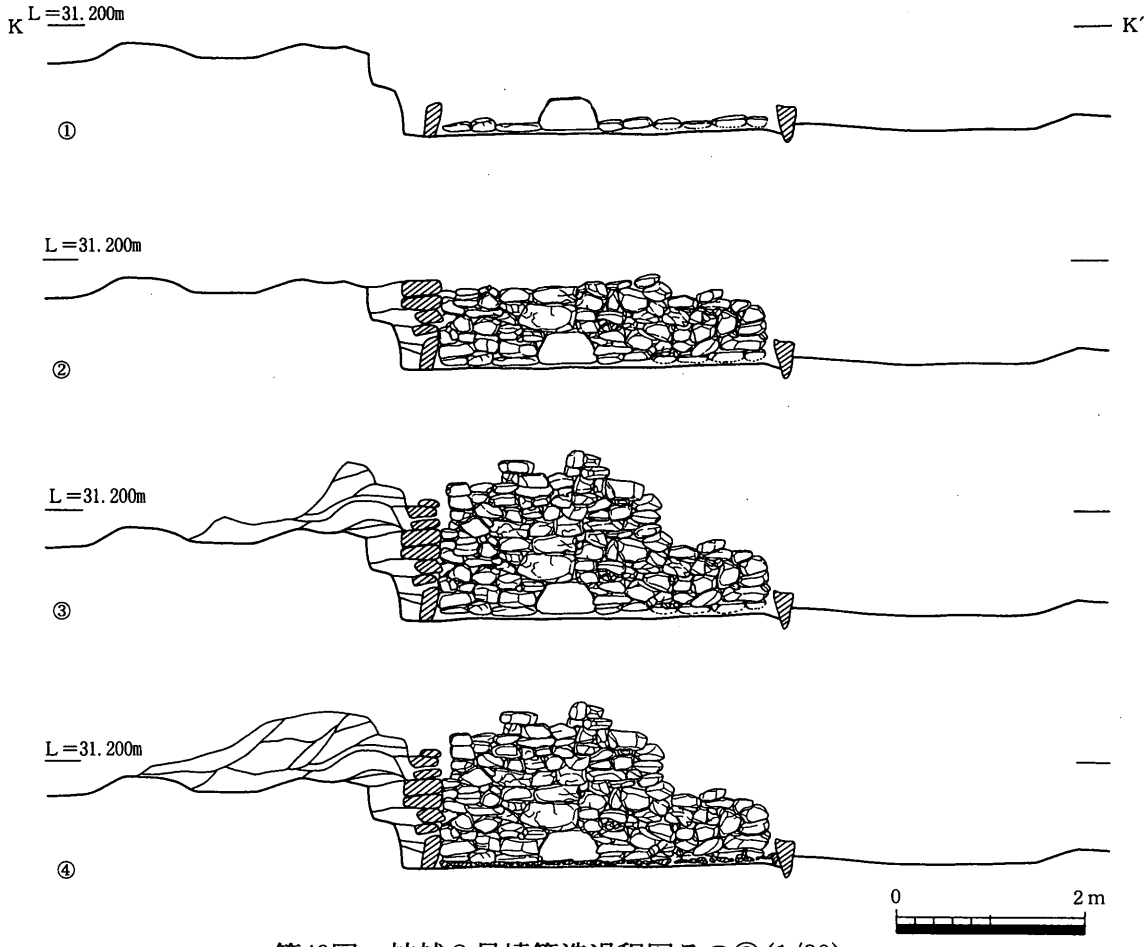
地山成形を行った後に当初から決められていたであろう石室規模及び石室開口方向でやや大きめの墓壙を掘削する。この墓壙は壁が垂直に掘削され、底面は平らに造られており、断面箱形を呈する。この時点で同時に玄室部分・羨道部分・墓道も含めて掘削されている。また羨道部は西側に緩やかに屈曲させるためか東側が２段掘に掘削されている。

③玄室・羨道部の基底石設置

墓壙掘削後羨道部東側を除き、底面の墓壙壁からやや内側に玄室・羨道部の内面を合わせるように基底石を設置する。この基底石は玄室部が厚さ10～20cm程度で、平面形態がほぼ方形を呈するものはそれ



第48図　神越２号墳築造過程図その①(1/80)



第49図　神越２号墳築造過程図その②(1/80)

ぞれの側面を、方柱状を呈するものはそれぞれの小口部分を直列状に設置し、奥壁と側壁コーナー部はそれぞれ端部の石材の角を接するように設置している。直列状に設置するのは西側基底石に認められ、西側が丘陵高所側である。羨道部基底石はかなり破壊されているものの玄室部に比べると雑の感がある。

また基底石がどの部分から設置されたかは不明である。

この基底石で特に奥壁４石のうち西から２石目については同規模の平たい河原石を直立させており、鏡石的な要素を持ち、玄室北西部（左奥部分）が特別な位置であることを示唆している。

④墓壙上面までの壁体構築（石室下部の安定化）

墓壙底面に基底石を設置した後に壁体石材となる方柱状の川原石を持ち送りさせながら構築する。その際に方柱状の石材は基底石に直交するように、つまり基底石上部に積み上げられる方柱状の石材は内側にする小口面を合わせるために石材の外側（反対小口側）半分程度は基底石の上部に乗らず、下部石材の裏込め土の上部に乗せ、安定させている。しかしこの壁体石材がすべて方柱状を呈する川原石ばかりではなく、幅・厚さに様々な石材が認められ、その中には下部石材の上面に収まる石材も存在する。これは基底石石材平面形に方形・長方形（方柱状）と様々な石材により、部分的には長側面を接する並列状態あるいは小口面を接する直列状態という状況からも解ることで、基底石石材・壁体石材の選定において特別な基準は無く、周辺で入手できる石材を使用して石室を構築した結果であると考える。

このように基底石も含め壁体石材を１石ごと構築するのと同時に墓壙掘り方と壁体石材の間には裏込めを行い１石ごとの安定化と上部石材のための安定面を造りながら墓壙掘り方上面(標高31.0mあたり)

まで一連の流れで構築したものと考える。

⑤石室上部の壁体構築と擬墳丘盛土（第一次盛土）

墓壙掘り込み面まで壁体を構築した後に石室上部の壁体を構築していく。その際上部壁体も下部同様に持ち送りさせながら、１石ごとに１～４層程度の土層を１単位としながら盛土する。壁体の最上部と天井石が抜き取られており、推測の域を出ないがおそらくこの盛土は天井石を構架するまで繰り返し、その結果、墳丘上の高まりができたものと考える。この壁体構築に伴う盛土の範囲は現在確認できる墳丘より一回り小さいもので、土層断面Ｇ－Ｇ′、Ｉ－Ｉ′で見ると西側で1.5～2.0m、東側で2.3～2.7mを測ることから平面形態が歪な墳丘（擬墳丘）が出来たものと考える。この壁体構築に伴う盛土を第一次盛土とする。

この③～⑤の工程で石室が完成するため奥壁・両側壁面には１石ごとに概ね横目地がとおり、墓壙掘り方上面（31.0m）で明瞭に横目地が確認できることとなる。

⑥墳丘の整形（第二次盛土）と周溝掘削

第一次盛土により擬墳丘が成形され、次に墳丘を円形にするために形を整える盛土を行う。これと並行して①工程時に地山成形を行った丘陵頂部側（高所側）の周溝を成形し、その際生じた余剰土も墳丘整形の盛土として使用したものと考える。

この第一次盛土と第二次盛土を見ると丘陵頂部側（西側）は２～15cm程度の細かい土層の版築を行っているが、反対側である丘陵先端部側（東側）は10～20cm程度のやや粗雑な盛土で成形されていることが解る。

⑦埋葬

①～⑥の工程で神越２号墳は完成した後に被葬者の埋葬を行う。被葬者の埋葬と副葬品の搬入については工程⑤でも可能であるが、ここでは古墳の完成後に行ったものと考える。

⑧閉塞と墓道埋め戻し

被葬者の埋葬と副葬品の搬入が終了した後、羨道部先端部の川原石による閉塞と墓道の埋め戻しを行い古墳の造営及び被葬者の埋葬が終了する。

以上①～⑧の工程を経て、神越２号墳が完成し、埋葬が終了する。

石室内埋葬順序

神越２号墳では玄室床面のみから遺物が出土している。土層断面Ｈ－Ｈ′でみると玄室下層には砂礫層及び砂層が水平堆積しており、後世の盗掘以後に堆積したものではなく、盗掘前に徐々に堆積したものであることが解る。また奥壁際と玄門部際から纏まって出土した土器類が置かれた位置で転倒した状態で出土していることやそれぞれの人骨部位が概ね一直線上に並ぶことから玄室床面で出土した遺物は埋葬当初の原位置から大幅に移動していないものと考える。

そこでこの人骨及び副葬品の配置・時期を詳細に検討することにより、被葬者の埋葬順序が推定できる。

まず本文中でも触れたが、人骨は頭蓋骨・上腕骨・大腿骨が確認でき、出土状況から概ね３体分の人骨が北西部、北東部、南側中心部に埋葬されたことが解り、腐朽状態でおそらく北西部人骨→北東部人骨→南側中央人骨の順に埋葬されたと考えられる。ここでは埋葬順により便宜的に第１～３被葬者とする。しかしこの埋葬順は人骨の腐朽状態によるもので、それ以外の裏付けがないことから出土副葬品に

よってこれを補強するものである。

その副葬品のなかで装飾品である耳環・玉類・空玉と鉄製品の分布を見ると北西部（推定第１被葬者周辺）に耳環２点・空玉・鉄鏃・ガラス玉が出土し、北東部（推定第２被葬者周辺）では耳環２点・管玉２点・ガラス玉・鉄製品が出土し、中央部（推定第３被葬者）では人骨頭部から約50cmほど距離があるものの耳環２点・ガラス玉多数・勾玉・馬具・刀子が出土しており、概ね人骨の位置と合致していることが解る。さらに土器類で見ると大きくは奥壁際中央に有蓋高坏と蓋のセットが２個体・土師質甕の計５点が纏まって出土している。また南西隅には須恵器坏身２点・坏蓋４点・有蓋高坏１点・無蓋高坏２点・台付き細頸壺１点・平瓶１点の計11点が纏まって出土している。前者の纏まりはちょうど第１被葬者と第２被葬者の頭部側の中間に位置することからどちらに共伴する土器類か不明であるが、後者の土器類の纏まりは第３被葬者に伴うものと考えられる。

また第３被葬者人骨がある周囲には棺台として使用された川原石が長方形状を呈するように規則的に配されている。

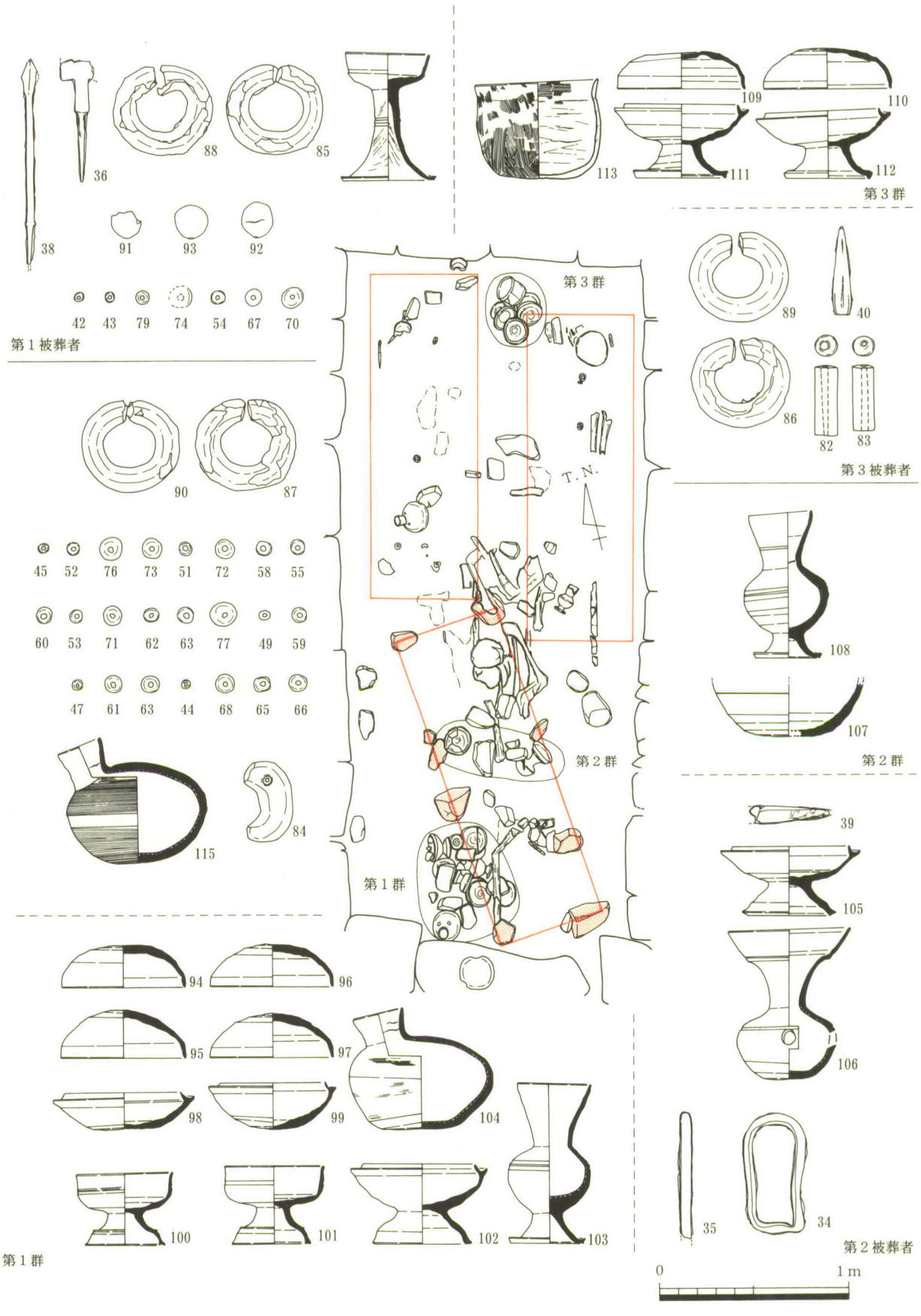
以上の玄室床面副葬品検出状況からすると埋葬当初の原位置を留めており、追葬に伴う「片付け」という行為も行われなかったものと考える。この前提に立てば前述したように概ねそれぞれの被葬者に伴うものと考えられ、奥壁際中央部で出土した須恵器・土師質土器の纏まりが第１被葬者か第２被葬者に伴うものかが判断できれば埋葬順序が解る。

そこで出土須恵器をみると奥壁際中央部で出土した須恵器は坏蓋の形態・内面に残る当具痕・法量から田辺編年ＴＫ43型式併行期と考えられ、一方玄門部側で出土した須恵器は坏身・坏蓋の形態・法量から田辺編年ＴＫ209型式併行期と考えられることから、須恵器による第１・２被葬者と第３被葬者の間に前後関係は指摘できる。次におそらく第１被葬者に伴うものと考えられる第47図無蓋高坏（114）・平瓶（115）は奥壁際中央部で出土した土器群と同時期であることからやはり第１被葬者と第２被葬者の前後関係は判断できない結果となった。

以上の結果から人骨の腐朽状態に差があるもののここでは第１被葬者と第２被葬者は同時期に埋葬され、続いて第３被葬者が追葬されたものと考える。

また被葬者は第３被葬者部分で棺台を確認したことから木棺と考え、その他の被葬者も同様に木棺に安置され、埋葬されたものと考える。木棺の規模は棺台配置から推定すると幅約0.56m、長さ約1.7m程度の規模で、この前提で推測すると第50図のような木棺配置となる。おそらく初葬段階で第１被葬者と第２被葬者が埋葬され、棺配置及び奥壁に鏡石を意識した奥壁構築から第１被葬者の優位性が指摘できる。

続いて追葬時に第３被葬者が埋葬されるが、この時点では依然初葬時の木棺が残っているために空いたスペースに埋葬した結果、このような棺配置になったものと考えられる。



第50図　神越２号墳第１～第３被葬者副葬品

第Ⅲ調査区

1．南丘陵樋端遺跡

樋端遺跡の南丘陵は丘陵高所側ではほぼ東西方向に延びるが、調査区内中央部でほぼ直角に北方向に曲がる。調査区内は全面において、後世の畑地化により開墾され、調査前に畝状の痕跡が確認できた。特に北側においては丘陵稜線から西半分がかなり削平を受け、広い面積の平らな部分が確認できた。この段々畑状の開墾は西側斜面で顕著に認められる（第52図）。

また北側東斜面はかなり急激に傾斜しており、旧状を留めていないものと考える。

第Ⅲ調査区（南丘陵）には丘陵稜線上に１本、それに直交するように３本、合計４本の土層壁を設定した（第53・54図）。その土層から丘陵稜線上では腐葉土・若干の包含層直下で遺構面の地山（花崗岩）となり、その直上で遺構を検出した。また斜面部においても同様であるが、斜面部では土層断面Ｃ－Ｃ′で丘陵削平土で平らな部分の面積を拡大した状況が確認でき、遺構はその地山斜面において検出している。この丘陵上後世の開墾と風雨による土砂の流失で遺構面はかなり削平を受けているものと考えられる。また低地ほど土砂の堆積が確認できず、現地表面から20cm程度で遺構面となることが解る。

南丘陵樋端遺跡（第Ⅲ調査区）からは特に南側を中心に弥生時代後期後半から古墳時代初頭の竪穴住居１棟、土壙墓35基、土器棺墓21基、不明遺構３基、古墳時代中期の古墳を１基検出した（第55図）。

①竪穴住居跡

SHⅢ01（第51図）

SHⅢ01は南丘陵（第Ⅲ調査区）先端部、標高29.9mにおいて検出した竪穴住居である。北側が丘陵先端部となるために削平を受け、南側３分の１程度が残存する。残存する部分から平面形態は円形を呈することが解る。規模は直径約6.28m、床面積約31㎡、検出面からの深さは埋土が残存する部分で約0.18mを測るもので、全体的にかなり削平を受けているが、中央土坑と主柱穴を検出した。

またこの竪穴住居は南側で土器棺墓STⅢ44を切っている。

南側に残る竪穴住居堆積土（第51図土層②黄やまぶき色砂混り粘質土）を取り除くと竪穴住居の内部構造が判明した。

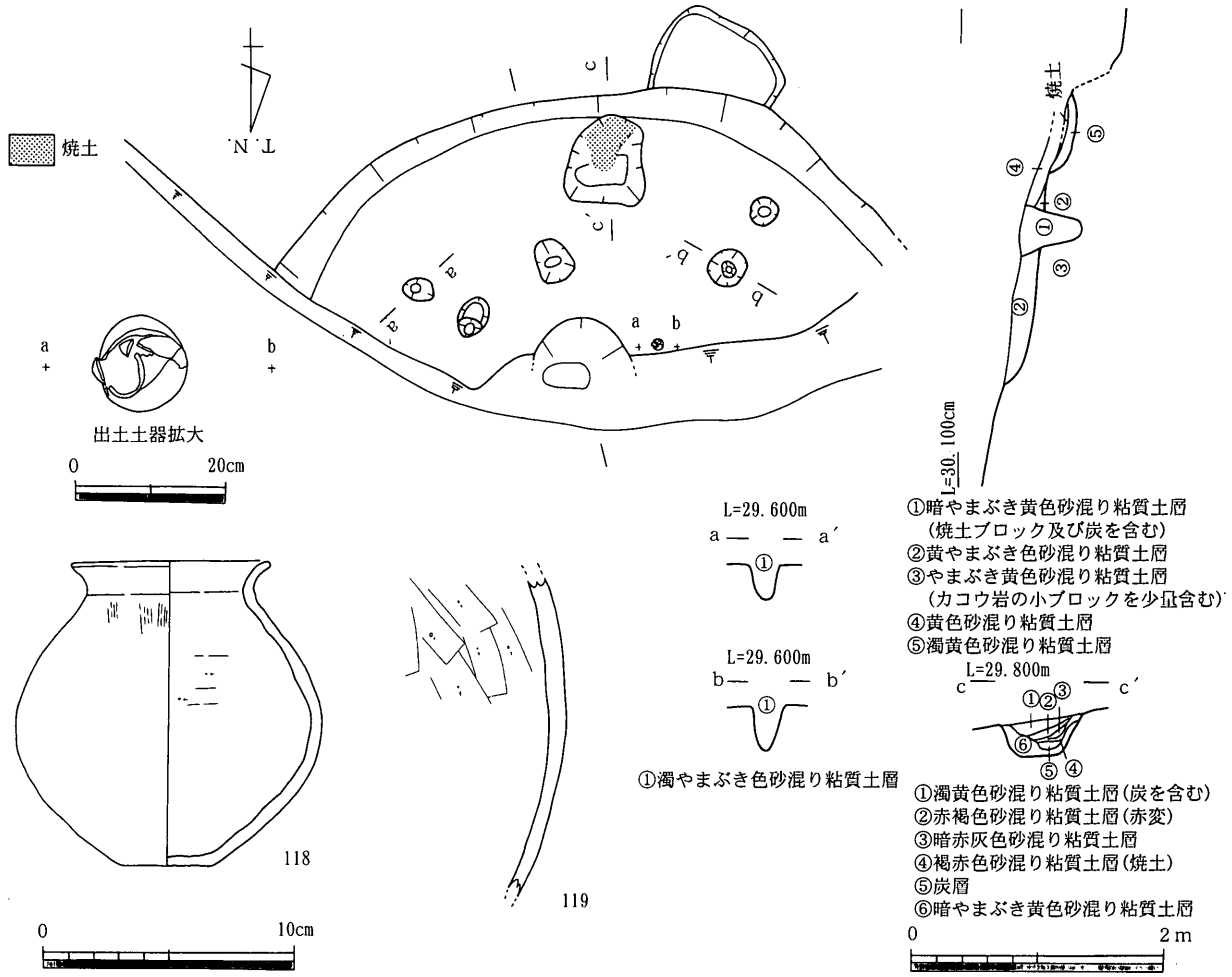
主柱穴は残存する床面から２穴検出しており、復元すると５穴と考えられる。主柱穴は平面形態が歪な円形で、直径0.16～0.30m、深さ0.28～0.33mを測る。また竪穴住居内部には主柱穴以外に数個の柱穴を確認したが、同時性を検証出来なかった。

中央土坑は北半分が削平を受けているが、底面部分はかろうじて残存している。平面形態は円形と考えられ、断面がU字状に窪む。底面上に土層⑤（黄色砂混り粘質土）が厚さ６cmほど堆積し、上部に炭層が３cmほど堆積している。

また南壁際で炭・焼土を含む土坑を検出した。平面形態が歪な方形で、断面が底部隅が張った箱形を呈する。底面に土層⑥（暗やまぶき黄色砂混り粘質土）が堆積し、やや窪んだ部分に炭層、土坑南側に焼土塊が確認でき、焼成施設の様相を呈している。

丘陵上で検出した竪穴住居はこの１棟のみで、これ以外に居住施設は検出していない。

住居床面中央土坑の西側から甕（第51図118・119）が出土しているだけで、ほとんど遺物は出土していない。



第51図 SHⅢ01平・断面図(1/60)、出土遺物実測図(1/3)

少量の出土遺物をみると甕は底部がしっかり残り、体部最大径が体部のほぼ中央部にある。頸部は緩やかに外反し、口縁部は外反しながら外上方に延び、端部は丸く収める。調整は内面にヘラ削り、外面には縦方向の刷毛目が施されている。

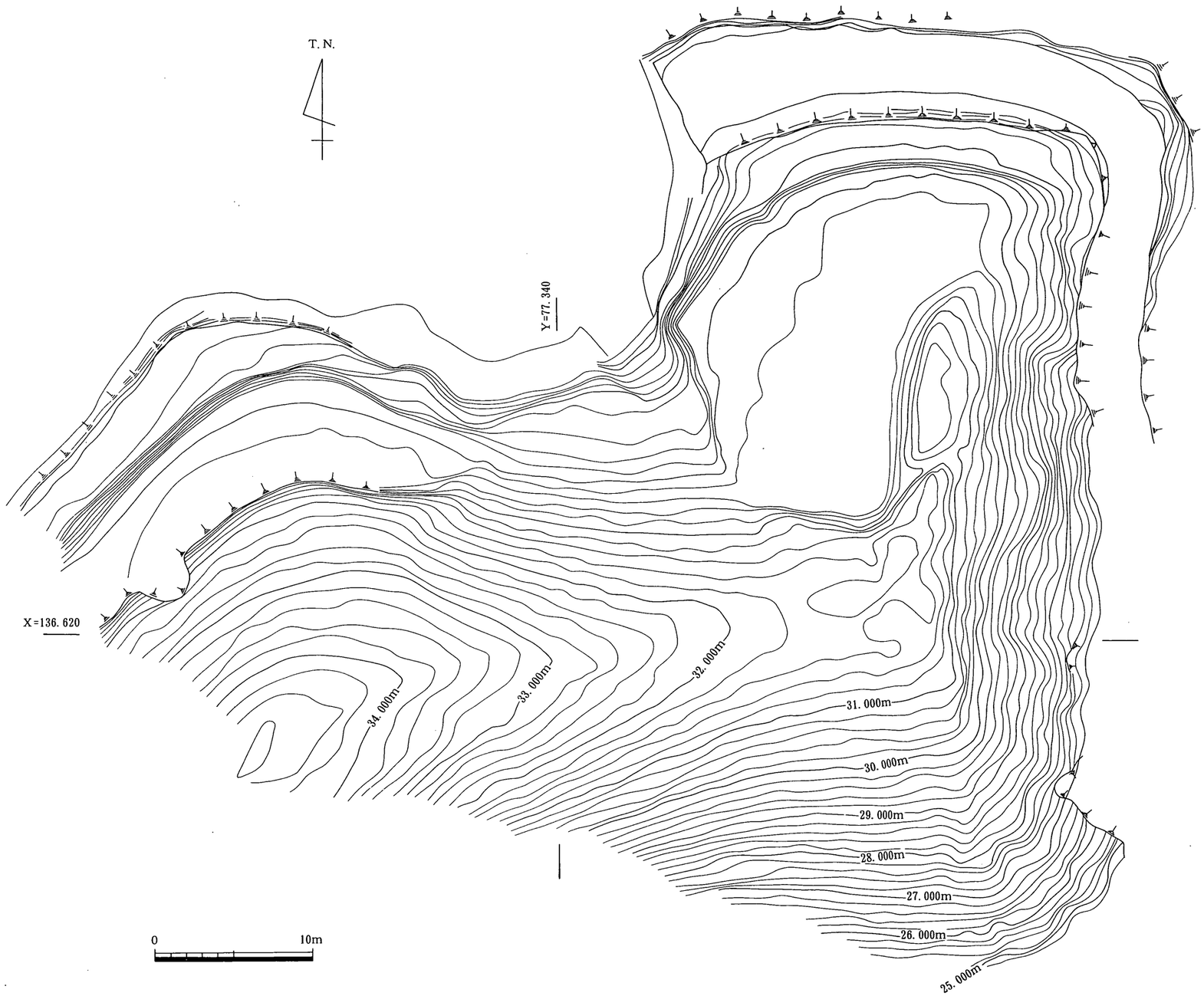
時期は弥生時代後期後半と考える。

②土壙墓

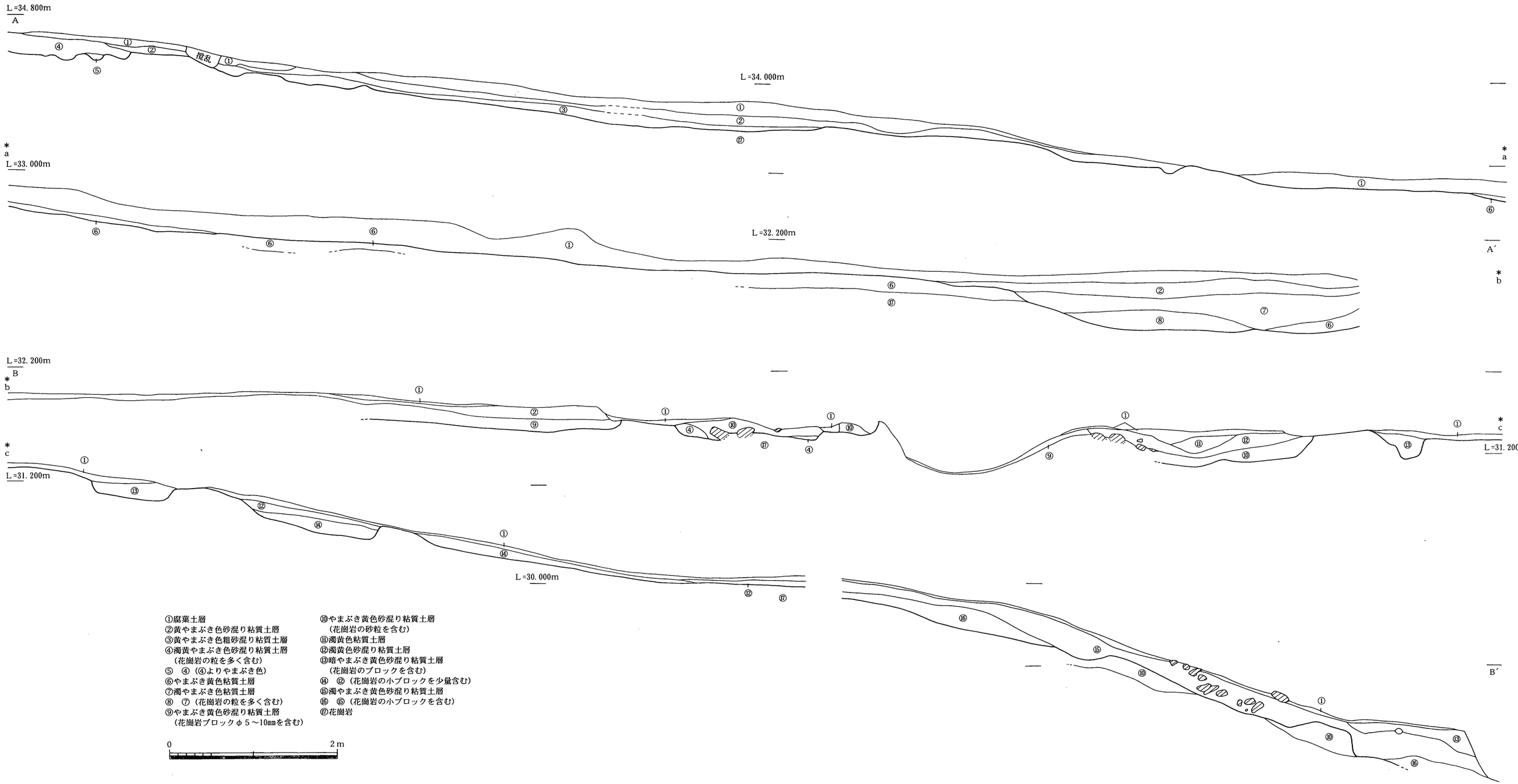
南丘陵は細かい地形をみると北西方向に延びた丘陵が緩やかに東に曲がり、第Ⅲ調査区中央部で北方向に屈曲する。またこの北側では丘陵稜線部から西側が畑地化によりかなり削平されており、旧地形を呈していない。

土壙墓はこの屈曲部分から南の丘陵上で合計34基検出した。現状でみると土器棺墓と土壙墓の分布は概ねこの屈曲部を境として北側に土器棺墓群、南側に土壙墓群が存在する（第55図）。しかし北側がかなり削平を受けているために不明であるが、土壙墓が北側にあった可能性も指摘でき、またそれは北丘陵（第Ⅱ調査区）で土壙墓と土器棺墓が混在した状態で確認していることからも窺われる。

土壙墓群はSKⅢ02・05・09・15の４基を除く全てが丘陵稜線に並行するように造られており、特に南側中央部稜線上には調査区内で最大規模のSTⅢ25があり、STⅢ23・24・26も含めて中心的な部分と考えられる。また南側斜面部ではほぼ同じ等高線上に平坦部を造り、直列状態の列埋葬が確認でき、頂部も

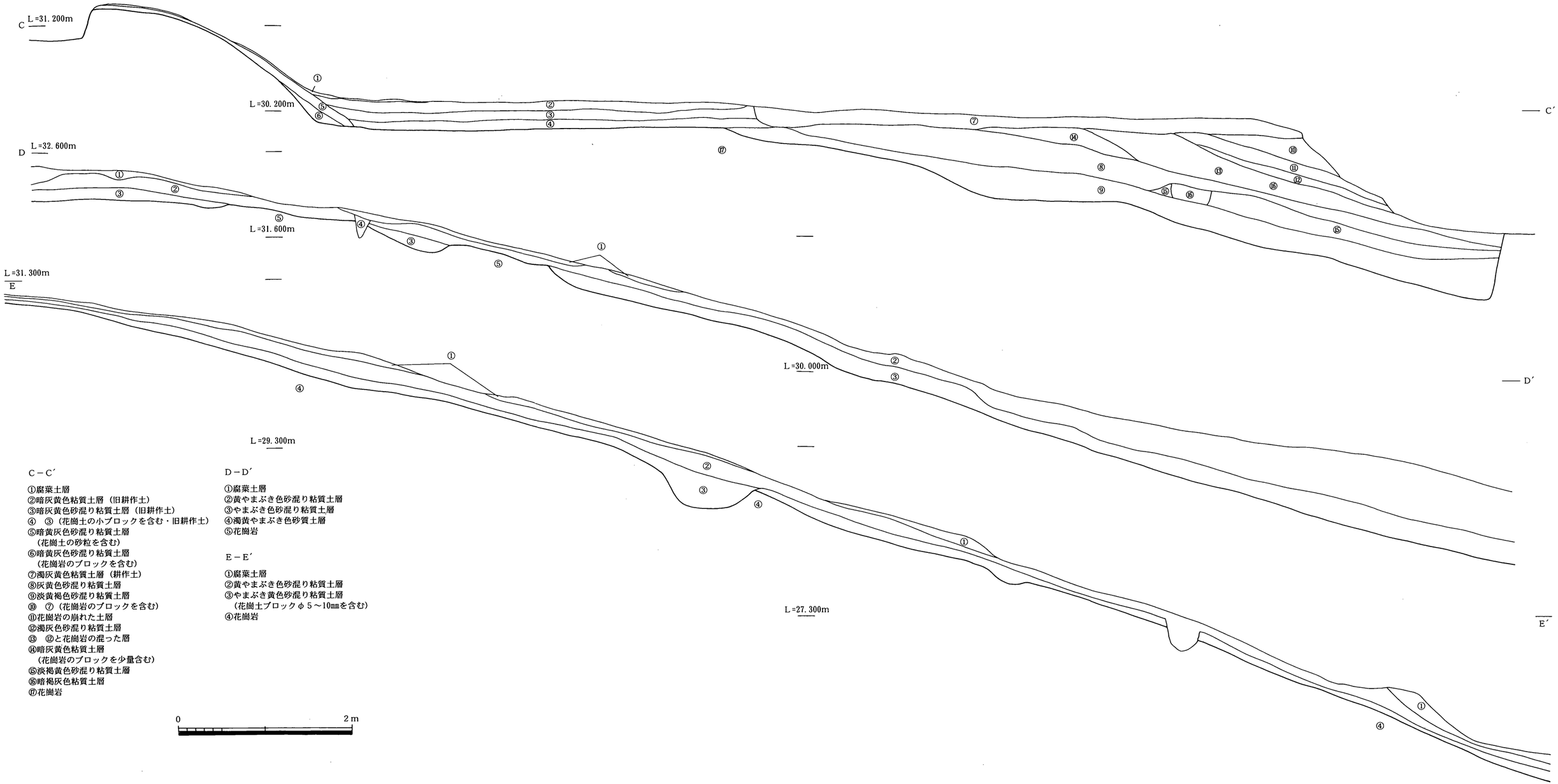


第52図　樋端第Ⅲ調査区地形測量図(1/300)



①腐葉土層
②黄やまぶき色砂混り粘質土層
③黄やまぶき色粗砂混り粘質土層
④濁黄やまぶき色砂混り粘質土層
（花崗岩の粒を多く含む）
⑤　④（④よりやまぶき色）
⑥やまぶき黄色粘質土層
⑦濁やまぶき色粘質土層
⑧　⑦（花崗岩の粒を多く含む）
⑨やまぶき黄色砂混り粘質土層
（花崗岩ブロックφ5～10㎜を含む）
⑩やまぶき黄色砂混り粘質土層
（花崗岩の砂粒を含む）
⑪濁黄色粘質土層
⑫濁黄色砂混り粘質土層
⑬暗やまぶき黄色砂混り粘質土層
（花崗岩のブロックを含む）
⑭　⑫（花崗岩の小ブロックを少量含む）
⑮濁やまぶき黄色砂混り粘質土層
⑯　⑮（花崗岩の小ブロックを含む）
⑰花崗岩

第53図　樋端第Ⅲ調査区土層断面図(1/40)



C－C′

①腐葉土層
②暗灰黄色粘質土層（旧耕作土）
③暗灰黄色砂混り粘質土層（旧耕作土）
④　③（花崗土の小ブロックを含む・旧耕作土）
⑤暗黄灰色砂混り粘質土層
（花崗土の砂粒を含む）
⑥暗黄灰色砂混り粘質土層
（花崗岩のブロックを含む）
⑦濁灰黄色粘質土層（耕作土）
⑧灰黄色砂混り粘質土層
⑨淡黄褐色砂混り粘質土層
⑩　⑦（花崗岩のブロックを含む）
⑪花崗岩の崩れた土層
⑫濁灰色砂混り粘質土層
⑬　⑫と花崗岩の混った層
⑭暗灰黄色粘質土層
（花崗岩のブロックを少量含む）
⑮淡褐黄色砂混り粘質土層
⑯暗褐灰色粘質土層
⑰花崗岩

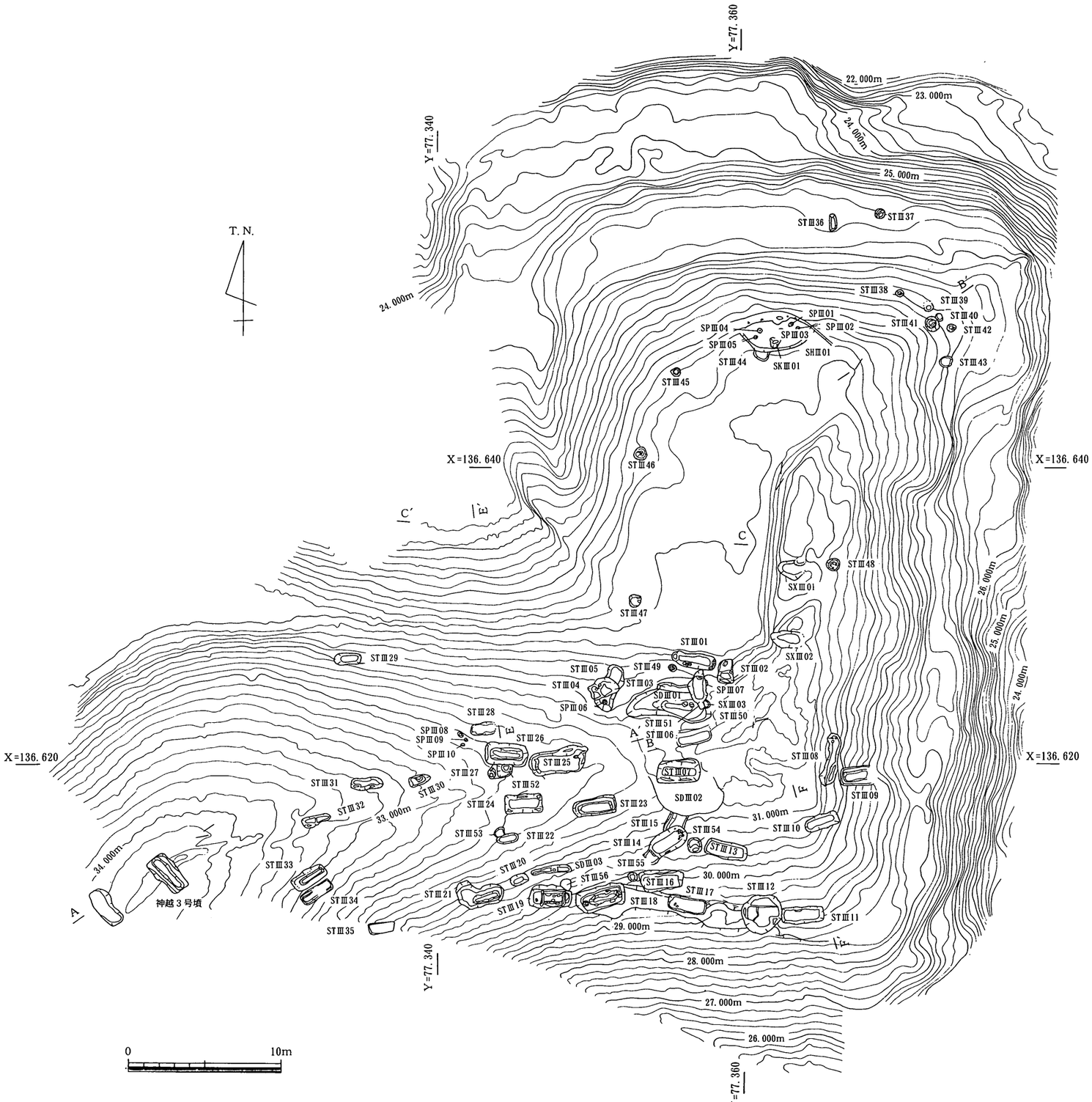
D－D′

①腐葉土層
②黄やまぶき色砂混り粘質土層
③やまぶき色砂混り粘質土層
④濁黄やまぶき色砂質土層
⑤花崗岩

E－E′

①腐葉土層
②黄やまぶき色砂混り粘質土層
③やまぶき黄色砂混り粘質土層
（花崗土ブロックφ5～10㎜を含む）
④花崗岩

第54図　樋端第Ⅲ調査区土層断面図(1/40)



第55図　樋端第Ⅲ調査区遺構配置図(1/300)

含めてほとんど土壙墓に切り合いはなく規則的に造営された墓域であることが解る。

STⅢ01（第56図）

STⅢ01は調査区中央部の北側斜面部、標高31.0mで検出した土壙墓で、平面形態は隅丸の長方形を呈する。断面は中央部が緩やかにU字状に窪む。土壙内には土層①（黄白色砂混り粘質土）上でみると中央部がU字状に窪み、東西の小口に約20×50cmの川原石１石を小口石として置き、南側長辺にはやや西よりに約20×30cmの川原石を直立させ置いている。北側長辺が削平を受けているために北側に川原石が置かれていたかは不明であるが、検出状況から墓壙内周囲全てに川原石が置かれていたとは考えられず、木棺の固定のために部分的に置いたものと考える。土層は１層のみで、土層①上が棺床となり、U字状に窪むことから木棺底部がU字状を呈するものであったことが窺われる。完掘状況では墓壙底面も隅丸長方形状を呈することと、断面が箱形状を呈することから墓壙は箱形上に掘削し、土層①をU字状に窪ませ、棺床にしたことが解る。

規模は完掘状態で長軸長約2.8m、短軸約1.02m（東小口部分約1.02m、西小口部分0.97m）、深さ約0.4mを測る。長軸主軸方向はN－99°－Eをとり、土壙墓はちょうど丘陵等高線に並行している。若干東側小口部分の規模が大きいことから頭位は東側と考える。

STⅢ02（第57図）

STⅢ02は調査区中央部の北側斜面部、標高31.0mで検出した土壙墓で、STⅢ01東側で検出した。平面形態は北側半分が削平されているが、隅丸の長方形を呈するものと考えられる。残存状態が悪いが、短軸断面は底面箱形を呈し、長軸断面では南側に段を持ち、南側小口部分が２段掘り状を呈している。検出墓壙北側で約30×40cmの川原石が出土した。

規模は長軸現存長約1.64m、短軸約0.9m（南小口部分約0.96m）、深さ約0.6mを測る。長軸主軸方向はN－１°－Eとほぼ真北を取り、土壙墓はちょうど丘陵等高線に直交している。

STⅢ03（第58図）

STⅢ03は調査区中央部の北側斜面部、標高31.15mで検出した土壙墓である。南側がSDⅢ01によって削平を受けているが、平面形態は隅丸の長方形を呈する。断面は底面が平らな箱形を呈する。

規模は完掘状態で長軸長約2.49m、深さ約0.13mを測る。長軸主軸方向はN－100°－Eをとり、土壙墓はちょうど丘陵等高線に並行している。

STⅢ04（第59図）

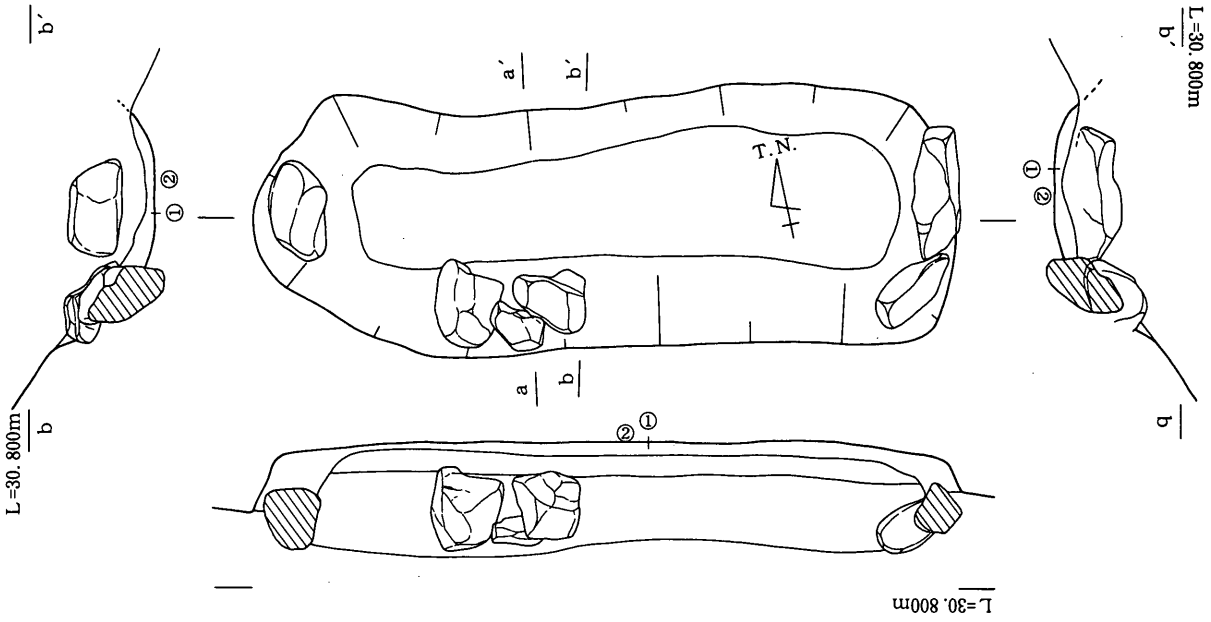
STⅢ04は調査区中央部の北側斜面部、標高30.9mで検出した土壙墓で、ちょうどSTⅢ05を切っている。平面形態は歪な長方形を呈し、断面は中央部が緩やかにU字状に窪む。完掘状態で土壙底面は歪で、深い部分と浅い部分が確認できる。土壙内から10～15cm程度の砂岩（川原石）が投げ込まれた状態で多量に出土している。

規模は完掘状態で長軸長約1.8m、短軸約1.27m、深さ約0.4mを測る。長軸主軸方向はN－65°－Eをとり、土壙墓はちょうど丘陵等高線に斜行している。

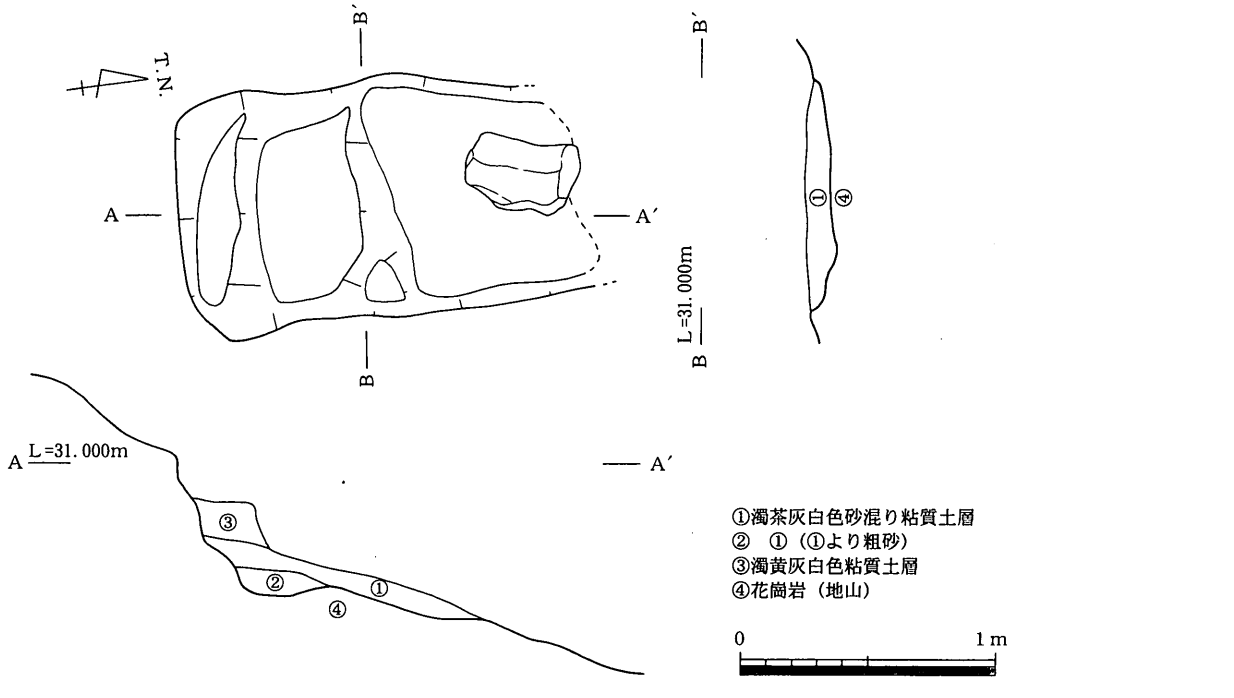
平面形態が歪で、墓壙底面もかなりの凹凸が認められることから土壙墓の可能性は低いが、ここではその範疇に入れて報告した。

STⅢ05（第59図）

STⅢ05は調査区中央部の北側斜面部、標高31.0mで検出した土壙墓で、平面形態は隅丸の長方形を呈する。断面は底面は平らで、やや上開きの箱形を呈する。土壙内には堆積土が６つに分けられる。STⅢ



第56図　STⅢ01平・断面図(1/30)



第57図　STⅢ02平・断面図(1/30)

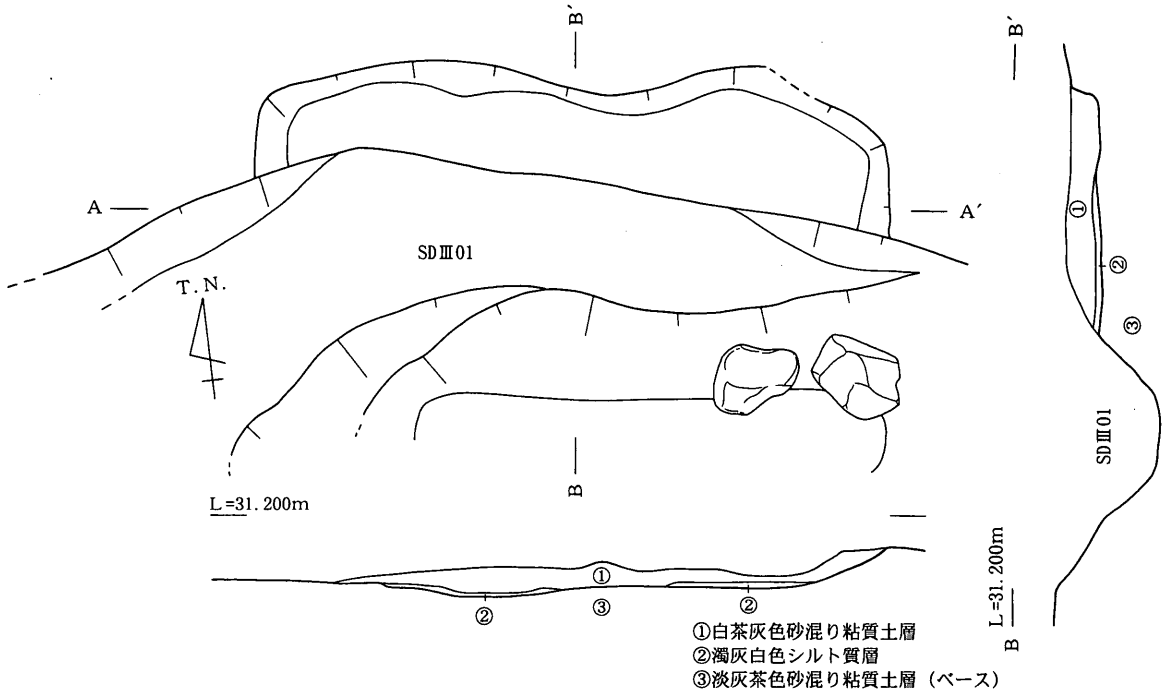
04によって切られているために、不明な部分もあるがほとんど水平堆積である。

規模は完掘状態で長軸長約3.1m、短軸約1.18m（南小口部分約1.37m、北小口部分1.18m）、深さ約0.51mを測る。長軸主軸方向はN－26°－Eをとり、土壙墓はちょうど丘陵等高線に直交している。若干南側小口部分の規模が大きいことから頭位は南側と考える。

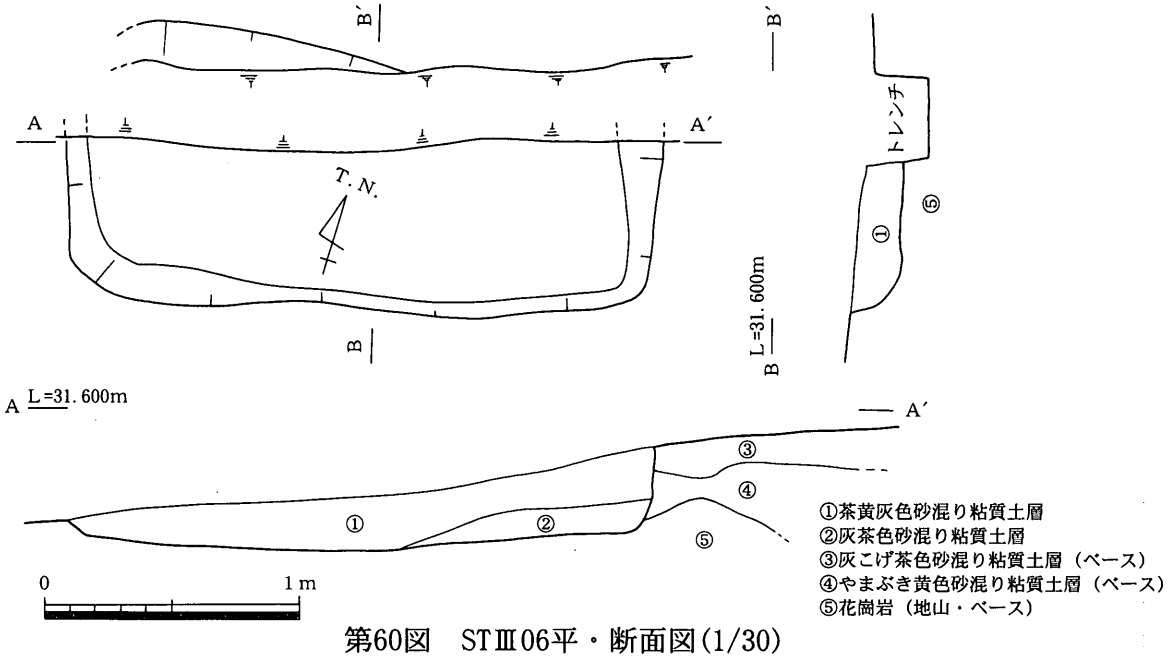
SPⅢ06（第61図）

STⅢ04の南東側、STⅢ05掘り方内南側で柱穴を検出した。

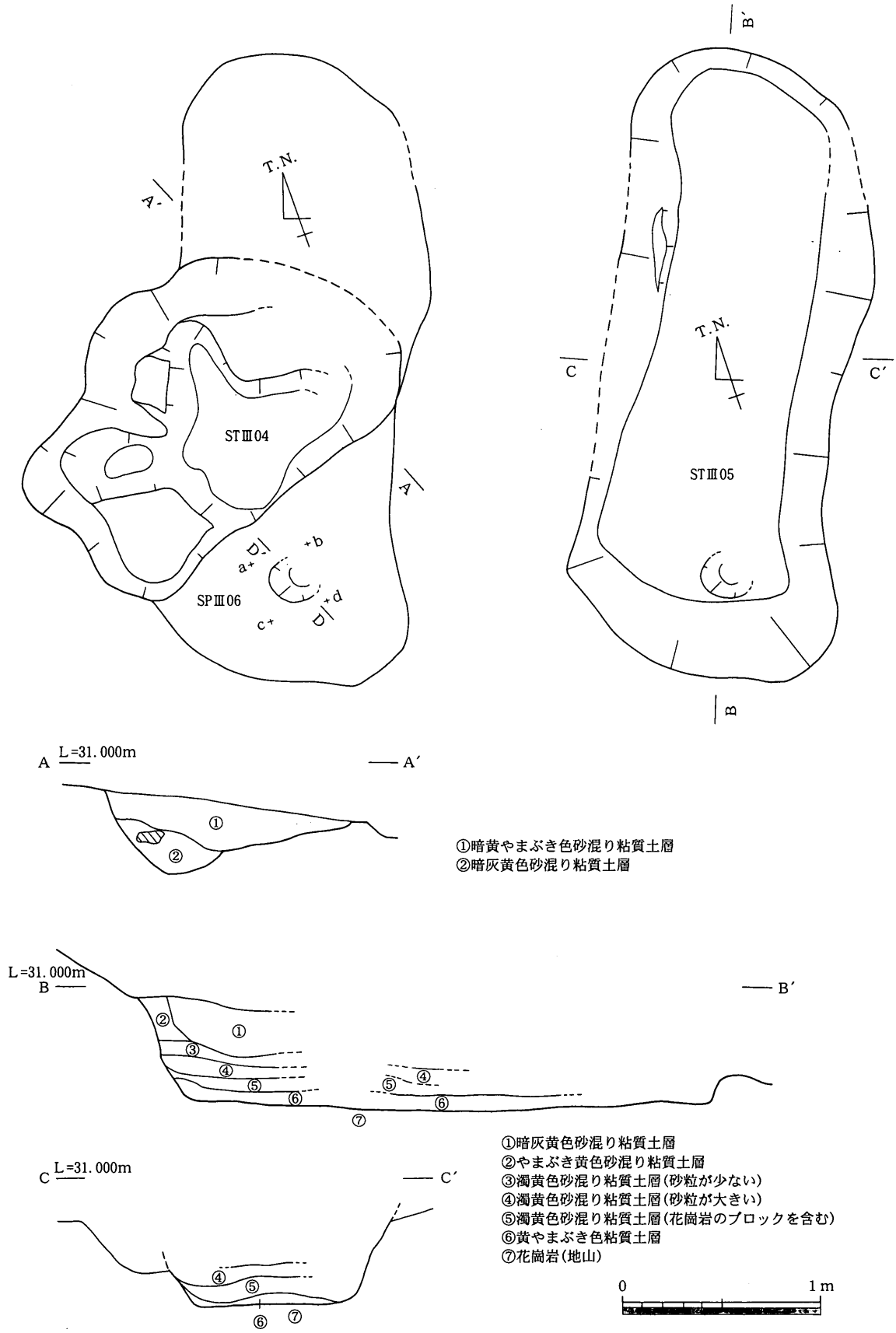
この柱穴は腐葉土・若干の包含層除去後、STⅢ04・05検出面と同一面で検出し、ちょうど柱穴掘り方内



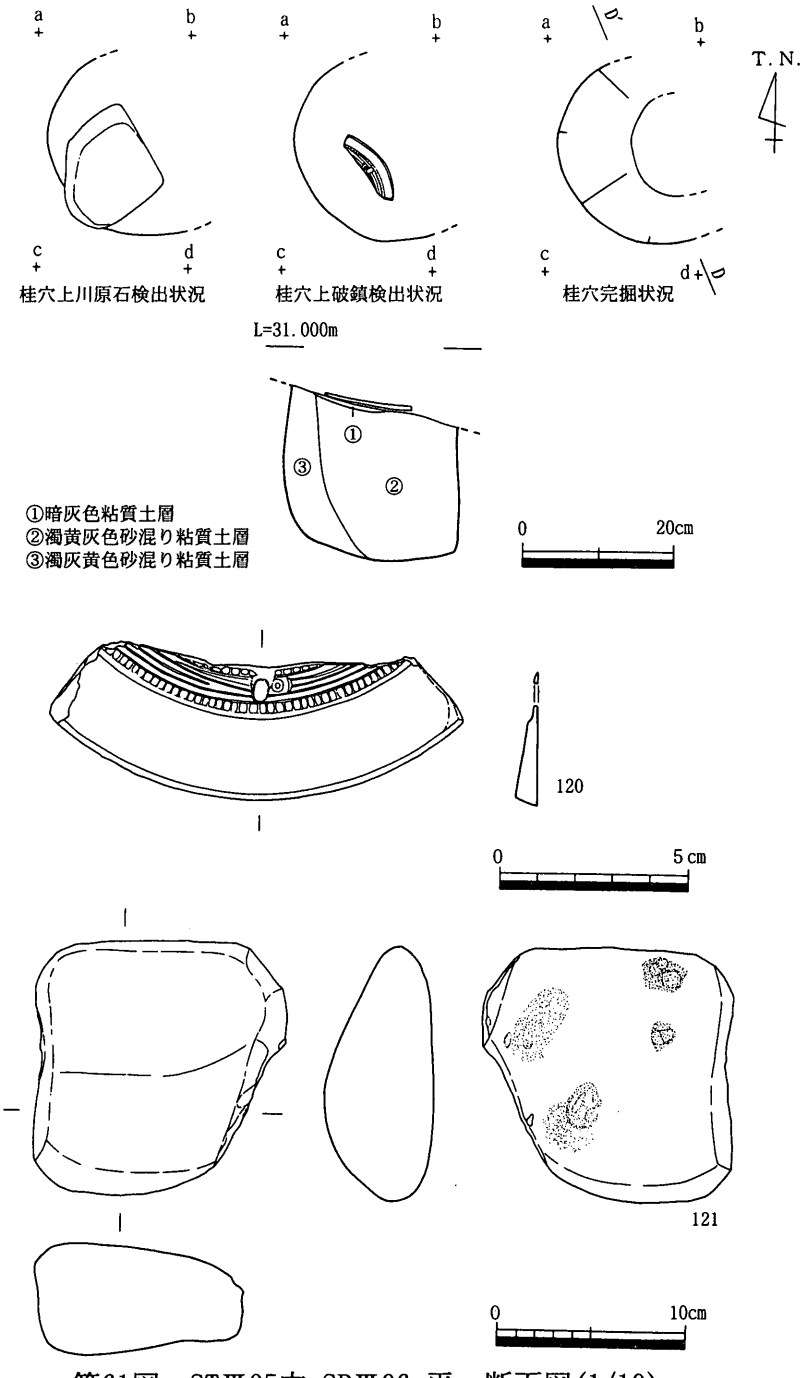
第58図　STⅢ03平・断面図(1/30)



第60図　STⅢ06平・断面図(1/30)



第59図　STⅢ04・05平・断面図(1/30)



第61図　STⅢ05内 SPⅢ06 平・断面図(1/10)、
出土遺物実測図(1/2、1/4)

上面に一辺約13cm角、厚さ6cm程度の角の丸い砂岩（川原石、第61図121）が置かれた状態であった。この砂岩の下位に柱穴があり、柱穴と砂岩の間に鏡面を下に向けた破鏡（第61図120）を検出した。柱穴は平面形態が円形を呈し、直径約23cm、深さ約20cmを測る。柱穴内堆積土層は3つに分けられ、特に土層①・②は破鏡の錆化の影響のために上部が黒色系に変色していた。

この破鏡及び川原石は柱穴掘り方内上面で検出しているために柱穴に伴うものかは不明であるが、明らかに何らかの意図を持って破鏡上面に川原石を置いたことは疑いなく、後世の土砂の流失により現状になった可能性も考えられる。また柱穴はSTⅢ05の南小口中央（頭位側）に位置していることからSTⅢ05との関係が考えられる。しかし同時期と推定してこの土壙墓を埋め戻した後に掘削されたものであれば、木棺の腐朽時の陥没により柱穴掘り方及び土層に何らかのミダレが生じてもいいはずであるが、柱穴埋土にそのミダレが確認できないことから、土壙墓との同時性は薄い。またこの柱穴はSTⅢ05内に堆積した土層①を切り込んでいることが解り、土層②・③を切り込むように堆積したこの土層①の堆積状況を木棺腐朽時のミダレと取れば、柱穴にもその乱れが影響するはずであるが、その状況が確認できないことから土壙墓との同時性は言えない状況になる。

このように川原石と破鏡とには同時性が考えられるが、柱穴及びSTⅢ04・05との同時性を証明する根拠には乏しい。

ここでは柱穴出土遺物として取り扱うが、さらに周辺で確認されている土壙墓と供に後述したい。

破鏡は鏡式でみると内行花文鏡で、後漢鏡である（第61図120）。面径は16.4cmで、残存角約87°であることから鏡面の約1/4程度で作られた破鏡である。雲雷文帯と周縁が確認でき、雲雷文帯と連弧文間

で破砕されている。周縁は断面が斜縁で、幅2.3cm、厚さ0.55cm、0.25cmを測る。雲雷文帯は単位文様で渦文・斜角線文・櫛歯文に分けられ、岡村氏の単位文様分類では渦文がかなり形骸化した同心円状を呈する渦文(ウ)に、斜角線文が線条が簡素になった斜角線文(2)に当たり、ちょうどこの渦文部分に穿孔が施されている。穿孔内側と破砕部分が全面かなり摩滅しており、穿孔上側（内区側）が紐づれにより特に摩滅していることが解る。

以上から破鏡の鏡式は岡村氏の分類で、四葉座内行花文鏡Ⅲ式に相当する。実年代は64年で、漢鏡編年の５期に当たる。

上部におかれた川原石は扁平な砂岩（第61図121）で、特に人為的な調整は確認できなかった。

STⅢ06（第60図）

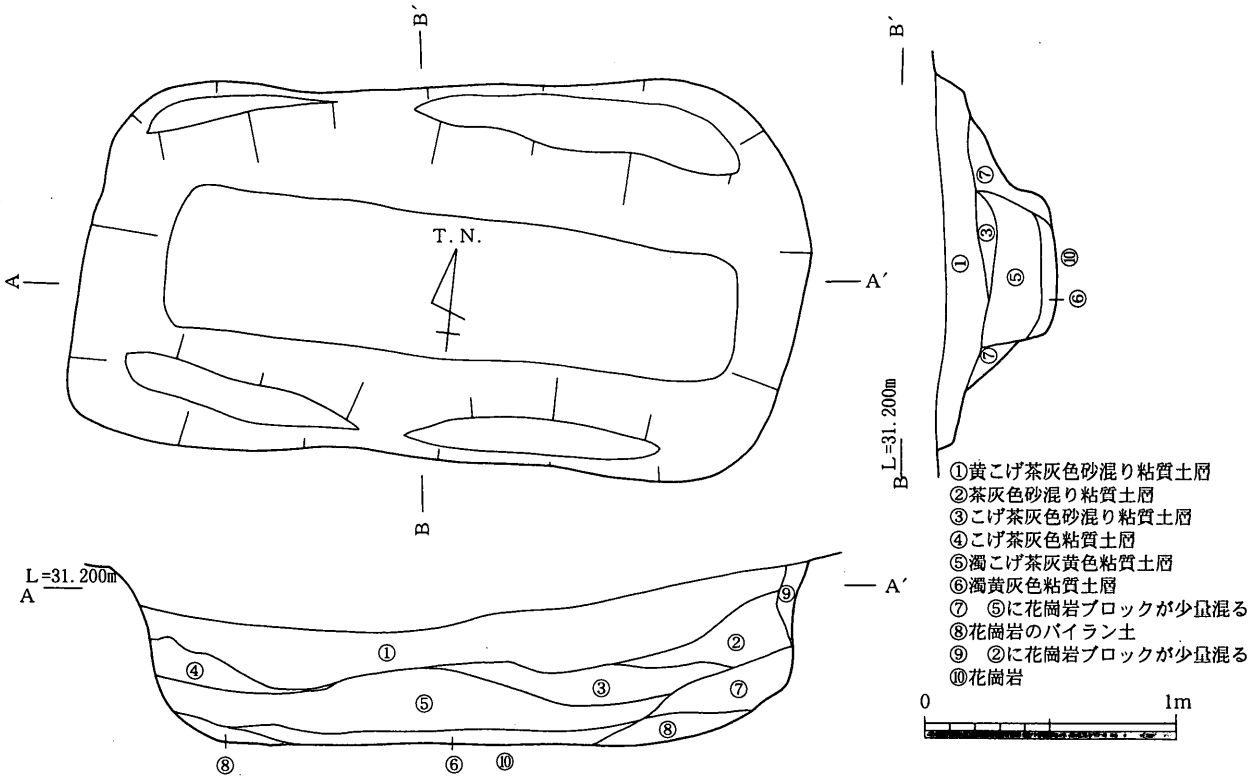
STⅢ06は調査区中央部の丘陵頂部、標高31.5mで検出した土壙墓で、トレンチで削平されているものの平面形態は隅丸の長方形で、断面は箱形を呈する。

規模は完掘状態で長軸長約2.32m、短軸約0.97m（西小口部分1.11m）、深さ約0.33mを測る。長軸主軸方向はN－76°－Eをとり、土壙墓はちょうど丘陵稜線に並行している。

STⅢ07（第62図）

STⅢ07は調査区中央部の丘陵頂部、標高31.3mで検出した土壙墓で、SDⅢ02によって切られており、溝底面で検出した。平面形態は隅丸の長方形を呈し、断面は中央部が箱形に窪み、長辺側上位に僅かに平坦面を造ることで断面二段掘を呈する。土壙内には中央部に土層③・⑤・⑥が堆積し、この周りに土層⑦が堆積する。土層③・⑤・⑥部分が木棺部分と考えられ、幅は約60cmを測る。

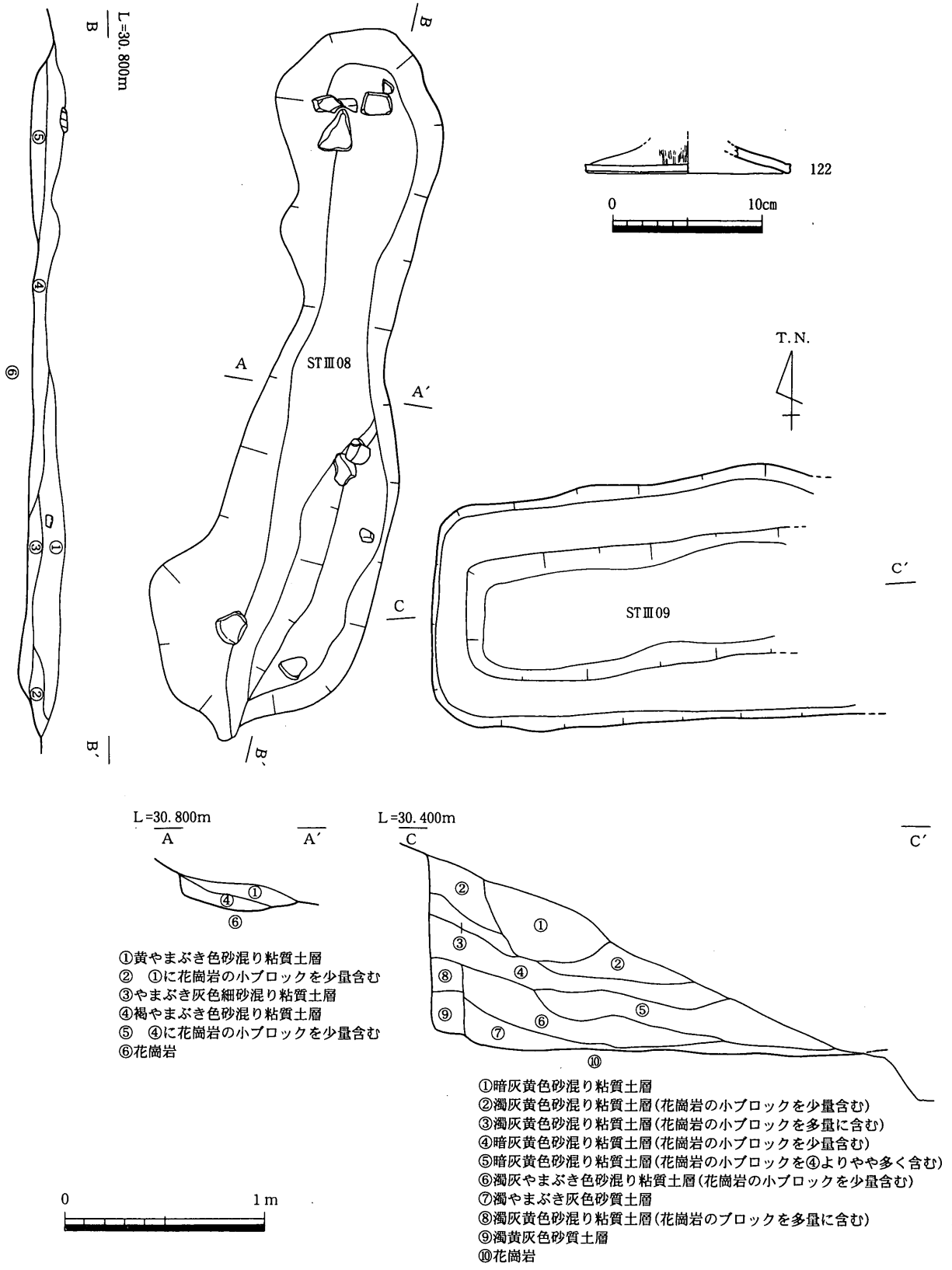
規模は完掘状態で長軸長約2.83m、短軸約1.46m（東小口部分約1.53m、西小口部分1.40m）、深さ約0.72mを測る。長軸主軸方向はN－91°－Eとほぼ東西主軸をとり、土壙墓はちょうど丘陵等高線に並行している。若干東側小口部分の規模が大きいことから頭位は東側と考える。



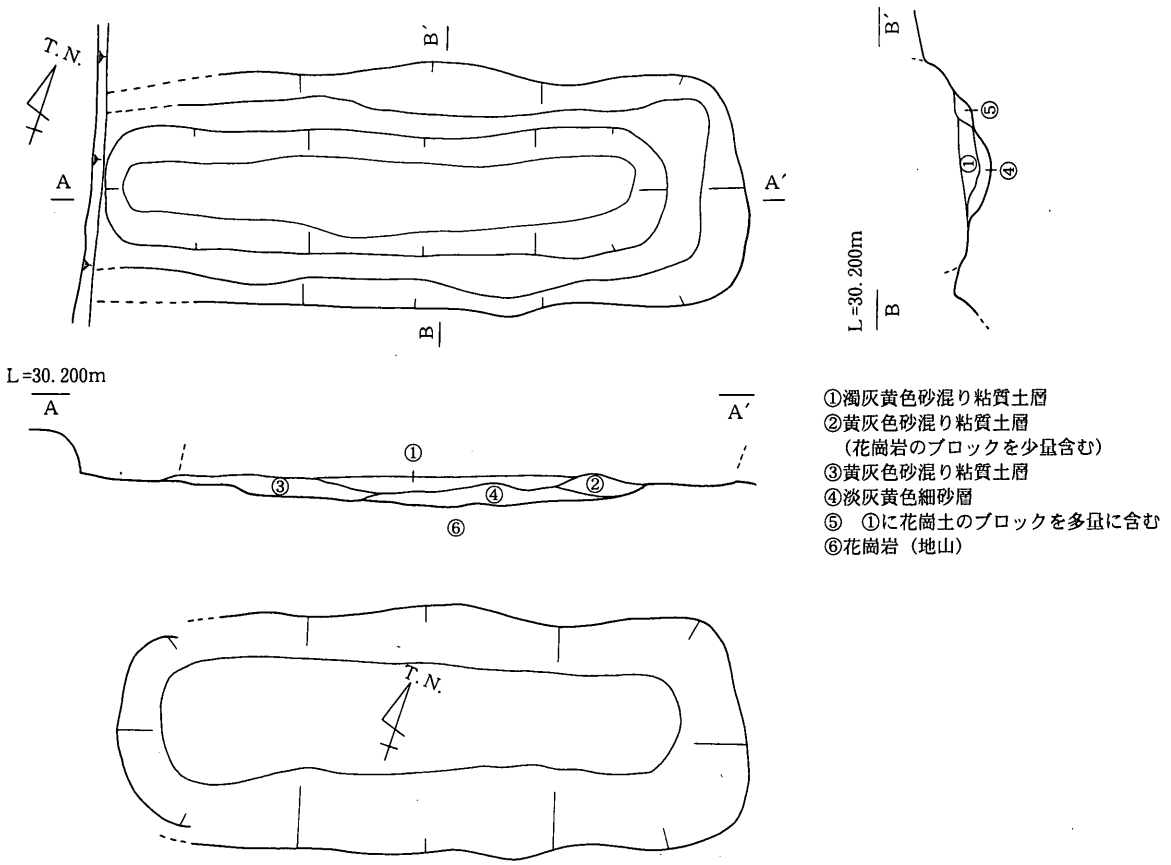
第62図 STⅢ07 平・断面図(1/30)

STⅢ08（第63図）

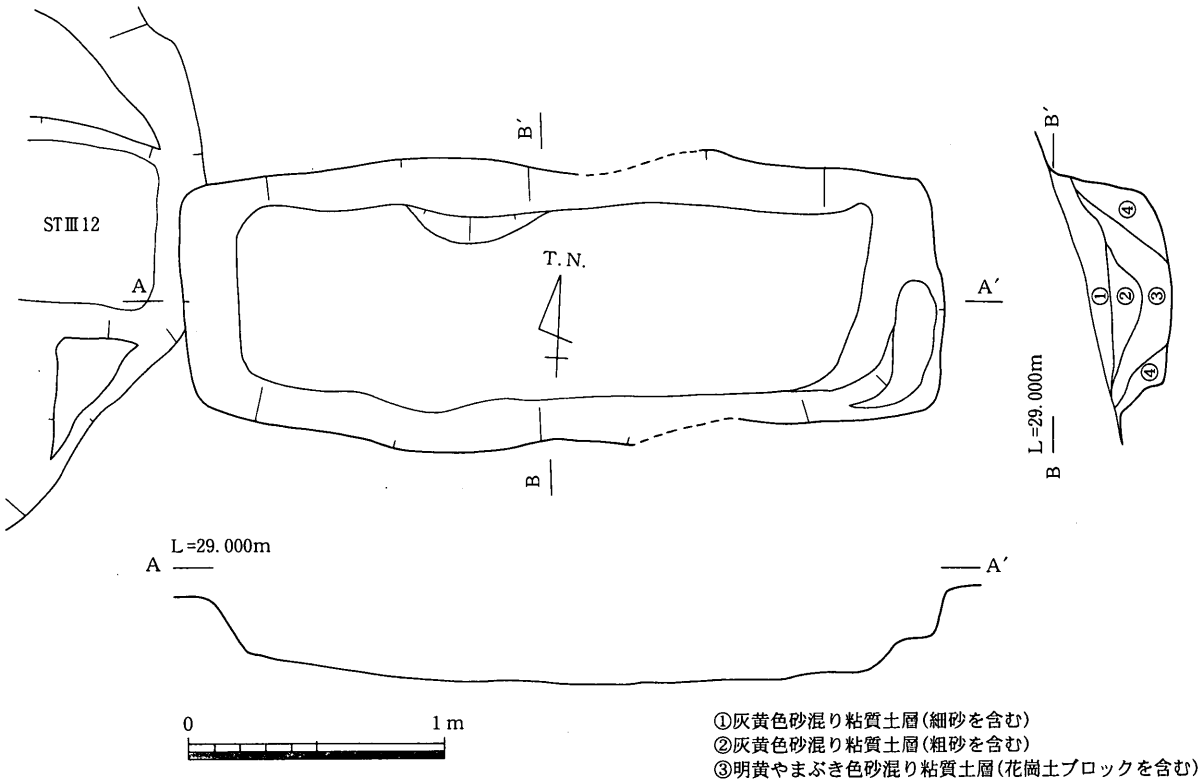
STⅢ08は調査区中央部の東側斜面部、標高30.6mで検出した土壙墓で、平面形態は歪な長方形状を呈し、断面は緩やかなU字状を呈する。土壙内床面で約20cm程度の川原石を検出したが、規則性は認められない。



第63図　STⅢ08・09平・断面図(1/30)、出土遺物実測図(1/4)



第64図　STⅢ10平・断面図(1/30)



第65図　STⅢ11平・断面図(1/30)

規模は完掘状態で長軸長約3.68m、短軸約0.85m、深さ約0.14mを測る。長軸主軸方向はN－13°－Eをとり、土壙墓はちょうど丘陵等高線に並行している。

ここでは土壙墓としたが、平面形態及び埋土の堆積状況から東側に長軸主軸を直交するように検出したSTⅢ09に伴う区画溝の可能性が考えられる。

土壙内から弥生時代の高坏（第63図122）が出土している。

STⅢ09（第63図）

STⅢ09は調査区中央部の東側斜面部、標高30.3mで検出した土壙墓で、STⅢ08東側で検出した。平面形態は東側半分が削平されているが、隅丸の長方形を呈するものと考えられる。東側の残存状態が悪いが、土壙墓底面に長辺側に幅約20cm、小口側に幅約15cm程の平らな部分が確認でき、断面箱形で、周囲に平坦面を持つ２段掘り状の墓壙である。堆積土層でみると土層⑥・⑦が棺部分に堆積した土層で、土層⑧・⑨は棺の裏込め土と考えられる。

規模は長軸現存長約2.16m、短軸約1.20m、深さ約0.98mを測る。長軸主軸方向はN－83°－Eとほぼ東西を取り、土壙墓はちょうど丘陵等高線に直交している。

STⅢ10（第64図）

STⅢ10は調査区中央部の東側斜面部、標高30.0mで検出した土壙墓である。平面形態は西側小口が一部削平されているが、隅丸の長方形を呈するものと考えられる。完掘状態で断面は底面周囲に約10～14cmの平坦面を持つ２段掘りを呈し、中央部は緩やかなU字状を呈する。

規模は長軸現存長約2.50m、短軸約0.95m、中央部窪み部分の規模は長軸約2.20m、幅0.48m、深さ約0.26mを測る。長軸主軸方向はN－71°－Eとほぼ真北を取り、土壙墓はちょうど丘陵等高線に並行している。

STⅢ11（第65図）

STⅢ11は調査区中央部の南側斜面部、標高29.0mで検出した土壙墓で、STⅢ12の東小口を切り、東側で検出した。平面形態は隅丸の長方形を呈し、断面は箱形を呈する。土層断面は土層①・②の中央が窪んでおり、棺腐朽時に窪んだものと考えられる。

規模は長軸現存長約2.96m、短軸約1.16m、深さ約0.48mを測る。長軸主軸方向はN－87°－Eとほぼ東西を取り、土壙墓はちょうど丘陵等高線に併行している。

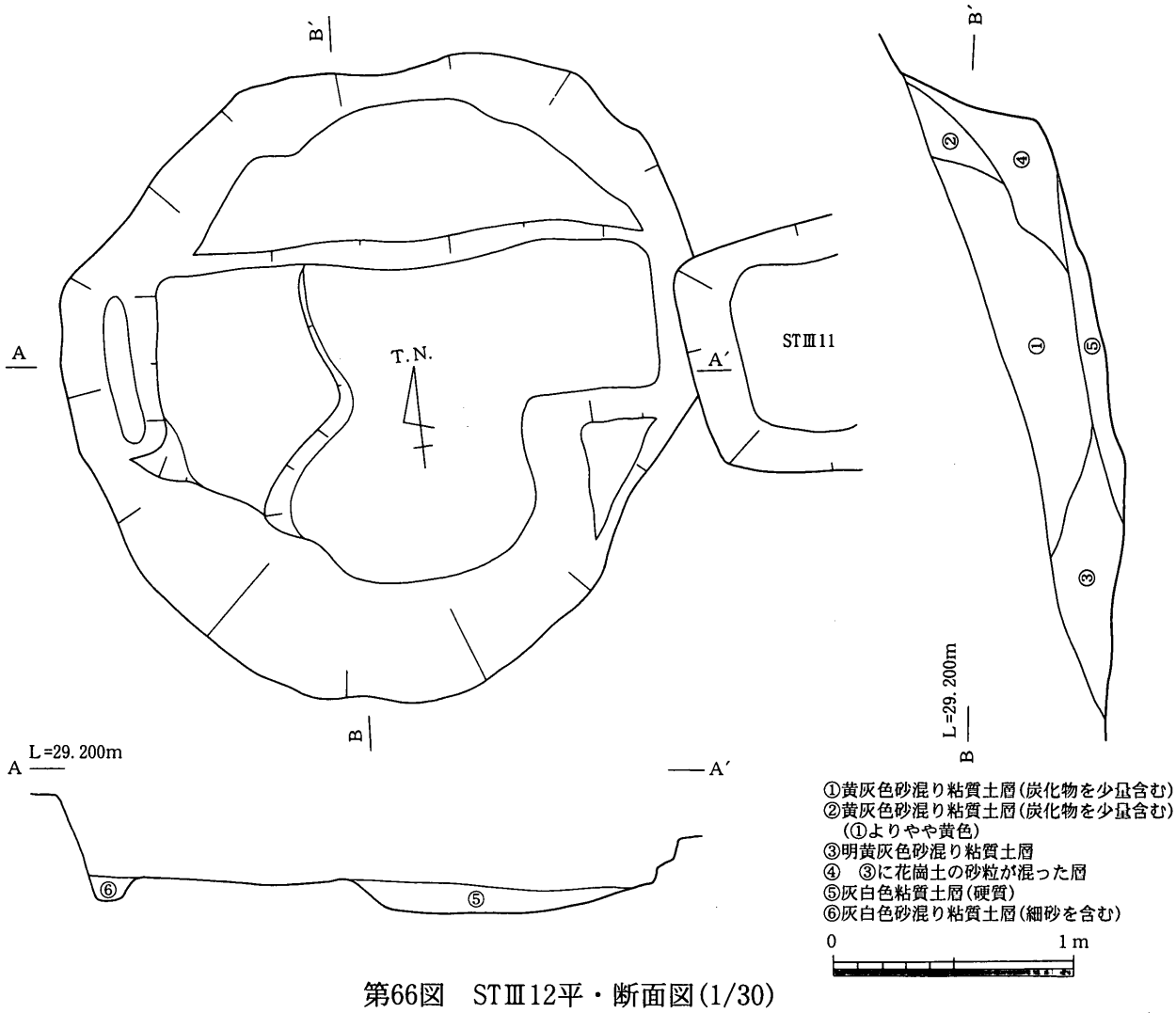
STⅢ12（第66図）

STⅢ12は調査区中央部の南側斜面部、標高29.1mで検出した土壙墓である。検出面での平面形態は歪な楕円形を呈し、規模は約2.6m、深さ約0.5mを測る。しかしこの土壙の底面で平面形態が隅丸長方形を呈する掘り方を検出している。西側小口部分には溝状の窪みがあり、小口板設置の溝と考えられる。おそらく底面で検出した長方形状の掘り込みが本来の土壙墓の形状と考えられ、楕円形の掘り込みは土壙墓に伴わないものと考える。

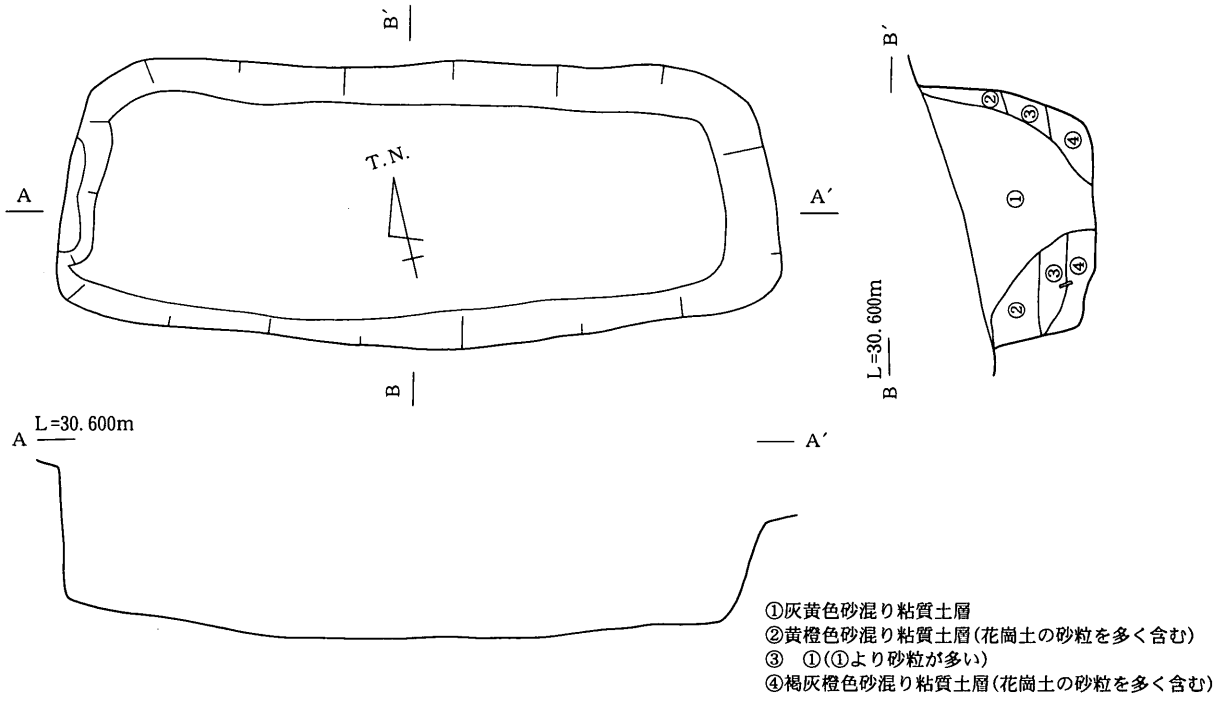
規模は長軸約2.67m、短軸約0.84m、現存深さ0.13mを測るもので、長軸主軸方向はN－91°－Eとほぼ東西を取り、土壙墓はちょうど丘陵等高線に並行している。土層断面及び完掘状況からこの楕円形の掘り方を持つ土坑が下位で検出した土壙墓を削平しているものと考えられる。

STⅢ13（第67図）

STⅢ13は調査区中央部の南側斜面部、標高30.5mで検出した土壙墓で、平面形態は隅丸の長方形で、断面は箱形を呈する。土層断面は土層①が土層②・③・④を切っており、攪乱土の可能性が高い。



第66図　STⅢ12平・断面図(1/30)



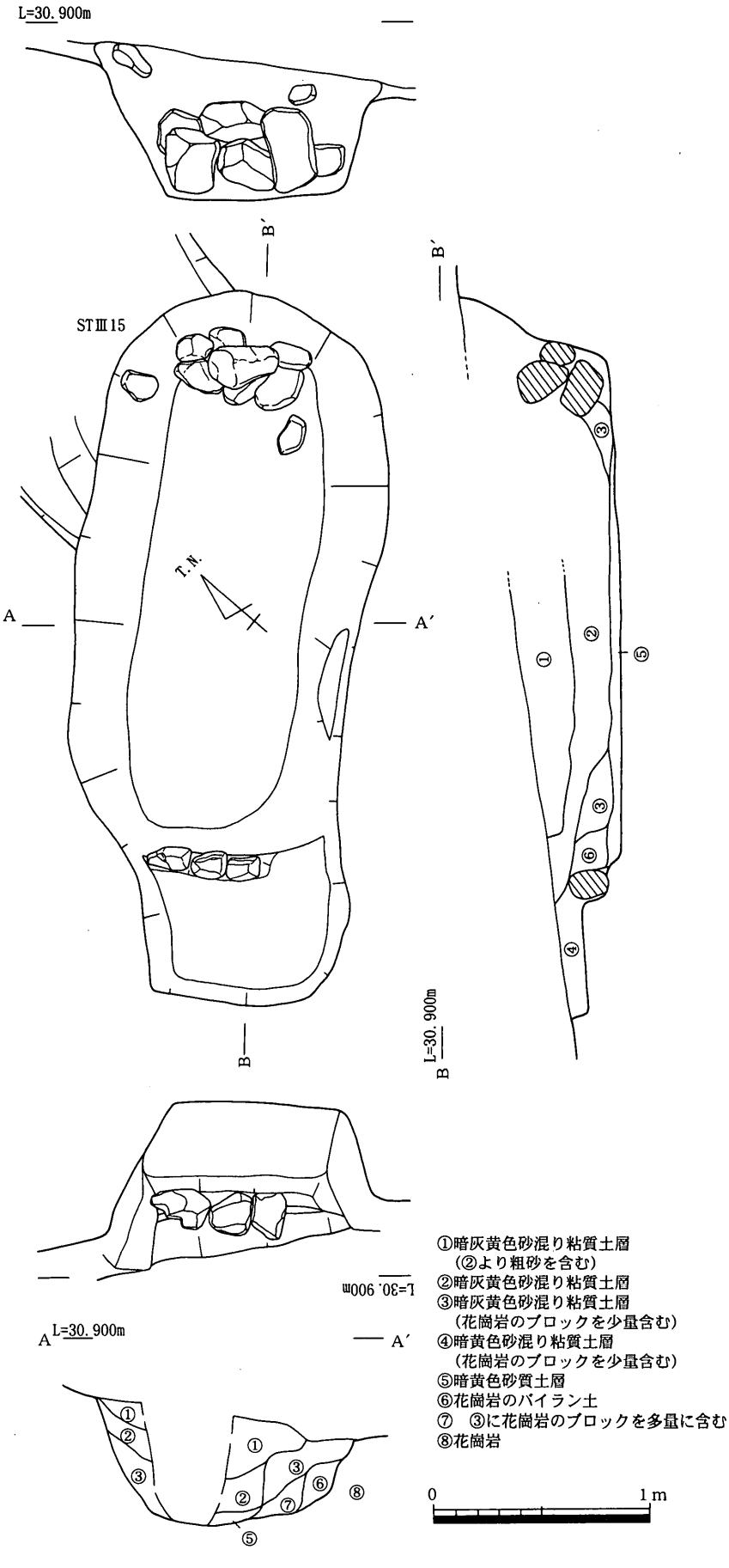
第67図　STⅢ13平・断面図(1/30)

規模は長軸現存長約2.78m、短軸約1.11m、深さ約0.70mを測る。長軸主軸方向はN－104°－Eとほぼ東西を取り、土壙墓はちょうど丘陵等高線に並行している。

STⅢ14（第68図）

STⅢ14は調査区中央部の南側斜面部、標高30.8mで検出した土壙墓で、平面形態は隅丸の長方形で、断面は上開きの箱形を呈する。堆積土層は7つに細分でき、土層⑤は微砂粒の混じる粘質土で粘土棺床と考えられ、土層③・⑤・⑥は木棺裏込め土と考えられる。土層①・②は木棺腐朽時に木棺上部に埋め戻していた土層が落ちたためにU字状に窪む堆積状況である。攪乱を受けているために木棺幅は不明である。土壙墓掘り方は南西側小口部分が2段掘になっており、その2段目段上に約15～20cm程の川原石を3石並べ、また北東側小口部分には約10～30cm程の川原石を7石積み上げている。北東側小口部分の川原石に規則性は認められない。また北東側小口部分から若干離れ、両側壁際に約10～20cm程の川原石を検出した。この側壁際の川原石が木棺側面に接して置かれていたものと考えれば木棺幅は50～60cmと考えられる。

規模は長軸長約3.26m、2段目掘り方長約2.68m、短軸約1.30m（北東小口部分約1.27m、南西小口部分約1.25m）、深さ約0.70mを測る。長軸主軸方向はN－55°－Eを取り、土壙墓はちょうど丘陵等高線に斜行している。両小口

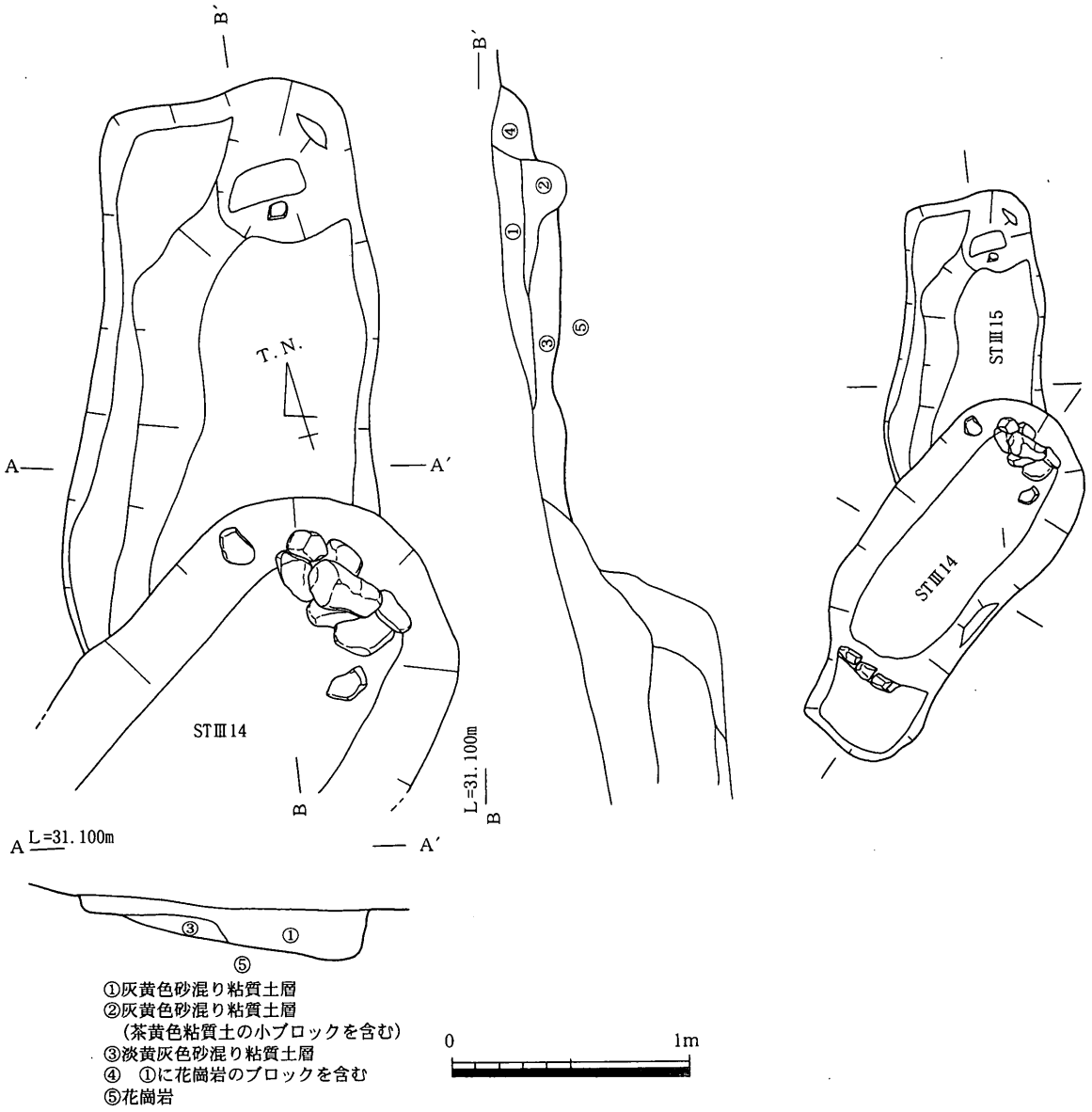


第68図　STⅢ14 平・断面図(1/30)

部分の規模はほぼ同じであるが、北東側小口部分に川原石が多量に置かれていることから頭位は北東側と考える。

STⅢ15（第69図）

STⅢ15は調査区中央部の南側斜面部、標高31.0mで検出した土壙墓である。北側小口をSDⅢ02によって切られ、南側小口をSTⅢ14によって切られている。平面形態は隅丸の長方形を呈するものと考えられ、規模は現存長約約1.67m、短軸幅約1.19m、深さ約0.35mを測る。墓壙床面検出状況から西側及び北側に幅15～30cm程の平らな面が確認でき、部分的に２段掘りを呈していることが解る。長軸主軸方向はＮ－18°－Ｅを取り、土壙墓主軸は丘陵等高線に直交している。



第69図　STⅢ15平・断面図(1/30)

STⅢ16（第70図）

STⅢ16は調査区中央部の南側斜面部、標高30.1mで検出した土壙墓である。平面形態は隅丸の長方形で、北側壁のほぼ中位に10～15cm程度の平坦面を持つが、断面は概ね上開きの箱形を呈する。墓壙中央底面に10～25cm程度の川原石が２石置かれた状態で出土している。

規模は長軸長約2.76m、短軸幅約1.27m（東小口部分約1.12m、西小口部分約1.42m）、深さ約0.96mを測る。長軸主軸方向はＮ－85°－Ｅとほぼ東西主軸を取り、土壙墓はちょうど丘陵等高線に並行している。

墓壙内西側の堆積土層①から土器片と鉄鏃（第70図123）が出土している。鉄鏃はちょうど土層①と②の境部分から出土している。土層①・②は木棺上に埋め戻された埋土と考えられ、土層①・②間から出土していることは土壙墓を埋め戻す過程のものとと考えられ、棺外に副葬されたものと思われる。

鉄鏃は先端部が欠損しているが、柳葉式の鉄鏃で弥生時代後期終末から古墳時代前期初頭のものと考えられる。

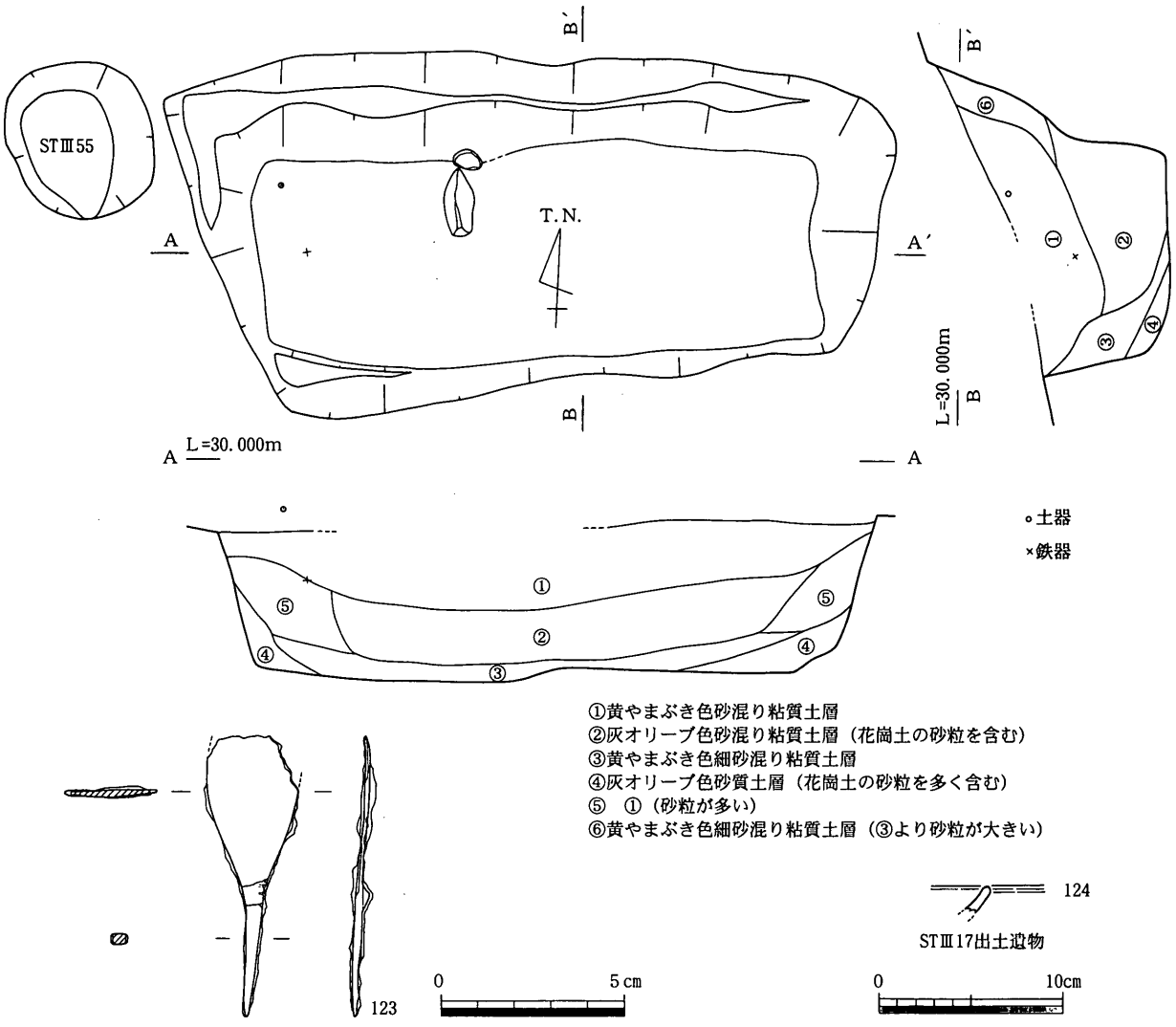
この鉄鏃の出土位置が土壙墓西側に位置することと若干西側小口幅が広いことから頭位は西側と考える。

STⅢ17（第71図）

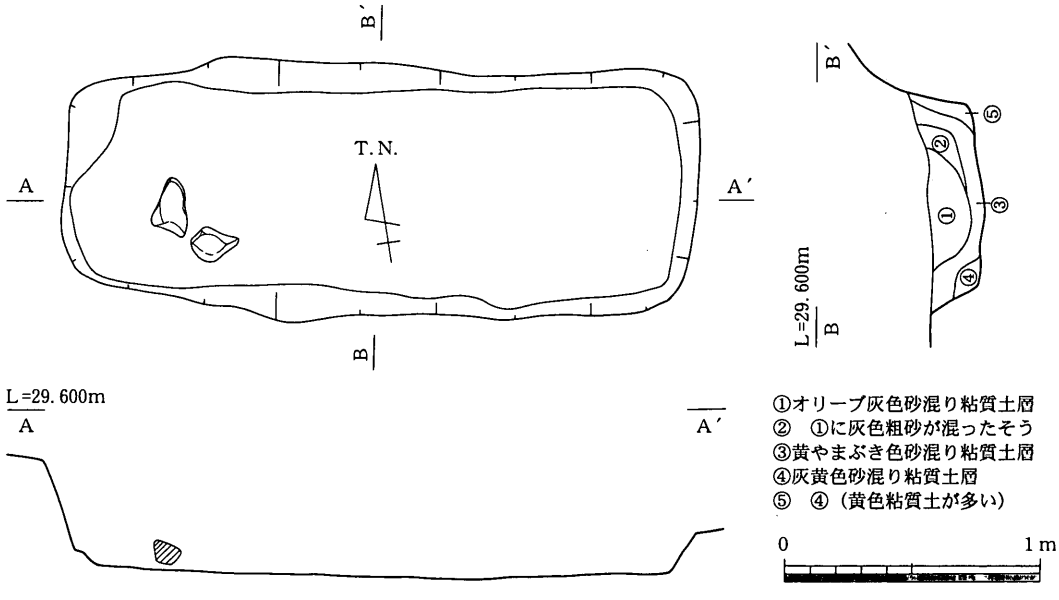
STⅢ17は調査区中央部の南側斜面部、標高29.4mで検出した土壙墓である。平面形態は隅丸の長方形で、断面は箱形を呈する。堆積土層を見ると土層①がU字状に堆積していることから木棺腐朽後に堆積した土層と考えられ、これからすると木棺は底面がU字状を呈し、幅0.48mを測ることが推定できる。墓壙西側底面に10～20cm程の川原石が２石置かれた状態で出土している。

規模は長軸長約2.47m、短軸幅約0.99m（東小口部分約0.96m、西小口部分約0.86m）、深さ約0.46mを測る。長軸主軸方向はＮ－100°－Ｅとほぼ東西主軸を取り、土壙墓はちょうど丘陵等高線に並行している。

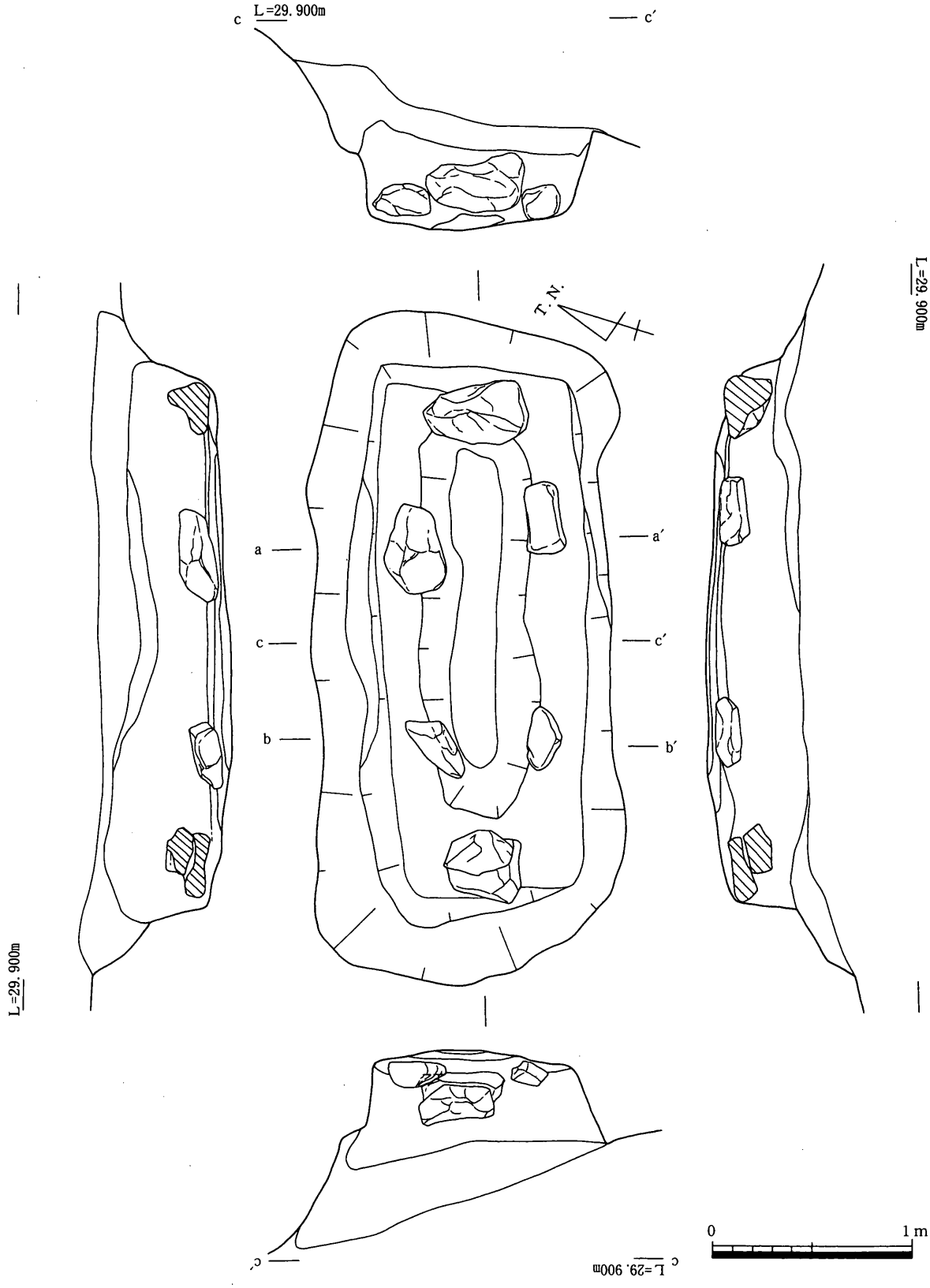
土壙内から土器片（第70図124）が出土している。鉢の口縁部と考えられ、胎土は精良である。



第70図　STⅢ16平・断面図(1/30)、出土遺物実測図(1/2)



第71図　STⅢ17平・断面図(1/30)、出土遺物実測図(1/4)

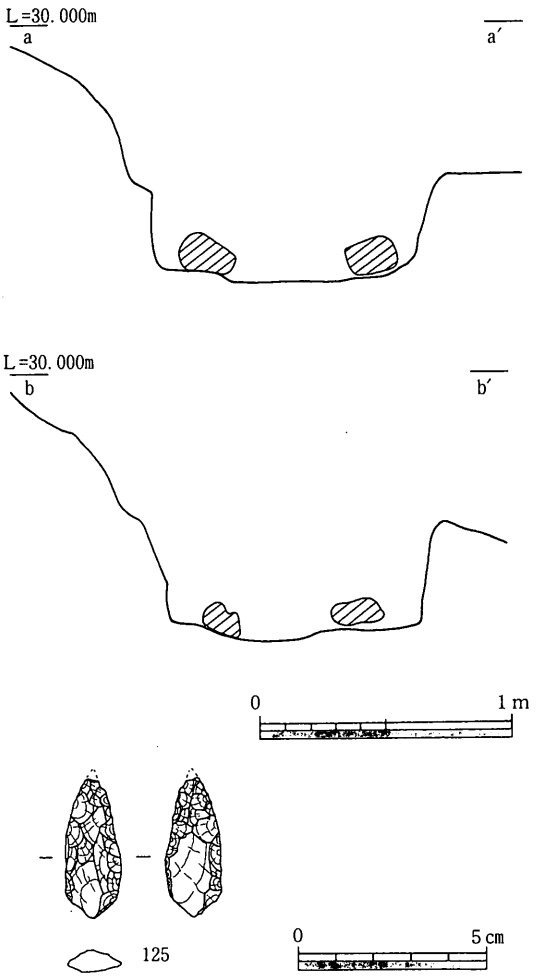


第72図　STⅢ18平・断面図(1/30)

STⅢ18（第72図）

STⅢ18は調査区中央部の南側斜面部、標高29.6mで検出した土壙墓である。平面形態は隅丸の長方形で、中央部底面が僅かにU字状に窪むが、概ね断面は箱形を呈する。墓壙底面は中央が隅丸長方形状に僅かに窪んでおり、その周囲に平坦面がある。幅は西側小口部分が約40cmと広いが、それ以外は約20程を測り、この平坦部分の北側小口に幅約30～50cmの川原石、西側小口に幅約20～35cmの川原石、側壁側には間隔をあけて北側・南側で対になるように幅約20～45cmの川原石が計４石置かれていた。側壁側の川原石は中央部の断面U字状の窪みと合わせて考えると、底面U字状を呈する木棺をU字状の窪みに合わせ、側面から固定するために置かれたものと考えられる。その結果木棺の規模が推定でき、長さ約1.9m、木棺断面が円形とすると幅約60cmを測る木棺と考えられる。

規模は長軸長約3.32m、短軸幅約1.52m（東小口部分約1.48m、西小口部分約1.54m）、深さ約0.98mを測る。また中央部の窪みは長軸約1.96m、短軸幅約0.51m、深さ約0.04mを測る。長軸主軸方向はＮ－73°－Ｅとほぼ東西主軸を取り、土壙墓はちょうど丘陵等高線に並行している。



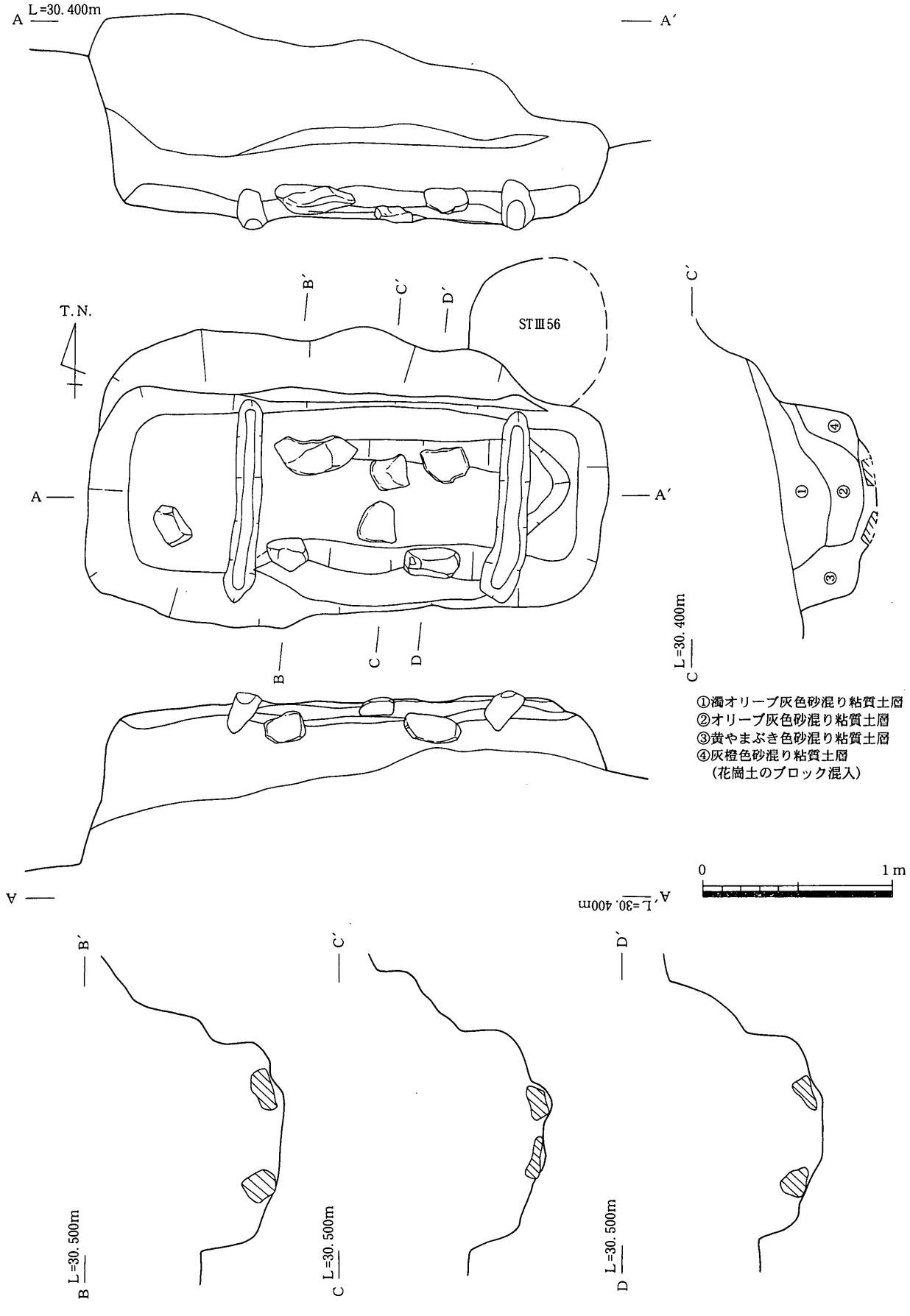
第73図　STⅢ18 断面図(1/30)、
出土遺物実測図(1/2)

墓壙内からサヌカイト製の石鏃（第73図125）が出土している。埋土中であることから共伴するかは不明である。

STⅢ19（第74図）

STⅢ19は調査区中央部の南側斜面部、標高30.2mで検出した土壙墓である。北側約0.7m離れた位置に土壙墓長軸とほぼ並行する溝状遺構SDⅢ03を検出している。

土壙墓の平面形態は隅丸の長方形で、中央部底面が僅かにU字状に窪むが、概ね断面は箱形を呈する。墓壙底面は中央が隅丸長方形状に窪んでおり、その周囲に平坦面がある。この窪みと周囲の平坦面を切るように短軸方向で２箇所溝状の落ちが確認できる。西側小口部分では中央部分に認められる明確な落ちは確認できないが、これ以外の周囲に約20cm程の平坦面を持つ。この平坦面の西側小口に幅約15～20cmの川原石を１石、中央側壁側には平坦部から中央窪み底面へ向けての傾斜部に間隔をあけて北側・南側で対になるように幅約15～40cmの川原石が計４石置かれ、さらに中央部には窪みの底面に幅約20cm程度の扁平な川原石を２石検出した。側壁側の川原石は中央部の断面U字状の窪みと合わせて考えると、中央部の２石は棺台に使用したものと考えられ、それ以外の４石は底面U字状を呈する木棺をU字状の窪みに合わせ、側面から固定するために置かれたものと考えられる。その結果木棺の規模が推定でき、長さは不明であるが、木棺断面が円形とすると幅約60cmを測る木棺と考えられる。これは土層断



第74図　STⅢ19平・断面図(1/30)

面からも土層②が木棺部分に埋没した痕跡と考えれば、ほぼ同じ幅を呈し、木棺の痕跡を裏付けている。また墓壙底面で検出した溝状遺構は西側小口から0.8m部分と東側小口から0.4m部分にあり、幅約15cm、深さ5～10cm程度で、中央の窪みと周囲の平らな部分も切っている。木棺の小口板を設置する溝の可能性も考えられるが、小口板に伴う溝とすると木棺の長さが約1.26mと墓壙掘り方に比べ短く、また掘り方東側に寄っていることから木棺の底面を支える枕木の可能性を指摘する。

規模は長軸長約2.76m、短軸幅約1.12m（東小口部分約1.05m、西小口部分約1.15m）、深さ約0.52mを測る。また中央部の窪みは短軸幅約0.70m、深さ約0.10mを測る。長軸主軸方向はN－91°－Eとほぼ東西主軸を取り、土壙墓はちょうど丘陵等高線に並行している。

この土壙墓は土器棺墓STⅢ56を切っている。

STⅢ20（第75図）

STⅢ20は調査区中央部の南側斜面部、標高31.0mで検出した土壙墓である。平面形態は隅丸の長方形で、断面はU字状を呈する。

規模は長軸長約1.22m、短軸幅約0.71m、深さ約0.22mを測る。長軸主軸方向はN－66°－Eを取り、土壙墓は概ね丘陵等高線に並行している。

STⅢ21（第76図）

STⅢ21は調査区中央部の南側斜面部、標高29.9mで検出した土壙墓である。平面形態は隅丸の長方形で、北西隅部分が円形状に拡張している。別遺構との切り合いの可能性がある。墓壙底面は中央が隅丸長方形状に窪んでおり、その周囲に平坦面がある。この平坦面は西側小口で幅約40cmと広いが、それ以外では幅約15～20cmとほぼ一定している。この平坦面の南側西で幅約10～20cmの川原石を1石検出した。側壁側の川原石は中央部の断面U字状の窪みと合わせて考えると、底面U字状を呈する木棺をU字状の窪みに合わせ、側面から固定するために置かれたものと考えられる。その結果木棺の規模が推定でき、木棺断面が円形とすると幅約50cmを測る木棺と考えられる。

規模は長軸長約2.70m、短軸幅約1.33m、深さ約0.68mを測る。また中央部の窪みは長軸約1.80m、短軸幅約0.54m、深さ約0.14mを測る。長軸主軸方向はN－74°－Eとほぼ東西主軸を取り、土壙墓はちょうど丘陵等高線に並行している。

墓壙内中央部落ち込みの東側、土層③のほぼ床面に接した位置から鉄鎌（第76図126）が出土している。刃部が直線で、背部分は曲線状を呈している。

この鉄鏃の出土位置が土壙墓東側に位置することから頭位は東側と考える。

STⅢ22（第77図）

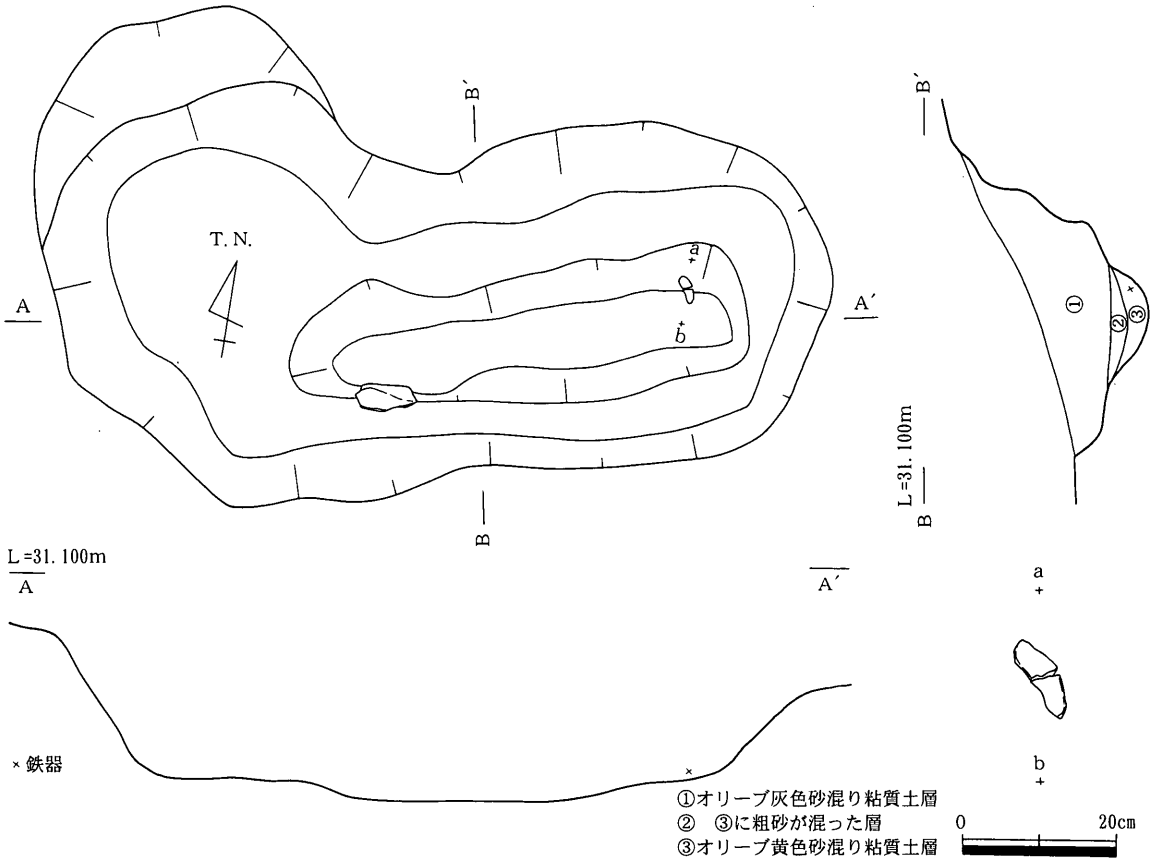
STⅢ22は調査区中央部の南側斜面部、標高32.0mで検出した土壙墓である。平面形態は隅丸の長方形で、断面はU字状を呈する。

規模は長軸長約1.43m、短軸幅約0.62m、深さ約0.33mを測る。長軸主軸方向はN－88°－Eとほぼ東西主軸を取り、土壙墓は概ね丘陵等高線に並行している。

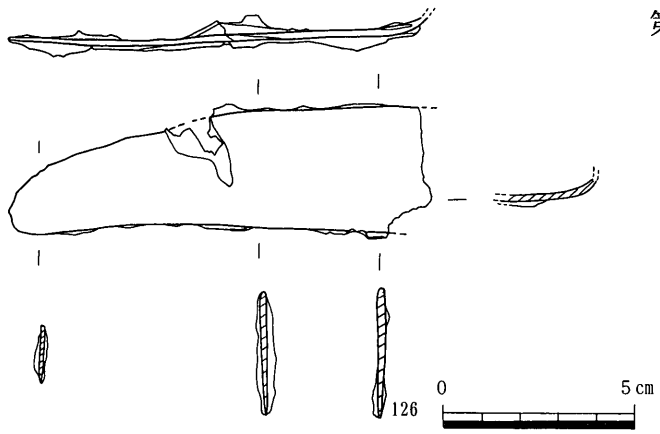
この土壙墓は土器棺墓STⅢ53を切っている。

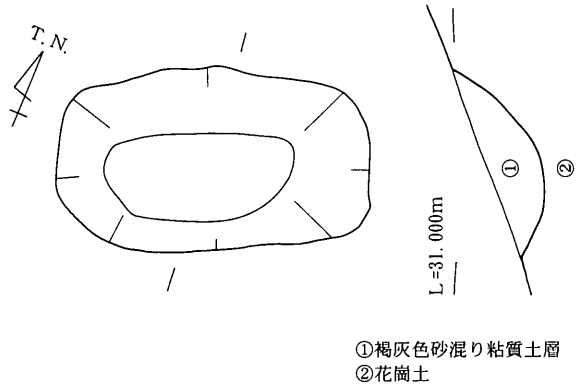
STⅢ23（第78図）

STⅢ23は調査区中央部の南側斜面部、標高31.6mで検出した土壙墓である。平面形態は隅丸の長方形である。土層断面で土層①を取り除くと墓壙内に木棺痕跡が確認できる。木棺痕跡は東西の小口板と南北の長側板の痕跡が、東西小口とも長側板が小口板に当たるような平面形状は「ロ」状を呈する。

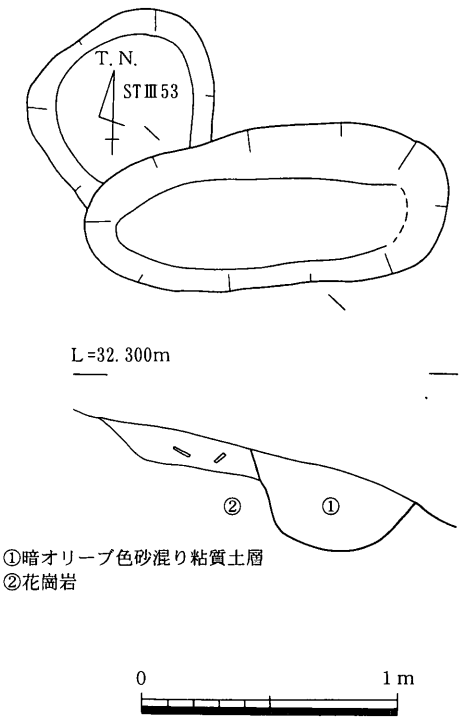


第76図　STⅢ21平・断面図(1/30)、
出土遺物実測図(1/2)

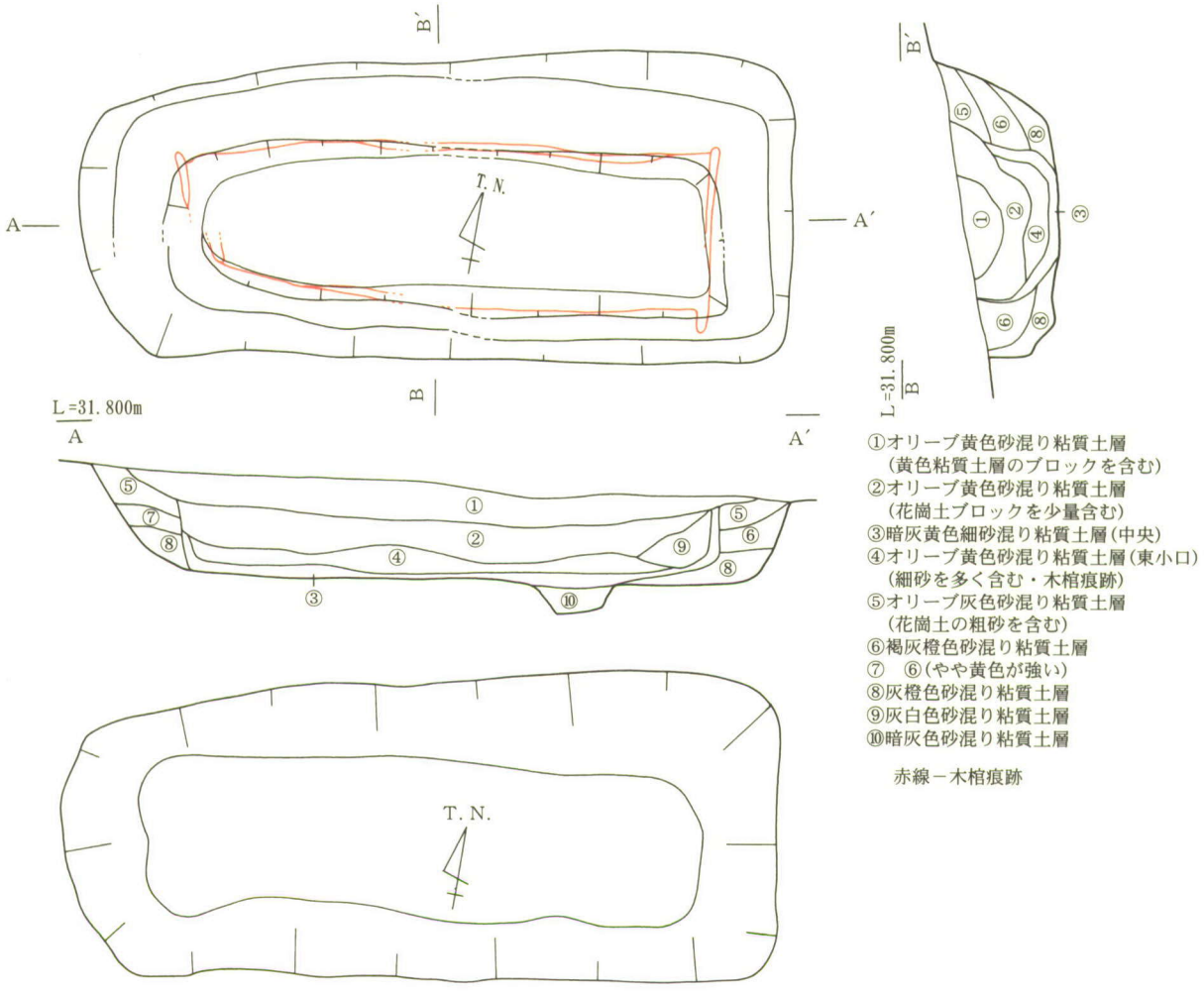




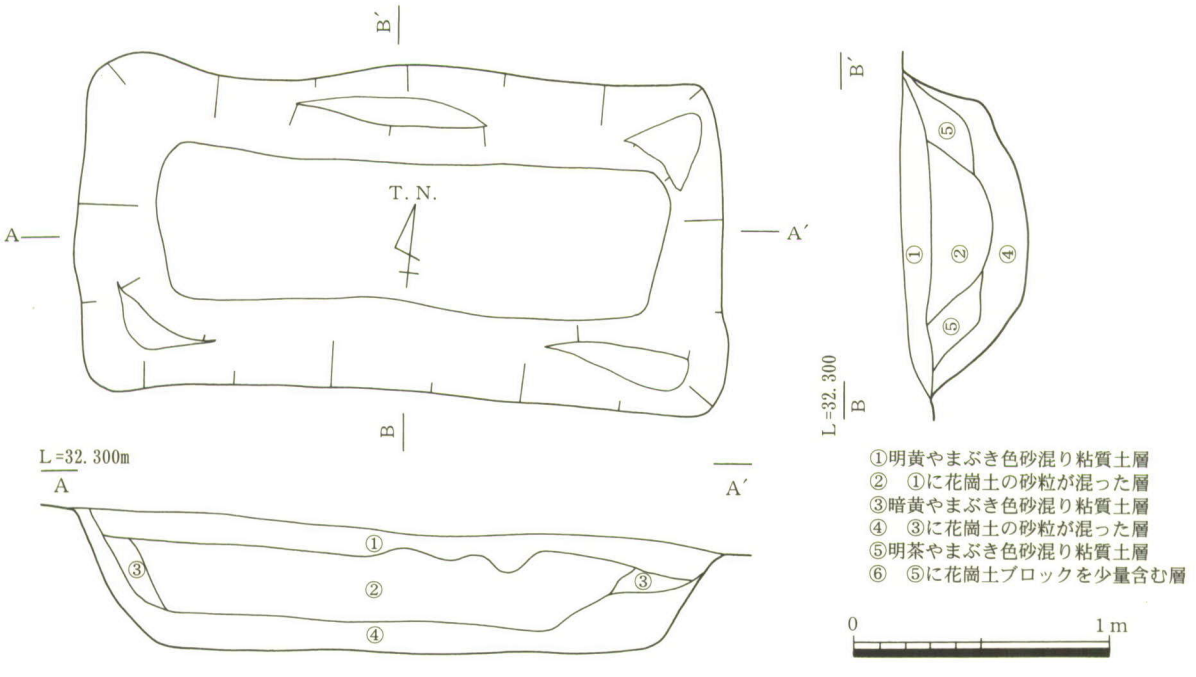
第75図　STⅢ20平・断面図(1/30)



第77図　STⅢ22平・断面図(1/30)



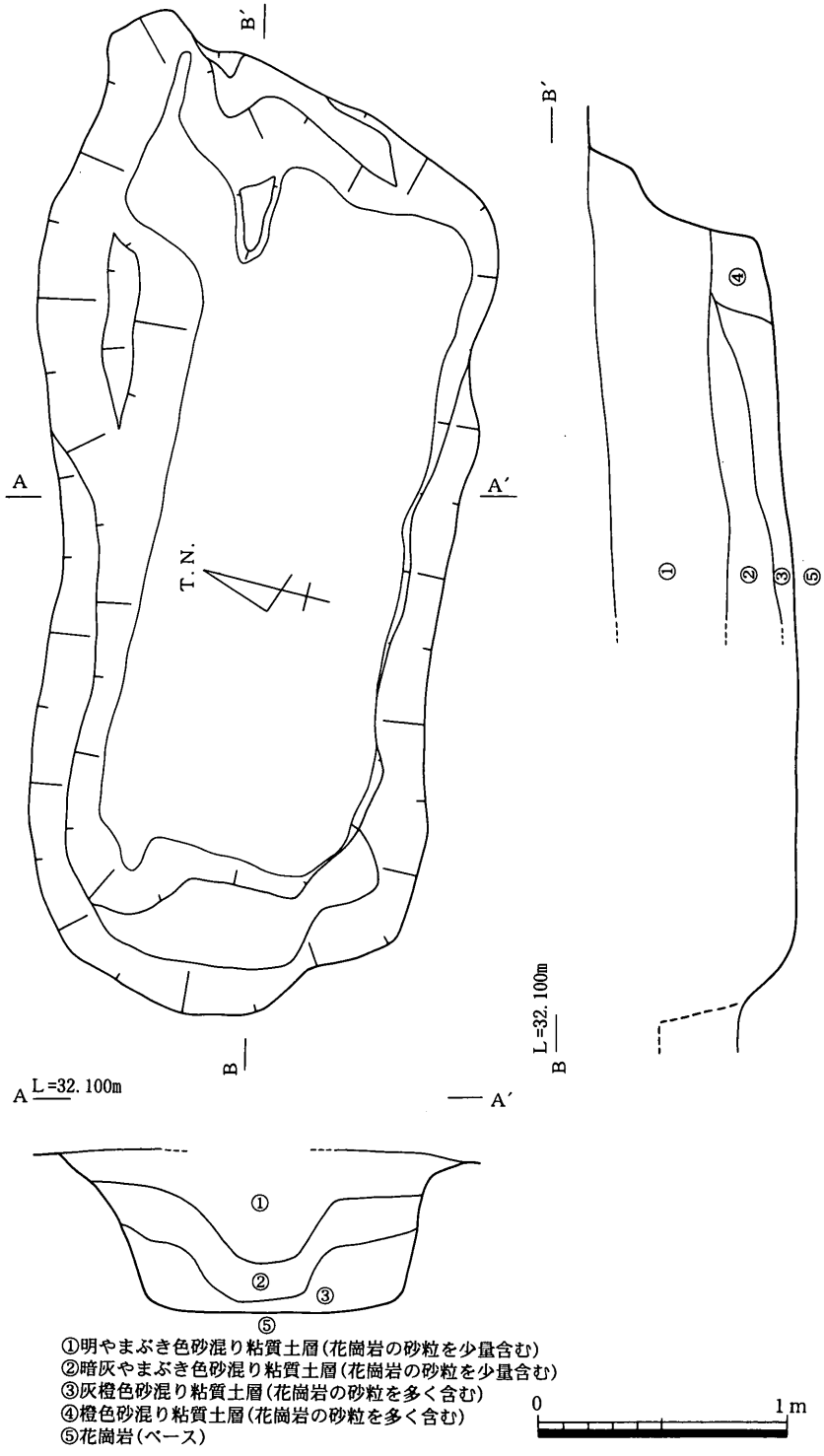
第78図　STⅢ23平・断面図(1/30)



第79図　STⅢ24平・断面図(1/30)

西側小口板は長さは不明であるが幅約2cm、東側小口板は長さ約0.73m、幅約2cmを測る。この木棺痕跡土層④は短軸土層断面でみると断面がU字状を呈しており、長軸土層断面でみると箱状を呈し、土質的には細砂質で棺身と小口板は同じであるが、小口部分ではオリーブ色が強いことから分離が可能である。土層断面から土層①～③は棺腐朽時に棺内に埋没した土層で、土層④が棺痕跡、土層⑤～⑧は棺を固定するための裏込め土である。この棺痕跡から棺身長は約2.10m、幅約0.6mを測る。

規模は長軸長約2.82m、短軸幅約1.15m、深さ約0.40mを測る。長軸主軸方向はN－83°－Eとほぼ



第80図　STⅢ25平・断面図(1/30)

東西主軸を取り、土壙墓は丘陵稜線に並行している。

STⅢ24（第79図）

STⅢ24は調査区中央頂部、標高32.2mで検出した土壙墓である。平面形態は長方形で、断面は緩やかに上部が開くU字状を呈する。土層断面から土層④が墓壙底面に敷いた土で、その上部をU字状に窪ませ棺身を置いたものと考えられる。土層②は棺が腐朽した後、埋没した土層と考えられ、長さ約1.90m、幅約0.7mを測る木棺と考えられる。

墓壙の規模は長軸長約2.53m、短軸幅約1.25m、深さ約0.49mを測る。長軸主軸方向はN－87°－Eとほぼ東西主軸を取り、土壙墓は丘陵稜線に並行している。

STⅢ25（第80図）

STⅢ25は調査区中央頂部、標高32.0mで検出した土壙墓で、土壙墓群中最大のものである。平面形態は隅丸長方形で、断面は箱形を呈する。土層断面から土層③が墓壙底面に敷いた土で、その上部をU字状に窪ませ棺身を置いたものと考えられる。土層①・②は棺が腐朽した後、埋没した土層と考えられる。

墓壙の平面形態は隅丸長方形を呈するが、西側小口部分の壁面に溝状の突出部が確認できる。おそらく箱形木棺の長側板を差し込むための溝と考えられる。

規模は長軸長約2.53m、短軸幅約1.25m、深さ約0.49mを測る。また墓壙底面規模は長軸長約2.63m、短軸幅約0.98mを測るかなり大型の箱形木棺と考えられる。長軸主軸方向はN－89°－Eとほぼ東西主軸を取り、土壙墓は丘陵稜線に並行している。

STⅢ26（第81図）

STⅢ26は調査区中央頂部、標高32.2mで検出した土壙墓である。平面形態は隅丸の長方形で、南側で土壙墓STⅢ27、土器棺墓STⅢ52を切っている。墓壙底面は中央が隅丸長方形状に窪んでおり、北側と南側に平らな部分があり、幅約10～15cmを測る。中央部の窪みは棺身底面に合わせて掘られているものと考えられることから棺は底面がU字状を呈するものと考えられる。

規模は長軸長約2.94m、短軸幅約1.51m、深さ約1.24mを測る。また中央部の窪みは長軸約2.26m、短軸幅約0.53m、深さ約0.04mを測る。長軸主軸方向はN－94°－Eとほぼ東西主軸を取り、土壙墓は丘陵稜線に並行している。

土壙内から壺の体部（第81図127）が出土している。

STⅢ27（第82図）

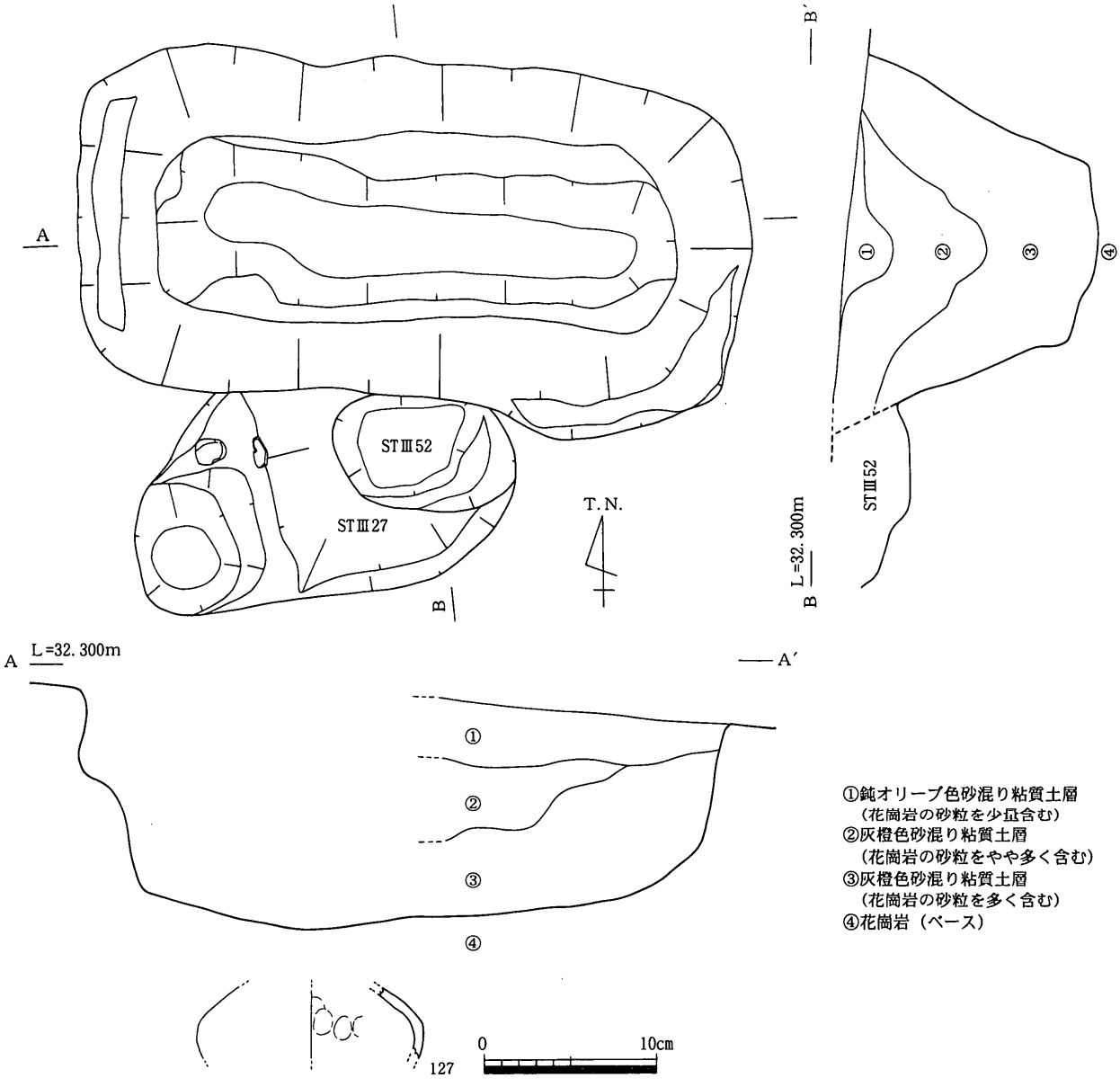
STⅢ27は調査区中央頂部、標高32.1mで検出した土壙墓である。北側をSTⅢ26、東側をSTⅢ52によって切られているが、平面形態は歪な楕円形状を呈するもので、断面は箱形を呈する。西側小口と考えられる部分には円形状の落ち込みが確認できる。墓壙の規模は長軸長約1.70m、深さ約0.12mを測る。長軸主軸方向はN－72°－Eとほぼ東西主軸を取り、土壙墓は概ね丘陵稜線に並行している。

ここでは土壙墓としたが、平面形態や底面の凹凸から土壙墓の可能性は低い。

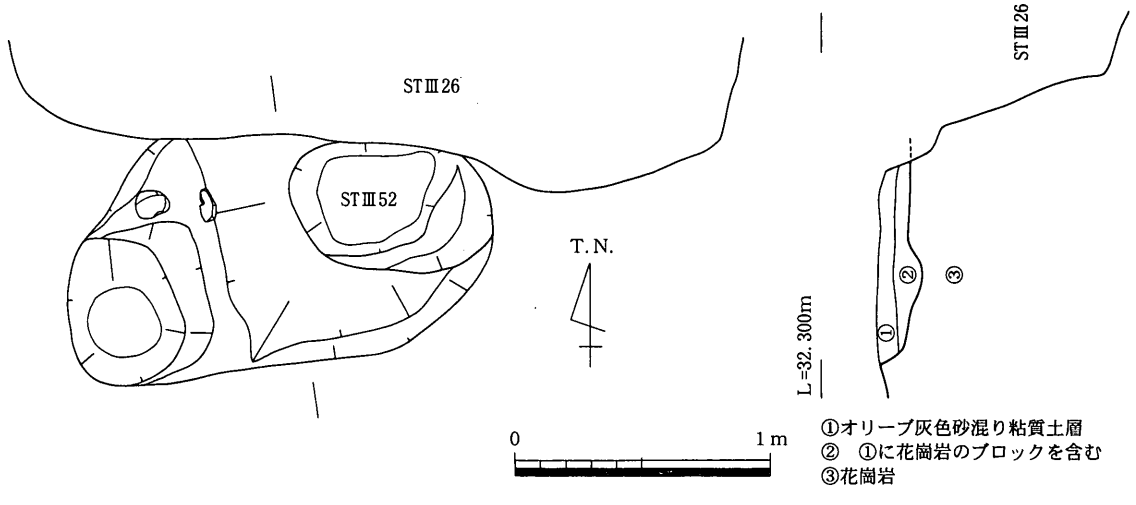
STⅢ28（第83図）

STⅢ28は調査区中央頂部、標高31.9mで検出した土壙墓である。東側小口部分が削平されているが、平面形態は隅丸の長方形を呈するもので、断面は緩やかに上部が開くU字状を呈する。

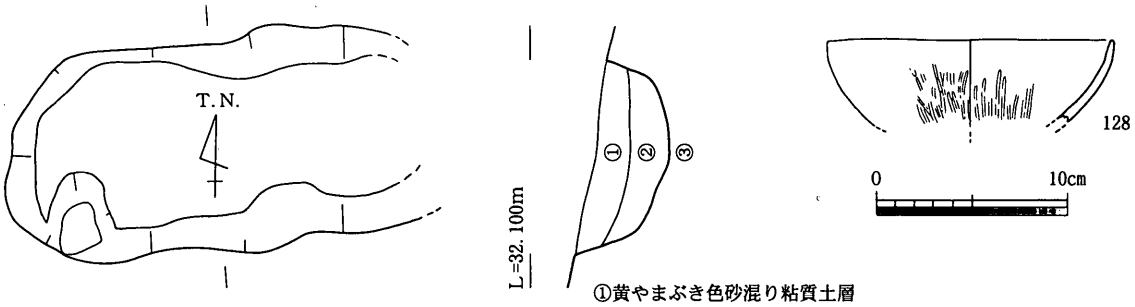
規模は長軸現存長約1.61m、短軸幅約0.82m、深さ約0.28mを測る。長軸主軸方向はN－83°－Eとほぼ東西主軸を取り、土壙墓は概ね丘陵稜線に並行している。



第81図　STⅢ26平・断面図(1/30)、出土遺物実測図(1/4)

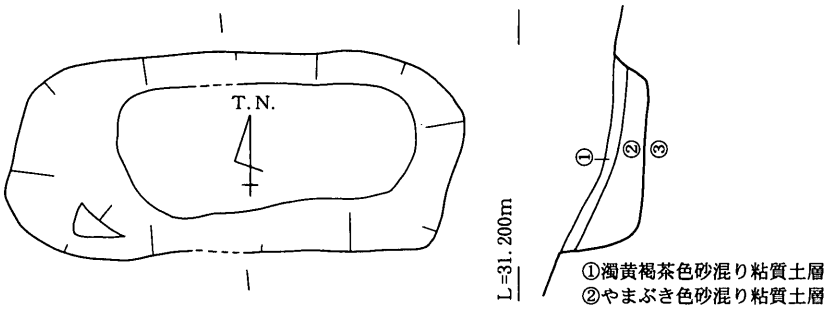


第82図　STⅢ27平・断面図(1/30)



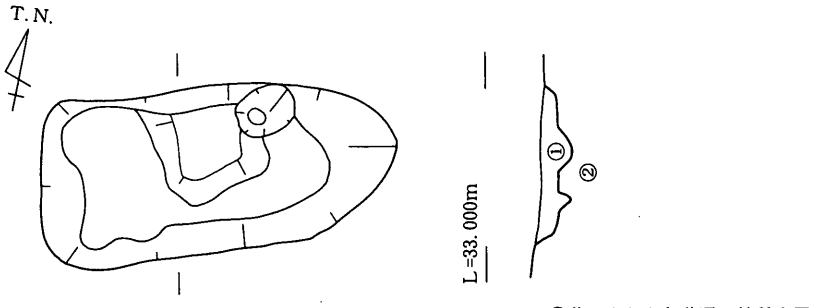
①黄やまぶき色砂混り粘質土層
②　①に花崗岩の粒を多く含む
③　花崗岩

第83図　STⅢ28平・断面図(1/30)、
出土遺物実測図(1/4)



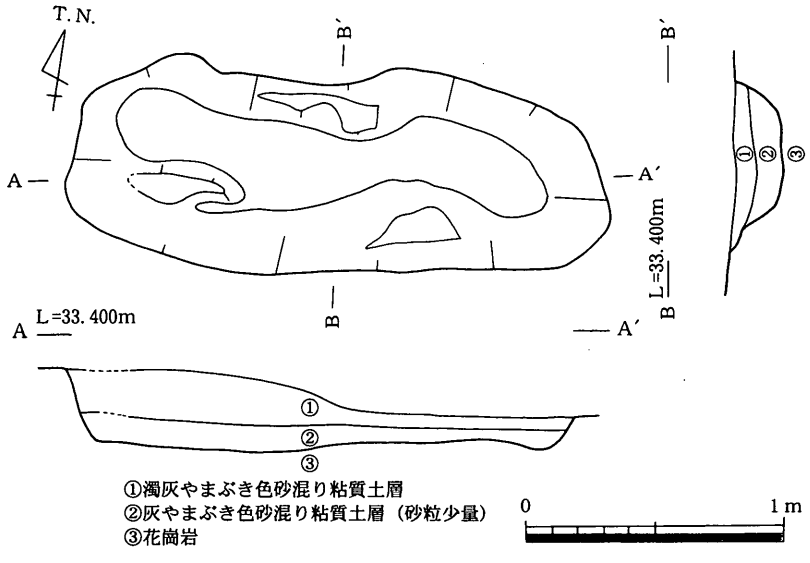
①濁黄褐茶色砂混り粘質土層
②やまぶき色砂混り粘質土層
③黄橙色混り粘質土層
(花崗岩の砂粒を多く含む)

第84図　STⅢ29平・断面図(1/30)



①黄やまぶき色砂混り粘質土層
②花崗岩

第85図　STⅢ30平・断面図(1/30)



①濁灰やまぶき色砂混り粘質土層
②灰やまぶき色砂混り粘質土層（砂粒少量）
③花崗岩

第86図　STⅢ31平・断面図(1/30)

土壙墓内から鉢（第83図128）が出土しており、内外面にヘラ磨きが顕著に認められる。

STⅢ29（第84図）

STⅢ29は調査区南部北側斜面、標高31.0mで検出した土壙墓である。平面形態は隅丸の長方形を呈するもので、断面は上部が開く箱形を呈する。

規模は長軸長約1.75m、短軸幅約0.77m、深さ約0.34mを測る。長軸主軸方向はN－88°－Eとほぼ東西主軸を取り、土壙墓は概ね丘陵等高線に並行している。

STⅢ30（第85図）

STⅢ30は調査区南部の丘陵頂部、標高32.8mで検出した土壙墓である。平面形態は隅丸の長方形を呈するもので、断面は墓壙底部に凹凸があるが、箱形を呈する。

規模は長軸長約1.40m、短軸幅約0.65m、深さ約0.06mを測る。長軸主軸方向はN－73°－Eとほぼ東西主軸を取り、土壙墓は丘陵稜線に並行している。

STⅢ31（第86図）

STⅢ31は調査区南部の丘陵頂部、標高33.2mで検出した土壙墓である。平面形態は歪な長方形を呈するもので、断面は上部が開く箱形を呈する。

規模は長軸長約2.09m、短軸幅約0.74m、深さ約0.19mを測る。長軸主軸方向はN－87°－Eとほぼ東西主軸を取り、土壙墓は丘陵稜線に並行している。

STⅢ32（第87図）

STⅢ32は調査区南部の丘陵頂部、標高33.4mで検出した土壙墓である。平面形態は歪な長方形を呈するもので、断面は上部が開くU字状を呈する。底面は西側がやや深くなっている。

規模は長軸長約1.94m、短軸幅約0.69m、深さ約0.28mを測る。長軸主軸方向はN－72°－Eとほぼ東西主軸を取り、土壙墓は丘陵稜線に並行している。

STⅢ33（第88図）

STⅢ33は調査区南部の南側斜面、標高33.1mで検出した土壙墓である。STⅢ34の北側に近接し、並列している。土層断面で土層①・②がU字状に窪むことから、棺身底面がU字状を呈する木棺の痕跡と考えられ、木棺断面が円形とすると幅約42cmを測る木棺と考えられる。土壙墓西側には10cm程度の川原石が散乱している。平面形態は隅丸の長方形を呈するもので、断面は箱形を呈する。

規模は長軸長約2.38m、短軸幅約1.03m、深さ約0.20mを測る。長軸主軸方向はN－56°－Eを取り、土壙墓はちょうど丘陵等高線に並行している。

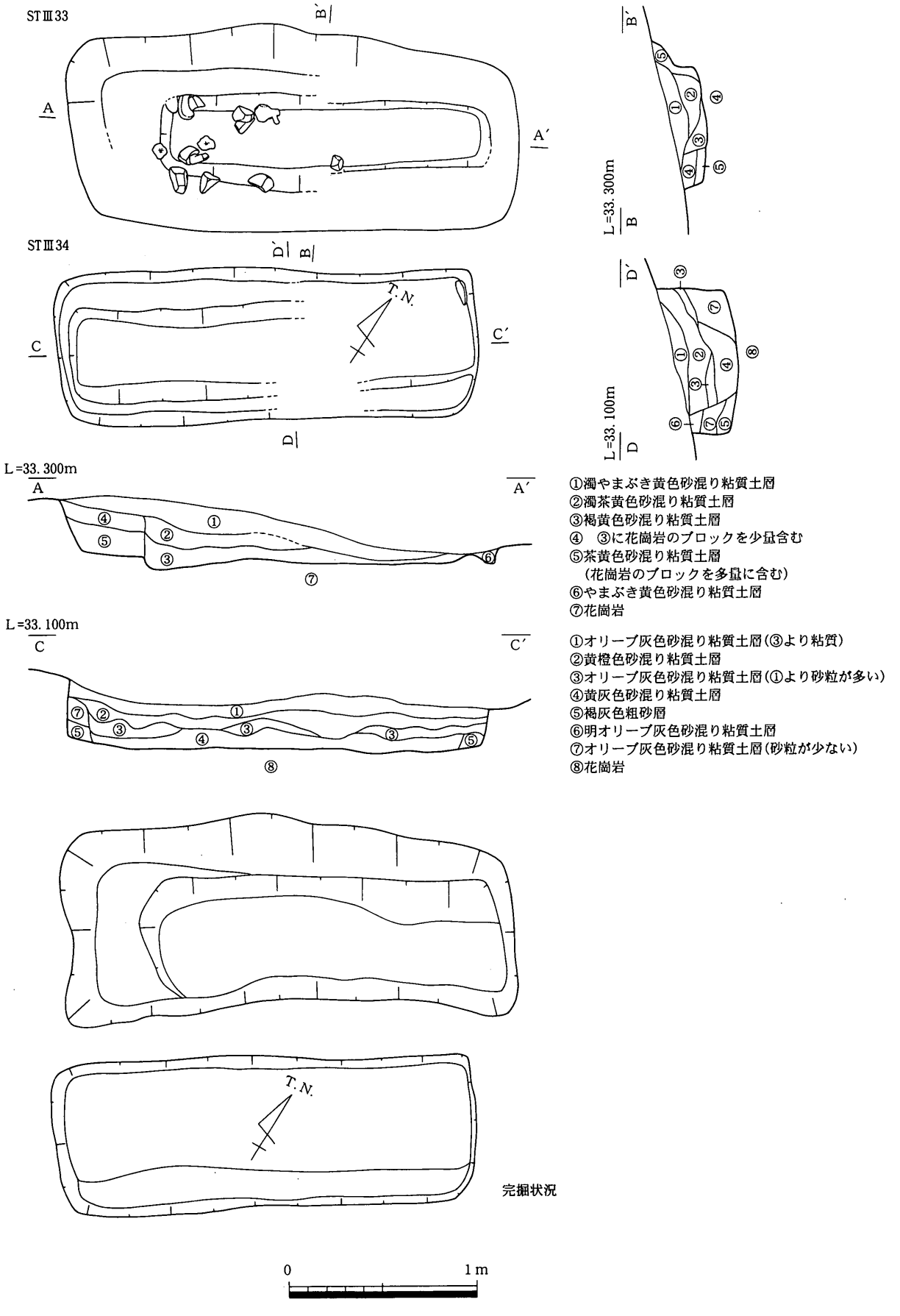
STⅢ34（第88図）

STⅢ34は調査区南部の南側斜面、標高32.9mで検出した土壙墓である。STⅢ33の南側に近接し、並列している。土層断面で土層④がU字状に窪むことから、棺身底面がU字状を呈する木棺の痕跡と考えられ、木棺断面が円形とすると幅約50cmを測る木棺と考えられる。平面形態は長方形を呈するもので、断面は箱形を呈する。

規模は長軸長約2.24m、短軸幅約0.79m、深さ約0.34mを測る。長軸主軸方向はN－54°－Eを取り、土壙墓はちょうど丘陵等高線に並行している。

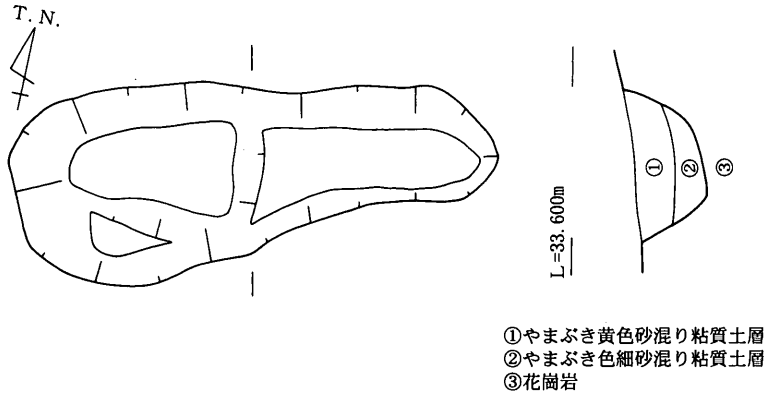
STⅢ35（第89図）

STⅢ35は調査区南部の南側斜面、標高31.2mで検出した土壙墓である。平面形態は長方形を呈するもので、断面は箱形を呈する。

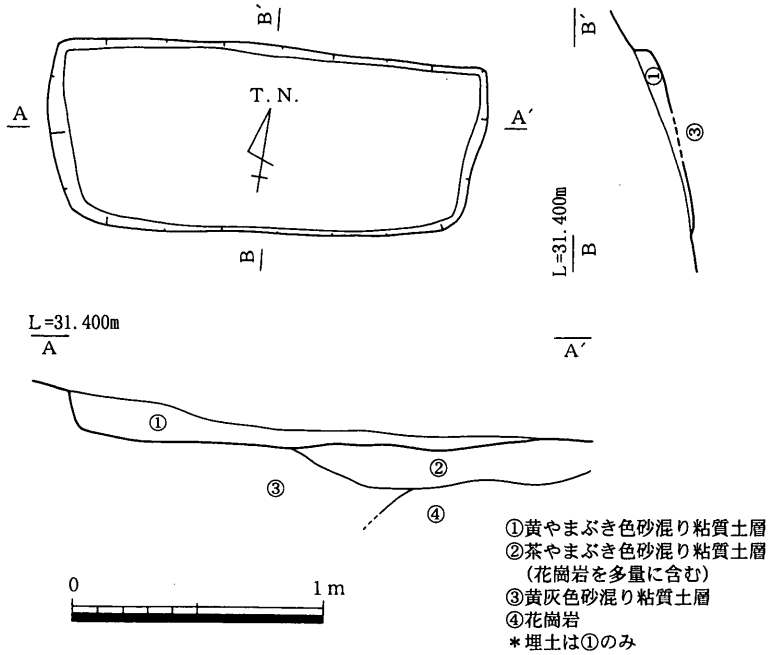


第88図　STⅢ33・STⅢ34平・断面図(1/30)

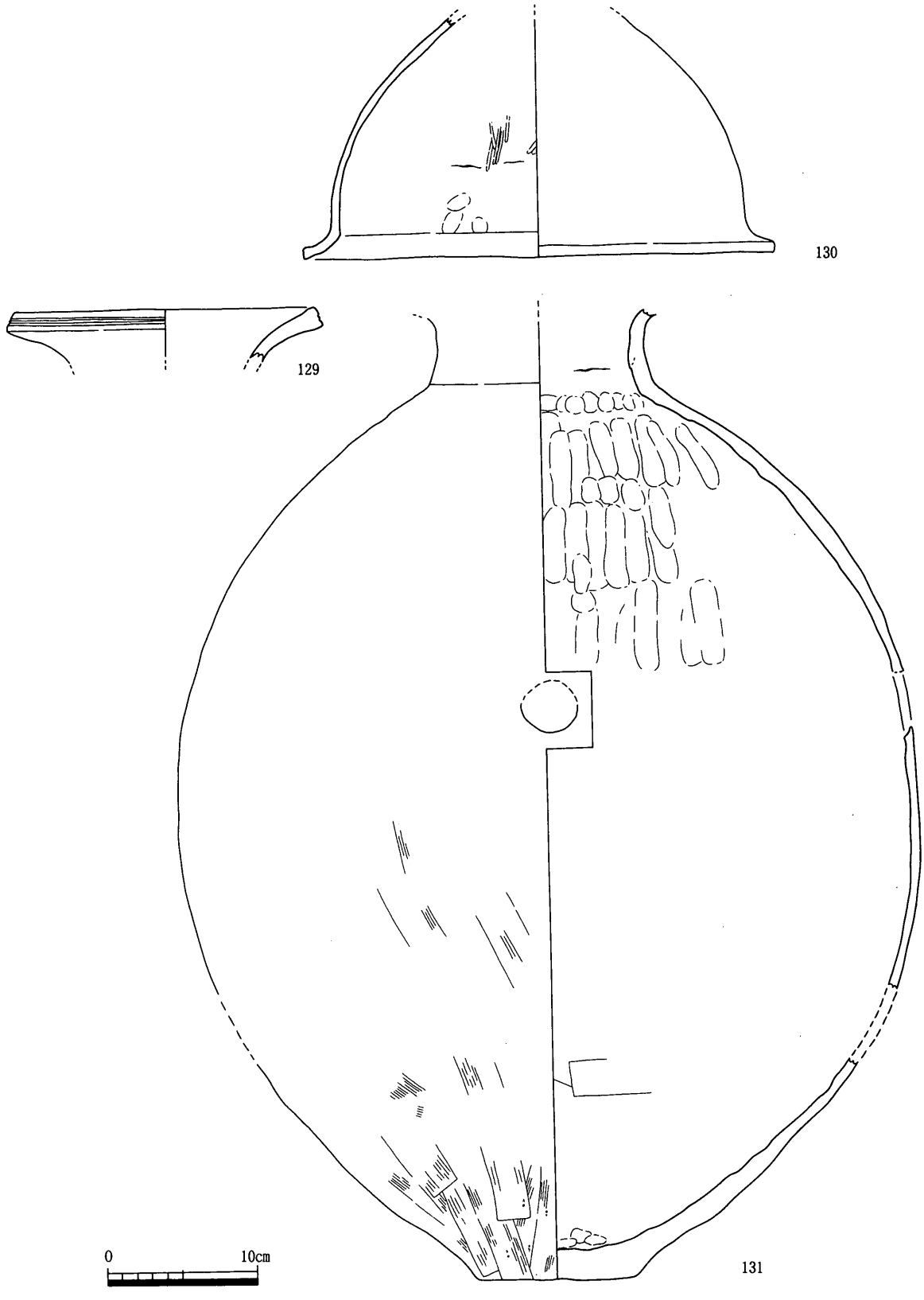
規模は長軸長約1.73m、短軸幅約0.73m、深さ約0.15mを測る。長軸主軸方向はN－84°－Eを取り、土壙墓はちょうど丘陵等高線に並行している。



第87図　STⅢ32平・断面図(1/30)



第89図　STⅢ35平・断面図(1/30)



第90図　STⅢ36出土遺物実測図(1/4)

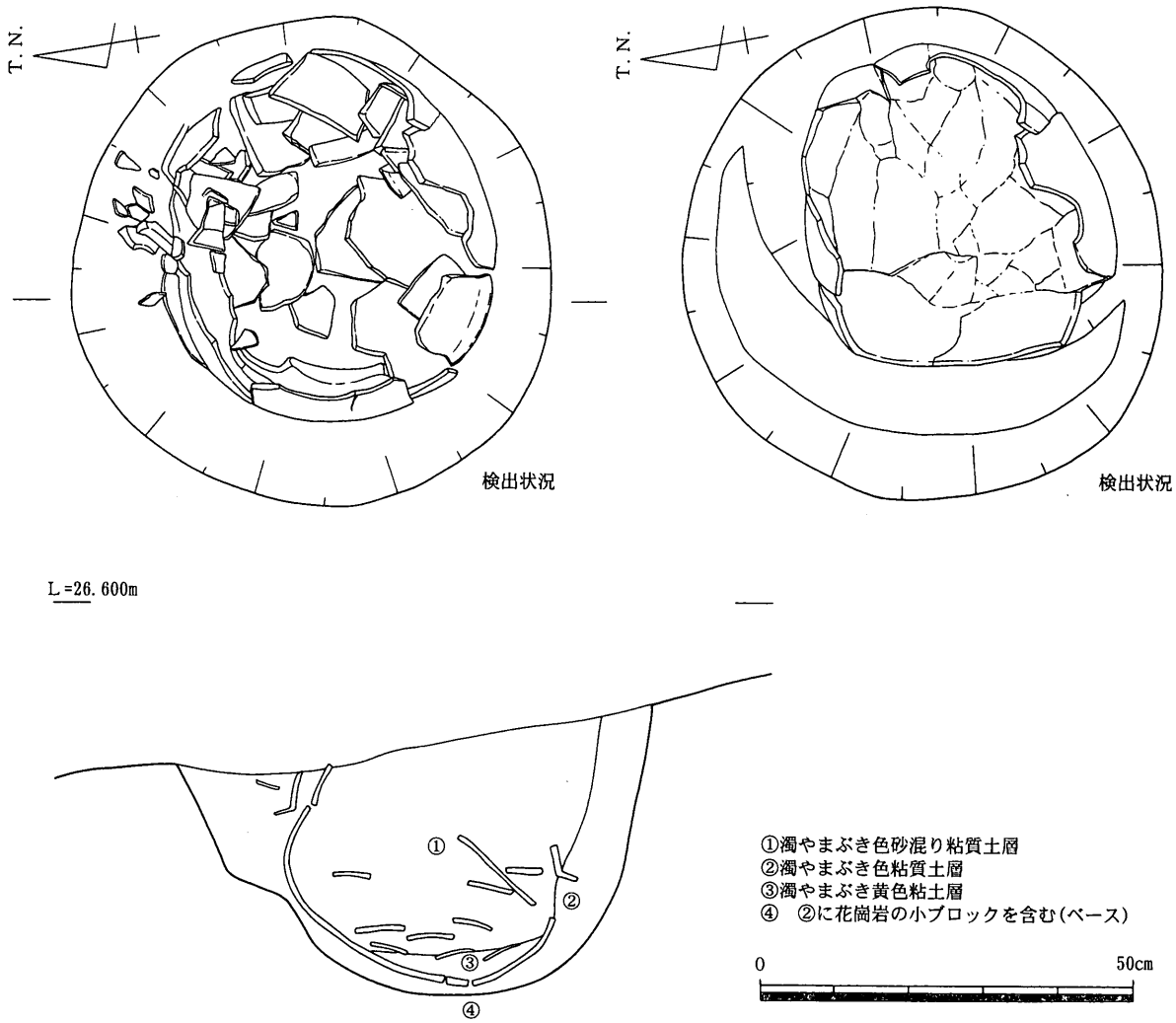
③土器棺墓

土器棺墓は南丘陵ほぼ全域において検出しているが、特に丘陵北東先端部に８基が集中していることが解る。これら以外はある程度の間隔があいているが、屈曲部から南側で検出した土器棺墓STⅢ52～56はその配置が何かを中心に弧状に配置されているようにも見える。

STⅢ36（第90図）

STⅢ36は南丘陵先端部、北方向に延び稜線上からやや降った部分、標高26.54mで検出した土器棺墓で、明確な遺構は検出していないがかなり土器が纏まって出土した。この部分は後世の畑地化により削平を受け、段々畑状になっており、その縁部から出土しているために原位置を保っていない可能性はある。

131は壺で底部に明瞭な平底を持ち、体部は内湾しながら延び、頸部は直線的に上方に延び、口縁部は外反する。体部最大径はほぼ中央部にあり、やや胴長の壺である。体部外面下位に縦方向の板ナデが、内面は上位に縦方向の指ナデが施されている。体部ほぼ中央部に穿孔が認められる。129は131の口縁部と考えられ、端部がやや肥厚し、外面には僅かに沈線が施されている。130は鉢で内湾する体部から口縁部は外方に屈曲する。壺とセットになるものと考えられる。



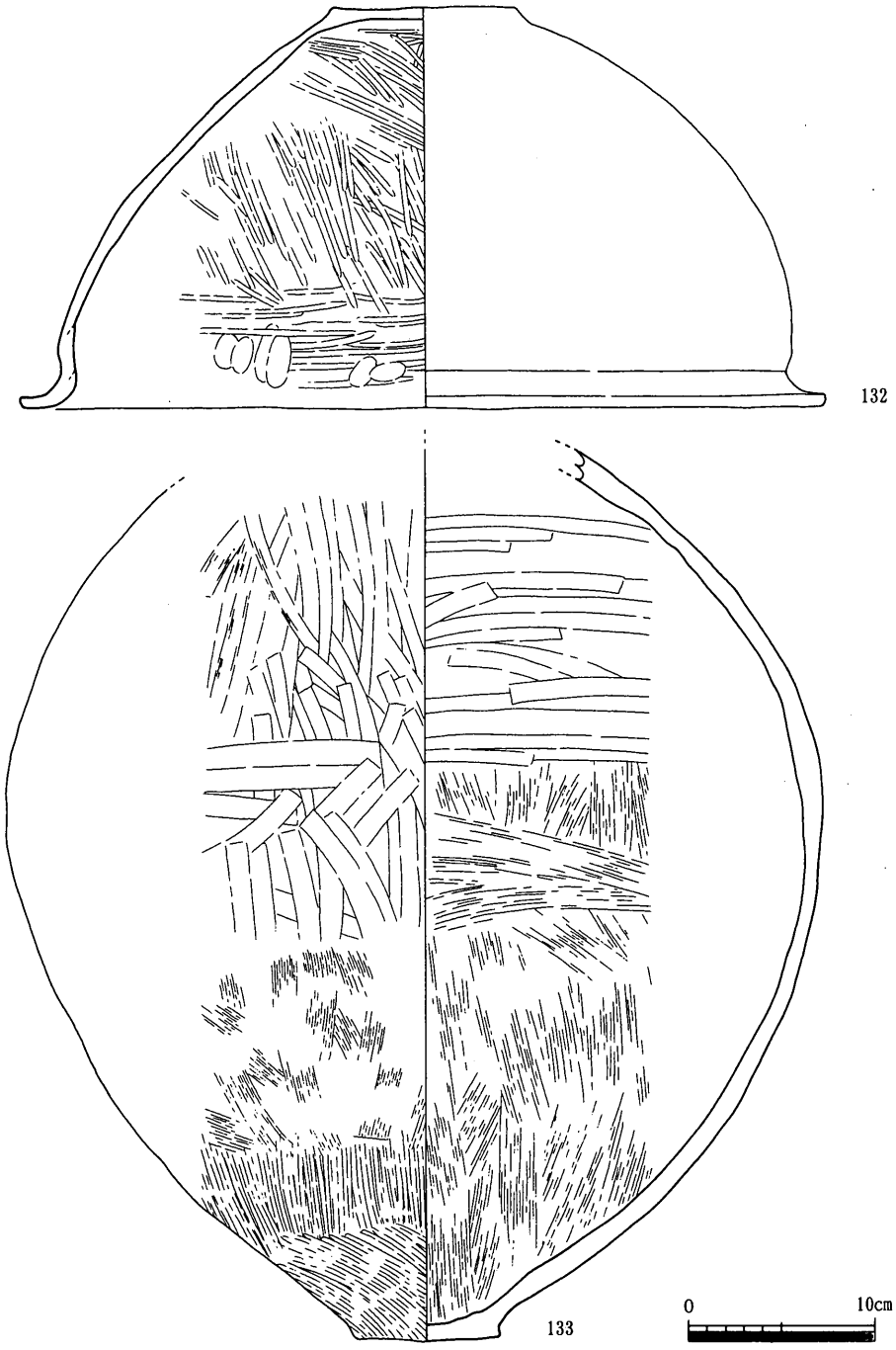
第91図　STⅢ37平・断面図(1/10)

STⅢ37（第91・92図）

STⅢ37は南丘陵先端部、標高26.4mで検出した土器棺墓で、上部が削平され、下部しか残存していない。

墓壙平面形態は直径約0.64mの歪な円形を呈し、断面から中央がU字状に窪み、深さは約0.34mを測る。底面は西側が２段になり、ちょうど棺身底部をこの段の部分に置き、体部を底面にして設置されている。したがって棺身（壺）底部は北西方向に、口縁部は南東方向に向き、この方向は白鳥・湊川上流方向である。棺身角度は約13°を測る。土層断面でみると棺身底面と土壙底面の間に土層③があることから土器棺埋納時と同時に埋め戻されていることが解る。

133は壺で底部に明瞭な平底を持ち、体部は内湾しながら延びる。体部最大径は中位よりやや上方に



第92図　STⅢ37出土遺物実測図(1/4)

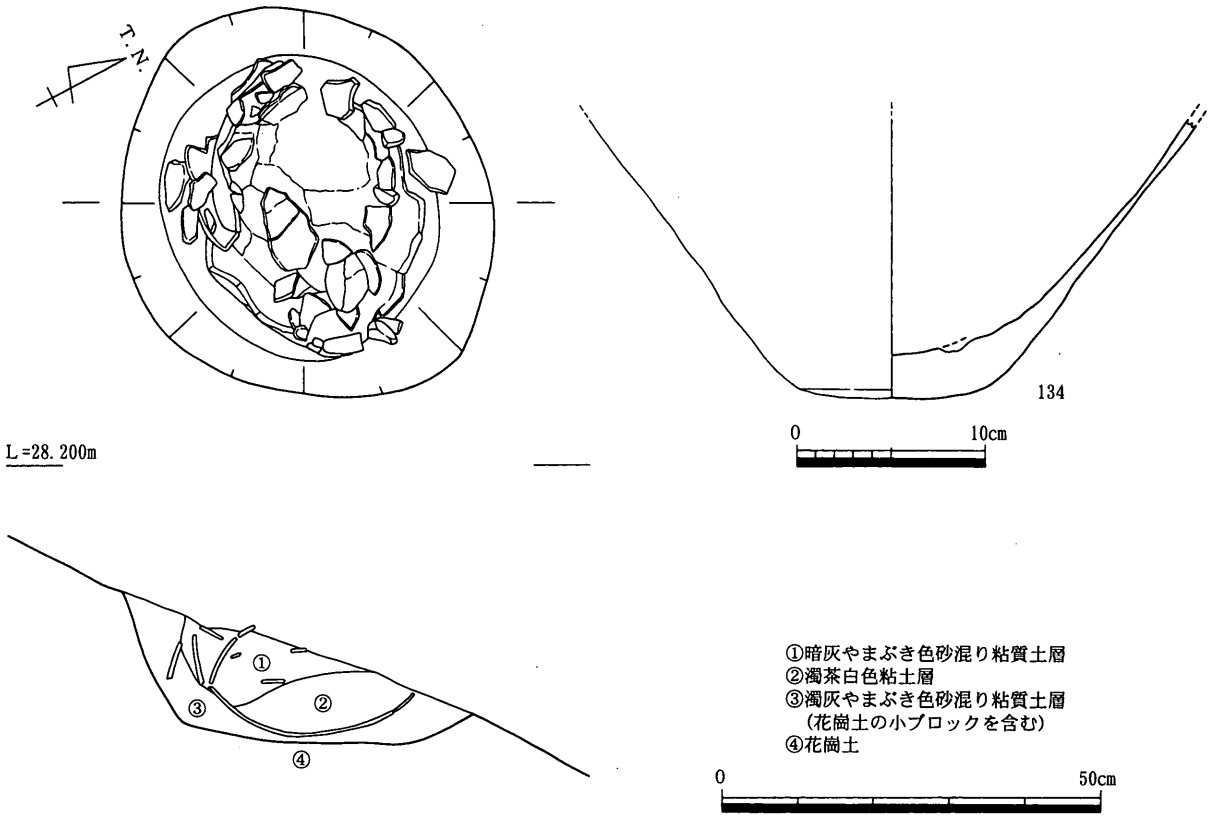
ある。頸部での打ち欠きは1/3程度体部上半まで及んでいる。体部外面には底部際に斜め方向のヘラ磨きが、下位に縦方向の刷毛目が、上位には主として縦方向の板ナデが施されている。内面は下位から中位にかけて縦方向の刷毛目が、上位は横方向の板ナデが施されている。132は鉢で底部にしっかりした平底を持ち、体部は内湾気味に延び、口縁部は外反する。体部内面にヘラ磨きが施されている。

STⅢ38（第93図）

STⅢ38は南丘陵先端部東、標高28.0mで検出した土器棺墓で、上部がかなり削平され、下部しか残存していない。このSTⅢ38も含めてSTⅢ38～43は南丘陵の先端東の部分にかなり近接して集中している。

墓壙平面形態は直径約0.50mの歪な円形を呈し、土層断面から底面が平らなU字状を呈し、深さは約0.13mを測る。土層断面でみると棺身底面と土壙底面の間に土層③があることから土器棺埋納時と同時に埋め戻されていることが解る。

134は壺の下半部で、底部に明瞭な平底を持ち、体部は直線的に外上方に延びる。



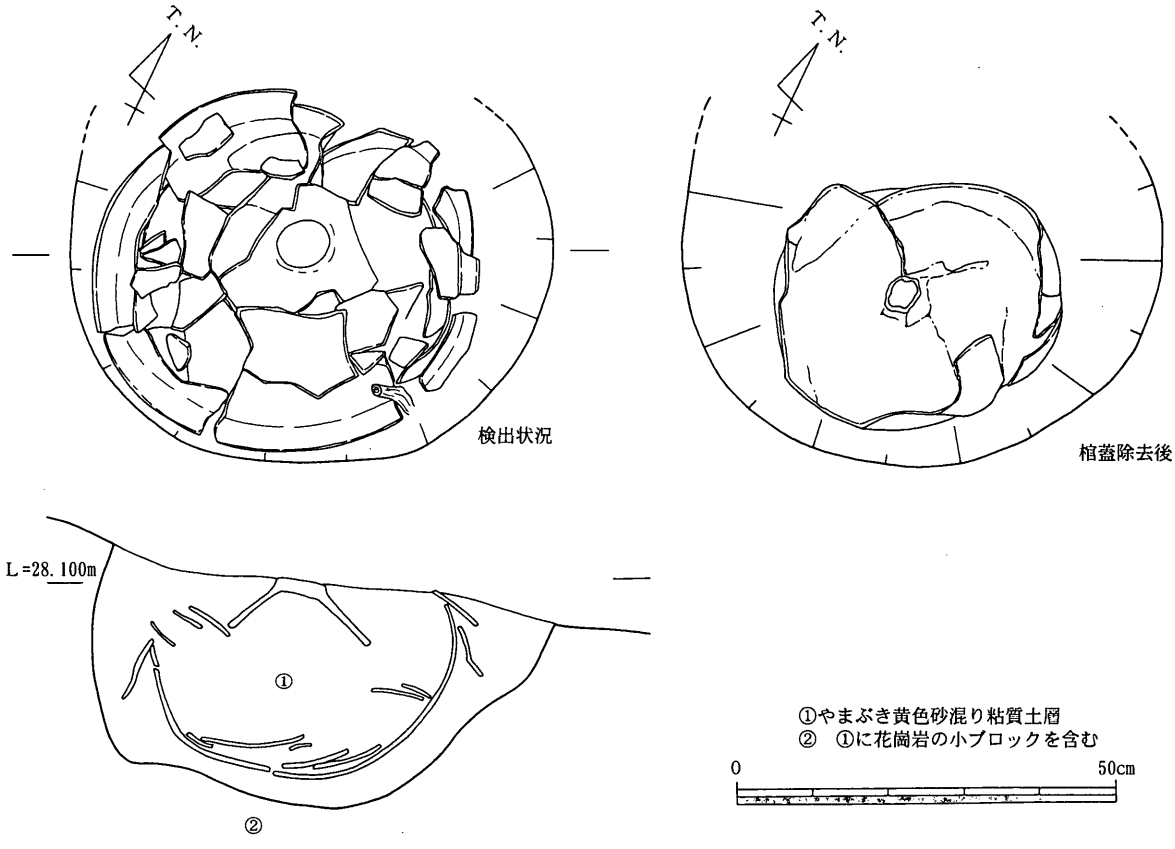
第93図　STⅢ38平・断面図(1/10)、出土遺物実測図(1/4)

STⅢ39（第94・95図）

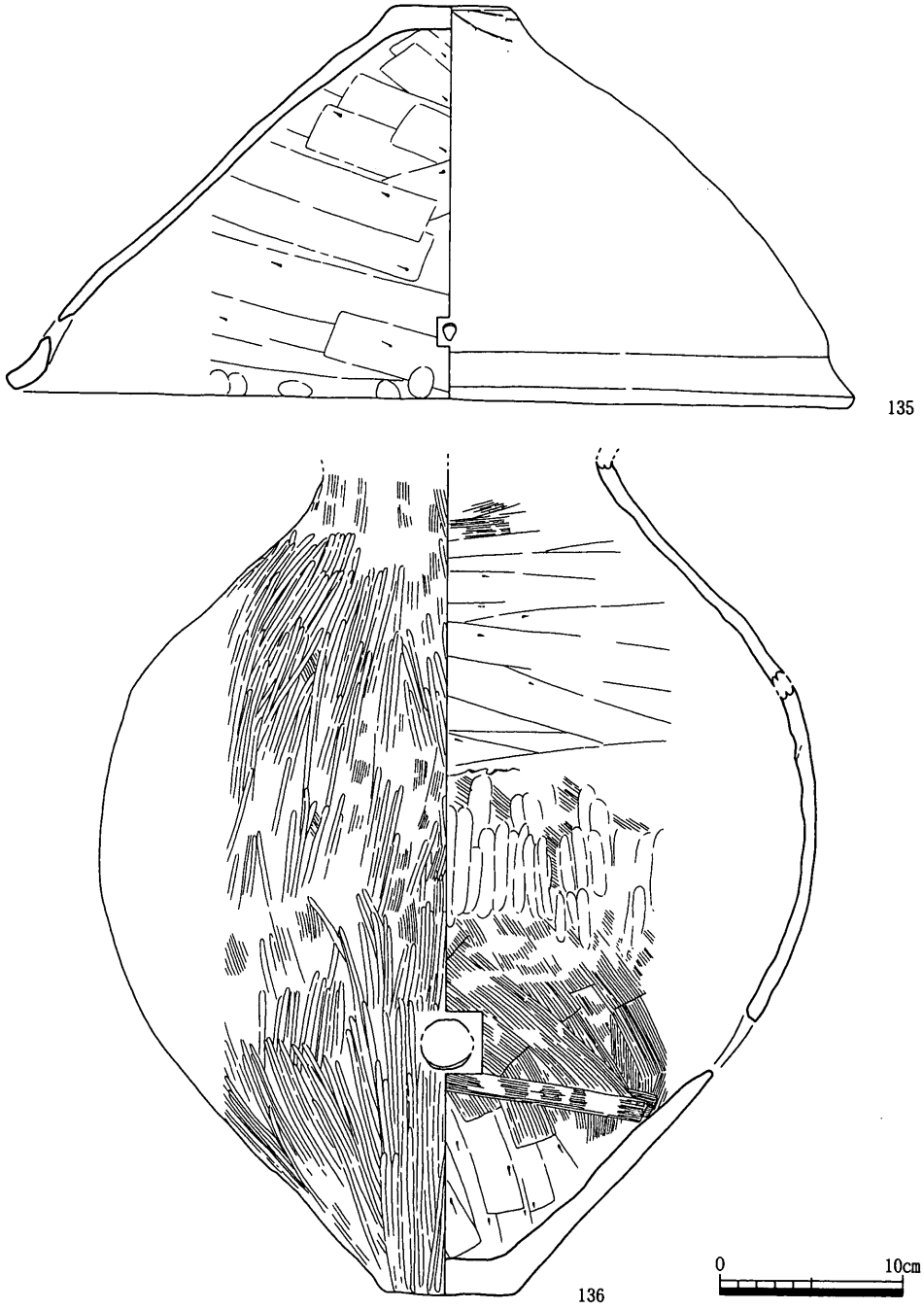
STⅢ39は南丘陵先端部東、標高28.1mで検出した土器棺墓で、掘り方上部は削平されていると考えられるが、棺身・棺蓋の残存状況は良好である。

墓壙平面形態は北側が一部削平されているが、直径約0.64mの歪な円形を呈し、断面から中央がU字状に窪み、深さは約0.30mを測る。底面は南西側と北東側が2段になり、ちょうど棺身底部と棺身上位をこの段の部分に置き、棺身角度を約43°傾斜させ、設置されている。棺身（壺）底部は南西方向に、口縁部は北東方向に向き、この方向は北丘陵方向である。土層断面でみると棺身底面と土壙底面の間に堆積土があることから土器棺埋納時と同時に埋め戻されていることが解る。

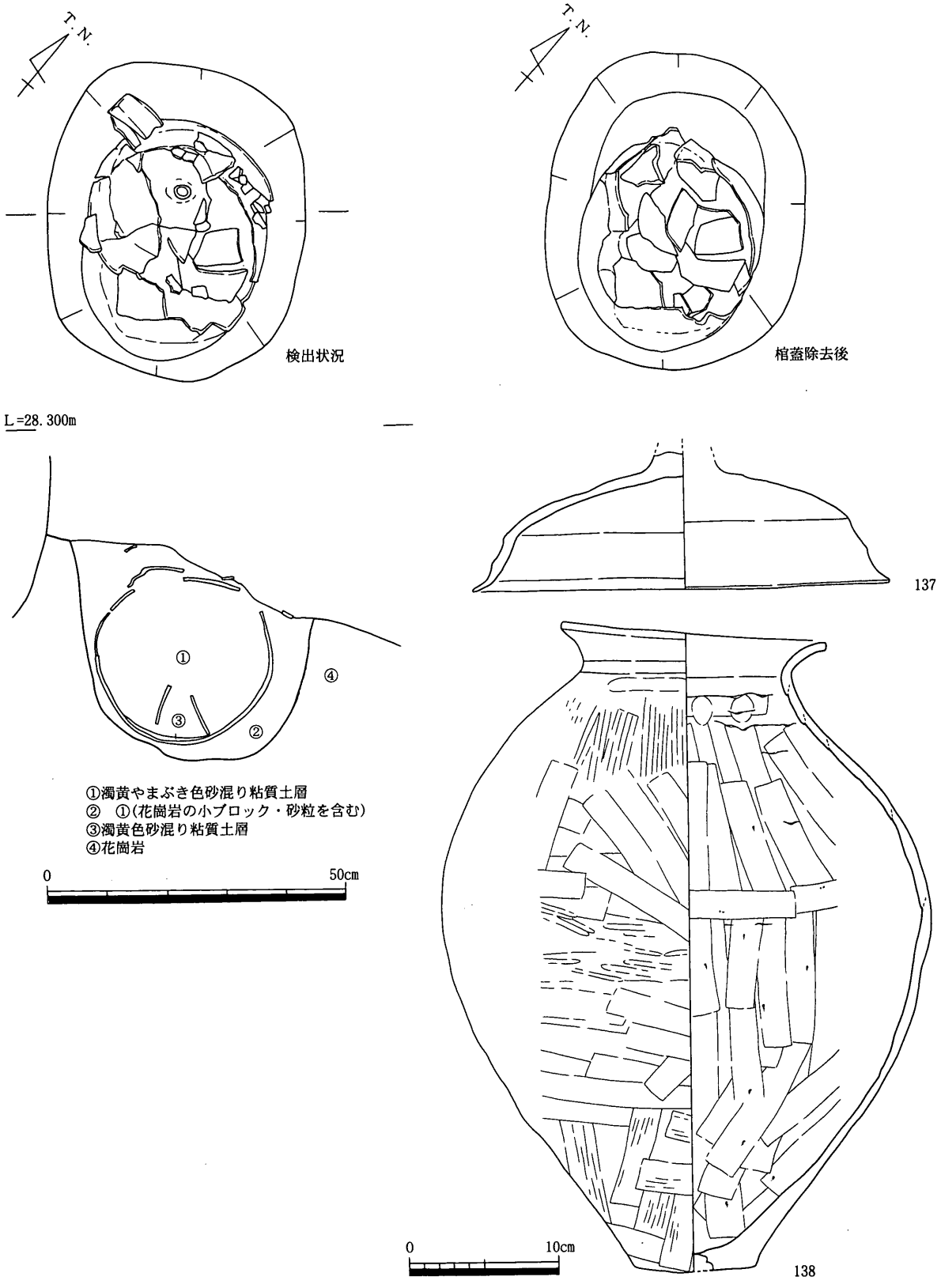
136は壺で底部に明瞭な平底を持ち、体部は内湾しながら延びる。体部最大径はほぼ中位にあり、頸部で打ち欠きされている。体部外面には縦方向の刷毛目の後、縦方向のヘラ磨きが密に施されている。内面は下位にヘラ削りが、中位に斜め方向の刷毛目が、上位は横方向のヘラ削りが施されている。体部中央下位に穿孔が認められ、検出時ではこの穿孔を底面としていた。135は鉢で、棺身の壺に比べるとかなり大型のものである。底部にしっかりした平底を持ち、体部は直線気味に延び、口縁部は外反する。体部内面に横方向のヘラ削りが施されている。口縁部の屈曲部分に1cm程度の穿孔が認められる。



第94図　STⅢ39平・断面図(1/10)



第95図　STⅢ39出土遺物実測図(1/4)



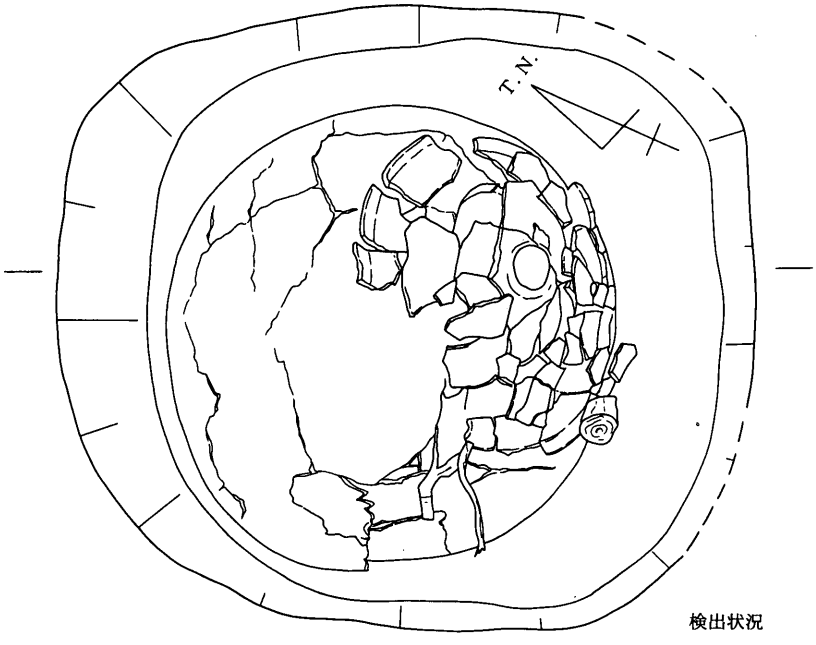
第96図　STⅢ40平・断面図(1/10)、出土遺物実測図(1/4)

STⅢ40（第96図）

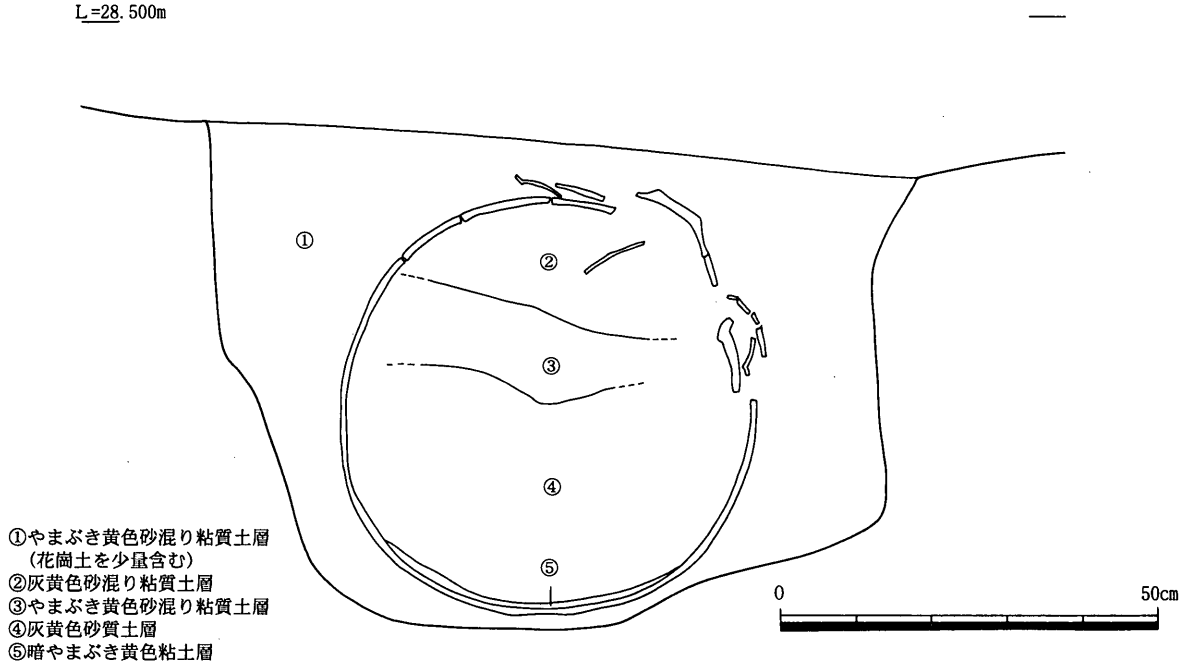
STⅢ40は南丘陵先端部東、標高28.1mで検出した土器棺墓で、棺身上位に棺蓋が残っており、ほぼ完全な形で検出した。

墓壙平面形態は隅丸の方形を呈し、長軸約0.50m、短軸約0.43mを測り、断面は棺身底部部分が若干の段を持つが、概ねU字状を呈し、深さは約0.33mを測る。底面は南側に若干の段を持ち、ちょうど棺身底部をこの段の部分に置き、棺身角度を約68°傾斜させ設置されている。棺身（甕）底部は南方向に、口縁部は北方向に向き、この方向は北丘陵方向である。土層断面でみると棺身底面と土壙底面の間に土層②があることから土器棺埋納時と同時に埋め戻されていることが解る。

138は甕で底部に明瞭な平底を持ち、体部は内湾しながら延び、体部最大径は中位よりやや上方にあ



検出状況



①やまぶき黄色砂混り粘質土層
（花崗土を少量含む）
②灰黄色砂混り粘質土層
③やまぶき黄色砂混り粘質土層
④灰黄色砂質土層
⑤暗やまぶき黄色粘土層

第97図　STⅢ41平・断面図①(1/10)

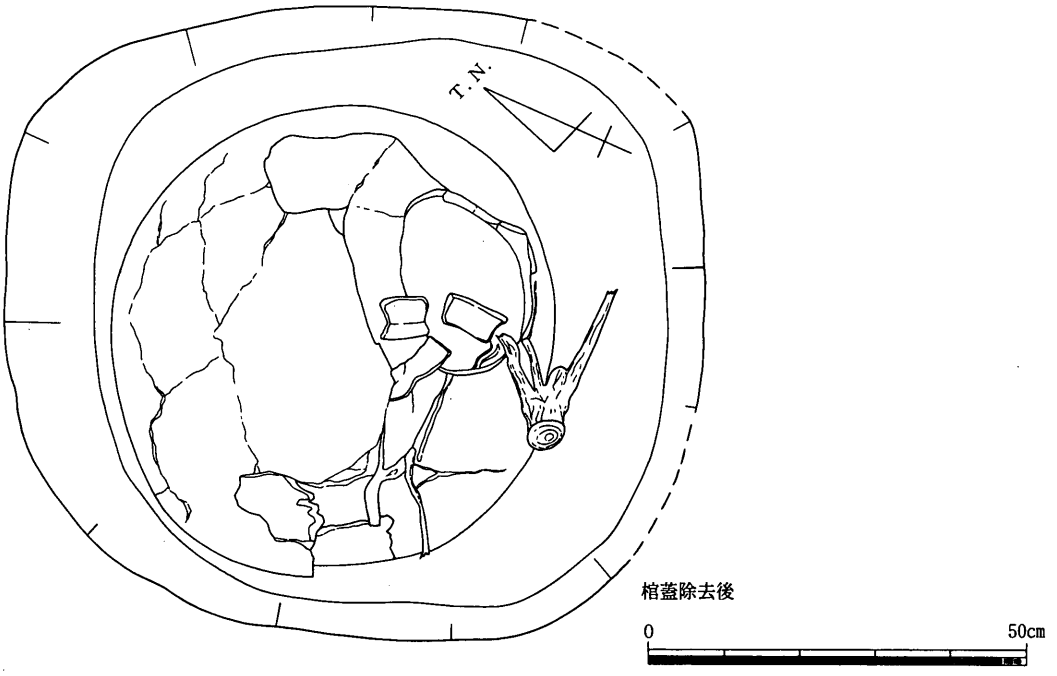
る。口縁部が一部残り、頸部から体部にかけて打ち欠きが認められる。体部外面には板ナデが認められ、中位に横方向のヘラ磨きが、上位に縦方向の刷毛目が施されている。内面は下位から上位にかけて縦方向で、下位から上位方向のヘラ削りが施されている。137は高坏で、脚部を打ち欠き、棺蓋としている。

STⅢ41（第97～99図）

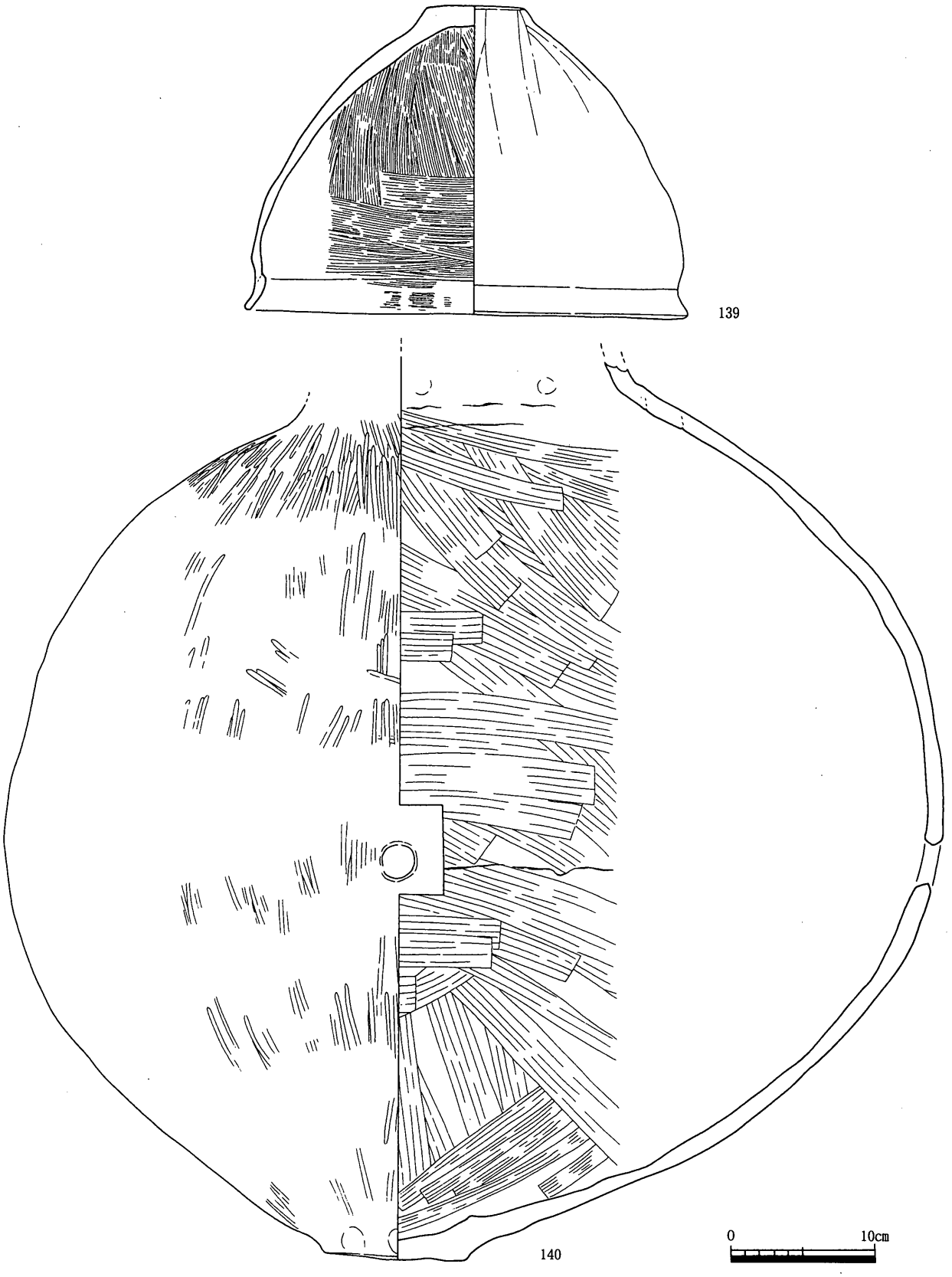
STⅢ41は南丘陵先端部東、標高28.4mで検出した土器棺墓で、棺身上位に棺蓋が残っており、ほぼ完全な形で検出した。

墓壙平面形態は隅丸の方形を呈し、長軸約0.92m、短軸約0.81mを測り、断面は棺身体部部分が若干の段を持つが、概ね箱形を呈し、深さは約0.63mを測る。底面は南側に若干の段を持ち、ちょうど棺身体部上半をこの段の部分に置き、棺身角度を約40°傾斜させ設置されている。棺身（壺）底部は北西方向に、口縁部は南東方向で、この方向は白鳥町、湊川上流方向である。土層断面でみると棺身底面と土壙底面の間に土層①があることから土器棺埋納時と同時に埋め戻されていることが解る。

140は壺で底部に明瞭な平底を持ち、体部は内湾しながら延び、体部最大径は中位にあり、かなり胴張りの壺である。頸部と体部の境で打ち欠きが認められる。体部外面には縦方向のヘラ磨きが施されている。内面は下位から上位にかけて斜め方向の粗い刷毛目が施されている。139は鉢で、棺身の壺に比べるとかなり小型のものである。底部にしっかりした平底を持ち、体部は内湾気味に延び、口縁部は外反する。体部外面下位に板ナデが、内面に刷毛目が施されている。



第98図　STⅢ41平面図②(1/10)



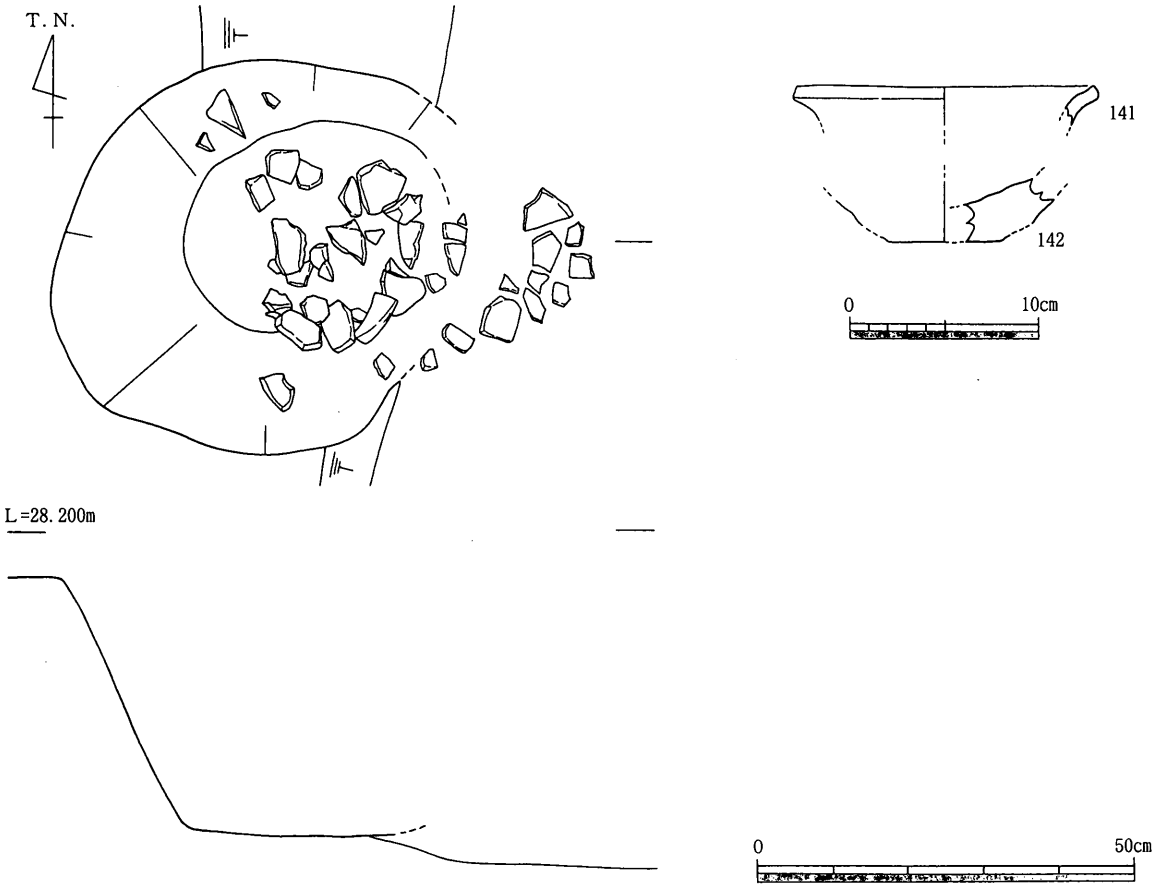
第99図　STⅢ41出土遺物実測図(1/4)

STⅢ42（第100図）

STⅢ42は南丘陵先端部東、標高28.1mで検出した土器棺墓で、掘り方東部が削平されている。

墓壙平面形態は東側が削平されているが、直径約0.50mの歪な円形を呈し、断面は箱形を呈し、深さは約0.32mを測る。墓壙内から土器棺片が散乱した状態で出土している。

141は壺の口縁部で、142は壺の底部で両者とも棺身に伴うものと考えられる。



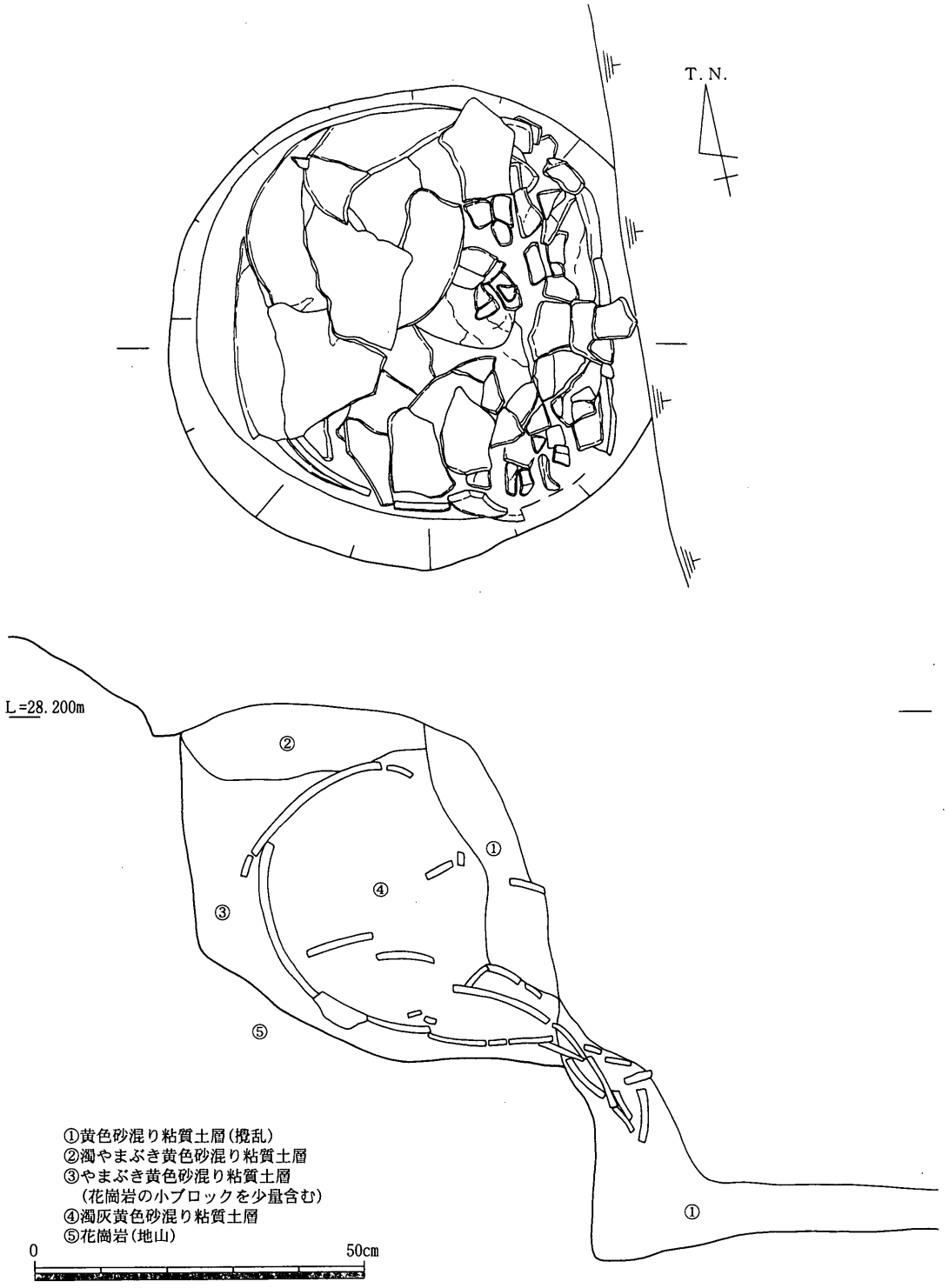
第100図　STⅢ42平・断面図(1/10)、出土遺物実測図(1/4)

STⅢ43（第101・102図）

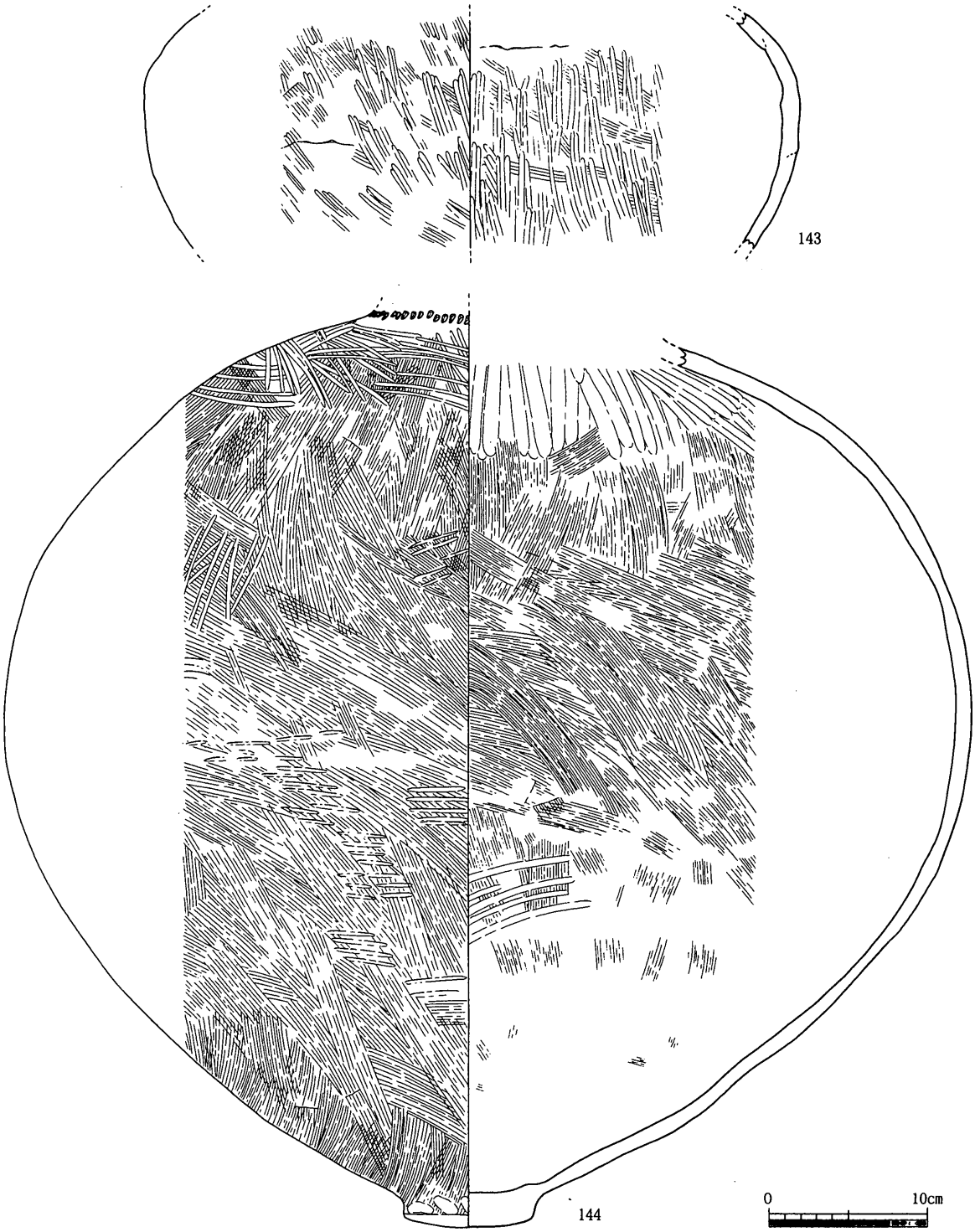
STⅢ43は南丘陵先端部東、標高28.2mで検出した土器棺墓で、掘り方東部は削平されていると考えられるが、棺身・棺蓋の残存状況はかなり良好である。

墓壙平面形態は東側が一部削平されているが、直径約0.71mの円形を呈し、断面から角張ったU字状を呈するものと考えられ、深さは約0.52mを測る。底面は角張っており、墓壙底面と側面の境の傾斜部に棺身底部を置き、棺身角度を約59°傾斜させ設置されている。棺身（壺）底部はほぼ西方向に、口縁部は東方向に向き、この方向は白鳥町、湊川方向である。土層断面でみると棺身底面と土壙底面の間に土層③があることから土器棺埋納時と同時に埋め戻されていることが解る。

144は壺で底部にやや突出した平底を持ち、体部は内湾しながら延び、体部最大径はほぼ中位にあり、かなり胴張りの壺である。頸部と体部の境で打ち欠きが認められる。体部外面には叩きの後斜め方向の刷毛目が、上位にはさらにヘラ磨きが施されている。また頸部と体部の境にはヘラ状工具による刺突文が施されている。内面は刷毛目が施され、部分的にヘラ磨きが認められる。頸部際には指ナデが施されている。143は壺の体部で、棺蓋としている。体部内外面にヘラ磨きが施されている。



第101図　STⅢ43平・断面図(1/10)

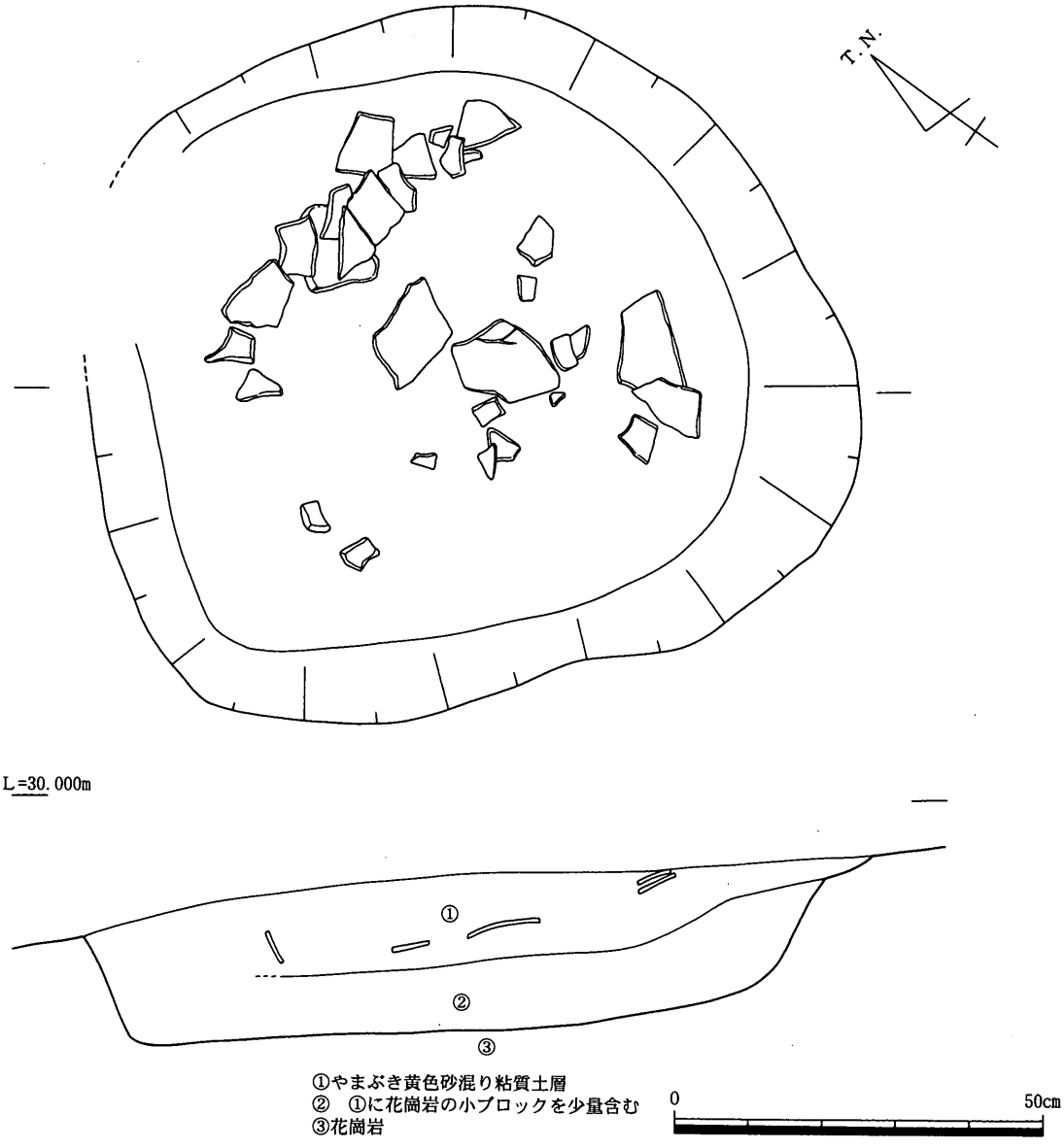


第102図　STⅢ43出土遺物実測図(1/4)

STⅢ44（第103図）

STⅢ44は南丘陵先端部、標高29.9mで検出した土器棺墓で、掘り方北部がSHⅢ01によって切られている。

墓壙平面形態は北部が切られているが、直径約0.95mの歪な円形を呈し、断面は箱形を呈し、深さは約0.20mを測る。墓壙内から少量土器片が出土している。



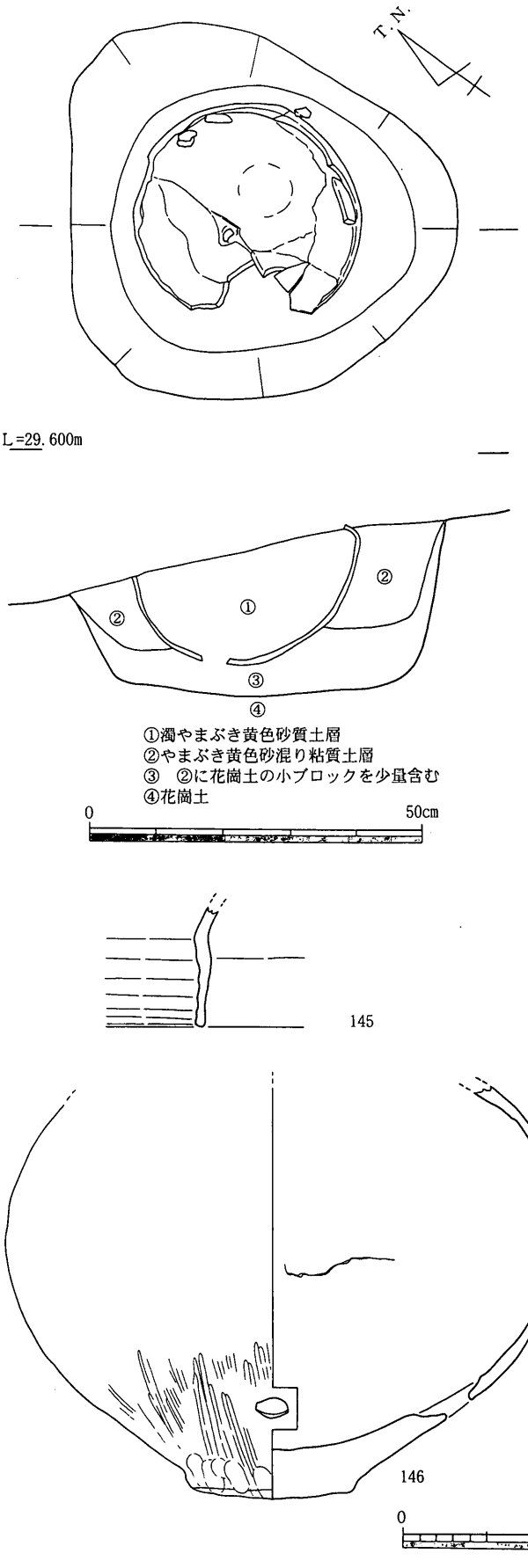
第103図　STⅢ44平・断面図(1/10)

STⅢ45（第104図）

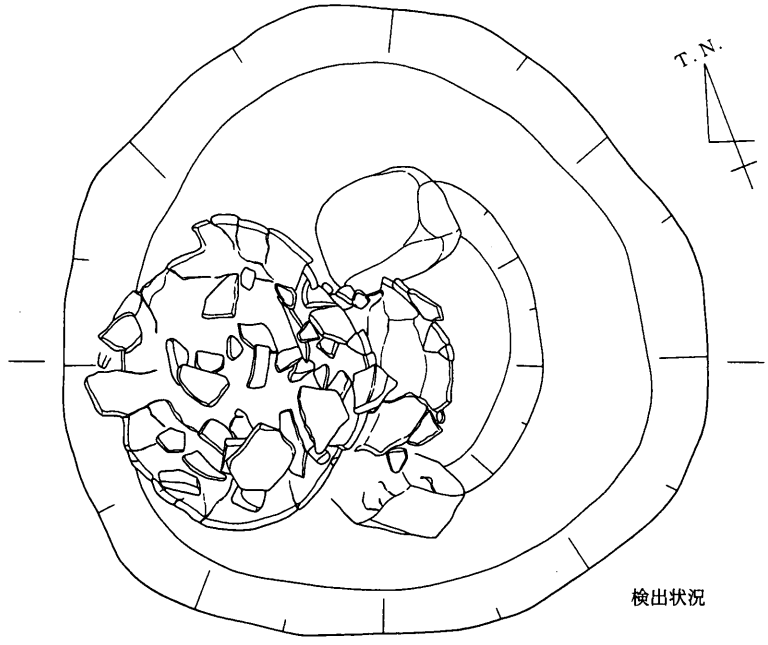
STⅢ45は南丘陵先端部、標高29.5mで検出した土器棺墓で、掘り方上部は削平されていると考えられ、棺身が残存していた。

墓壙平面形態は直径約0.54mの歪な円形を呈し、断面は箱形を呈し、深さは約0.22mを測る。底面は平らであるが、墓壙底面と棺身底部間に土層③を敷き、棺身角度を約33°傾斜させ設置されている。棺身（壺）底部はほぼ東方向に、口縁部は西方向に向き、この方向は大内町方向である。土層断面でみると棺身底面と土壙底面の間に土層③があることから土器棺埋納時と同時に埋め戻されていることが解る。

146は壺で底部にやや突出した平底を持ち、体部は内湾しながら延び、体部最大径はほぼ中位にあり、かなり胴張りの壺である。打ち欠きは体部上位まで及んでいる。体部外面には下位に縦方向のヘラ磨きが施されている。体部下位に穿孔が認められ、穿孔を下位にして埋められていた。145は鉢の口縁部で、棺蓋としている。口縁部外面に凹線が認められる。

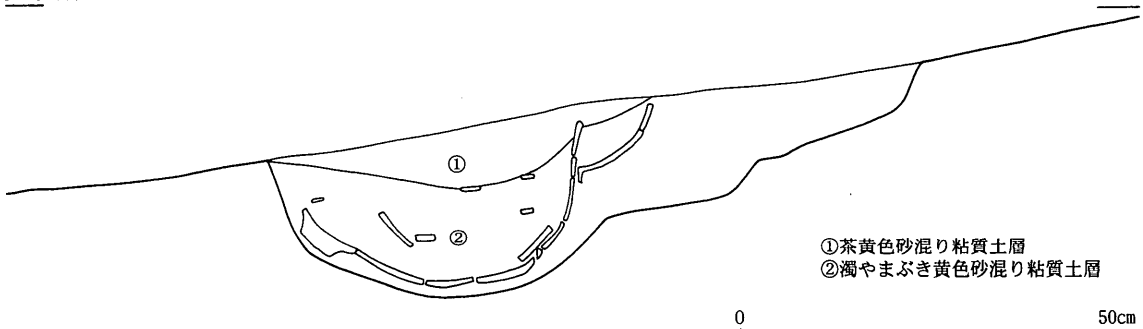


第104図　STⅢ45平・断面図(1/10)、
出土遺物実測図(1/4)



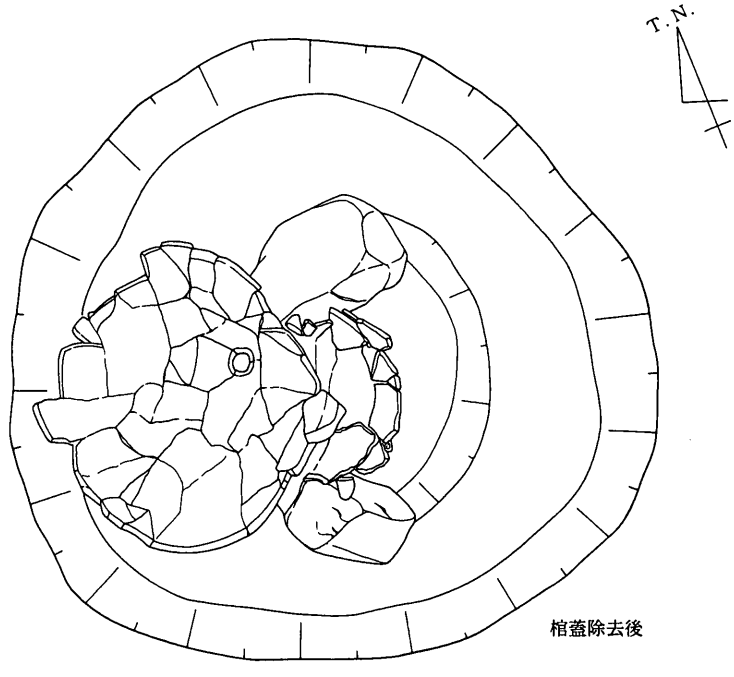
検出状況

L=29.600m



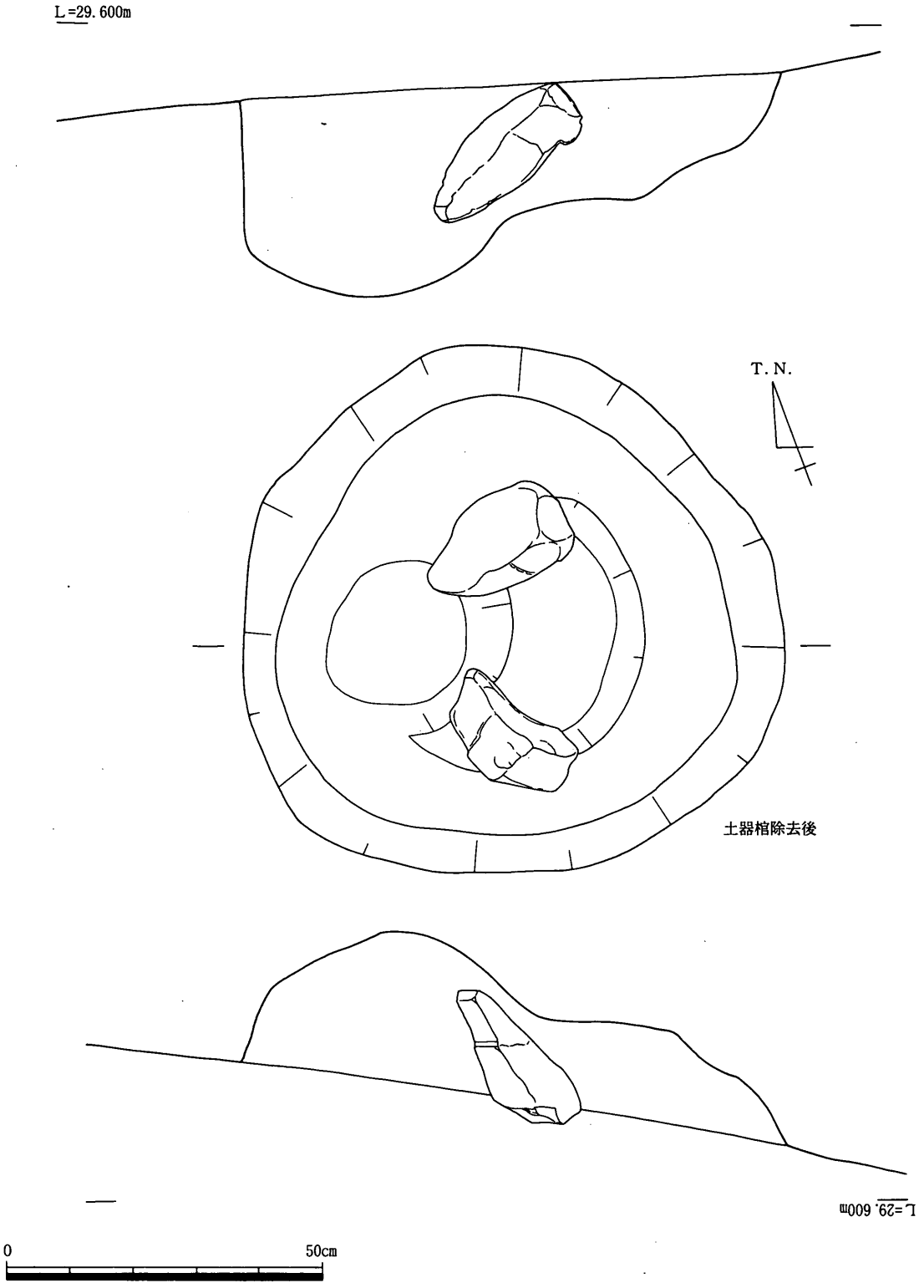
①茶黄色砂混り粘質土層
②濁やまぶき黄色砂混り粘質土層

0 50cm



棺蓋除去後

第105図　STⅢ46平・断面図①(1/10)

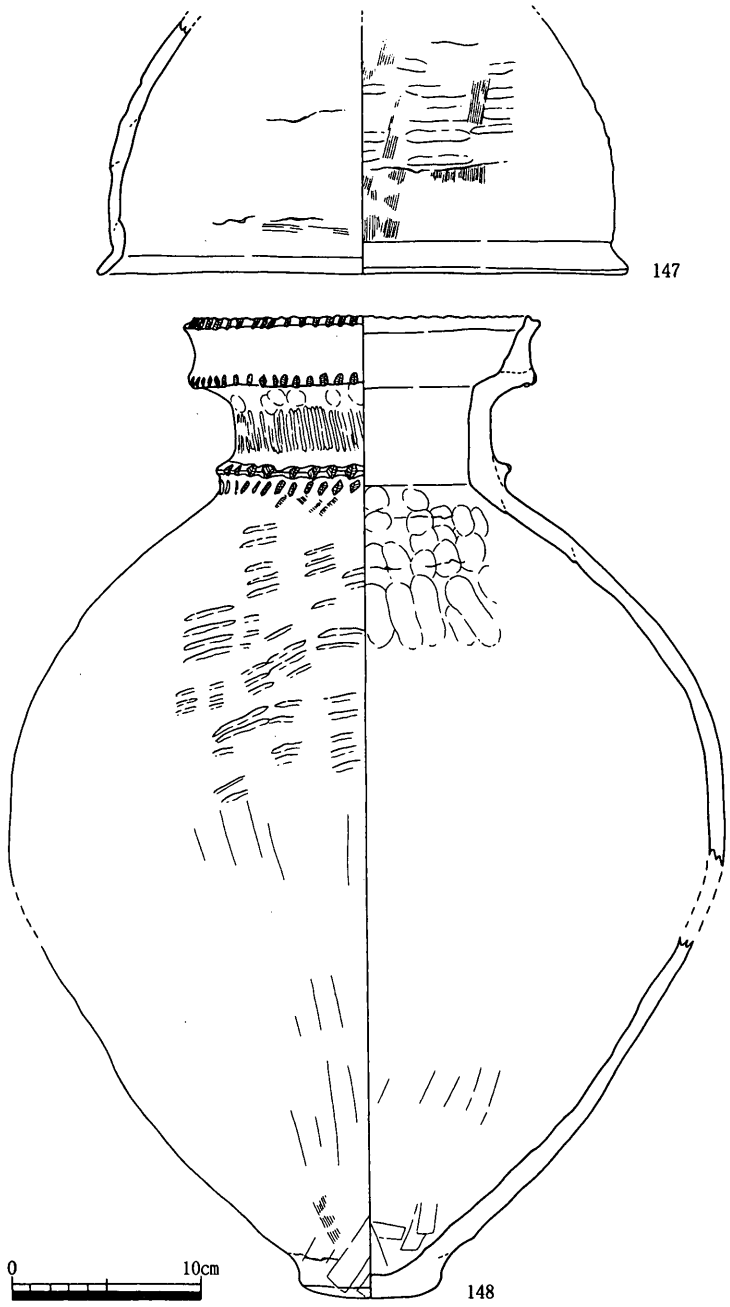


第106図　STⅢ46平・断面図②(1/10)

STⅢ46（第105～107図）

STⅢ46は南丘陵先端部西斜面、標高29.5mで検出した土器棺墓で、掘り方上部は削平されていると考えられ、棺身・棺蓋下部が残存していた。

墓壙平面形態は直径約0.85mの歪な円形を呈し、断面は東側が３段になっており、最下段部分はU字状を呈し、深さは約0.22mを測る。底面は棺身の形状に整形されており、３段目の上部に壺の口縁部を置き、棺身角度を約32°傾斜させ設置されている。この棺身上に棺蓋を重ね、さらにその左右に幅10～20cm、厚さ8cm程度の川原石を置き、棺身上部と棺蓋を挟み込んでいる。棺身（壺）底部はほぼ西方向に、口縁部は東方向に向き、この方向は丘陵上部、白鳥町方向である。土層断面でみると棺身底面はほぼ土壙底面に接しており、棺蓋下位には土層②があることから土器棺埋納時と同時に埋め戻されていることが解る。



第107図　STⅢ46出土遺物実測図(1/4)

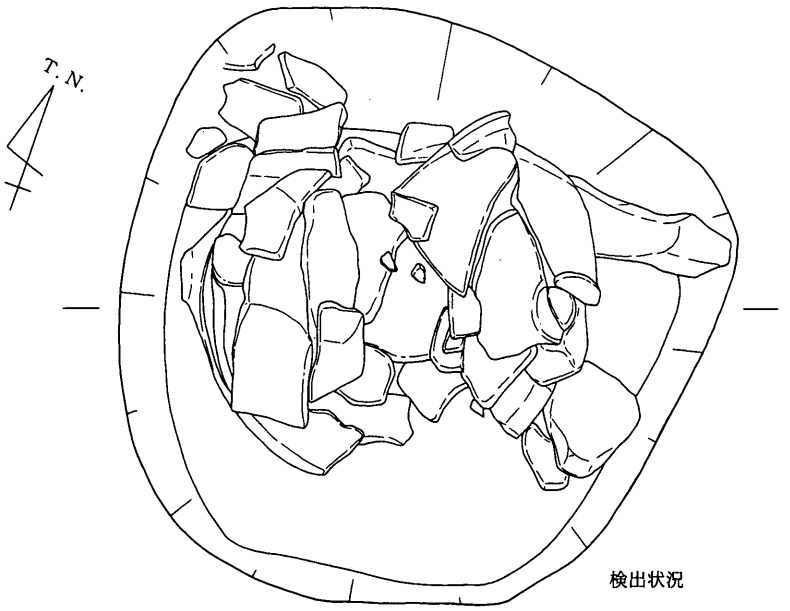
148は壺で底部にやや突出した平底を持ち、体部は内湾しながら延び、体部最大径は中位からやや上方にある。頸部は直線的に上方に延び、口縁部は外反し、さらに上方に屈曲する２重口縁壺である。打ち欠きは頸部と体部の境で行われているが、打ち欠いた口縁部・頸部を一緒に埋め戻していたと考えられる。体部外面には下位に縦方向の板ナデが、上位には叩きが施されている。頸部と体部の境には刻み目のある突帯があり、この原体で突帯下位及び２重口縁屈曲部・口唇部に刺突文が施されている。頸部外面にはヘラ磨きが施されている。体部上位に穿孔が認められ、穿孔を下位にして埋められていた。体部内面には下位に板ナデが、上位に指頭痕・指ナデが施されている。147は鉢で、内湾する体部から口縁部が外反する。

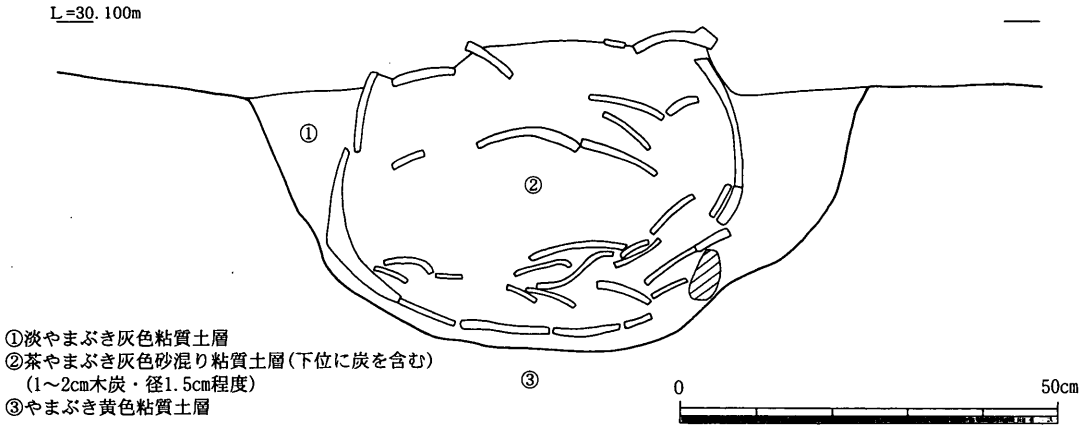
STⅢ47（第108～110図）

STⅢ47は南丘陵調査区内中央部西斜面、標高30.1mで検出した土器棺墓で、掘り方上部は削平されているものの棺身・棺蓋が残存していた。

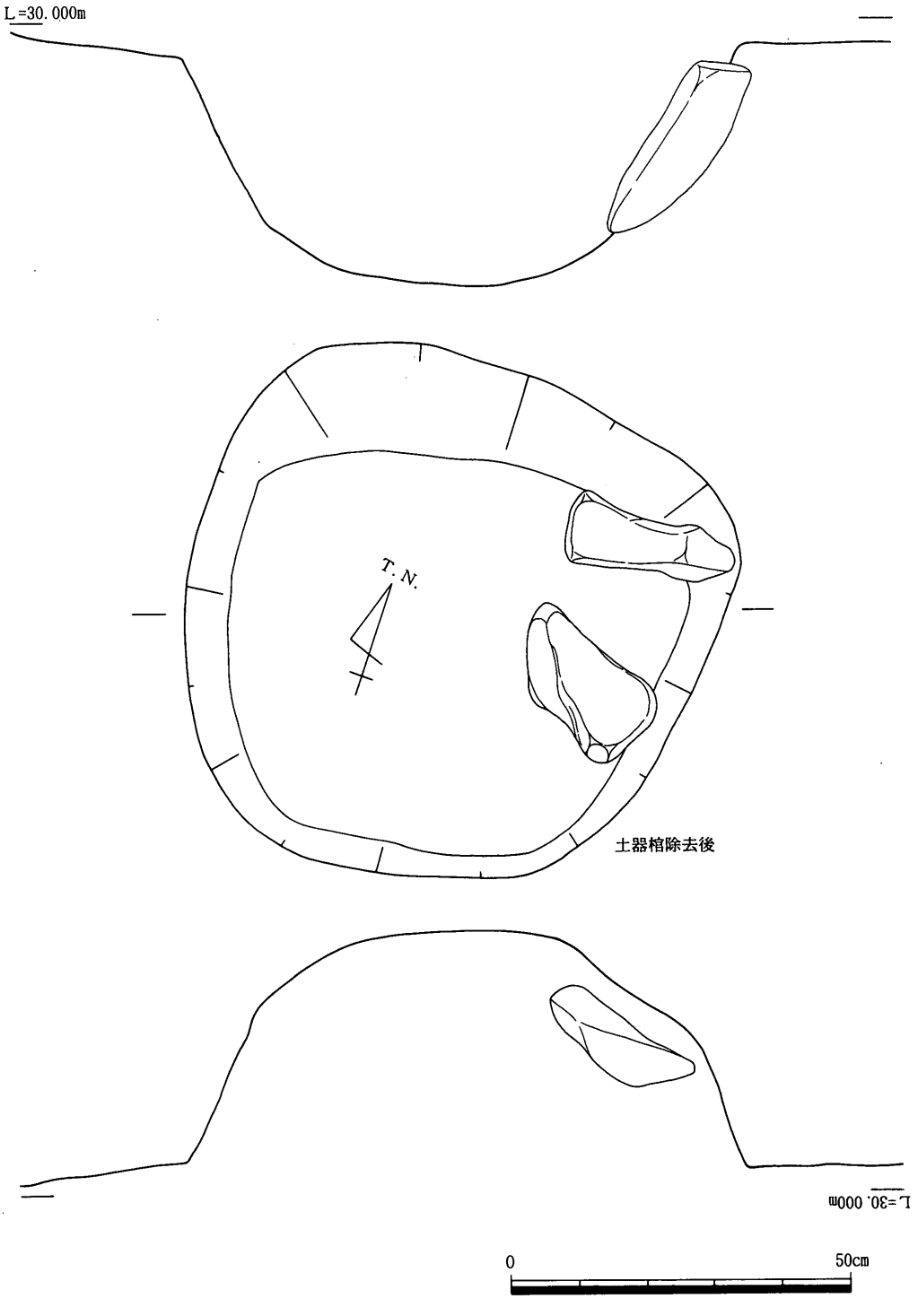
墓壙平面形態は一辺約0.76mの隅丸の方形を呈し、断面は東側が２段になっており、深さは約0.40mを測る。底面は棺身の形状に整形されており、２段目の上部に壺の体部上半を置き、棺身角度を約24°傾斜させ設置している。この棺身上に棺蓋を重ね、さらにその左右に幅14～23cm、厚さ7cm程度の川原石を置き、棺身上部と棺蓋を固定している。棺身（壺）底部はほぼ西方向に、口縁部は東方向に向き、この方向は丘陵上部、白鳥町方向である。土層断面でみると棺身底面はほぼ土壙底面に接しており、棺蓋下位には土層①があることから土器棺埋納時と同時に埋め戻されていることが解る。

150は壺で底部にやや突出した平底を持ち、体部は内湾しながら延び、体部最大径は中位からやや上方にある。打ち欠きは頸部と体部の境で行われている。体部外面には縦方向の刷毛目の後ヘラ磨きが施されている。体部下位、底部際に穿孔が認められる。体部内面には横方向の刷毛目が施されている。149は鉢で、内湾する体部から口縁部が外反する。体部外面には縦方向の刷毛目が、内面には刷毛目の後ヘラ磨きが施されている。

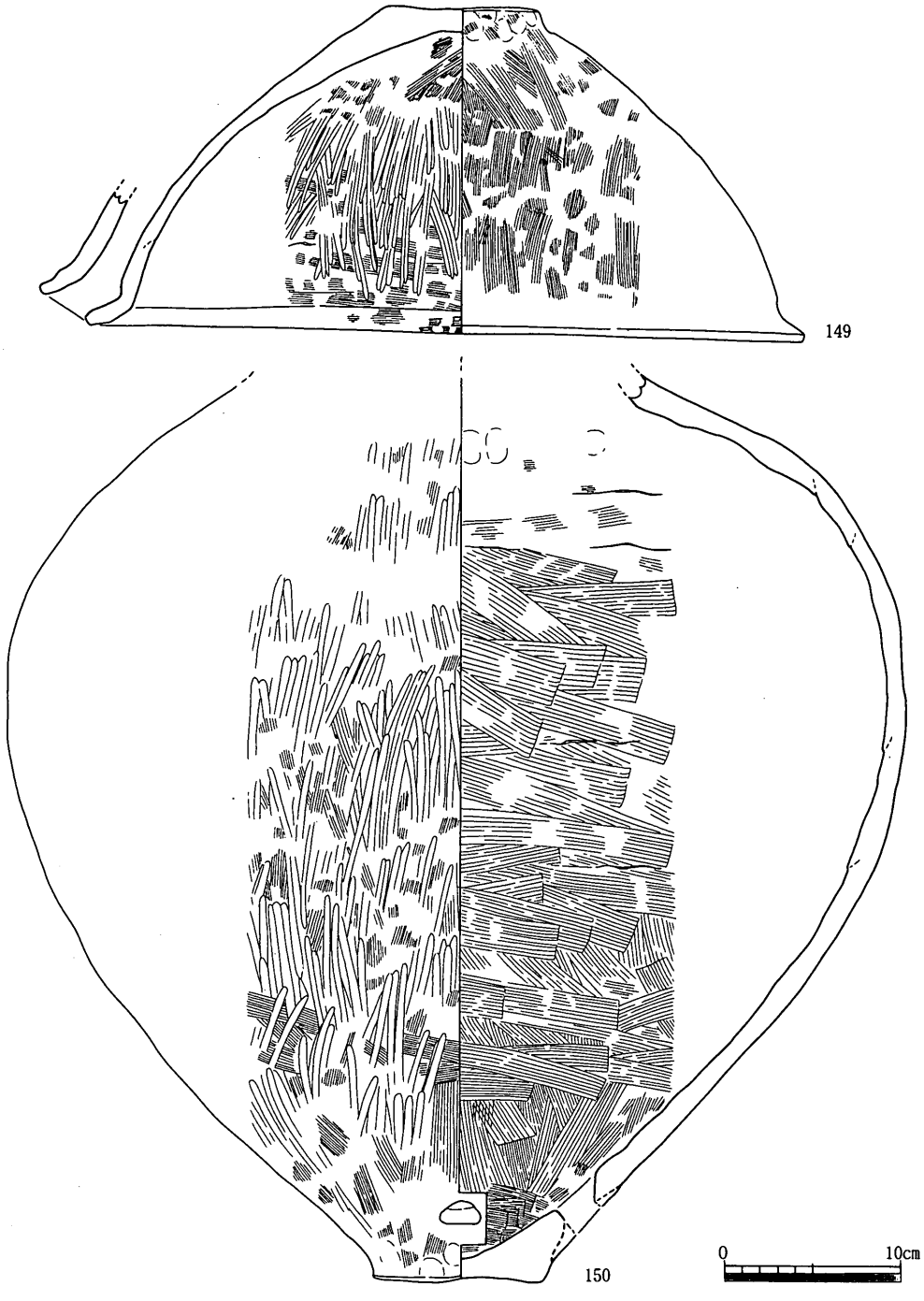




第108図　STⅢ47平・断面図①(1/10)



第109図　STⅢ47平・断面図②(1/10)



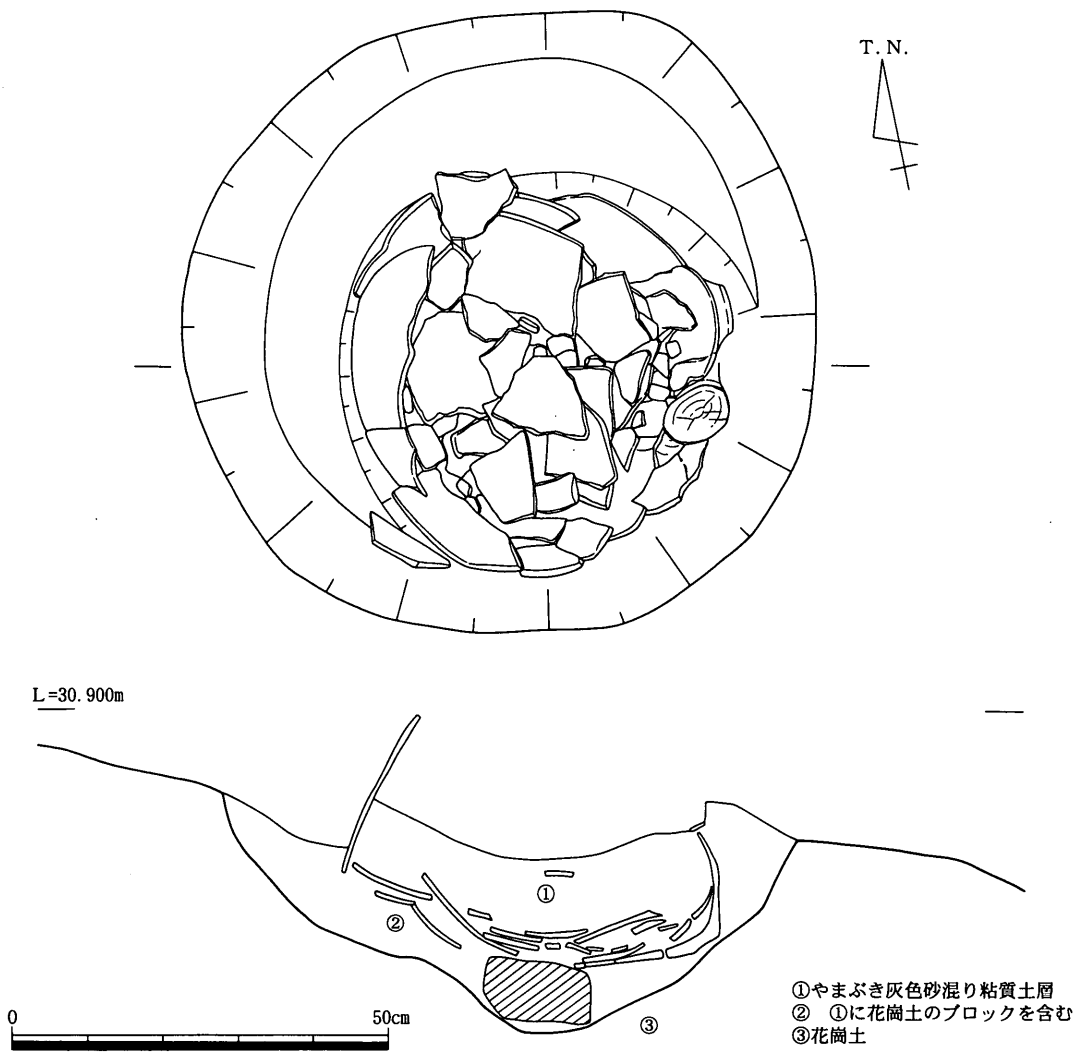
第110図　STⅢ47出土遺物実測図(1/4)

STⅢ48（第111・112図）

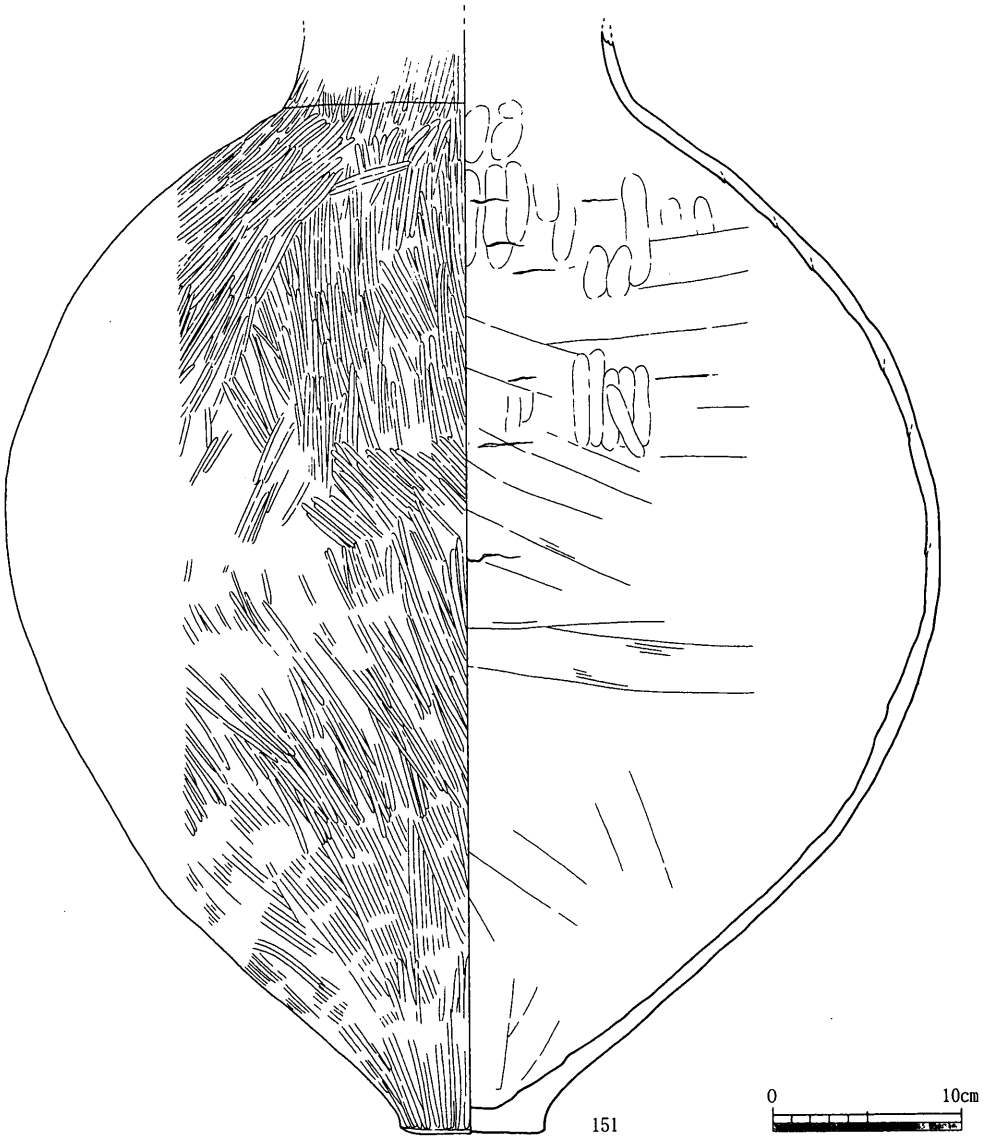
STⅢ48は南丘陵調査区内中央部東斜面、標高30.8mで検出した土器棺墓で、掘り方上部は削平されていると考えられ、棺身が残存していた。

墓壙平面形態は直径約0.84mの歪な円形を呈し、断面は北側が２段になっており、最下段部分はU字状に窪み、深さは約0.32mを測る。墓壙底面のU字状に窪む部分には15cm角、厚さ10cm程度の川原石を置き、壺の体部を乗せ、棺身角度を約41°傾斜させ設置している。棺身（壺）底部はほぼ東方向に、口縁部は西方向に向き、この方向は丘陵上部方向である。土層断面でみると棺身底面は川原石及び土層②があることにより土壙底面に接しておらず、土器棺埋納時と同時に埋め戻されていることが解る。

151は壺で底部にやや突出した平底を持ち、体部は内湾しながら延び、体部最大径はほぼ中位にある。頸部下位まで残っており、やや内径気味に延びる。打ち欠きは一部頸部が残存するが、頸部と体部の境で行われている。体部外面には下位に縦方向の刷毛目の後ヘラ磨きが、中位から上位にかけてヘラ磨きが施されている。体部内面には全面に板ナデが施されている。



第111図　STⅢ48平・断面図(1/10)



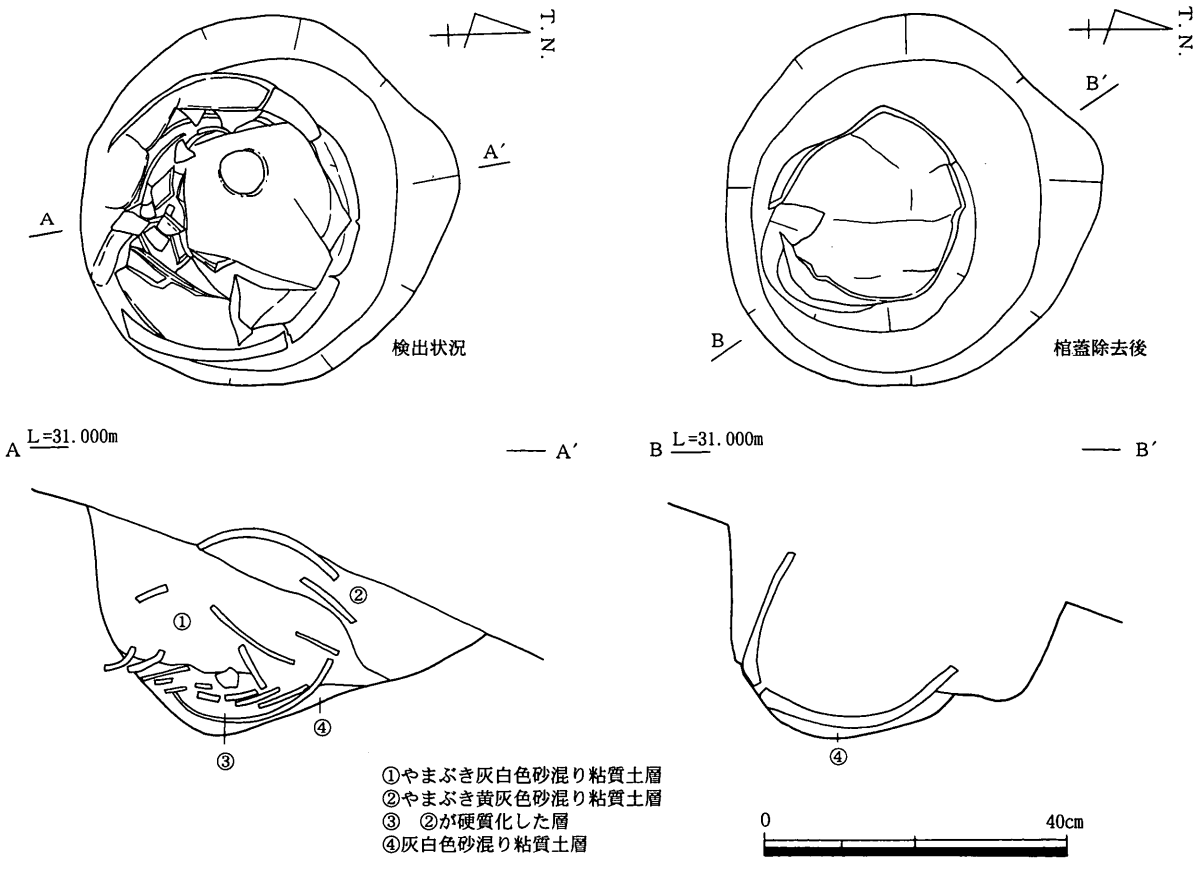
第112図　STⅢ48出土遺物実測図(1/4)

STⅢ49（第113・114図）

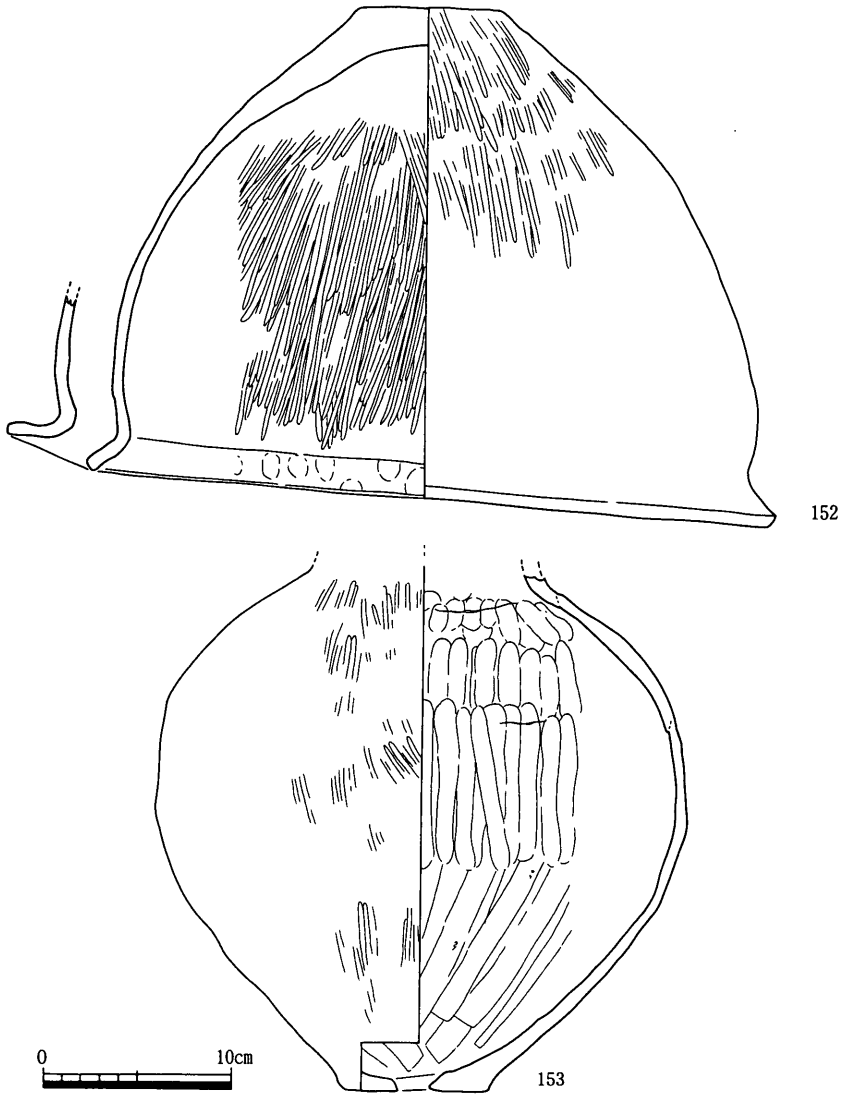
STⅢ49は南丘陵調査区内中央部西斜面、標高30.9mで検出した土器棺墓で、掘り方上部は削平されているが、棺身・棺蓋が残存している。

墓壙平面形態は直径約0.49mの円形を呈し、断面は北側が２段になっており、最下段部分はU字状に窪み、深さは約0.27mを測る。墓壙底面は壺の体部とほぼ同様に整形され、２段目に壺の体部上半を乗せ、棺身角度を約30°傾斜させ設置している。棺身（壺）底部はほぼ南東方向に、口縁部は北西方向に向き、この方向は大内町方向である。土層断面でみると棺身底面は土層④があることにより土壙底面に接しておらず、土器棺底面を固定するためのものである。

153は壺で底部に平底を持ち、体部は内湾しながら延び、体部最大径は中位からやや上位にある。打ち欠きは頸部と体部の境で行われている。体部外面には縦方向のヘラ磨きが、体部内面には下位にヘラ削りが、中位から上位にかけて指ナデが施されている。底部に穿孔が認められる。152は棺身の壺に比べるとかなり大型のもので、内湾する体部から口縁部が外反する。体部外面には縦方向のヘラ磨きが、内面にも縦方向のヘラ磨きが施されている。



第113図　STⅢ49平・断面図(1/10)

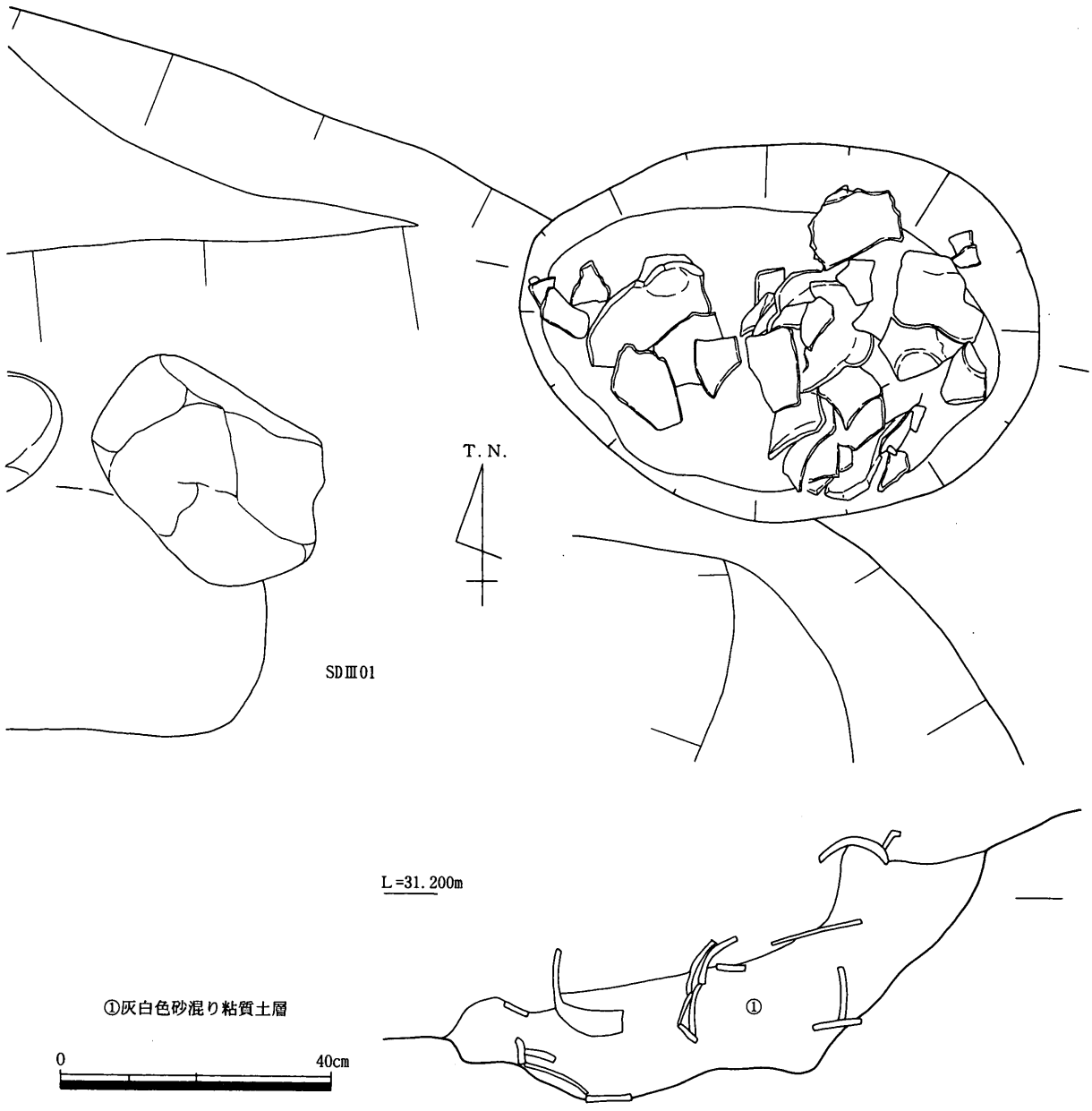


第114図　STⅢ49出土遺物実測図(1/4)

STⅢ50（第115図）

STⅢ50は南丘陵調査区内中央部稜線上、標高31.3mで検出した土器棺墓で、掘り方上部は削平され、破片が散乱した状態で出土した。この土器棺墓はSXⅢ03とSDⅢ01によって切られており、またSTⅢ51を切っている。出土遺物にはSTⅢ51と接合関係にある遺物が出土していることからＳＴⅢ50を掘削する時におそらく近接するSTⅢ51を掘削した土坑の可能性があるが、ここでは土器棺墓とする。

墓壙平面形態は長軸約0.77m、短軸約0.55mを測る楕円形を呈し、底面が歪であるが、概ねU字状を呈し、深さは約0.32mを測る。



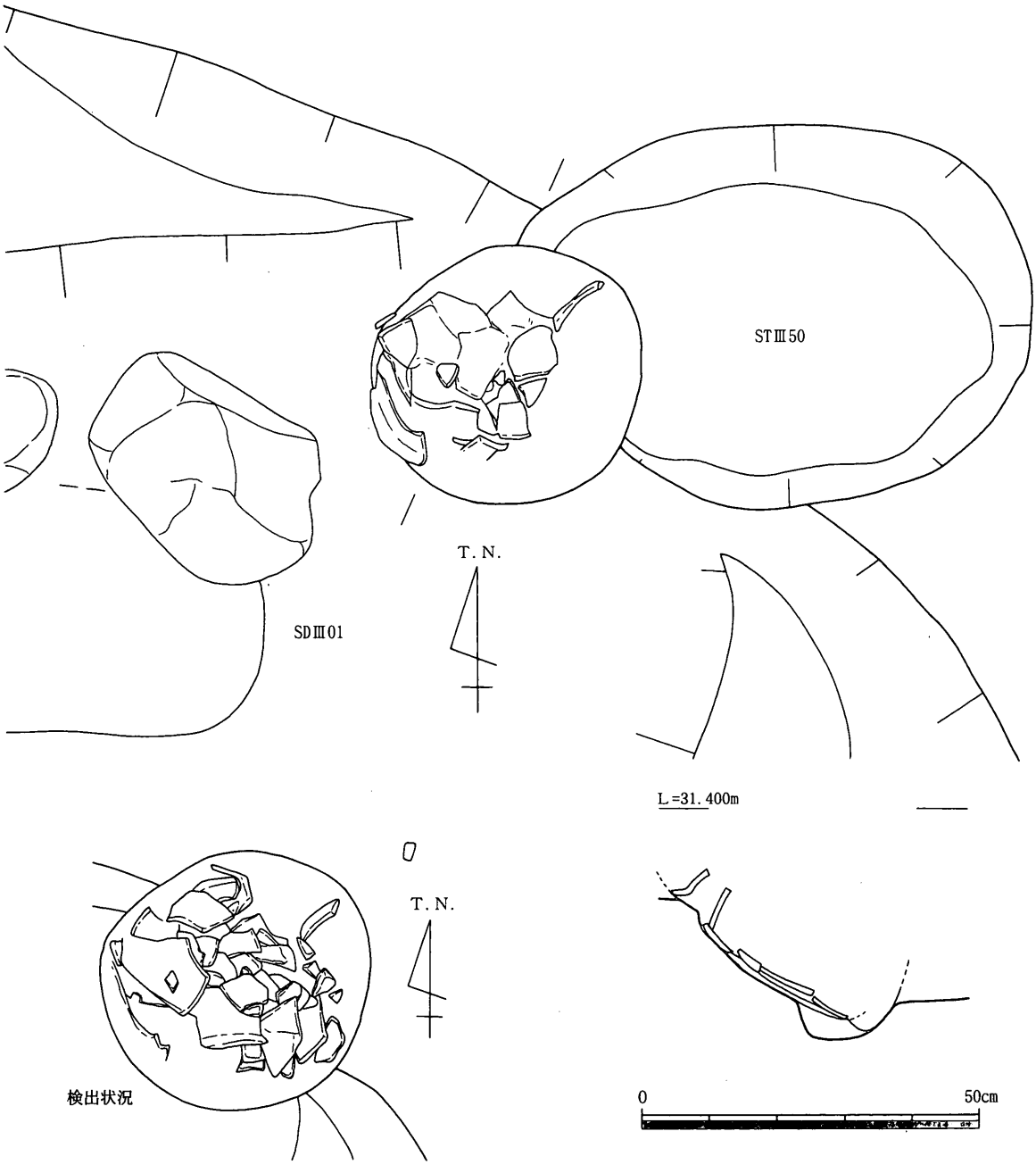
第115図　STⅢ50平・断面図(1/10)

STⅢ51（第116・117図）

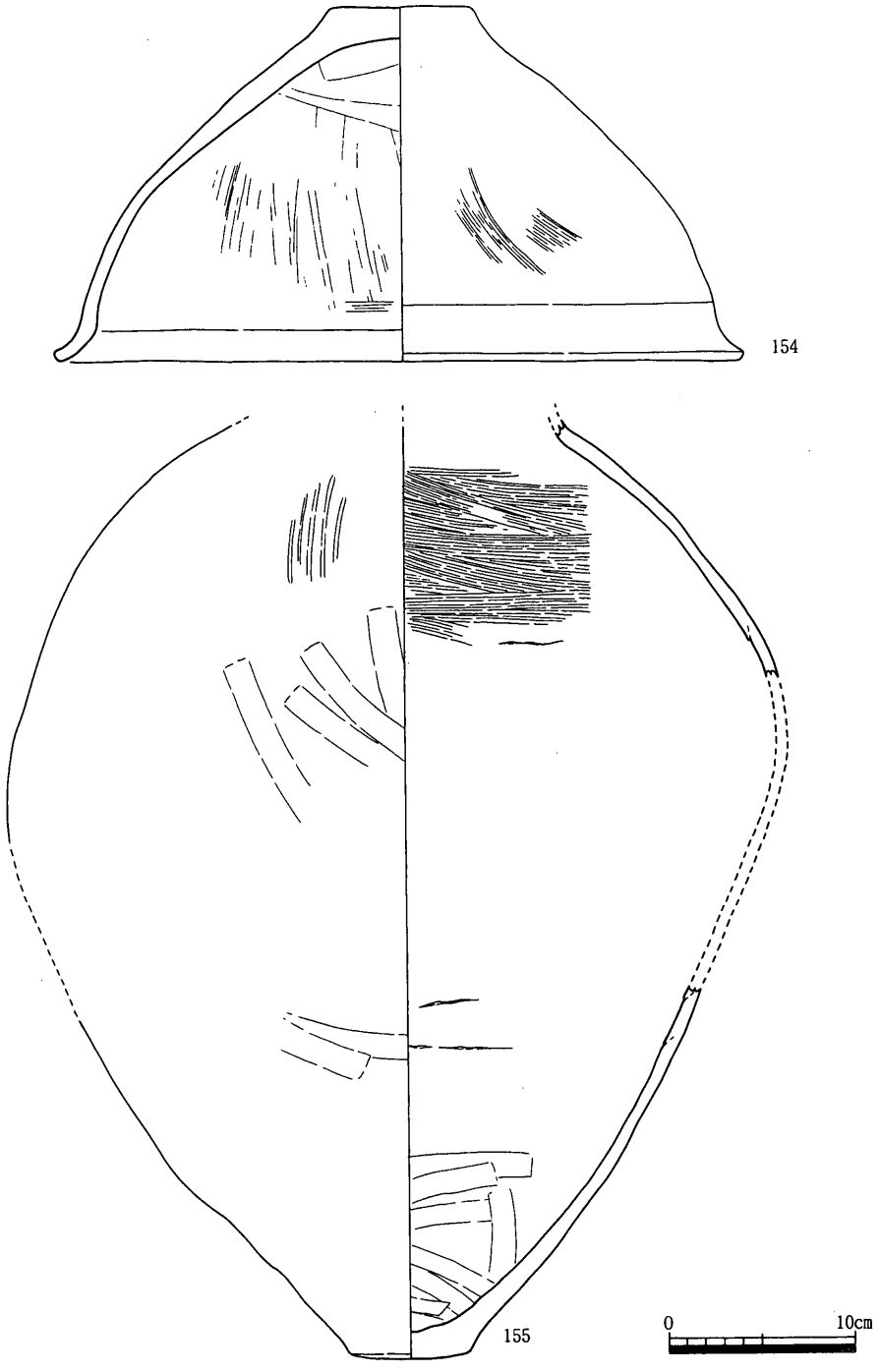
STⅢ51は南丘陵調査区内中央部西斜面、標高31.3mで検出した土器棺墓である。この土器棺墓はSDⅢ01とSTⅢ50によって切られており、かなり残りが悪い。

検出時での墓壙平面形態は直径約0.40mの円形を呈し、断面はU字状に窪むと推定でき、深さは約0.20mを測る。

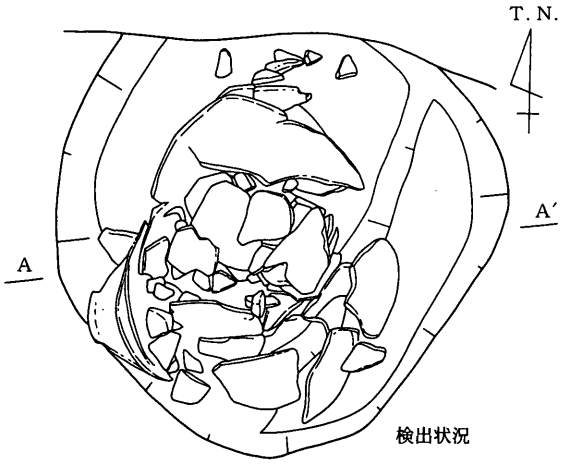
155は壺で底部に平底を持ち、体部は内湾しながら延び、体部最大径は中位からやや上位にある。打ち欠きは頸部と体部の境で行われている。体部外面には中位に板ナデが、上位に縦方向のヘラ磨きが施されている。体部内面には下位に板ナデが、上位に刷毛目が施されている。154は鉢で、内湾する体部から口縁部が外反する。体部外面には斜め方向の刷毛目が、内面にも縦方向の板ナデが施されている。

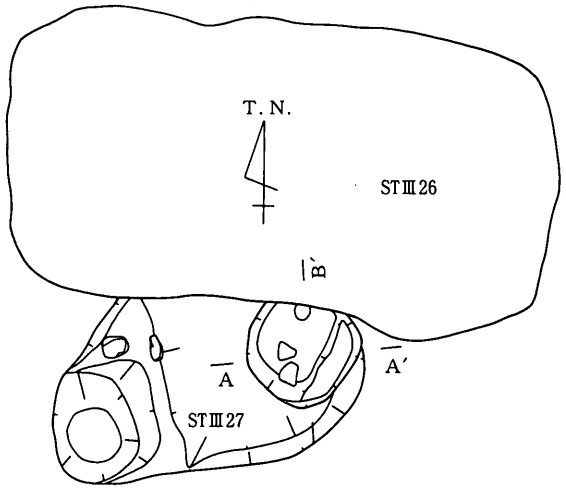


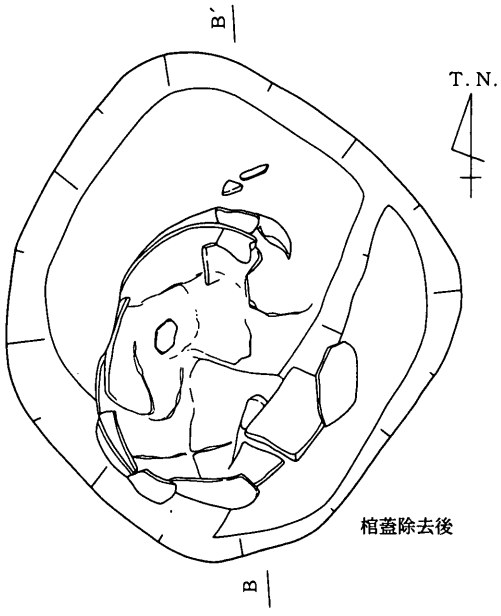
第116図　STⅢ51平・断面図(1/10)

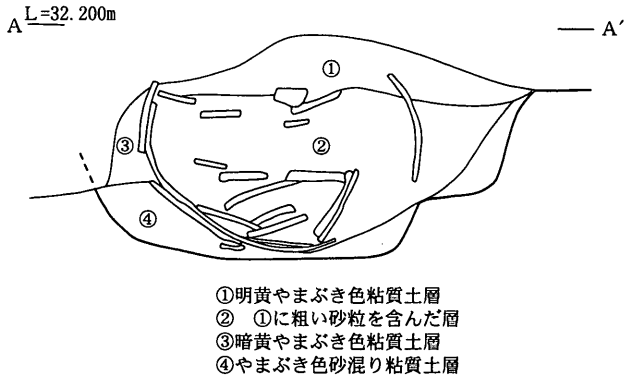


第117図　STⅢ51出土遺物実測図(1/4)

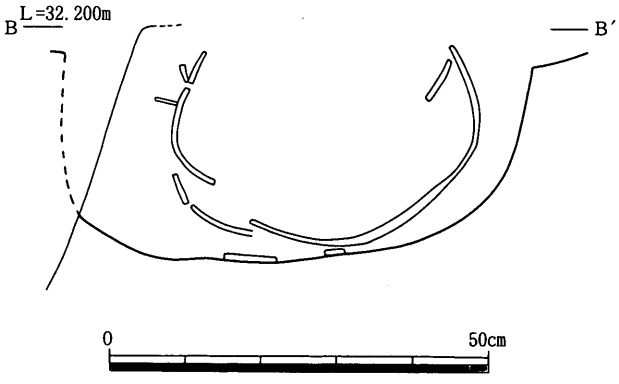


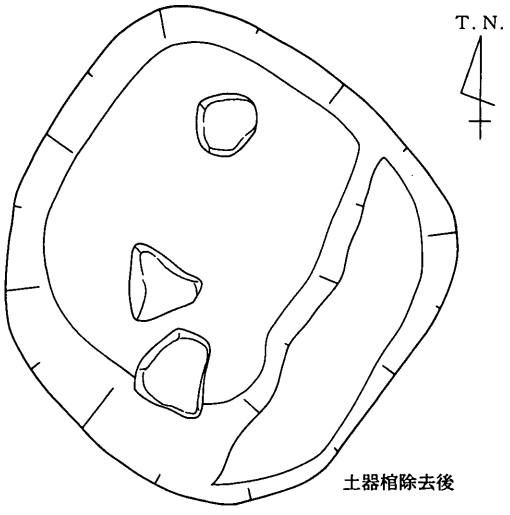






①明黄やまぶき色粘質土層
② ①に粗い砂粒を含んだ層
③暗黄やまぶき色粘質土層
④やまぶき色砂混り粘質土層





第118図　STⅢ52平・断面図(1/10)

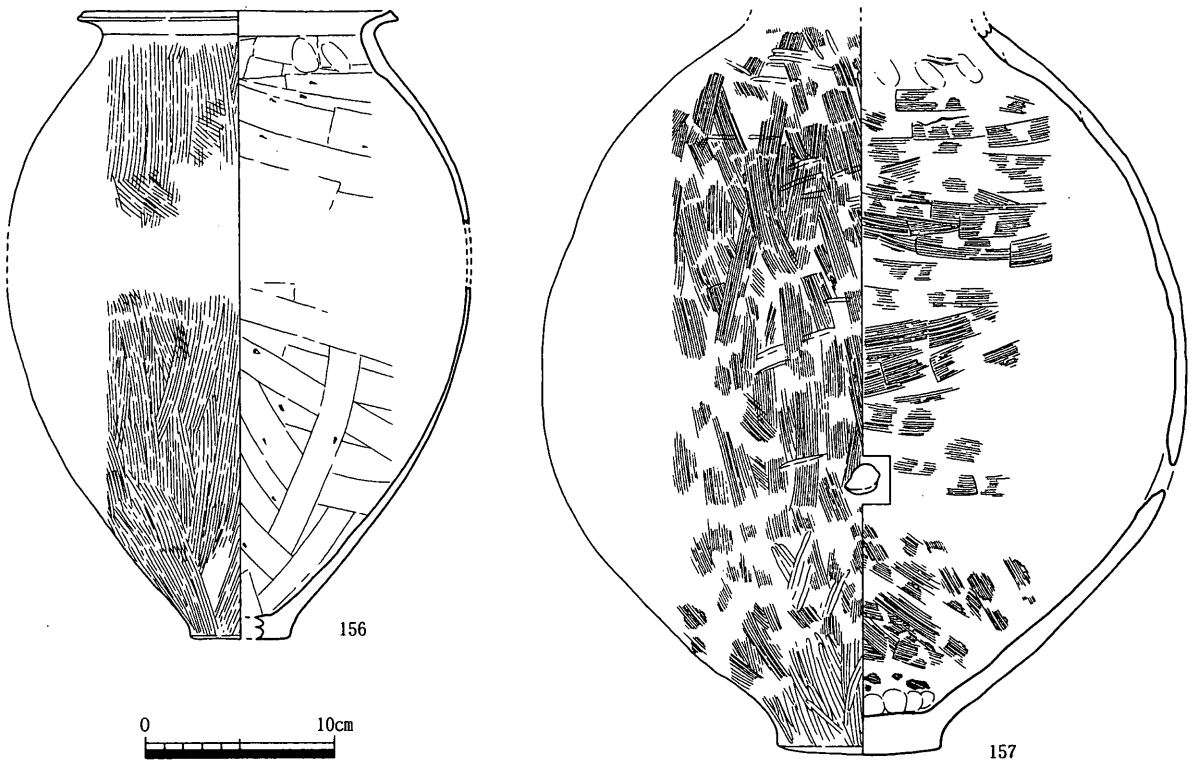
STⅢ52（第118・119図）

STⅢ52は南丘陵調査区内南丘陵上、標高32.15mで検出した土器棺墓で、掘り方北部がSTⅢ26によって削平されているが、棺身が概ね残存している。またこの土器棺墓はSTⅢ27を切っている。

墓壙平面形態は直径約0.57mの歪な円形を呈し、断面は南東側が２段になっており、最下段部分は箱形状に窪み、深さは約0.27mを測る。墓壙底面は箱形に整形され、底部を墓壙底面西側に置き、２段目に壺の体部上半を乗せ、棺身角度を約22°傾斜させ設置している。棺身（壺）底部はほぼ西方向で、口縁部は東方向に向き、この方向は白鳥町、湊川方向である。土層断面でみると棺身底面は土層④があることにより土壙底面に接しておらず、土層④を底面に敷き、土器棺底面を安定させ、埋め戻している。

157は壺で底部に突出した平底を持ち、体部は内湾しながら延び、体部最大径は中位からやや下位にあり、下ぶくれを呈する。打ち欠きは頸部と体部の境で行われている。体部外面には叩きの後、縦方向の刷毛目が、体部内面には横方向の刷毛目が施されている。体部やや下半に穿孔が認められる。検出時穿孔は下位に向けられていた。154は棺蓋に転用したと考えられる甕である。底部に平底を持ち、体部はない湾しながら延び、体部最大径はほぼ中位にある。頸部は稜を持たず屈曲し、口縁端部は上方に僅かに摘み出す。体部外面に縦方向の刷毛目が、内面に頸部やや下位まで前面にヘラ削りが施されている。

若干甕の方が古い様相を呈していることからSKⅢ14に伴うものが、混入した可能性も考えられる。

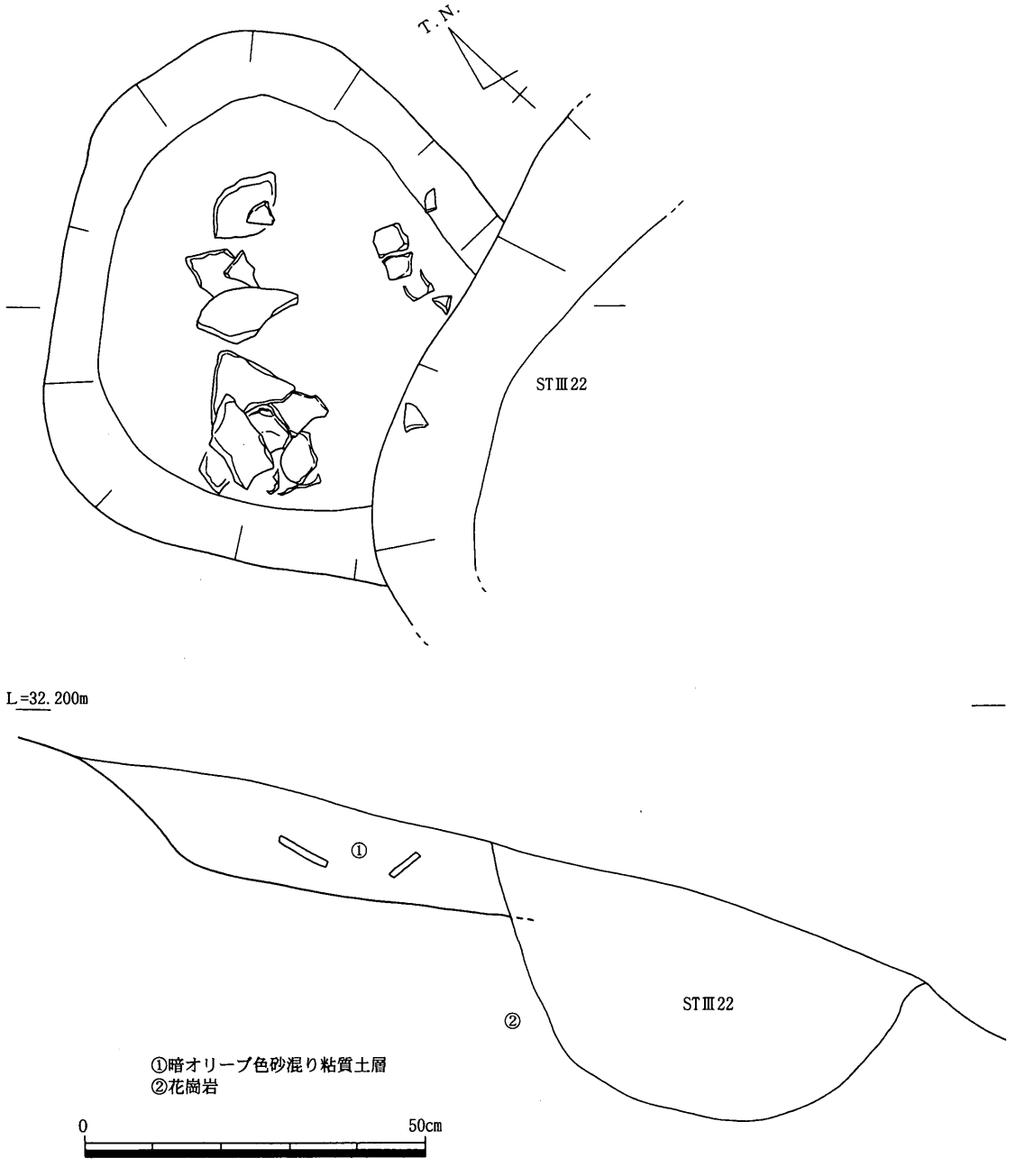


第119図　STⅢ52出土遺物実測図(1/4)

STⅢ53（第120図）

STⅢ53は南丘陵調査区内南部東斜面、標高32.1mで検出した土器棺墓で、掘り方上部は削平され、南部はSTⅢ22によって切られており、STⅢ53内からは破片が散乱した状態で出土した。

墓壙平面形態はSTⅢ22によって切られているものの、直径約0.75mの歪な円形を呈し、断面は不明であるが、底面は南側（STⅢ22方向）に向かって傾斜している。、深さは約0.13mを測る。



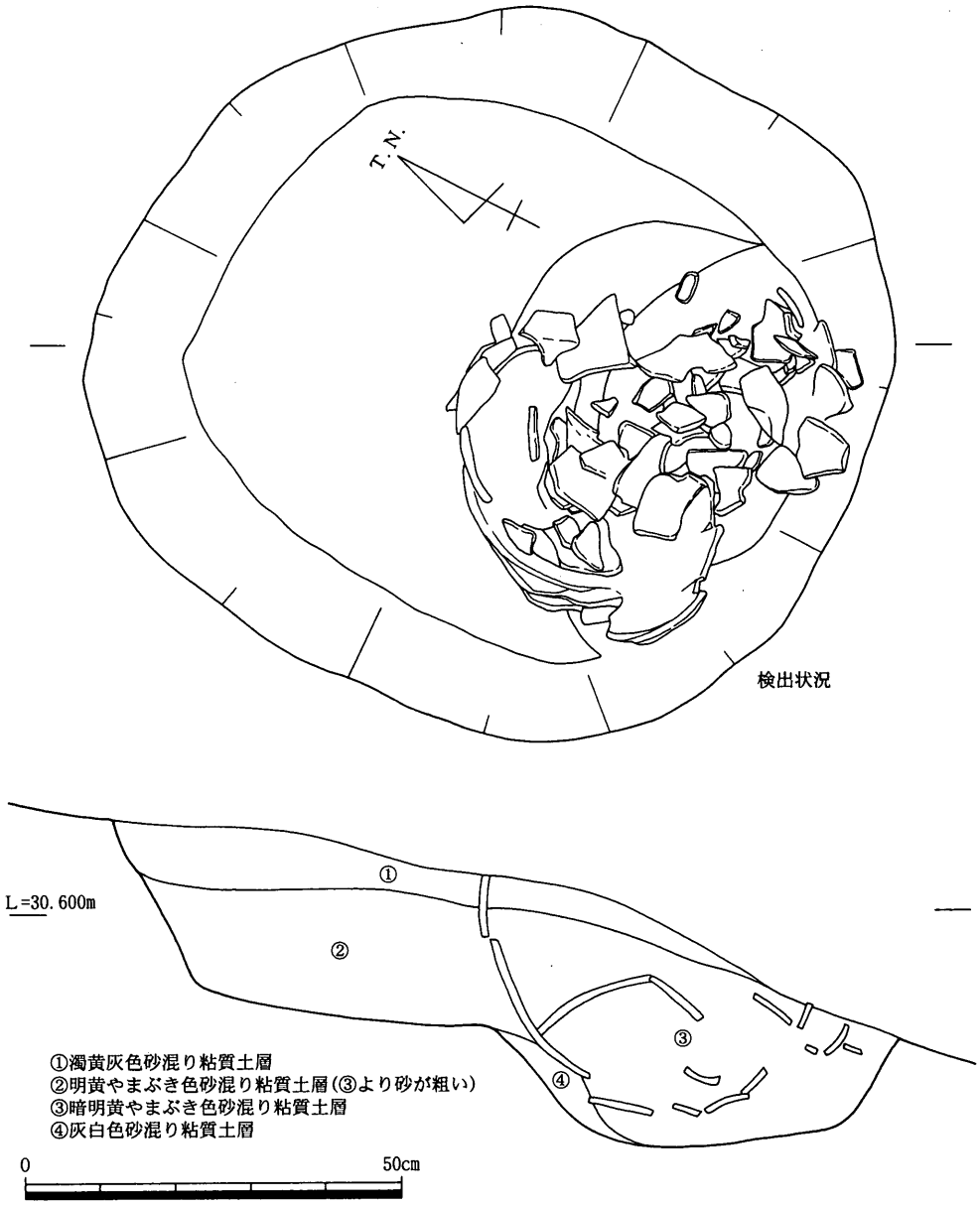
第120図　STⅢ53平・断面図(1/10)

STⅢ54（第121～123図）

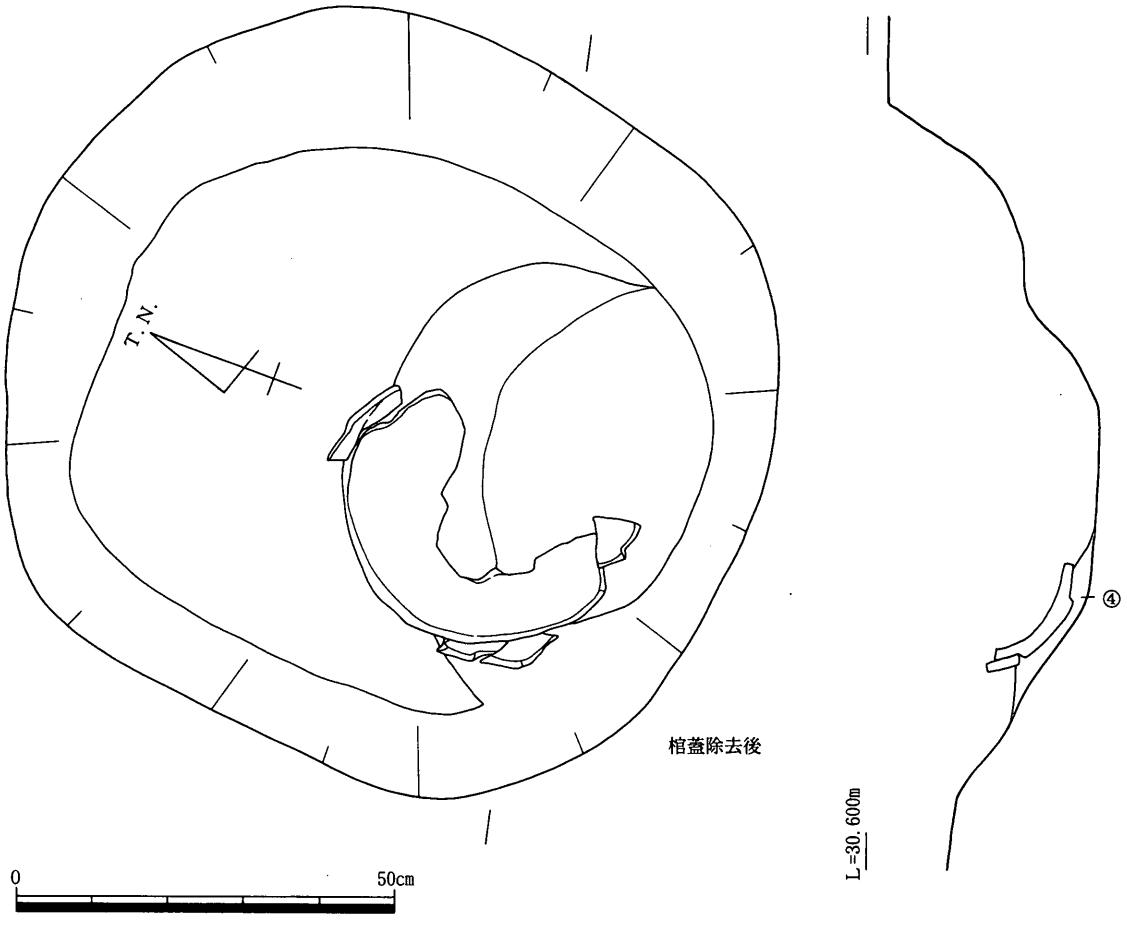
STⅢ54は南丘陵調査区内南部東斜面、標高30.7mで検出した土器棺墓で、掘り方上部は削平されている。

墓壙平面形態は直径約0.93mの歪な円形を呈し、断面は北側が２段になっており、最下段部分はU字状に窪み、深さは約0.61mを測る。東西断面で壺（棺身）の底部が確認でき、壺底部を土壙底面にし、棺身角度を約47°傾斜させ設置している。棺身（壺）底部はほぼ西方向で、口縁部は東方向に向き、この方向は白鳥町、湊川方向である。土層断面でみると棺身底部を土層④で固定し、土層②で周りを埋め戻している。

159は壺で底部に平底を持ち、体部は内湾しながら延び、体部最大径は中位にある。壺の体部上半が残っていないため、打ち欠き部位は不明である。体部外面には縦方向のヘラ磨きが、体部内面には下位に板ナデが、中位に刷毛目が施されている。158は棺蓋の高坏で、体部内・外面にヘラ磨きが施されている。



第121図　STⅢ54平・断面図①(1/10)



第122図　STⅢ54平・断面図②(1/10)

STⅢ55（第124・125図）

STⅢ55は南丘陵調査区内南部東斜面、標高30.1mで検出した土器棺墓で、掘り方上部は削平されているが、棺身・棺蓋は残存している。

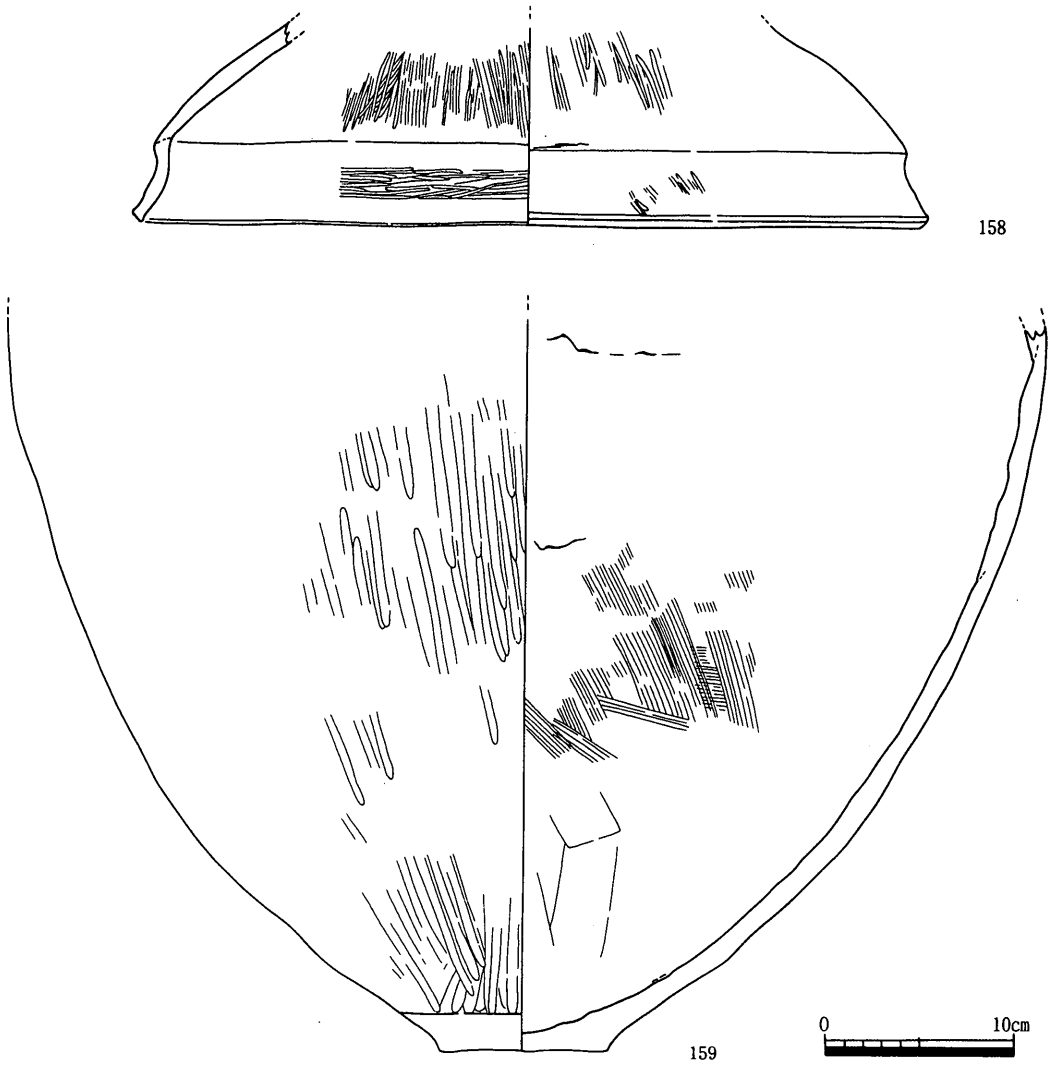
墓壙平面形態は長軸約0.77m、短軸約0.58mの楕円形を呈し、断面は南東側が僅かに２段になっており、最下段部分はU字状に窪み、深さは約0.36mを測る。断面でU字状に窪んだ部分に壺（棺身）の底部を置き、壺体部を高所側にし、棺身角度を約66°傾斜させ設置している。棺身（壺）底部はほぼ東方向に、口縁部は西方向に向き、この方向は丘陵高所方向である。土層断面でみると棺身底部を土壙底部に置き、土層①で周りを埋め戻している。

161は壺で底部に平底を持ち、体部は内湾しながら延び、体部最大径は中位よりやや上方にある。壺の体部上半から打ち欠いている。体部外面には縦方向のヘラ磨きが、体部内面は不明。体部下位に穿孔が認められ、埋設時は底面側に向けて置かれていた。160は鉢で、体部は内湾し、口縁部は外反する。体部外面には叩きが施され、内面には横方向の刷毛目の後、縦方向のヘラ磨きが施されている。

STⅢ56（第126図）

STⅢ56は南丘陵調査区内南部東斜面、標高30.4mで検出した土器棺墓で、掘り方上部は削平され、南部はSTⅢ19によって切られており、STⅢ56内からは破片が散乱した状態で出土した。

墓壙平面形態はSTⅢ19によって切られているものの、直径約0.77mの円形を呈し、断面は不明である



第123図　STⅢ54出土遺物実測図(1/4)

が、底面は南側（SKⅢ19方向）に向かって傾斜している。深さは約0.25mを測る。

163は壺で底部に平底を持ち、体部は内湾しながら延び、体部最大径は上方にある。壺の打ち欠きは頸部と体部の境である。体部外面には下位に板ナデが、体部内面は上位に指ナデが施されている。162は鉢で、口縁部しか残存しておらず、口縁部は外反する。

④まとめ

南丘陵で検出した土壙墓は35基、土器棺墓は21基である。

土壙墓はほとんどが調査区内南半分で検出しており、ほとんど丘陵に並行して造られている。特にSTⅢ25は検出した土壙墓中最大規模を測り、丘陵稜線上に造られていることからこれらの土壙墓群の中心的存在と考えられる。また南側斜面部には平坦面を造り、土壙墓を列埋葬していることやそれぞれの土壙墓がほとんど切り合っていないことからSTⅢ25を中心に規則的・計画的に造営された土壙墓群であることが解る。

ほとんどの土壙墓の主体部構造は土壙墓底面がU字状に窪んでいることや土層断面にU字状を呈する木棺痕跡が確認されていることから木棺底部がU字状あるいは船底状を呈する木棺であることが解るが、中心的存在のSTⅢ25の主体部は墓壙底面が平らなことや両小口に部分的に長側板の痕跡と考えられる突出部が確認できることから組合せ式の箱形木棺であることが解っており、土壙墓の規模・立地・主

体部構造に格差が認められる。

時期的にはほとんど遺物が出土していないので、判然としないが、土器棺墓を切っていることやSTⅢ16・21出土の鉄製品から弥生時代終末から古墳時代初頭にかけて短期間に造営された土壙墓群であると考える。

土器棺墓は概ね４つの時期に分けられる。この４時期は北丘陵の時期とほぼ同じで、棺身（壺）の体部最大径の位置によって設定した。

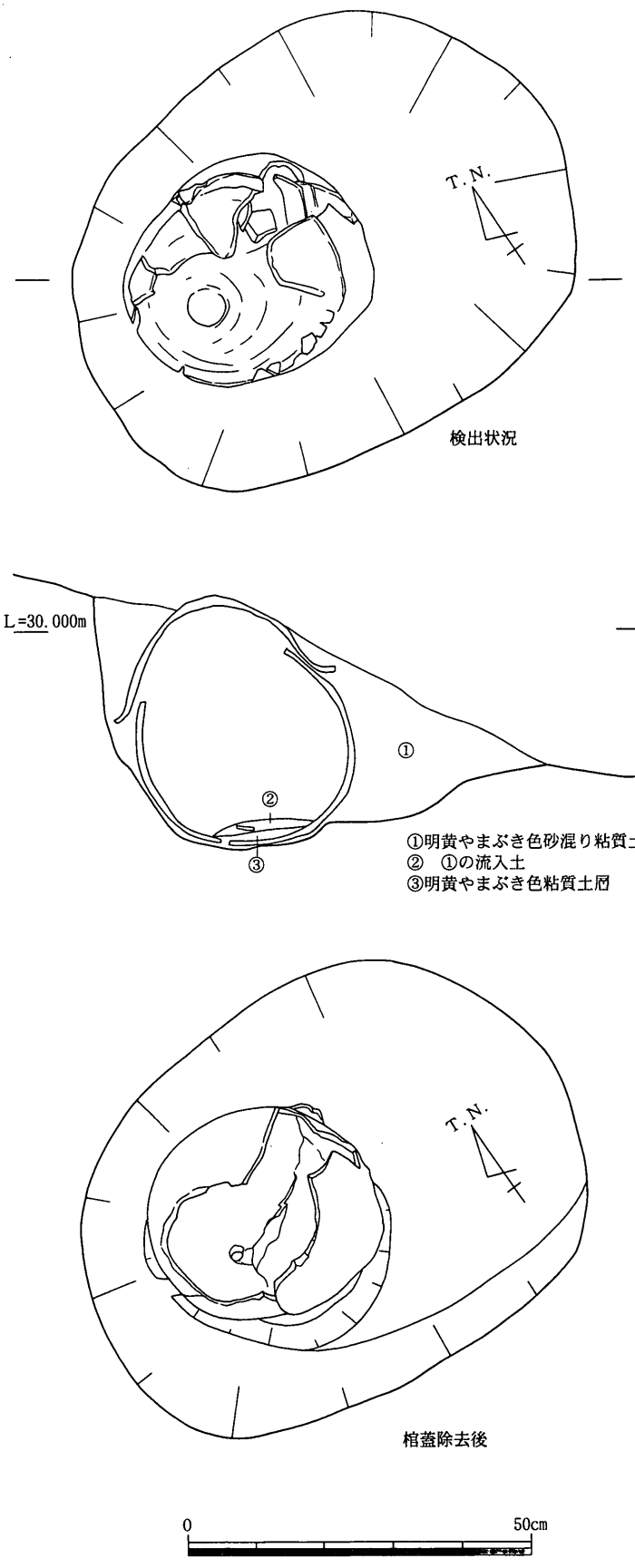
１期は体部最大径が中央より上位にあり、肩の張る形態のものでSTⅢ47、２期は体部最大径が中央よりやや上位にあるものでSTⅢ40・46・54、３期は体部最大径がほぼ中位にあるものでSTⅢ37・39・43・45・48・49・55、４期は体部最大径が中央より下位にあるものでSTⅢ41・52にそれぞれ当たる。

時期は北丘陵と同時期と考えられることから弥生時代後期後半から古墳時代初頭の時期にかけて造営されたものと考える。

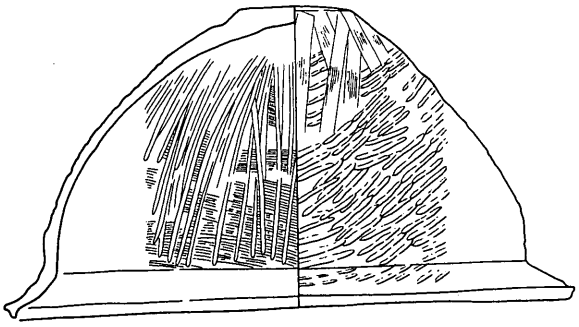
土器棺墓の口縁部方向（棺身主軸方向）には丘陵高所側を向くものや白鳥町側、大内町側と全体でもまた時期ごとにおいても規則性は認められない。

土壙墓・土器棺墓検出時に周辺から多数の土器片が出土している（第128図）。

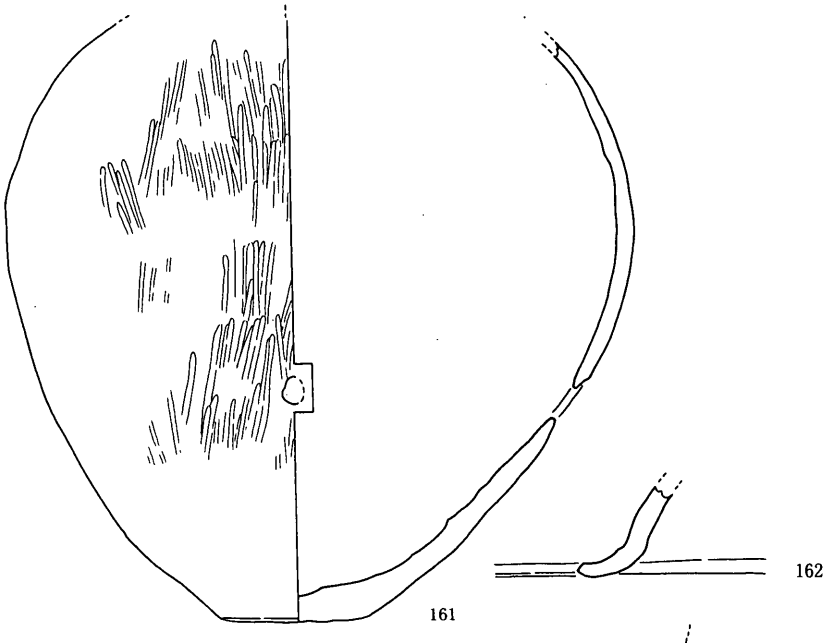
その広がりは特に南斜面を中心に広がっており、その土器片はほとんどが土器棺墓STⅢ53～56の破片と考えられる。しかし土器棺墓を検出していない部分でも土器片を採取していることから検出した土器棺墓以外にも存在した可能性が指摘できる。



第124図　STⅢ55平・断面図(1/10)



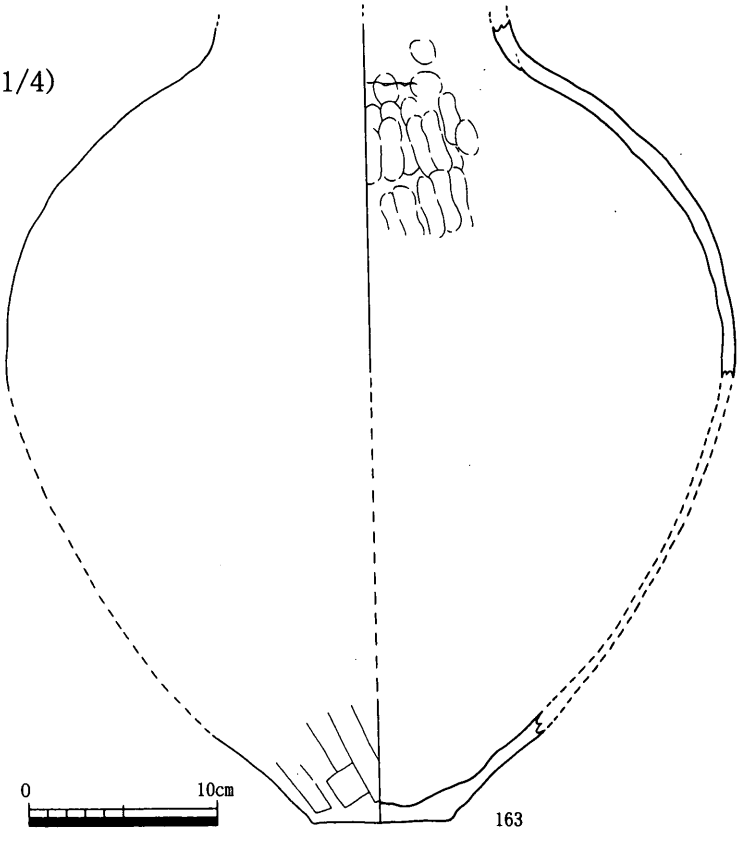
160



161

162

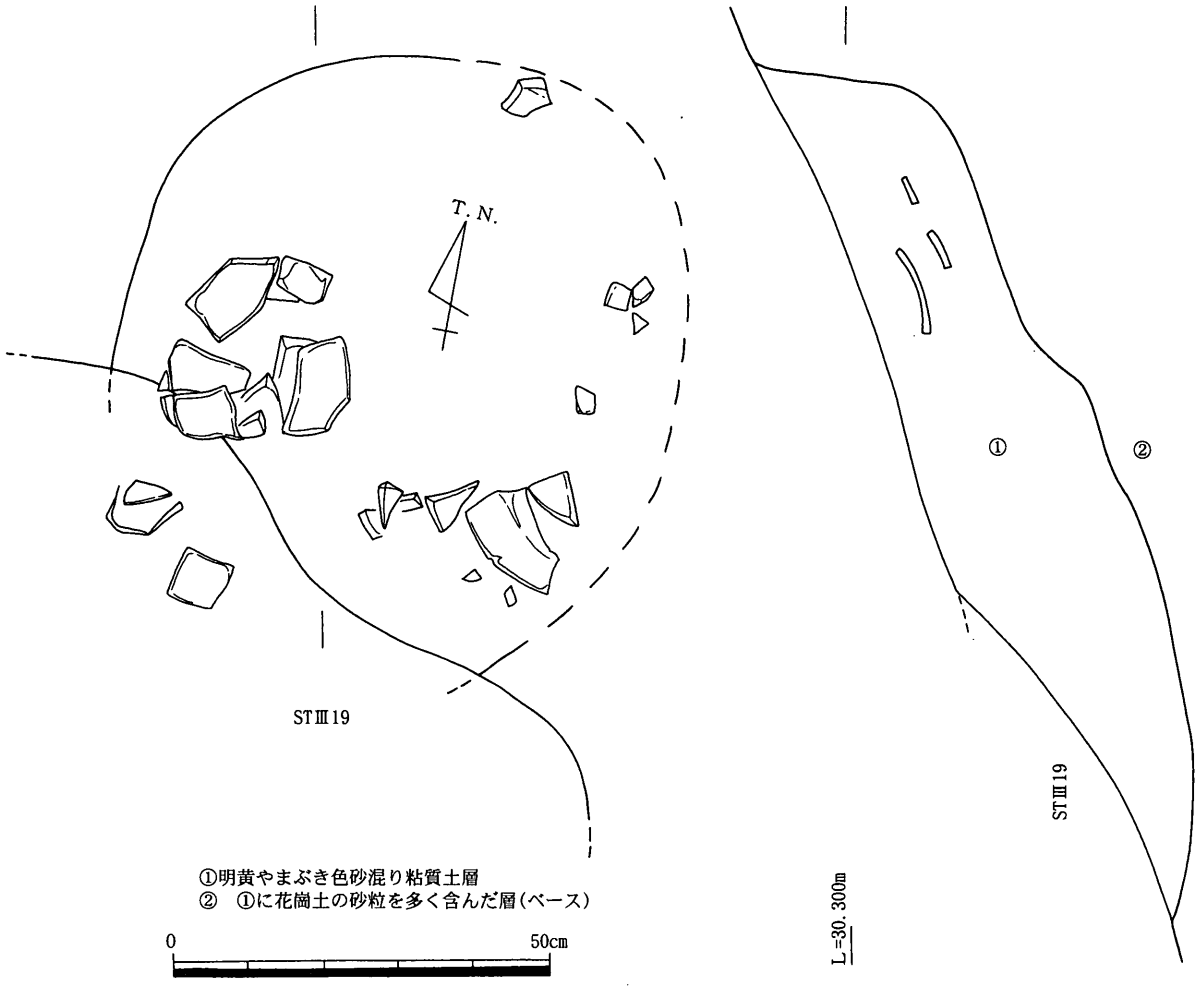
第125図　STⅢ55出土遺物実測図(1/4)



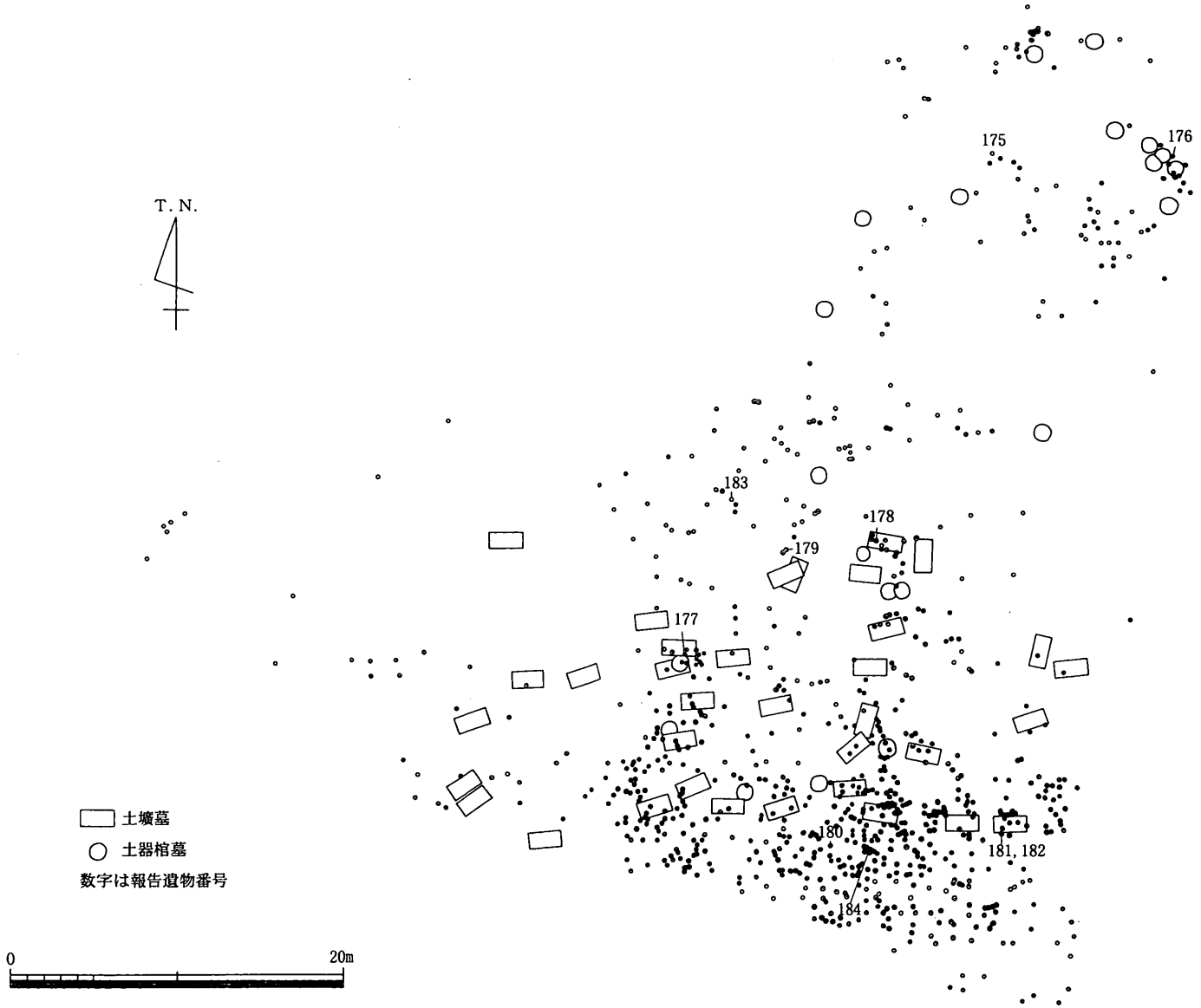
0　10cm

163

第127図　STⅢ56出土遺物実測図(1/4)



第126図　STⅢ56平・断面図(1/10)



第128図　樋端第Ⅲ調査区 土壙墓・土器棺墓位置図、土器片出土位置図(1/400)

④溝状遺構

第Ⅲ調査区南丘陵中央部で溝状遺構を３条検出している。

SDⅢ01（第129・130図）

SDⅢ01は丘陵頂部で検出した溝状遺構で、流路方向はほぼ東西方向で緩やかに屈曲し、平面形態が三日月状を呈する。底面は西側が２段になり、平らな面を持つが、東側は傾斜が急である。規模は幅約1.7m、深さ0.51mを測る。

溝内よりサヌカイト製の楔状石器（第129図167）が出土している。

この溝の屈曲は南側を意識しているようで、南側に土壙墓はSTⅢ06・07があり、おそらくこれらの土壙墓の区画溝と考えられる。

時期は弥生時代終末から古墳時代初頭と考えられる。

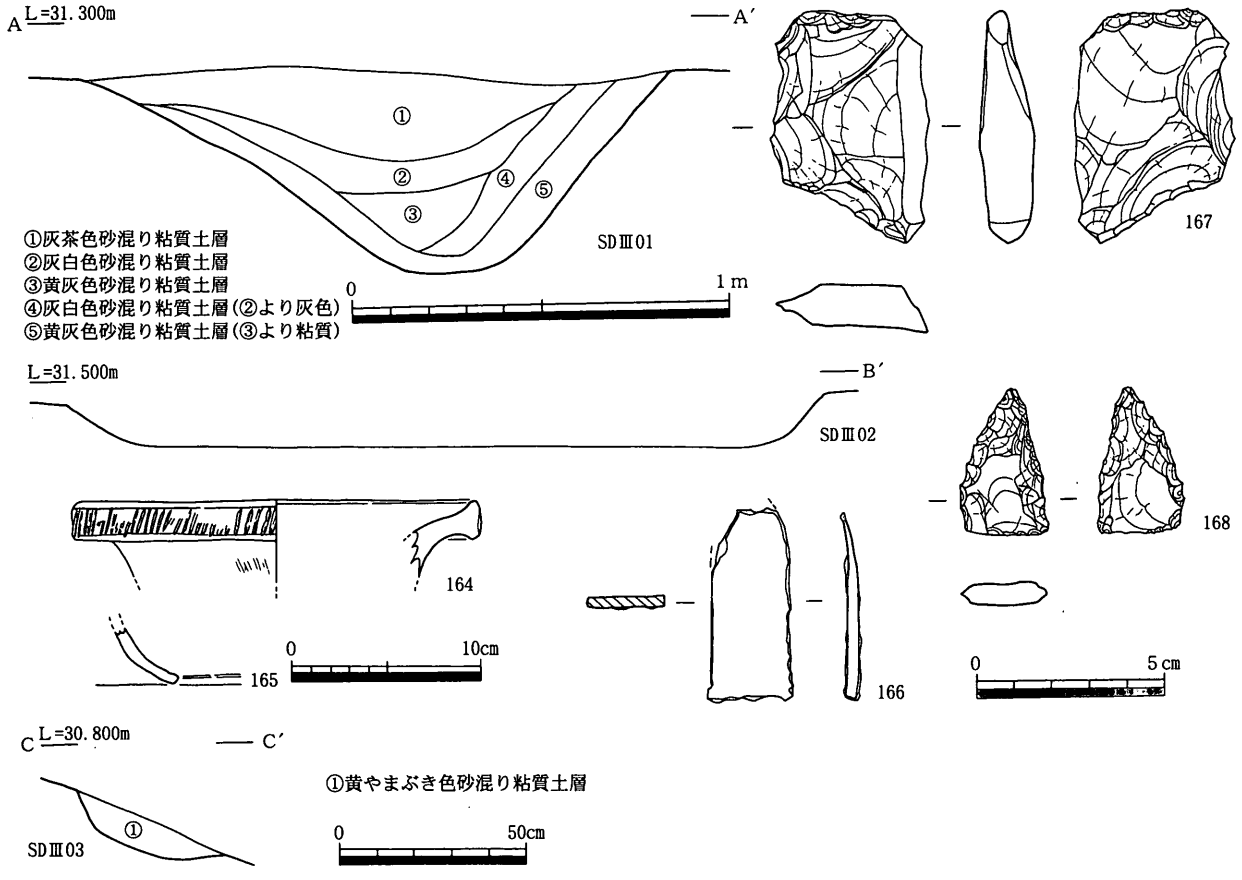
SDⅢ02（第129・130図）

SDⅢ02は丘陵頂部で検出した溝状遺構で、流路方向はほぼ南北方向で、丘陵稜線に直交する。北側は不明であるが南側は僅かに東に屈曲し、溝の東側を意識したものと考えられる。この溝の東側はちょうど南丘陵が北方向に屈曲する部分であるために当初古墳の周溝とも考えたが、屈曲部分にその痕跡は確認できなかった。断面は緩やかなU字状を呈し、規模は幅約4.5m、深さ0.3mを測る。

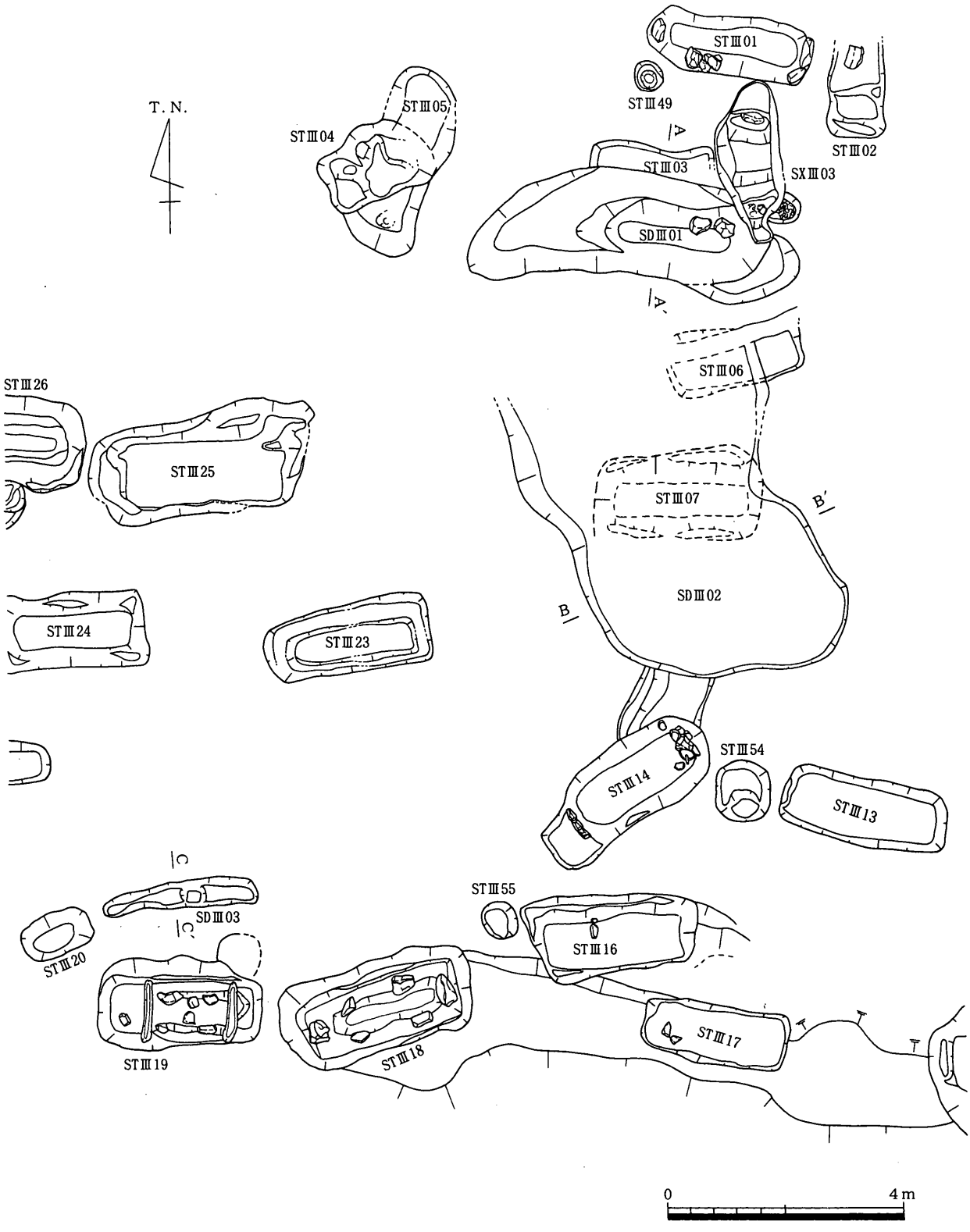
溝の底面でSTⅢ07を検出し、北側ではおそらくSTⅢ06を切っているものと考えられる。

溝内より弥生土器壺・高坏、サヌカイト製石鏃、不明鉄製品（第129図164～166・168）が出土している。

時期はSTⅢ07を切っていることから古墳時代以降と考えられる。



第129図　SDⅢ01～03土層断面図(1/20)、出土遺物実測図(1/4, 1/2)



第130図　SDⅢ01～03平面図(1/100)

SDⅢ03（第129・130図）

SDⅢ03は丘陵南斜面で検出した溝状遺構で、流路方向はほぼ東西方向で緩やかに屈曲する。断面はU字状を呈し、規模は幅約0.46m、深さ0.1mを測る。

溝内より遺物は出土していない。

この溝の屈曲は南側を意識しているようで、南側には約0.8m離れて、土壙墓はSTⅢ19がある。おそらくこの土壙墓に伴うものと考えられ、樋端遺跡内で区画溝を持つ土壙墓はこれ１基のみである。

⑤不明遺構

南丘陵はほぼ中央部で北方向に屈曲し、その屈曲部から北は西側がかなりの範囲後世の畑地化により平らに削平されており、ほとんど旧状を呈していない。SXⅢ01・02を検出した位置は東側で僅かに残る丘陵頂部である。また東斜面は急傾斜になっており、STⅢ11以外遺構を確認していない。

この僅かに残る丘陵頂部は、東にある集落から丘陵に上る山道によって斜め方向に切り通しの痕跡が確認できる。この切り通し部の北側と南側でSXⅢ01・02を検出した。

SXⅢ01（第131図）

SXⅢ01は南丘陵調査区内北部稜線上、標高31.4mで検出した不明遺構である。

SXⅢ01は切り通し部の北側で検出した。遺構はこの丘陵頂部に直交する溝状の掘り方を持ち、内部に拳大（８cm程度）から人頭大（20～30cm程度）の砂岩（川原石）を不規則に投げ込まれた状態で検出した。東西の小口部分に明確な肩部はなく、当初は丘陵に直交する溝内に川原石が投げ込まれたものと考えられていた。しかし上部に堆積した川原石を除去すると南側側壁に沿って幅18～40cm、厚さ10cm程度の砂岩（川原石）が直列状に確認でき、人為的な配置であることが窺われた。

このような人為的に配置された礫はこれ以外になく、また断面をみると緩やかなU字状を呈し、その底部に川原石が置かれている状況が解る。

以上の状況からSXⅢ01の性格は判然としない。

167はこの遺構から出土した壷である。時期は弥生時代と考えられ、この遺構が弥生時代の所産の可能性がある。

SXⅢ02（第132図）

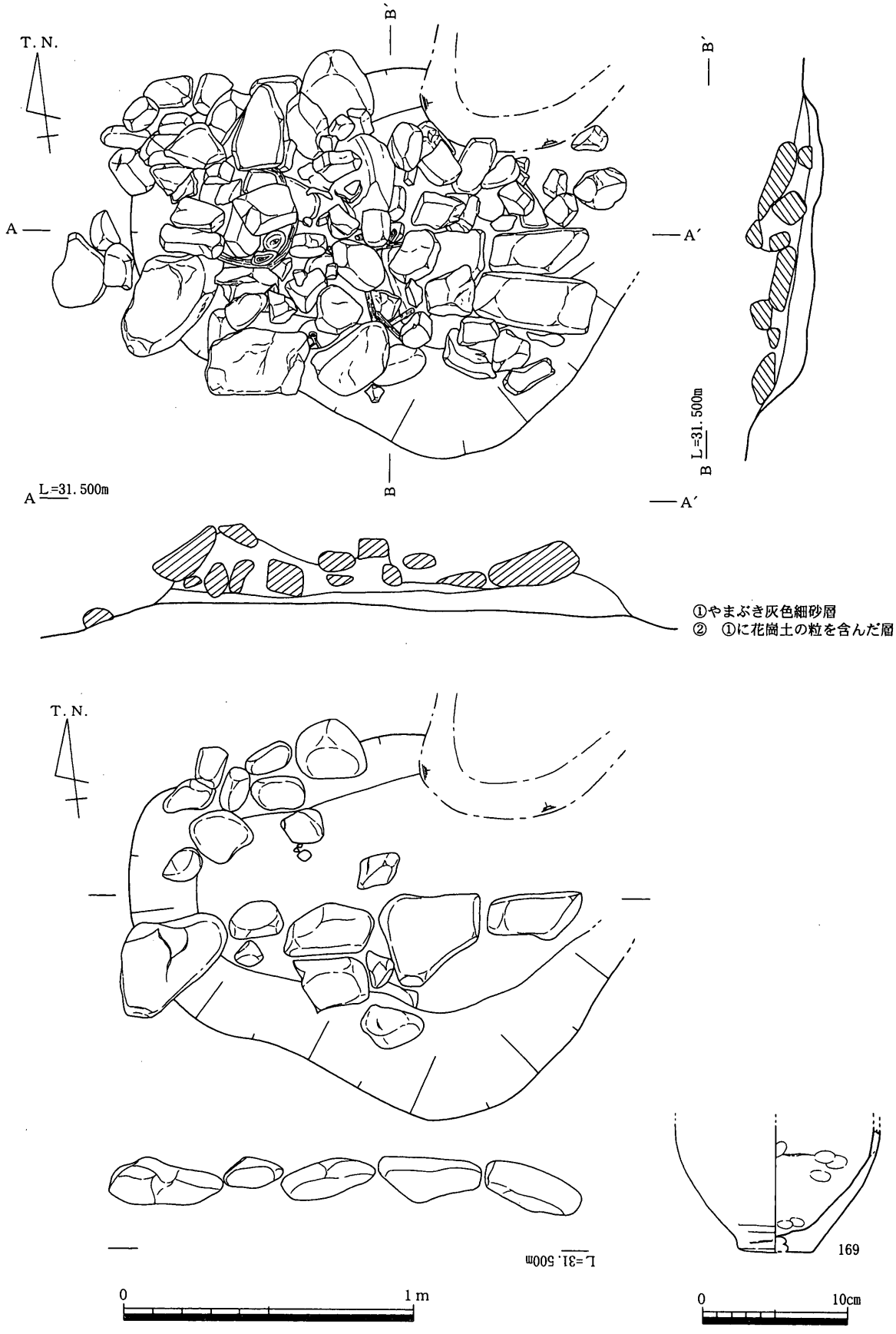
SXⅢ02は南丘陵調査区内北部稜線上、標高31.5mで検出した不明遺構である。

SXⅢ02は切り通し部の南側で検出した。遺構はこの丘陵頂部に直交する溝状の掘り方を持ち、内部に拳大（８cm程度）から人頭大（20～30cm程度）の砂岩（川原石）を不規則に投げ込まれた状態で検出した。東西の小口部分に明確な肩部はなく、当初は丘陵に直交する溝内に川原石が投げ込まれたものと考えられていた。しかし上部に堆積した川原石を除去すると東側小口部分に幅18～40cm、厚さ10cm程度の砂岩（川原石）が並列状に確認でき、人為的な配置であることが窺われた。

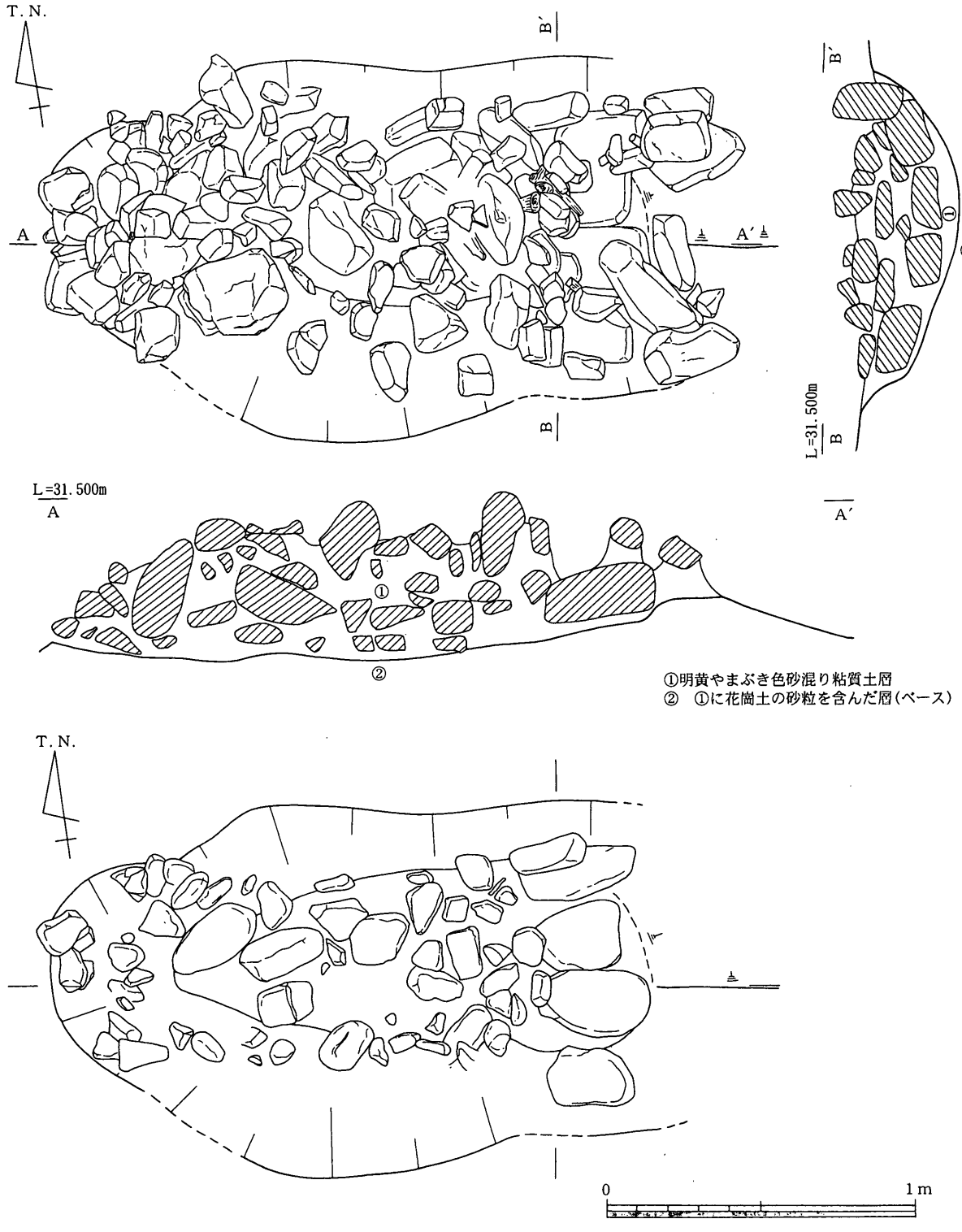
このような人為的に配置された礫はこれ以外になく、また断面をみるとU字状を呈し、その底部に小口部分の川原石が置かれている状況が解る。

以上の状況からSXⅢ02の性格は判然としない。

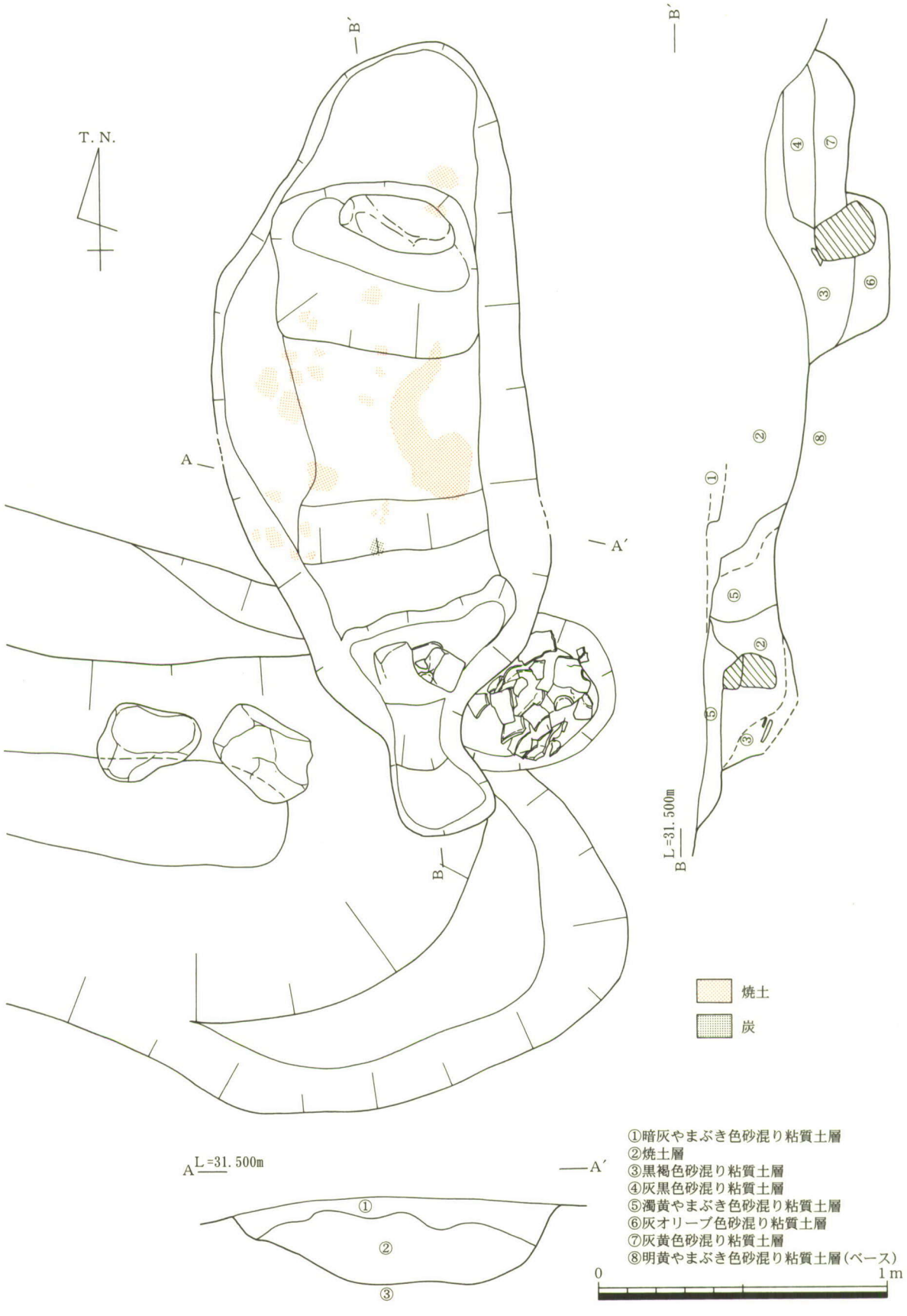
このSXⅢ01・02は丘陵に直交、遺構内検出の川原石などの検出状況から同様な遺構であることが判明した。これら遺構間の距離はSXⅢ01の南掘り方とSXⅢ02の北掘り方で約3.5mを測り、中心で約4.8mを測る。この遺構を遺構間に存在した遺構を区画する溝とも考えられるが、遺構間に遺構を検出していな



第131図　SXⅢ01平・断面図(1/20)、出土遺物実測図(1/4)



第132図　SXⅢ02平・断面図(1/20)



第133図　SXⅢ03平・断面図(1/20)

い現状では判然としない。

SXⅢ03（第133図）

SXⅢ03は南丘陵調査区内中央部稜線上、標高31.4mで検出した不明遺構である。平面形態が南北に長い溝状を呈し、南部に突出部を持つ。土層断面から土層⑦（地山）上に貼り付けた土層④の隔壁状のものを境として南側には下位に土層③（黒褐色を呈する焼土層）があり、上部に土層②（焼土層に礫が混じる）が堆積する。この土層③は被熱によるものと考えられ、この部分が燃焼施設である可能性が考えられる。この土層③はこの遺構の北側でも確認されている。この北側の土層③下位にはさらに方形の土坑があり、方柱状の川原石が置かれていた。また隔壁状を呈する土層⑤の北壁は熱を受け、赤変している。また上部に土層②（焼土）が堆積していることからこの部分でも燃焼行為が行われた可能性が指摘できる。

以上の検出状況から何らかの焼成遺構と考えられるが、性格まで確認できなかった。

このSXⅢ03はSDⅢ01及びSTⅢ14を切っており、明らかに弥生時代後期よりは後出するが、出土遺物がないために時期は不明である。

2．神越３号墳

(1)調査前の状況

神越３号墳の所在する丘陵は虎丸山から北東方向に派生する丘陵の内、原間遺跡を挟み東側にある。この東側の丘陵は原間６号墳、原間５号墳が所在する主丘陵から樋端１号墳、樋端２号墳、神越３号墳が所在する支丘陵に先端付近で北東方向に分岐する。

神越３号墳が所在する丘陵は東丘陵、標高約61.2mを測る頂部から北東方向に分岐し、湊川の西岸を並行して延びる。この丘陵は調査区内で部分的に東西方向に延びる部分が確認でき、その屈曲部、標高約34.5mの頂部に神越３号墳は所在する。

調査前は雑木林が生い茂っていたが、以前はこの丘陵も畑として開墾されていたようで、調査後僅かに段々畑の痕跡が確認できた。この開墾のためか、調査前の踏査や調査前の地形測量を実施しても地形的に墳丘らしきものは確認できなかった。

調査にあたっては地形測量図及び予備調査の結果を踏まえ、稜線上及び主体部に直交する計３本の畔を設定し、表土剥ぎから開始した。

(2)墳丘・周溝

標高約34.5mの頂部に神越３号墳墳丘は所在する。尾根筋の北・南側は後世の畑地化のために墳形は明確には判断できない。しかし尾根筋の南西側に残る周溝がやや弧を描いていることより円墳と考えられ、墳丘部から周溝最下部への変換点を墳裾とした場合に直径約8.54m、墳高は南西側部分の周溝最下部から約0.8mを測る。墳丘に明確な盛土はなく、腐葉土及び部分的に若干の包含層（流失土）が確認でき、直下で花崗土を基盤とする地山が全面で検出できる。腐葉土直下で墓壙掘り方が検出できることや墳高がかなり低いことから墳丘中心部はかなり削平を受けているものと考えられる。

周溝は検出状況から延長約2.7m、最大幅約1.3m、土層断面から幅約1.2m、深さ約0.25mの規模を持つ。周溝から遺物は出土していない。

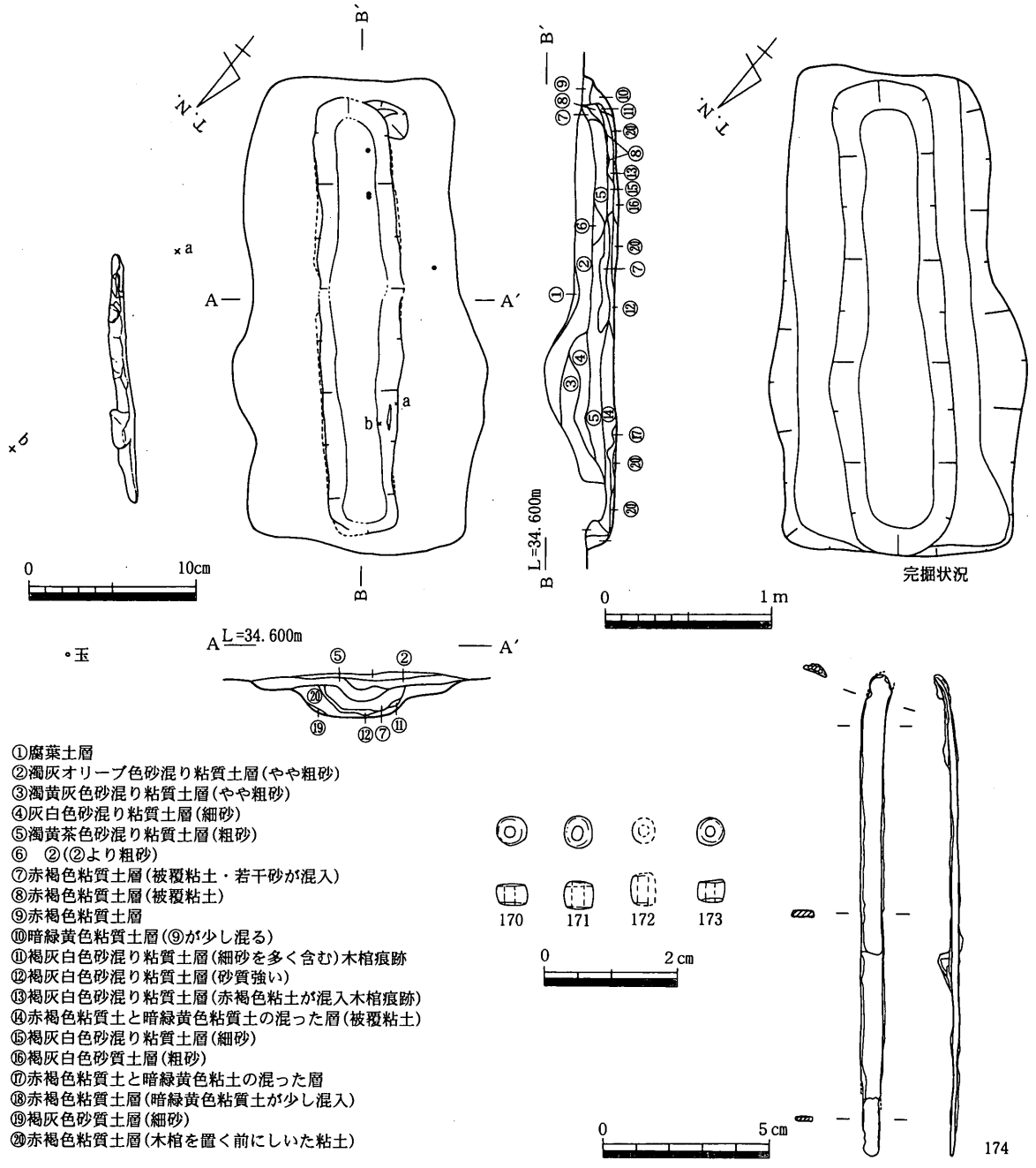
(3)埋葬施設

埋葬主体は墳丘のほぼ中央に１基確認した。主体部は腐葉土を取り除くと花崗土（一部花崗岩）になり、その直上で検出した。

主体部は標高34.5mで検出した粘土槨木棺墓で、平面形態は検出面で隅丸の長方形を呈する。

まず墓壙の被覆土と考えられる土層①～⑥と木棺被覆粘土土層⑦・⑧・⑭を取り除くと小口部分約10～15cm、側辺側で40～50cm程度の平らな部分を持ち、中央部が隅丸の長方形状に窪む所謂２段掘の墓壙となる。規模は検出面掘り方で長辺約2.75m、幅約1.25m（北西小口幅約1.30m、南東小口幅約1.20m）、平らな部分までの深さ約0.07mを測る。中央部の窪み部の規模は長辺約2.53m、幅0.48m（北西小口幅約0.43m、南東小口幅約0.45m）、深さ約0.20mを測る。この面で墓壙ほぼ全面には土層⑳（赤褐色粘質土）を検出した。

土層断面観察の結果、特に土層⑳は木棺下位から周囲に置かれた土層で、土層⑦・⑧・⑭は木棺を直接被覆した土層と考えられる。これらの土層は長軸土層断面でみると均一にではなく、部分的には土色・土質を微妙に変えているが、短軸土層断面でみると２段掘を呈する墓壙掘り方底面上に土層⑳が連続して、墓壙底面に厚さ３～10cm程度で同じように確認できることから、その上面に木棺を置いたもの



第134図　神越３号墳主体部平・断面図(1/40)、出土遺物実測図(1/1、1/2)

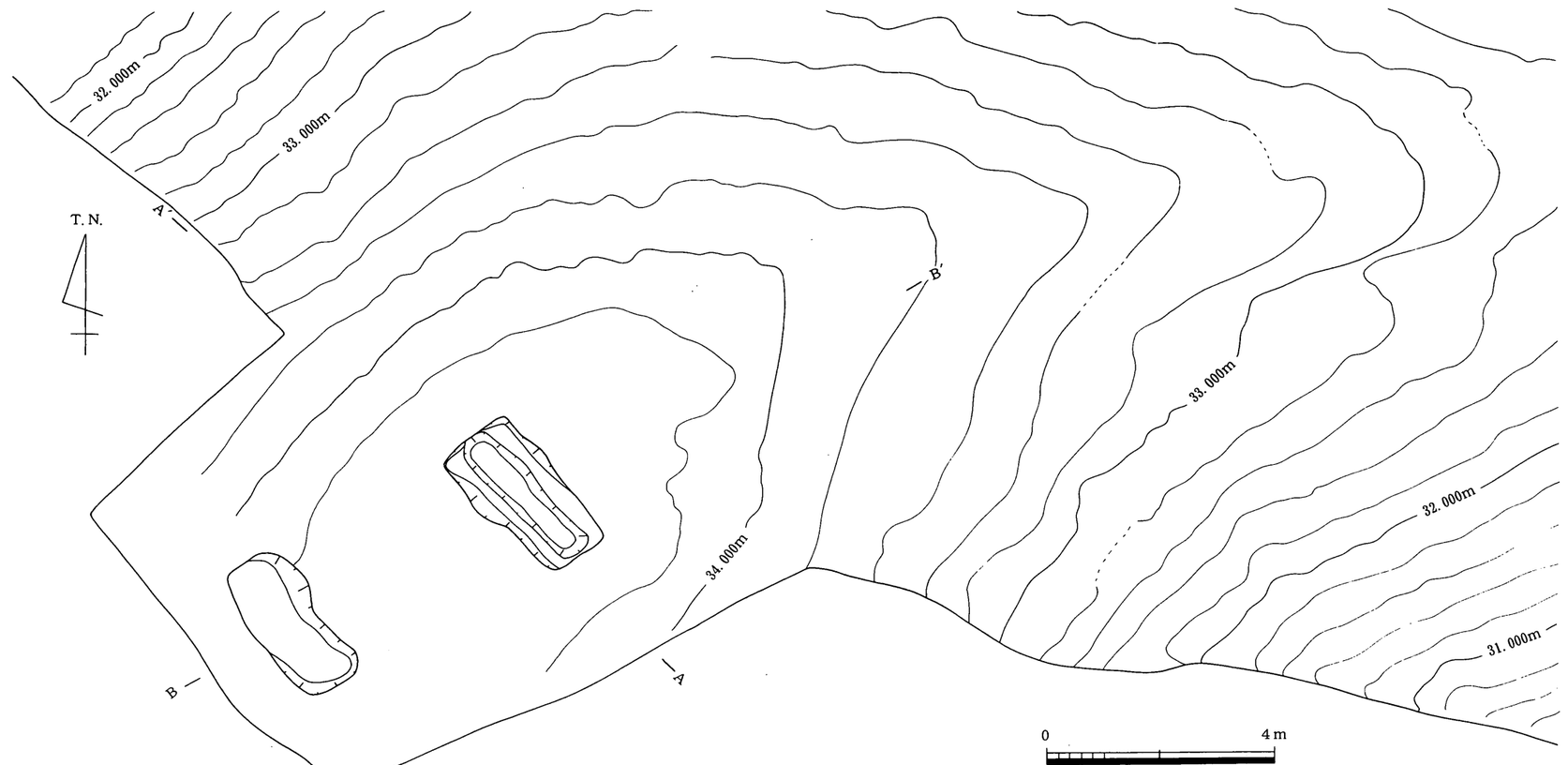
と考えられる。

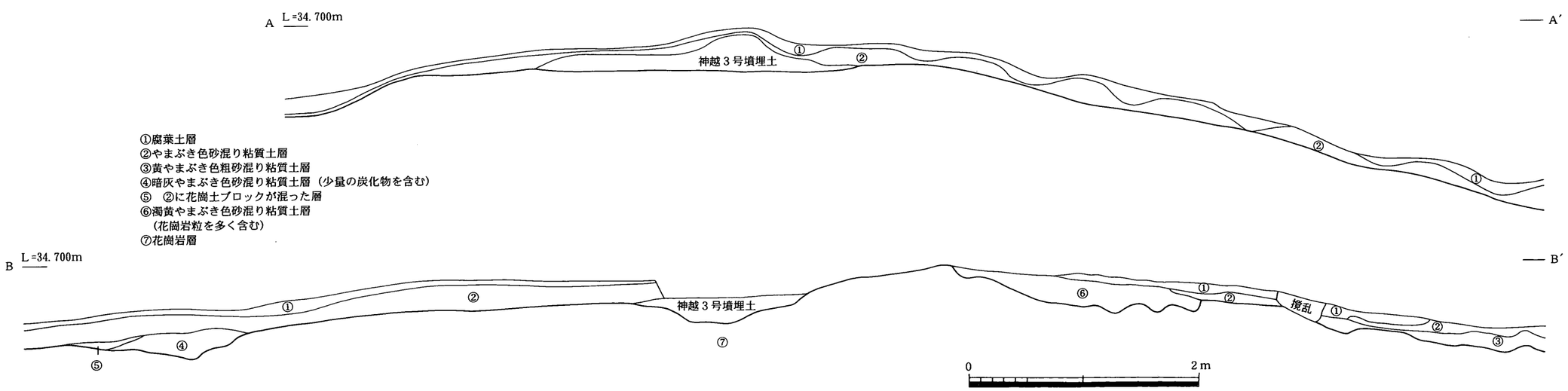
土層断面をみると中央の窪み部分が円形を呈することから割竹型の木棺と考えられ、規模は土層⑳の上面の幅で外径約0.53m、長さ約2.5mを測る。

埋葬手順は地山を掘削し、２段掘の土坑を造り、まず窪み部分の底面と段上部に土層⑳を敷くことで棺の安定と棺下部の粘土による被覆が完成する。棺を設置後土層⑦・⑧・⑭を棺全面を被覆する。そして最終的に土層①・②・⑤により墓壙は埋め戻される。

墓壙は長軸主軸はＮ－42°－Ｗを取る。

遺物は木棺上面の被覆粘土土層⑦・⑧・⑭を取り除くと木棺部が窪むように全面に木棺痕跡土層⑪・⑬を検出し、その上面で出土した。





第135図　神越３号墳平・断面図(1/100、1/40)

遺物はガラス玉４個、鉄製の鉇１点で、ガラス玉は木棺部分南東側（木棺内）で３個、南西側土層⑳上面（木棺外）が出土した。鉇は木棺部分北西側（木棺内）の南側辺に沿って出土した。

(4)出土遺物

木棺内出土遺物

168～170は棺内から出土したガラス玉である。色調は空色（青色）を呈するもので、直径４㎜程度で、高さ３㎜程度を測る。

172は鉄製の鉇である。刃部が右方向に屈曲しており、埋葬時に折り曲げられたものか、土圧によって曲がったものかは不明である。刃部が鍬形を呈し、刃部表には僅かに鎬が認められる。刃部と茎部のの境には明確な関を持たない。現存長14.1cm、刃部長2.5cm、刃部最大幅0.7cm、茎－柄部長11.6cm、柄部幅0.7cm、厚さ0.2cmを測る。

この鉇は古瀬分類（1993）のＩａ類に当たる。時期は古墳時代全時期に認められる。

木棺外出土遺物

171は棺外から出土したガラス玉である。棺内から出土したガラス玉と同色を呈し、大きさもほとんど同じである。

これらの出土位置から頭位は東と考えられる。

時期は明確に時期決定できる遺物が出土していないが、埋葬主体部の構造等からＴＫ23型式併行期の所産と考えられる。

(5)まとめ

調査の結果、主体部は粘土槨木棺墓であることが判明した。この主体部構造は原間３号墳と同じで、当古墳に共伴する遺物が出土していないが、おそらくほぼ同時期か若干後出するものと考えられる。

神越３号墳は主体部の長軸主軸がＮ－42°－Ｗ（頭位を東とすると南へ48°）を取っているが、丘陵稜線に直交することから、東西主軸を指向するものではなく、丘陵に規制された主体部主軸と考えられ、原間３号墳と比較すると原間３号墳は頭位が東で、南15°、26°と依然東西主軸を指向していることと丘陵稜線に斜行していることから、神越３号墳より若干古く位置付けられるものと考えられる。

古瀬清秀『古墳出土の鉇の形態的変遷とその役割』「考古論集－慶祝松崎寿和先生六十三歳論文集－」松崎寿和先生退官記念事業会編1997.3

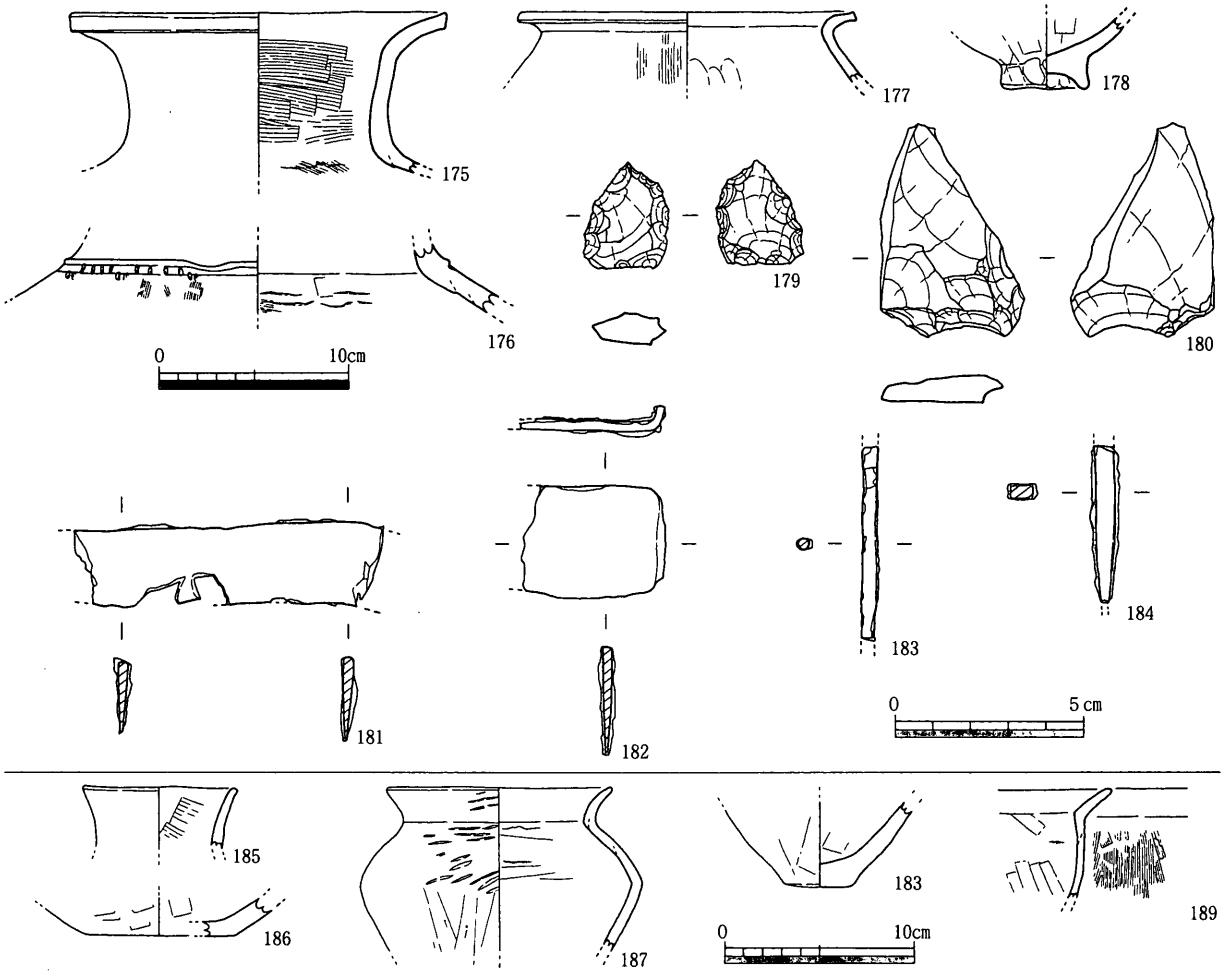
古瀬清秀『副葬品の種類と編年　農耕具』「古墳時代の研究　第８巻　古墳Ⅱ　副葬品」雄山閣1991.11

3．包含層出土遺物

173～182は出土位置が解る遺物で、弥生土器・石製品・鉄製品がある。

173～176は弥生土器で、時期は後期後半である。177・178はサヌカイト製の石鏃とスクレイパーと考えられる。179・180は鎌で、直刃鎌である。181・182は鏃の茎と考えられる。

183～187は包含層出土遺物で、弥生時代後期後半から古墳時代後期初頭と考えられる。



第136図　樋端第Ⅲ調査区包含層(1/4、1/2)

第３章　自然科学分析の結果

第1節　樋端遺跡・金毘羅山遺跡出土遺物の分析について

（財）元興寺文化財研究所

１．調査対象

No.１　鏡１（破鏡）樋端遺跡

No.２　鏡２（破鏡）金毘羅山遺跡

２．調査手順

表面から非破壊で、ケイ光X線分析（以下、XRF）による元素分析を行った。分析箇所は写真１と２の①～②である。鉛の有無を確認した後、それぞれの遺物の欠損部（③）から直径1.2mmのドリルで金属部分を粉体試料として採取し、そのXRF分析も行った。

採取した試料を用いての鉛同位体比測定の調査を、東京国立文化財研究所　保存科学部　平尾良光氏らにお願いした。

３．使用機器及び測定条件

●エネルギー分散型ケイ光X線分析装置（セイコーインスツルメンツ㈱製SEA5230）

試料の微小領域X線を照射し、その際に試料から放出される各元素に固有のケイ光X線を検出することにより元素を同定する。

モリブデン管球使用、大気条件下、コリメータ1.8mm、管電圧45kV

４．結果

いずれの鏡も、検出したのは主に銅（Cu）、スズ（Sn）、鉛（Pb）であった。他にヒ素（As）、銀（Ag）、アンチモン（Sb）、鉄（Fe）を検出した。

青銅製の鏡であり、鉛、ヒ素、銀、アンチモンは鏡に当初から含まれているものとみられる。表面から検出している鉄は土壌の影響によるものと考える。

No.１、No.２共に、表面の①、②で検出されたヒ素、銀、アンチモンが、内部から採取した試料③では、わずか、またはほとんど検出されていない。内部に微量含まれる成分が腐食により表面に濃縮されているために、このような現象がみられると推測する。

鉛同位体測定の結果については、平尾氏らの報告書を参照されたい。

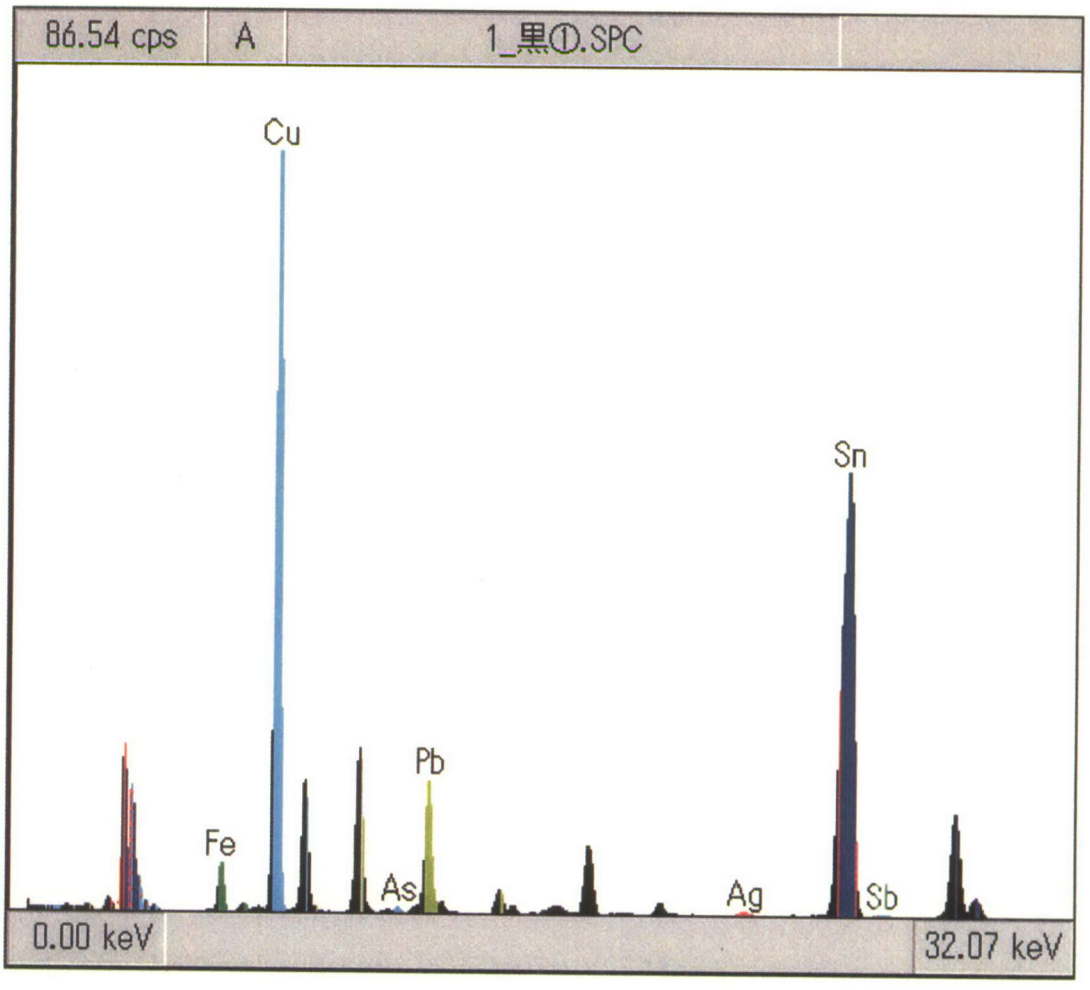
［測定条件］

測定装置	SEA5230
測定時間（秒）	300
有効時間（秒）	214
試料室雰囲気	大気
コリメータ	φ1.8 mm
励起電圧（kV）	45
管電流（μA）	36
コメント	99257香川県　No.1鏡１ 鏡背縁　黒色部①

［試料像］

視野: [X,Y] 6.25,　4.67 (mm)

［スペクトル］

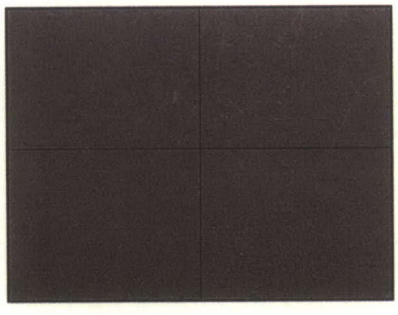


第137図　No.１　鏡１　①のＸＲＦスペクトル

［測定条件］

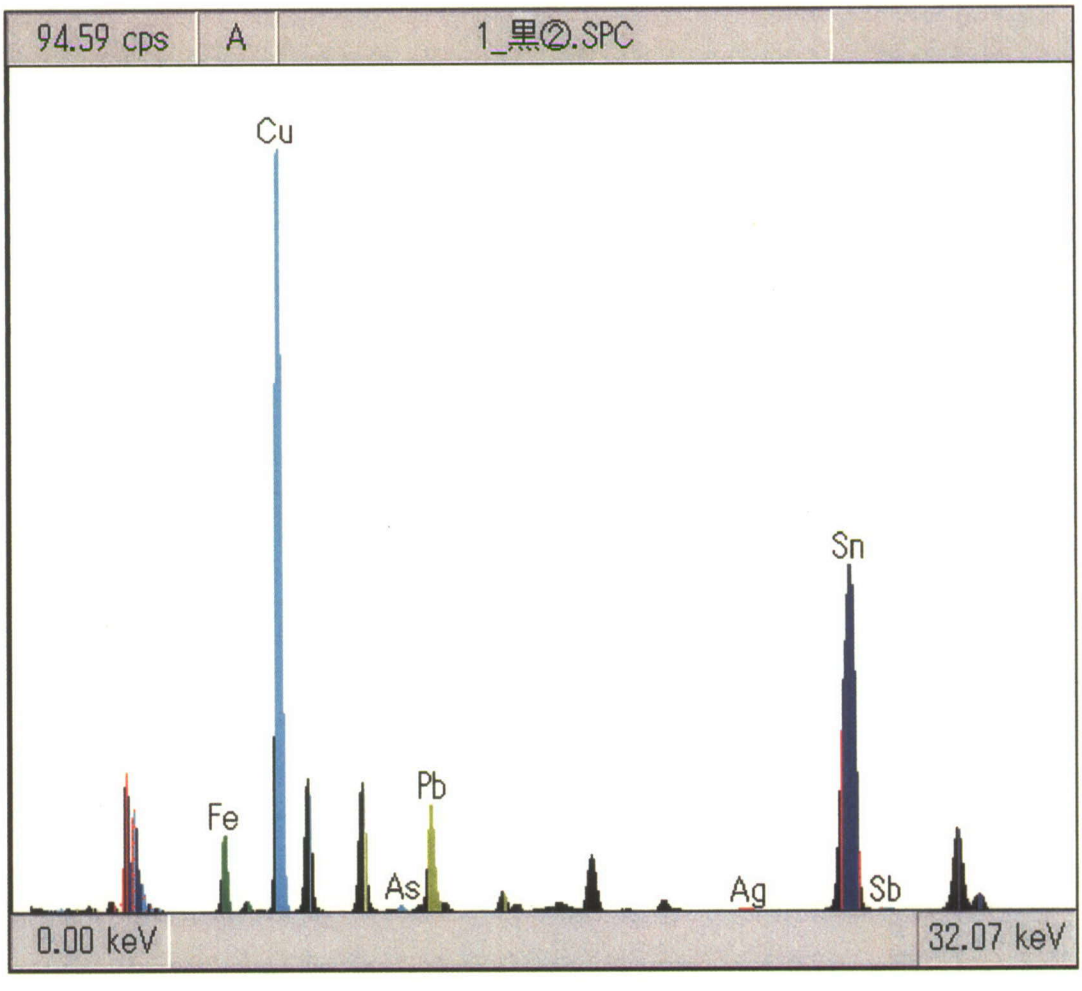
測定装置	SEA5230
測定時間（秒）	300
有効時間（秒）	219
試料室雰囲気	大気
コリメータ	φ1.8 mm
励起電圧（kV）	45
管電流（μA）	32
コメント	99257香川県　No.1鏡１ 鏡背縁　黒色②

［試料像］



視野: [X,Y] 6.25,　4.67 (mm)

［スペクトル］

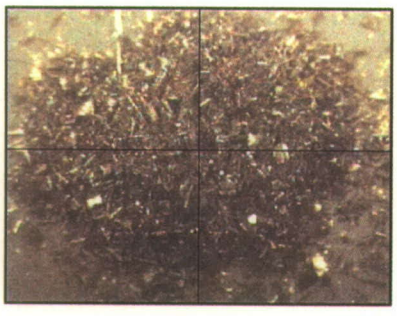


第138図　No.１　鏡１　②のＸＲＦスペクトル

［測定条件］

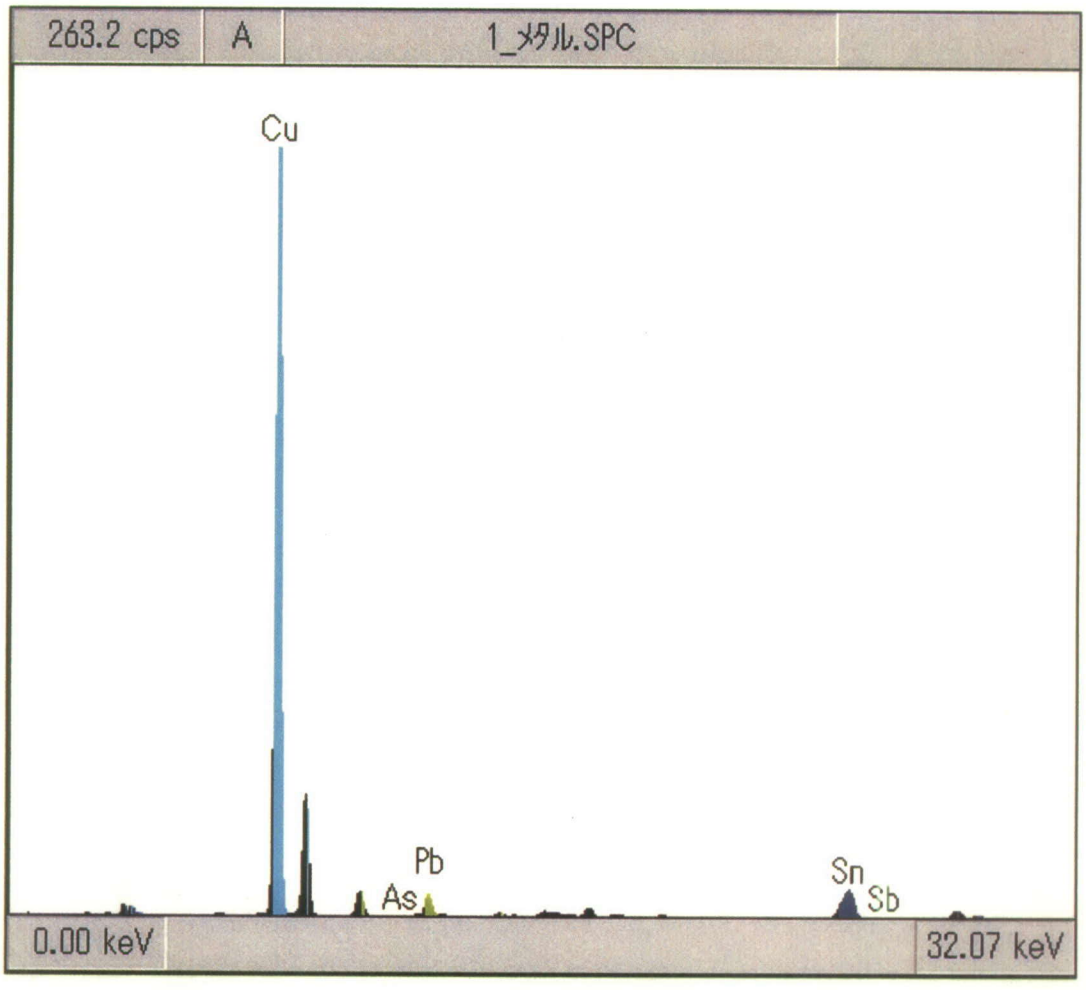
測定装置	SEA5230
測定時間（秒）	300
有効時間（秒）	215
試料室雰囲気	大気
コリメータ	φ1.8 mm
励起電圧（kV）	45
管電流（μA）	20
コメント	99257香川県　No.1鏡１ ﾒﾀﾙｻﾝﾌﾟﾘﾝｸﾞ試料

［試料像］



視野: [X,Y] 6.25,　4.67 (mm)

［スペクトル］

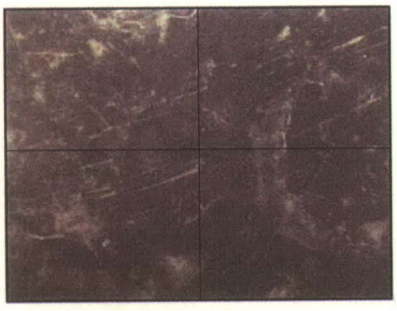


第139図　No.1　鏡１　③からの採取試料のＸＲＦスペクトル

［測定条件］

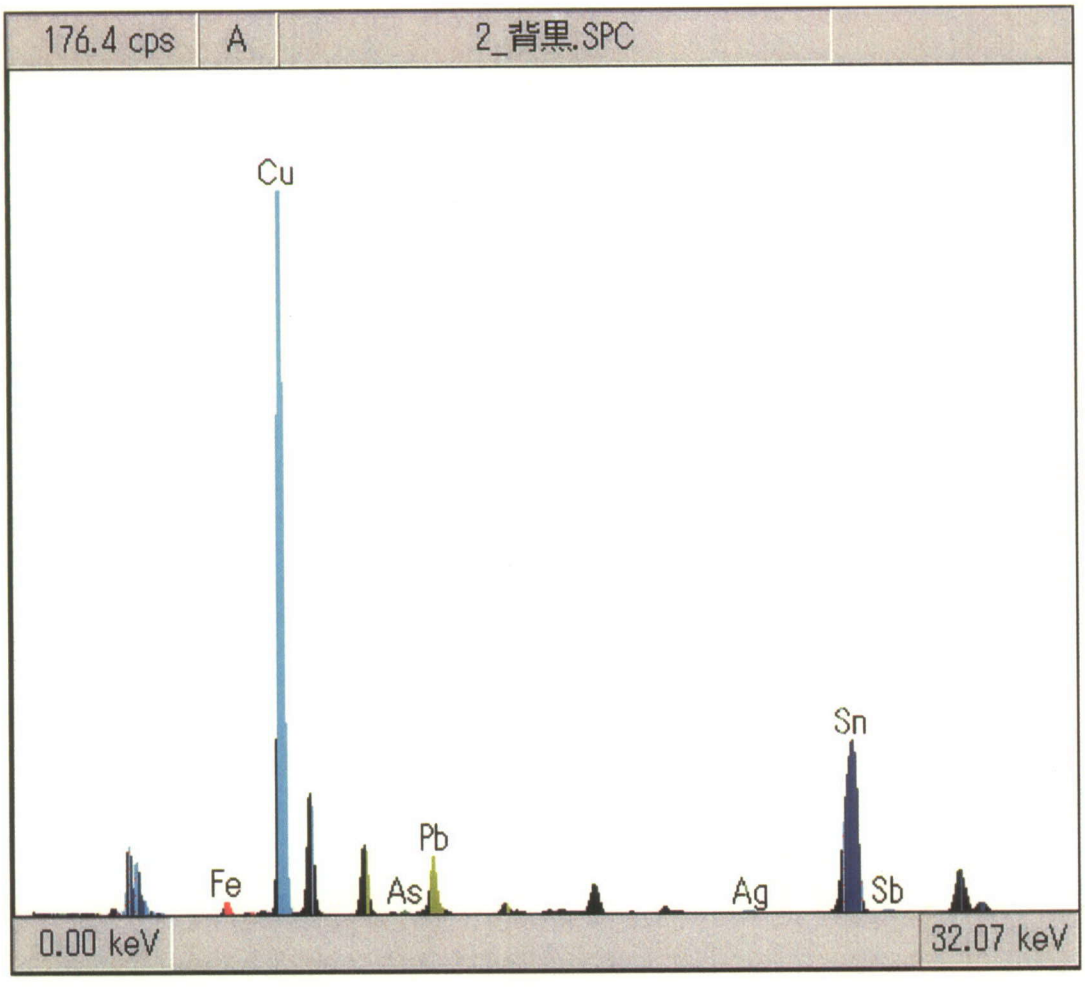
測定装置	SEA5230
測定時間（秒）	300
有効時間（秒）	208
試料室雰囲気	大気
コリメータ	φ1.8 mm
励起電圧（kV）	45
管電流（μA）	32
コメント	99257香川県　No.2鏡２ 鏡背縁　黒色部

［試料像］



視野: [X,Y] 6.25,　4.67 (mm)

［スペクトル］

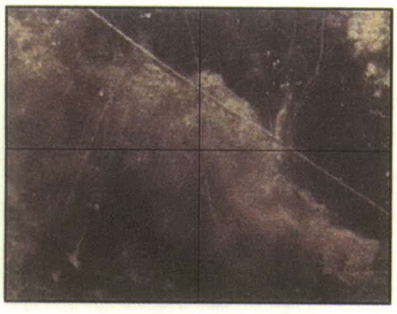


第140図　No.２鏡２　①のＸＲＦスペクトル

［測定条件］

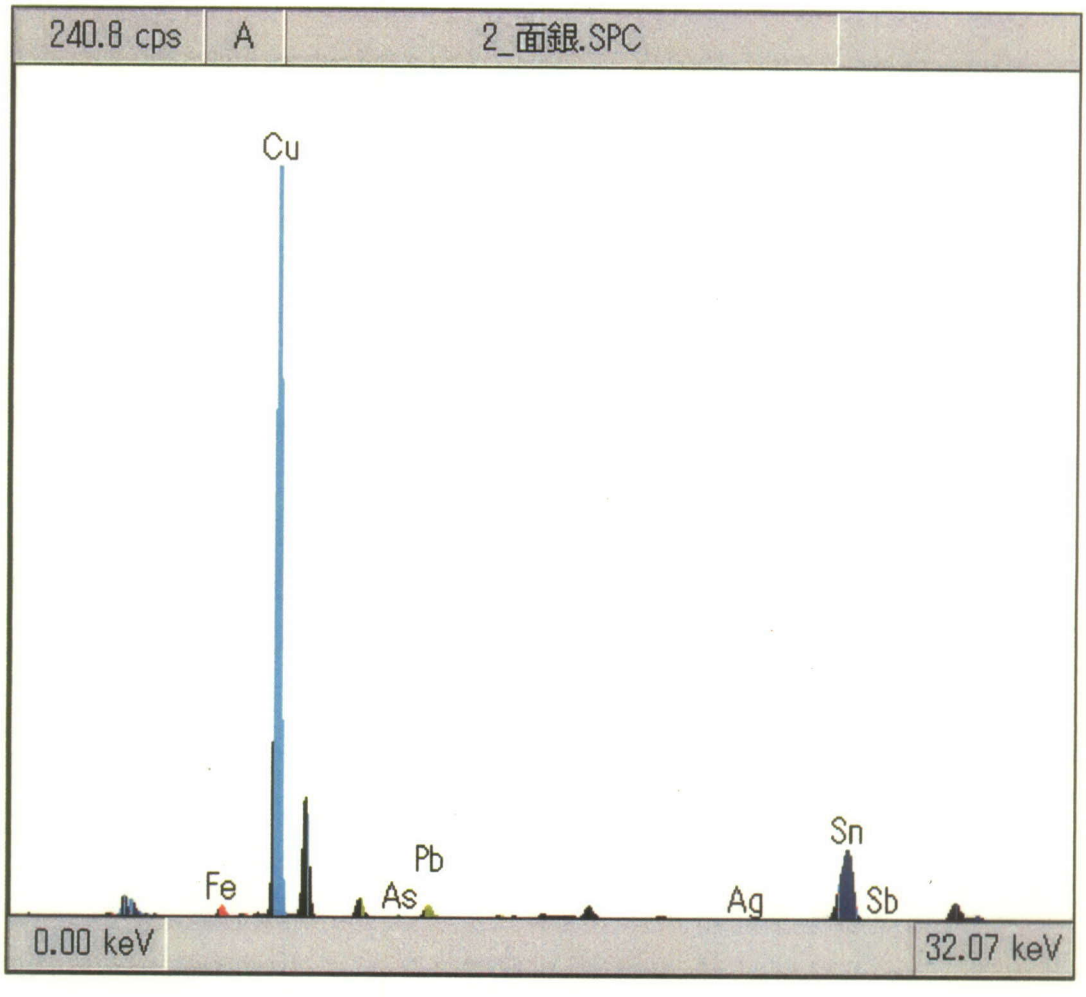
測定装置	SEA5230
測定時間（秒）	300
有効時間（秒）	216
試料室雰囲気	大気
コリメータ	φ1.8 mm
励起電圧（kV）	45
管電流（μA）	20
コメント	99257香川県　No.２鏡２ 鏡面　銀色部

［試料像］



視野: [X,Y] 6.25,　4.67 (mm)

［スペクトル］

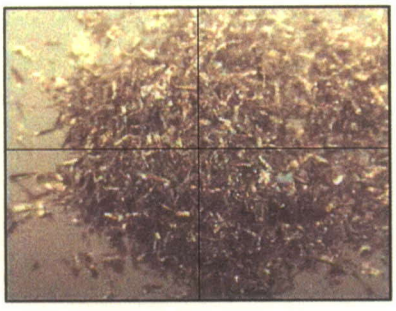


第141図　No.２鏡２　②のＸＲＦスペクトル

［測定条件］

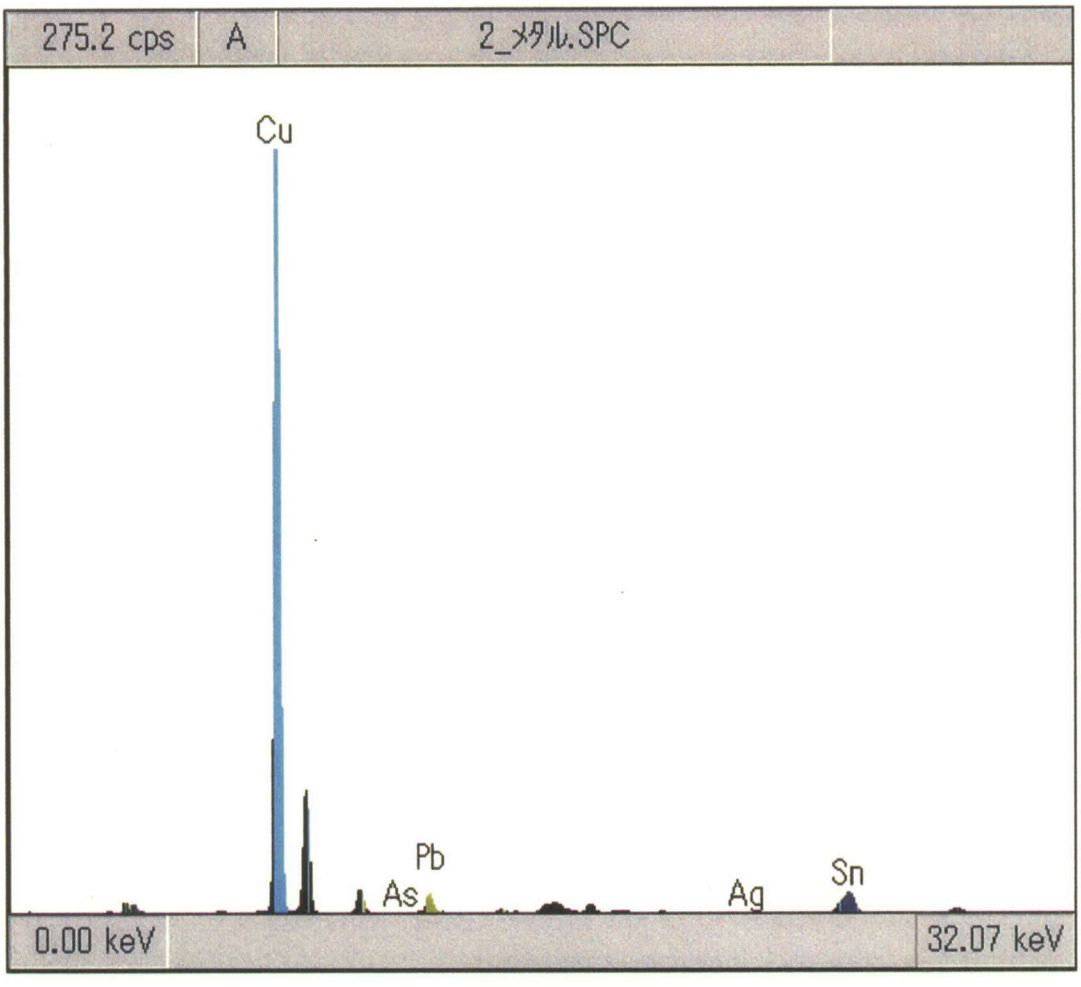
測定装置	SEA5230
測定時間（秒）	300
有効時間（秒）	210
試料室雰囲気	大気
コリメータ	φ1.8 mm
励起電圧（kV）	45
管電流（μA）	20
コメント	99257香川県　No.２鏡 ﾒﾀﾙｻﾝﾌﾟﾘﾝｸﾞ試料

［試料像］

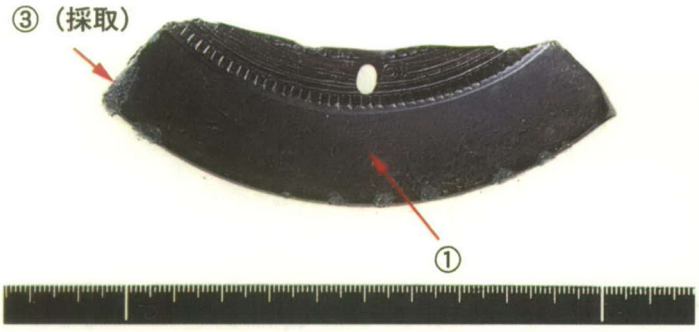


視野: [X,Y] 6.25,　4.67 (mm)

［スペクトル］



第142図　No.２鏡２　③からの採取試料のＸＲＦスペクトル



③の拡大　（×5）

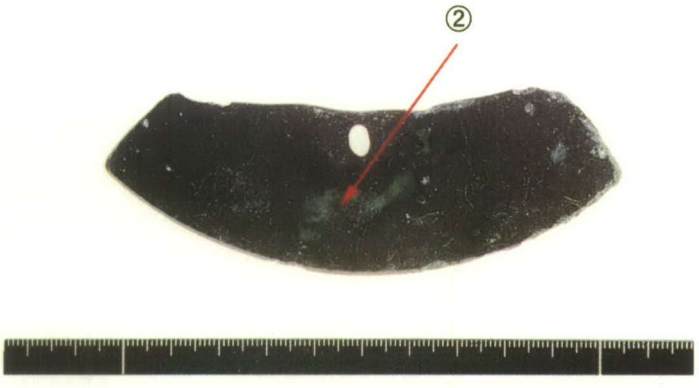


写真１　No.１　鏡１の分析箇所と試料採取箇所

③の拡大　（×5）

写真２　No.２　鏡２の分析箇所と試料採取箇所

第2節　香川県樋端遺跡および金毘羅山遺跡から出土した破鏡についての鉛同位体比

東京国立文化財研究所保存科学部
早川　泰弘
鈴木　浩子
平尾　良光

1．はじめに

(財)香川県埋蔵文化財調査センターより元興寺文化財研究所を通して、香川県大川郡白鳥町樋端遺跡と大川郡大内町金毘羅山遺跡から出土した破鏡に関して自然科学的な方法による調査の依頼があった。そこで、遺物の材料となった鉛について鉛同位体比法による産地推定を行った。

2．資料

資料は香川県大川郡白鳥町樋端遺跡と大川郡大内町金毘羅山遺跡から出土した破鏡２面である。写真は省略する。以下の考古学的詳細は、元興寺文化財研究所からの資料による。また、試料となる錆の採取は元興寺文化財研究所が行った。

１）樋端遺跡出土破鏡[1)]

弥生時代後期～終末期の墓域から出土した。四葉座内行花文鏡の破鏡と考えられる。漢鏡の編年で５期、四葉座内行花文鏡のⅢ式（ＡＤ60年前後）と判定される。

２）金毘羅山遺跡出土破鏡[2)]

斜面包含層から出土。斜面上部の竪穴式石室（弥生時代末～古墳時代前期）から流出したと見られるが断定できない。鏡式は不明である。

3．分析法

1)　鉛同位体比法による青銅原料の産地推定

産地推定のために鉛同位体比法を利用した[3)]。一般に、鉛の同位体比は鉛鉱山の岩体が違えばそれぞれの鉱山毎に異なった値となることが知られており、産地によって特徴ある同位体比を示すことが今までの研究でわかっている。そこで、鉛の産地の違いが鉛同位体比に現れるならば、文化財資料に含まれる鉛の同位体比の違いは材料の産地を示すと推定される。古代の青銅には鉛が微量成分として0.01％程度、あるいは主成分の一つとして5～20％含まれている。鉛同位体比の測定に用いられる鉛量は測定器（質量分析計）の感度が非常に良いため１マイクログラムの鉛があれば十分である。また試料は青銅の金属部分でも錆部分でも、同位体比は変わらないことが示されているので、資料からは錆を微少量採取するだけで十分である。そこでこの方法を本資料の材料産地の推定に利用することを試みた。資料から錆の一部を採取し鉛を科学的に分離し、表面電離型質量分析計で同位体比を測定したい。

2)　鉛同位体比の測定

資料から微少量（1mg以下）の錆を採取して、鉛同位体比測定用の試料とした。錆試料を石英製

のビーカーに入れ、硝酸を加えて溶解した。この溶液を白金電極を用いて直流2Vで電気分解し、鉛を二酸化鉛として陽極に集めた。析出した鉛を硝酸と過酸化水素水で溶解した。0.1μgの鉛をリン酸ーシリカゲル法で、レニウムフィラメント上に載せ、サーモクエスト社製全自動表面電離型質量分析計MAT262に装着した。分析計の諸条件を整え、フィラメント温度を1200℃に設定して鉛同位体比を測定した。同一条件で測定した標準鉛NBS-SRM-981で規格化し、測定値とした。

4．鉛同位体比の結果と考察

1) 鉛同位体比測定値

測定した鉛同位体比を表1で示した。この値を今までに得られている資料と比較するために鉛同位体比の図で示した。（第151図）。

縦軸が$^{208}Pb/^{206}Pb$の値、横軸が$^{207}Pb/^{206}Pb$の値とした図を仮にA式図と呼ぶこととする。この図では鉛同位体比に関して今までに得られている結果を模式的に表し、今回の結果をこの中にプロットした※5~9)。日本の弥生時代に相当する頃の東アジア地域において、Aは中国前漢鏡が主として分布する領域で、後の結果からすると華北産の鉛である。Bは中国後漢鏡および三国時代の銅鏡が分布する領域で、華南産の鉛である。Cは現代の日本産の大部分の主要鉛鉱石が入る領域、Dは多鈕細文鏡が文布する領域の中央線として示され、朝鮮半島産の鉛と推定される。またaは弥生時代の後期銅鐸が示した特別な鉛を意味する領域である。

縦軸が$^{207}Pb/^{204}Pb$の値、横軸が$^{206}Pb/^{204}Pb$の値とした図をB式図と呼ぶこととする。この図の中でA′、B′、C′、D′ は中国華北、華南、日本、朝鮮半島産の鉛領域を表わす。

これらの図の中に、測定値を●で示した。

2) 考察

樋端遺跡から出土した破鏡は、第151図のA図式においてB領域に位置し華南産の鉛と考えられる。B式図においても同様である。これまでの研究で、B領域は後漢鏡が多く位置する領域である。この破鏡は考古学的に見ると漢鏡5期にあたり、後漢鏡の破鏡と考えられているので、材料的にも問題はないだろう。

金毘羅山遺跡から出土した破鏡は、第151図のA式図においてA領域とB領域の中間に位置した。これは、

① D領域とA領域の材料を混ぜ合わせたものを用いる。

② A領域とB領域の材料を混ぜ合わせたものを用いる。

と2つの可能性が考えられる。これまでの研究において、弥生時代の青銅器に用いられている鉛は、古いものからD領域→A領域→a領域のものが使用されている09)。古墳時代になるとB領域のものがほとんどとなる。このことか、①の材料を用いていた場合は弥生時代中期前半に用いられていた材料、②の場合は弥生時代から古墳時代にかけて用いられていた材料を使用していると推定される。しかしこのどちらであるかという決め手はなく、鉛同位体比ではこれ以上わからない。

5 引用文献

(1) 香川県教育委員会：四国横断自動車道に伴う埋蔵文化財発掘調査概報　平成11年度（2000）

(2) 担当者からの聞き取りおよび内部資料より

(3) 平尾良光：鉛同位体比を用いた産地推定；考古学と自然科学4　考古学と年代測定学・地球科学、松浦秀治・上杉　陽・藁科哲男編、314-349、同成社(1999)

(4) 平尾良光、馬淵久夫：表面電離型固体体質量分析計VG-Sectorの規格化について；保存科学28、17-24(1989)

(5) 馬淵久夫、平尾良光：鉛同位体比法による漢式鏡の研究；MUSEUM　No.370、4-10(1982a)

(6) 馬淵久夫、平尾良光：鉛同位体比から見た銅鐸の原料；考古学雑誌　68、42-62(1982b)

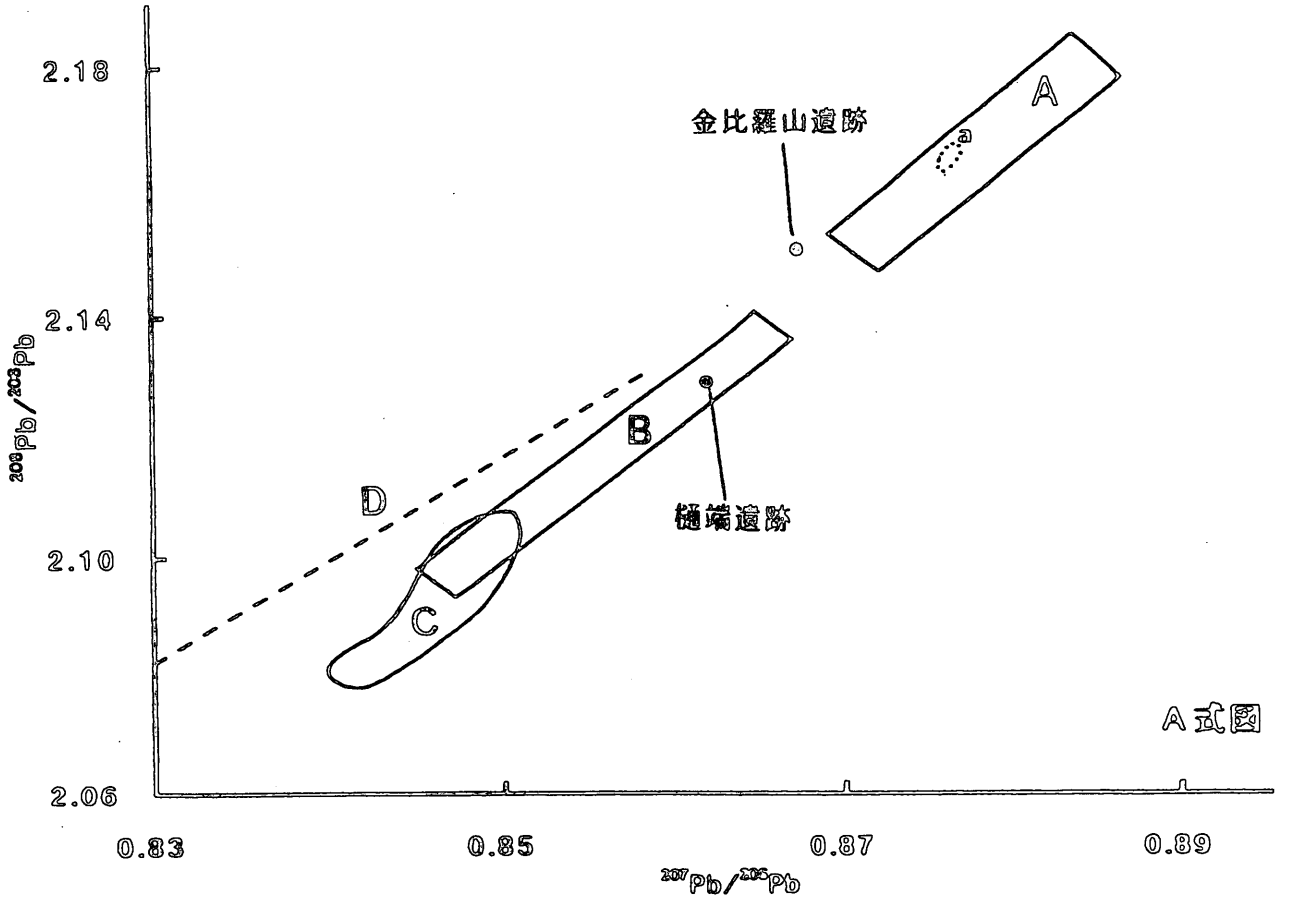
(7) 馬淵久夫、平尾良光：鉛同位体比法による漢式鏡の研究（ニ）；MUSEUM　No.382、16-26(1983)

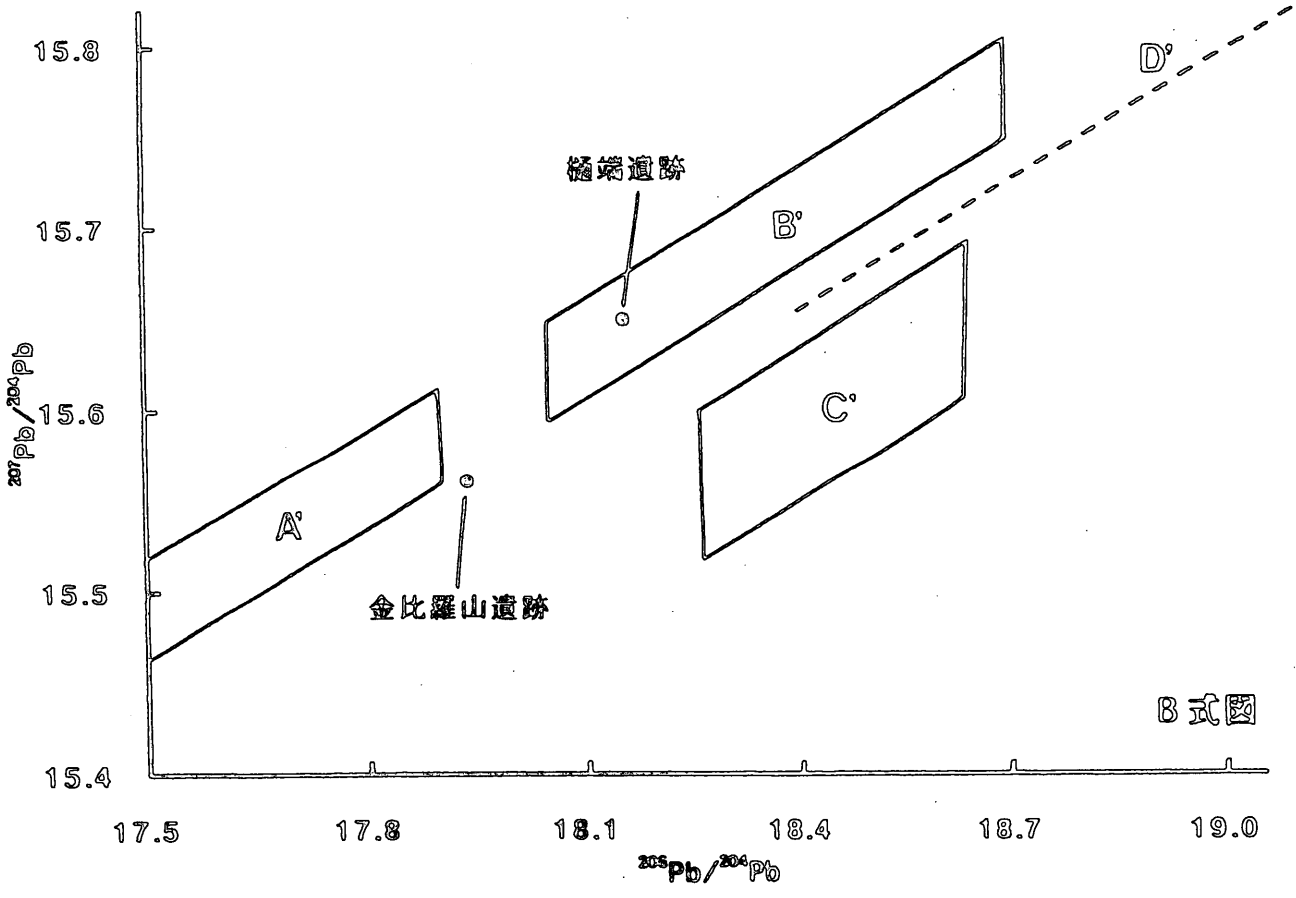
(8) 馬淵久夫、平尾良光：東アジア鉛鉱石の鉛同位体比ー青銅器との関連を中心にー；考古学雑誌73、199-210（1983)

(9) 平尾良光編：古代青銅の流通と鋳造；鶴山堂（1999)

第２表　香川県樋端遺跡・金毘羅山遺跡から出土した破鏡の鉛同位体比

測定番号	資料名	遺跡名	$^{206}Pb/^{204}Pb$	$^{207}Pb/^{204}Pb$	$^{208}Pb/^{204}Pb$	$^{207}Pb/^{206}Pb$	$^{208}Pb/^{206}Pb$
HS886	破鏡	樋場遺跡	18.156	15.649	38.650	0.8619	2.1288
HS887	破鏡	金毘羅山遺跡	17.938	15.559	38.577	0.8674	2.1506
		誤差範囲	±0.010	±0.010	±0.030	±0.0003	±0.0006





第143図　樋端・金毘羅山遺跡から出土した破鏡の鉛同位体比

第４章　まとめ

第１節．樋端遺跡の土壙墓・土器棺墓について

１．造墓意識の違い

樋端遺跡は北丘陵（第Ⅱ調査区）と南丘陵（第Ⅲ調査区）で土壙墓と土器棺墓を多数検出している。

北丘陵では土壙墓（台状墓、石室状墓も含む）は７基、土器棺墓６基検出している。土壙墓から遺物が出土していないために明確な時期決定が行えないが、唯一副葬遺物が出土している台状墓は下川津Ⅰ・Ⅱ式併行期と考えられ、当墳墓群中最古に位置付けられる。一方土器棺墓は棺身及び棺蓋に使用されている土器の体部の形態等で概ね１～４つの時期に分けられ、それは弥生時代後期後半から古墳時代初頭の時期と考えられる。この時期区分において土器棺墓の変遷はSTⅡ11→STⅡ12→STⅡ10・13→STⅡ08・09となる（第144図）。その内２期が下川津Ⅲ式併行期と考えられることから土壙墓と土器棺墓は同時期に造営されたことが窺われる。

北丘陵で土壙墓は丘陵先端部にまず台状墓が造られ、丘陵高所へと造られていることが解り、土器棺墓は丘陵南斜面部から徐々に丘陵稜線上に造られていることが解る。また土壙墓と土器棺墓の関係を見ると下川津Ⅰ・Ⅱ式併行期では台状墓と土器棺墓は立地場所から明確に分離され、それぞれの造営場所が分けられていたが、徐々に土壙墓と土器棺墓がともに丘陵稜線上に造られるようになり、混在する傾向が認められる。

このように弥生時代後期後半の時期には土壙墓と土器棺墓の立地が明確に分離されていたものが、古墳時代初頭には混在する結果となった。

南丘陵では土壙墓は35基、土器棺墓21基検出している。土壙墓から遺物が出土していないために明確な時期決定が行えないが、内部構造からほぼ同時期と考えられ、鉄製品等から弥生時代終末から古墳時代初頭の所産と考えられる。一方土器棺墓は棺身及び棺蓋に使用されている土器の体部の形態等で概ね１～４つの時期に分けられ、それは弥生時代後期後半から古墳時代初頭の時期と考えられる。この時期区分において土器棺墓の変遷はSTⅢ47→STⅢ38・40・46・50・54・56→STⅢ37・39・43・45・48・49・55→STⅢ36・52となる。時期はほぼ北丘陵の時期に対応する。

これら土壙墓と土器棺墓を見ると土器棺墓STⅢ52・53・56は土壙墓によって切られており、特に最後の４期とした土器棺墓STⅢ52としたものを土壙墓STⅢ26が切っていることから土器棺墓と土壙墓の造営時期が明確に分離されることが解る。

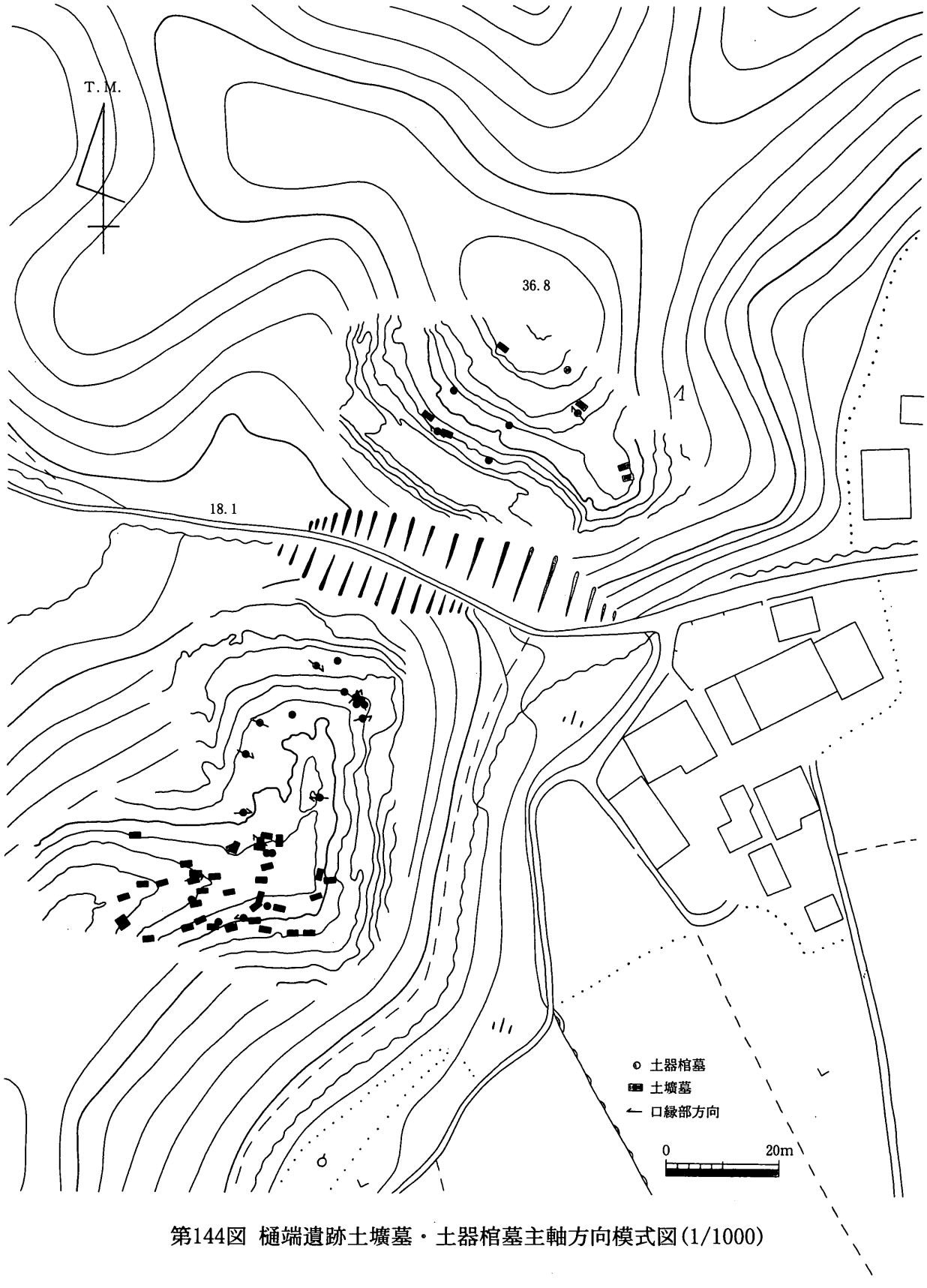
南丘陵で土器棺墓を主体として弥生時代後期後半から造営され始め、土壙墓は最後の土器棺墓が造営された直後、土壙墓を主とした墓域として成立するものと考えられる。

明らかに北丘陵とは造墓意識の違いが認められることが判明した。

２．土壙墓・土器棺墓の主軸方位について

土壙墓の主軸方位については北丘陵の台状墓の主体部STⅡ03・04はかなり東西主軸を意識しているように見られるが、それ以外のものについては丘陵等高線に並行しており、地形に制約を受けた主軸方位を取っている（第144図）。一方南丘陵では丘陵に直交するものも少量認められるが、大半は丘陵稜線に並行し、しかも密集する割には切り合い関係がほとんど認められない。これは短期間に、しかも規則的に造営されたことを裏付けている。

土器棺墓の主軸方向（口縁部の方向）は丘陵高所側、湊川・白鳥町側（東方向）、大内町側（西方向）と一定しておらず、各時期においても規則性は認められない結果となった。



第144図 樋端遺跡土壙墓・土器棺墓主軸方向模式図(1/1000)

第２節　原間地区・樋端地区の中期古墳について

原間遺跡と樋端遺跡において古墳時代中期の古墳は原間遺跡で原間３～10号墳の計８基と樋端遺跡で樋端１・２号墳、神越３号墳の計３基を検出した。これらは弥生時代の集落を検出した原間遺跡を挟む東・西側の丘陵上で検出している。東丘陵は主となる丘陵（主丘陵）とそこから派生した支丘陵ａ（樋端１・２号墳）と支丘陵ｂ（神越３号墳）があり、それぞれで古墳を検出している。これらの古墳の詳細をまとめたものが第３表である。

西丘陵で検出した古墳は原間３・４・７～10号墳で、丘陵頂部・丘陵上傾斜部・丘陵斜面部とその立地が様々である。一方東丘陵の主丘陵で検出した古墳は原間５・６号墳で、これらは丘陵頂部で検出している。また支丘陵ａ・ｂで検出した古墳は樋端１・２号墳、神越３号墳で、丘陵頂部や丘陵傾斜面で検出している。

また埋葬施設も木槨・粘土槨木棺墓・土壙墓（箱形木棺）・船底状木棺・箱式石棺と様々で、出土遺物にも規模・時期差によりかなり様相が違うことが解っている。

以下それぞれの項目について簡単にまとめてみたい。

１．古墳築造順序と築造場所

原間遺跡及び樋端遺跡で検出した中期古墳は11基あり、共伴遺物及び埋葬主体部の状況から前後関係が解る。

時期決定は共伴する須恵器及び土師器の編年を基軸とし、根拠とした。

その結果を基に前後関係をまとめるとこの古墳群のなかで一番古く築造された古墳は原間６号墳で、田辺編年ＴＫ216型式併行期、一番新しいものは原間４・９号墳で、田辺編年ＴＫ47型式併行期と５世紀前半から後半に形成された古墳群であることが解る。

したがってこの須恵器・土師器による時期決定から原間遺跡・樋端遺跡の古墳群は原間６号墳→原間５号墳→原間３号墳、樋端１・２号墳、神越３号墳→原間４・９号墳→原間10号墳という築造順序となる（第145図）。これ以外の古墳については時期は不明であるが、概ねその立地からＴＫ47型式併行期のものと考える。

この築造順序を基に築造場所をみると原間６・５号墳は東丘陵主丘陵のそれぞれの頂部に造られていることが解り、後続する原間３号墳、樋端１・２号墳、神越３号墳は西丘陵及び東丘陵の主丘陵から北東方向に分岐した支丘陵ａ・ｂ上に造られており、古墳の立地から主丘陵・頂部という要素で明確に区別できる。また墳丘規模においても原間６・５号墳が直径20m以上の円墳に比べて、後続する古墳は直径15m以下の円墳であることにも明確な格差が認められる。

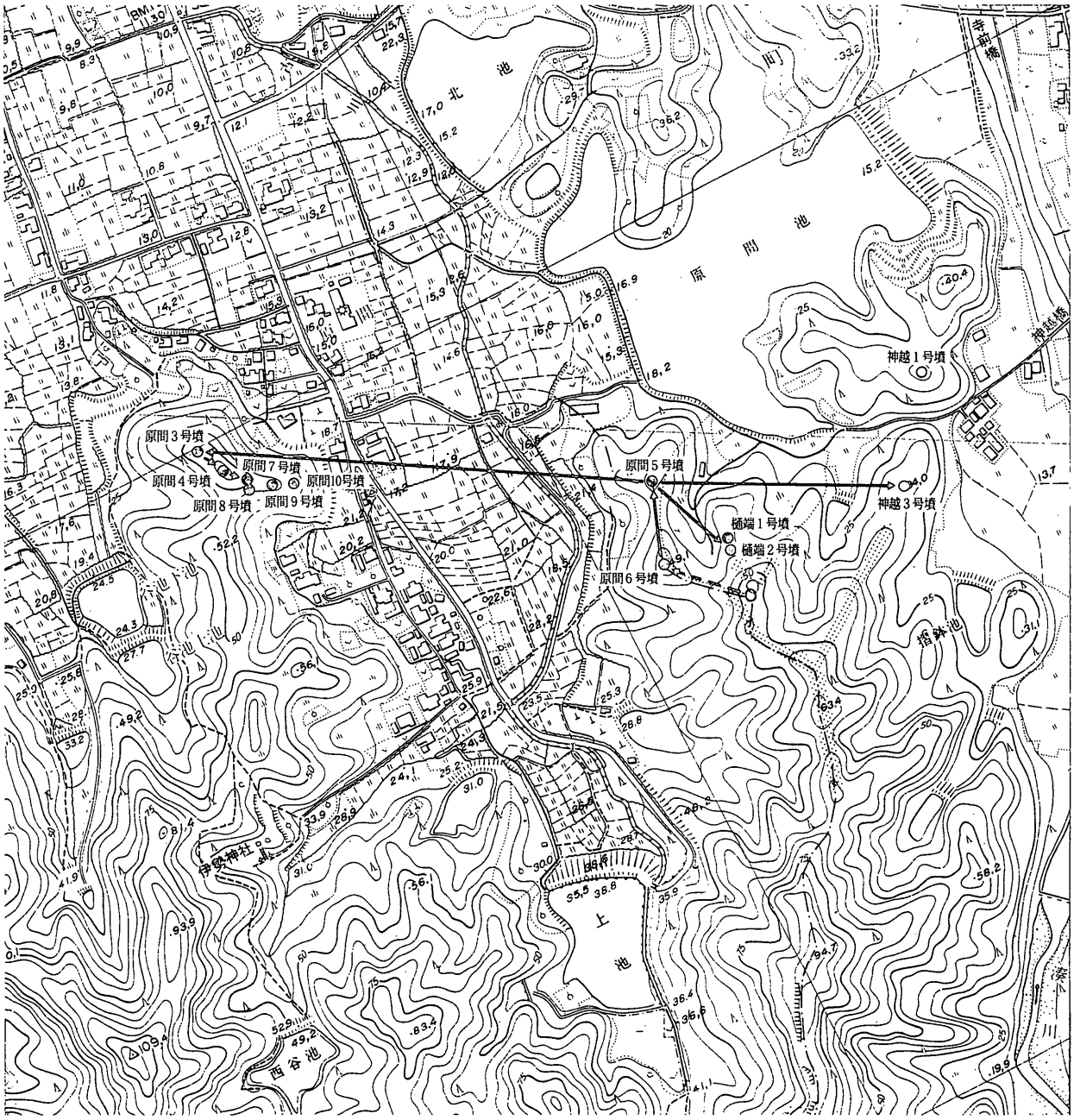
この築造順序は調査区内の現象面でみると第145図に示したように原間６号墳→原間５号墳という首長墓系譜がこれ以降墓域を拡大し、それぞれの丘陵に墓域を構成するということが考えられる。しかし西丘陵に築造された古墳群が別系譜という考え方も可能で一概に判断できない。

東丘陵の主丘陵と支丘陵の関係でみると明らかにＴＫ23型式併行期以降に墓域は拡大し、古墳群を形成するようである。副葬品の格差でみるとおそらく主として丘陵頂部に築造されている古墳主体部に鉄製品が副葬されていることが解り、ＴＫ23型式併行期以降に築造された古墳の首長墓が丘陵頂部、それ以外は下位集団の古墳であると考えられる。このことから首長墓系譜は依然丘陵頂部に築造

第３表　原間地区・樋端地区　古墳詳細一覧表

古墳名	丘陵位置	標　高	墳丘形	墳丘規模	葺石	埴輪	埋葬施設	主軸方向	副葬品	共伴須恵器
原間６号墳	東丘陵頂部	48.6m	円墳	30.2m 墳丘高 3.5m	× 墳裾に列石	×	木槨	南５° 東西主軸 頭位　東	刀３(棺内)短甲・頸鎧・肩鎧・斧・鋤先・　・刀子(木槨内) 鎌・刀・斧・剣・　・須恵器・土師器(槨外)	TK216
原間５号墳 第１主体部	東丘陵頂部	41.5m	円墳	20.2m	×	×	箱形木棺	北36°	須恵器直口壺(墳丘上)	TK208
第２主体部							箱形木棺	南31°		
原間３号墳 第１主体部	西丘陵頂部	53.5m	円墳	14.5m	×	×	船底状木棺	南15°(新) 頭位　東	鉇・不明鉄製品(主体部) 須恵器・土師器(周溝)	TK23
第２主体部							粘土槨木棺墓	南26°(古) 頭位　東		
樋端１号墳	支丘陵ａ傾斜面	37.5m	円墳	6.3m	×	×				(TK23)
樋端２号墳	支丘陵ａ傾斜面	39.8m	円墳	8.7m	×	×	箱形木棺	南６° 丘陵に直交 頭位　東	刀(主体部)、鏃(主体部上) 鋤先・鏃・　・ヤス・土師器(周溝)	TK23
神越３号墳	支丘陵ｂ頂部	34.5m	円墳	8.54m	×	×	粘土槨木棺墓	南48° 丘陵に直交 頭位　東	鉇・ガラス玉	(TK23)
原間９号墳	西丘陵傾斜面	45.4m	円墳	8.6m	×	×			須恵器(周溝)	TK47
原間４号墳	西丘陵頂部	54.2m	円墳	13.3m	×	×	箱形木棺	北19° 丘陵に直交 頭位　東	鉄刀・刀子・鉄鏃・　(主体部) 鑿・須恵器・土師器(周溝)	(TK47)
原間７号墳	西丘陵傾斜面	50.2m			×	×	箱式石棺	北49° 丘陵に直交 頭位　南西		
原間８号墳	西丘陵斜面	48.2m			×	×	箱式石棺	北0.5° 丘陵に並行 頭位　東		
原間10号墳	西丘陵頂部	43.5m	楕円形墳	7.0×9.3m	×	×	粘土槨木棺墓	北86.5° 丘陵に直交 頭位　北		

※主軸方位については主体部の長軸主軸で、東小口を基準として東方向から北・南へ○°と角度を提示している。



第145図　原間地区・樋端地区中期古墳築造順序

する傾向が読みとれる。

この傾向を他地域でみるとＴＫ208型式併行期の長尾町川上古墳は丘陵先端部に１基単独であり、群集墳を形成しない。しかし寒川町大井七ツ塚古墳群（石井古墳群）、末則古墳群、岡の御堂古墳群などはＴＫ23型式併行期以降の築造で、古墳群を形成することから原間遺跡・樋端遺跡の状況と合致することが解る。つまり５世紀代に出現する初期群集墳はＴＫ23型式併行期以降に造営された古墳群で、この時期に爆発的に墓域・造墓者を拡大し、各地において古墳群が形成されるものと考える。

２．埋葬形態について

各古墳の埋葬形態をみると原間６号墳の主体部が木槨という特異な構造であること以外、土壙＋箱形木棺、粘土槨木棺墓、箱式石棺と原間５号墳以降様々で、特に時期ごとに変化するような規則性は認められない。しかし他地域、特に長尾町川上古墳、綾南町浦山古墳群・岡の御堂古墳をみるとその

ほとんどが竪穴式石槨を主体部に持っており、明確に主体部構造が竪穴式石槨に移行していることが解る。

この点で原間遺跡・樋端遺跡で検出した古墳時代中期の古墳群は特異な様相を呈している。

3．東西主軸の形骸化

前期古墳においては埋葬主軸方位にかなり厳格に東西方位を守っていることは、先学諸氏によって論じられていることである。

原間古墳群及び樋端古墳群で見ると埋葬主軸方位の東西指向はこの地域でみるとおそらく原間６号墳（ＴＫ216型式併行期）まで残るようである。しかし後続する原間５号墳（ＴＫ208型式併行期）、原間３号墳（ＴＫ23型式併行期）になると徐々に埋葬主軸方位の東西指向が形骸化し、樋端２号墳、神越３号墳、原間４号墳では丘陵に直交する埋葬主軸方位を持つようになる。つまりＴＫ208型式併行期段階で徐々に東西指向が形骸化し始め、続くＴＫ23型式併行期段階で完全な東西主軸という概念は消滅し、丘陵稜線に主体部を直交させる意識が主流となる。

それは川上古墳（ＴＫ208型式併行期段階）で埋葬主軸方位の東西指向に形骸化の傾向が認められることもこの結果を裏付けている。

4．大内町・白鳥町内の中期古墳について

この原間古墳群及び樋端古墳群以外に中期古墳が所在することが確認されている。

まず大内町内では大内町住屋（前山丘陵の西裾部、第146図）から須恵器坏身２点、坏蓋２点、高坏１点、土師器直口壺１点が出土している（第146図）。この資料は昭和初期頃地元土地所有者が発見したもので、開墾中にこの６点が纏まって出土した。おそらく古墳に副葬されていたものと考えられる。

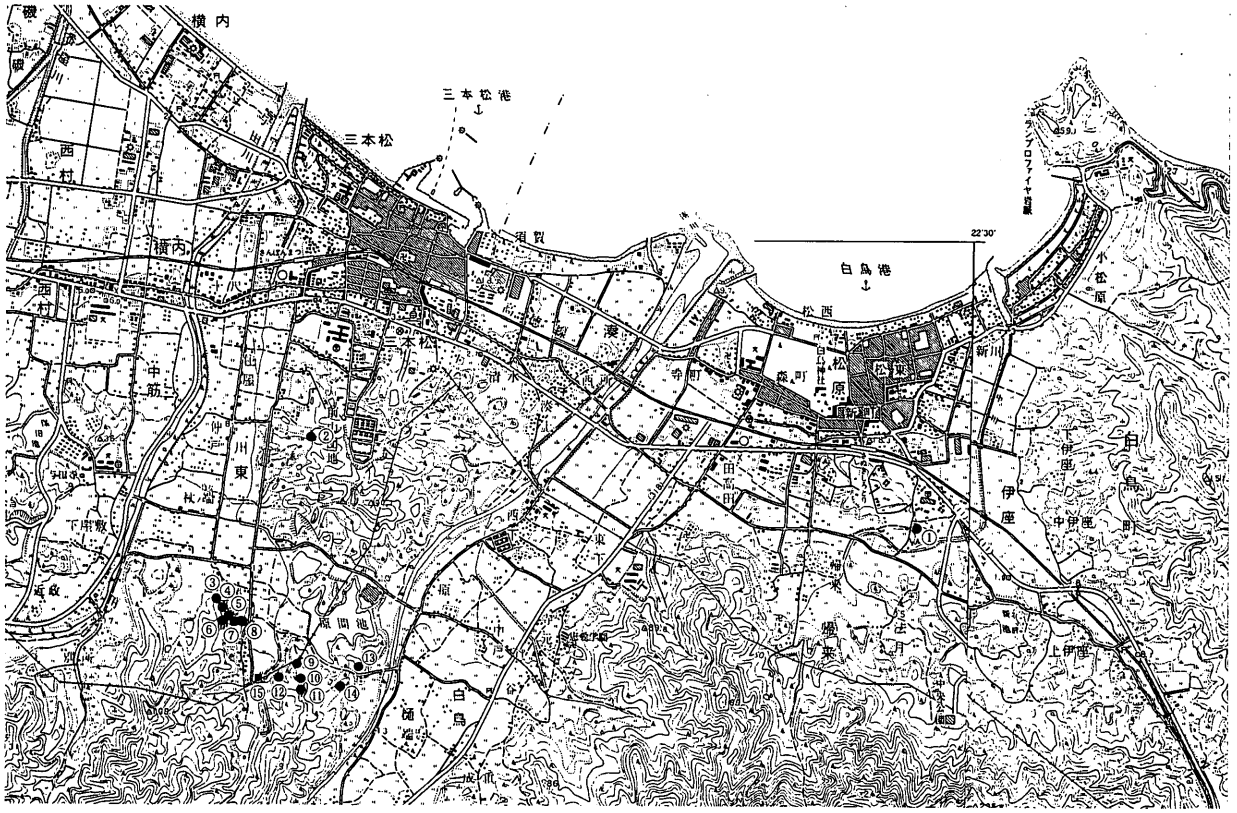
190・191は須恵器坏蓋、192・193は須恵器坏身、194は須恵器高坏である。

190は天井部が平らで、かなり急に屈曲する。天井部と体部の境に突出したシャープな稜を持ち、口縁部は内傾しており、端部には僅かに段を持つ。天井部のヘラ削りは一単位６～７㎜の幅で、天井部の8.6割の範囲に施されている。ヘラ削りの方向は順まわり（時計回り）である。天井部内面には横ナデの後不定方向の指ナデが施され、天井部外面には自然釉がかかっている。口径13.0cm、器高4.35cmを測り、かなり扁平な形態である。

191は天井部が平らで、緩やかに体部となる。天井部と体部の境に突出したシャープな稜を持ち、口縁部は内傾しており、端部には僅かに段を持つ。天井部のヘラ削りは一単位６～７㎜の幅で、天井部の8.5割の範囲に施されている。ヘラ削りの方向は順まわり（時計回り）である。口径13.1cm、器高4.6cmを測り、やや天井部の高い形態である。器壁はかなり薄く作られている。

192は底部が平らで、蓋受け部はやや上方に延び、シャープに仕上げられている。立ち上がりは高く、やや内傾し、口縁端部には僅かに段を持つ。底部のヘラ削りは一単位６～９㎜の幅で、天井部の8.4割の範囲に施されている。ヘラ削りの方向は順まわり（時計回り）である。口径11.3cm、受け部径13.5cm、器高4.8cmを測り、やや扁平な形態である。器壁はかなり薄く作られ、底部には自然釉がかかっている。おそらく190とセットになるものと考えられる。

193は底部が平らで、蓋受け部はやや上方に延び、シャープに仕上げられている。立ち上がりは高



第146図　大内町白鳥町内中期古墳位置図

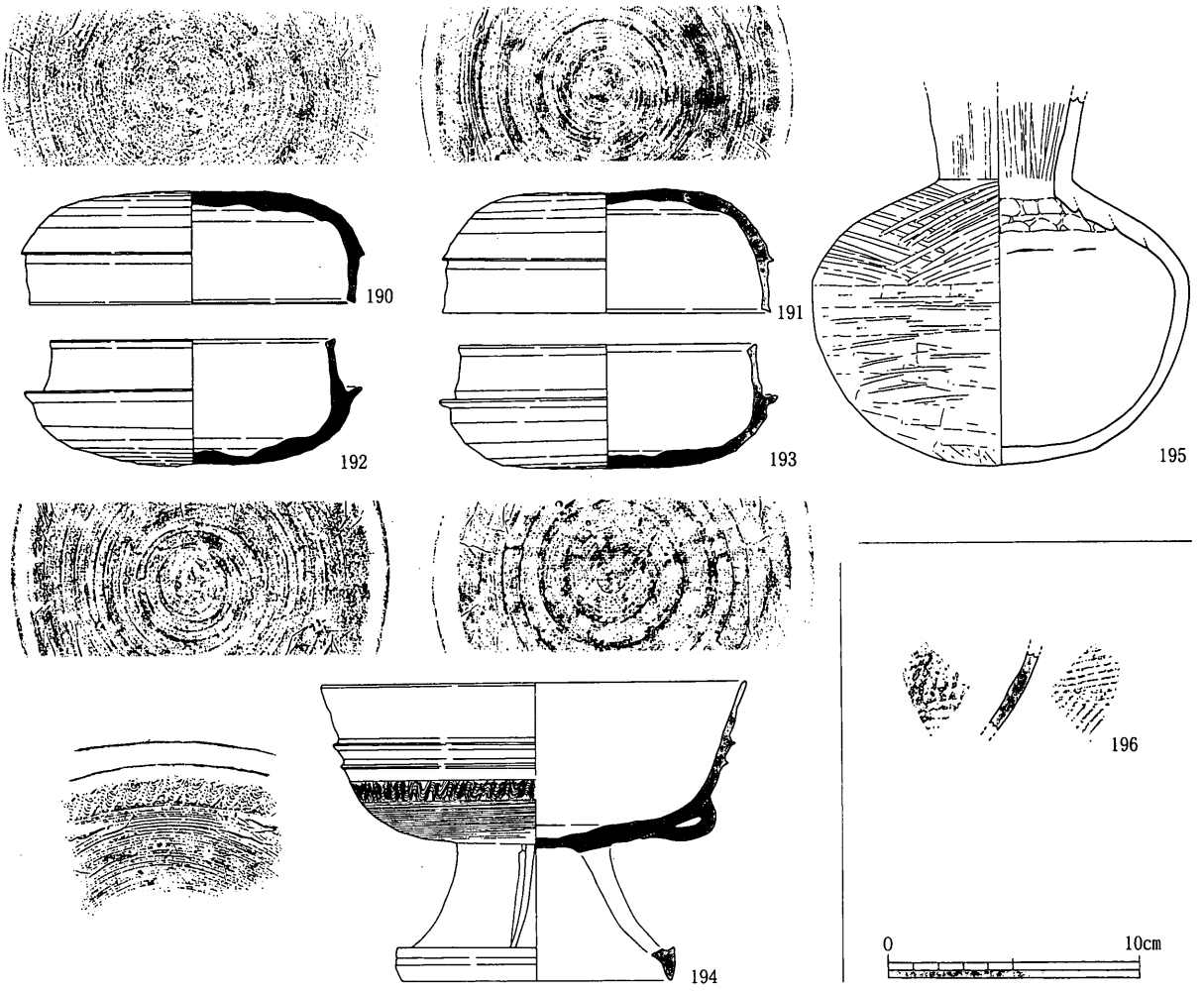
①190～195(遺物番号)出土位置
②196(遺物番号) 出土位置
③原間３号墳
④原間４号墳
⑤原間７号墳
⑥原間８号墳
⑦原間９号墳
⑧原間10号墳
⑨原間６号墳
⑩原間１号墳
⑪原間２号墳
⑫原間２号墳
⑬原間１号墳
⑭原間３号墳
⑮原間遺跡（古墳時代中期）

く、やや内傾し、口縁端部には僅かに段を持つ。底部のヘラ削りは一単位６～10㎜の幅で、天井部の8.3割の範囲に施されている。ヘラ削りの方向は順まわり（時計回り）である。口径11.9cm、受け部径13.55cm、器高4.8cmを測り、かなり扁平な形態である。器壁はかなり薄く作られている。おそらく191とセットになるものと考えられる。

194は須恵器無蓋高坏で、かなり坏部の深いもので、底部と体部の境に屈曲部を持つ。体部は直線的に外上方に延び、ほぼ中央にシャープな突帯を２条持つ。体部から口縁部にかけて薄く作られており、口縁端部は丸く仕上げる。下段の突帯下に上部を横ナデ、下部をカキ目によって消されているが、明瞭で、細かい櫛描波状文が施されている。耳状把手は一方のみで、上部が波状文帯にかかるもので、かなり下方に貼付されている。脚部は緩やかに広がり、端部を上下に拡張する。透かしは長方形の四方透かしで、脚部外面の透かし際を面取りするという特徴がある。口径16.9cm、坏部高6.4cm、器高11.6cm、底径10.8cmを測る。

195は土師器直口壺で、頸部は直線的に外上方に延びる。体部はやや肩の張る形態で、底部に僅かに平底を持つ。頸部内外面には縦方向のヘラ磨きが、体部上半には分割のヘラ磨きが、下半にはヘラ削りの後粗いヘラ磨きが施されている。胎土は精良である。頸部径が5.3cmとかなり狭い。

これらの須恵器・土師器は同時期と考えられ、須恵器坏身・坏蓋の形態や無蓋高坏の耳状把手の位



第147図　大内町 前山丘陵・白鳥町内出土遺物実測図(1/3)

置および脚部の透かしの特徴からＯＮ46型式併行期である。

これらの資料は確実に墳墓に伴う資料とは言い難いが、所有者からの聞き取りやこれらの土器に伴い鉄製品が出土していることから古墳の可能性が考えられる。この資料が古墳出土であれば原間・樋端古墳群内でも原間５号墳（ＴＫ208型式併行期）より若干古く位置付けられ、原間・樋端古墳群と同様な古墳群が前山周辺に営まれていたことを窺わせ、今後重要な資料となる。

次に白鳥町内では表採資料であるが、須恵器壷の体部片がある。この資料は白鳥町帰来にある独立低丘陵の斜面部で表採したもので、おそらくこの丘陵に古墳がある可能性を窺わせるものである。

196は須恵器壷の体部片で、体部外面には３～４㎜幅の細かい平行叩きが施され、内面には磨り消されているが、同心円状の当具痕が僅かに認められる。

時期は壺体部小片のために明確には判断できないが、おそらく５世紀後半～末（ＴＫ23～47型式併行期）頃のものと考えられる。

一方これらの古墳を造営した集団の居住地が平成13年度の原間遺跡の発掘調査によって検出された（第146図）。

原間遺跡は現在まで平成９・10年度に四国横断自動車道建設に伴い発掘調査を実施した横断道原間遺跡、平成９・11年度に大内白鳥インター線建設に伴い発掘調査を実施した県道原間遺跡があり、平

成13年度に実施した県道原間遺跡を含めると合計４回目となる。この４回の発掘調査から原間遺跡の概要が解る。

まず横断道原間遺跡の調査によって弥生時代から近世の集落を検出し、特に弥生時代では主として微高地上に中心小集落が展開することが解り、時期は弥生時代後期後半から終末にかけてで、継続して集落が営まれていることが判明した。また集落構成の最小単位である単位集落（家族）が約60mの範囲内で、竪穴住居２～３棟、掘立柱建物１棟、土壙墓等で構成されていることが判明した。さらに原間遺跡弥生集落の範囲は平成９年度に実施された県道原間遺跡でほとんど弥生時代の遺構を検出していないことから概ね北限を確認し、横断道の予備調査で居住域に対する生産域（水田？）を推定した。また微高地復元段階で原間遺跡弥生集落の中心部分を推定したが、予想通り平成11・13年県道原間遺跡の発掘調査でその中心部分を確定する結果となった。この中心集落で検出した遺構の時期は弥生時代後期後半から古墳時代初頭、古墳時代中期・後期、古代と横断道原間遺跡で検出した遺構の時期幅より広いということからも解る。

今回ここで報告するのは古墳時代中期の遺構についてである。古墳時代中期は原間遺跡の西丘陵・東丘陵上に古墳が築造される時期で、今回の調査まで古墳の築造者の集落が確認されてなかったのが、今回の調査で判明したことになる。

検出された遺構は平成13年度県道原間遺跡調査区のほぼ中央部分、微地形復元で確認した微高地の最高所に当たる部分で、竪穴住居を１棟検出している。ここでは竪穴住居SH07について報告する。

SH07は北部を水田高低差により削平を受けているものの平面形態は隅丸長方形を呈し、規模は東西4.78m、南北推4.05m、検出面からの深さ18cmを測る。北辺部分が削平を受けているために竈の有無は確認できないが、中央部に炉の痕跡が確認されていないこと南東コーナー部で検出した土坑内から甑が出土していることからおそらく北辺部分に竈を持っていたものと推定できる。主柱穴は４穴と考えられ、その内３穴を検出している。南北主軸は真北より21.5° 西偏する。

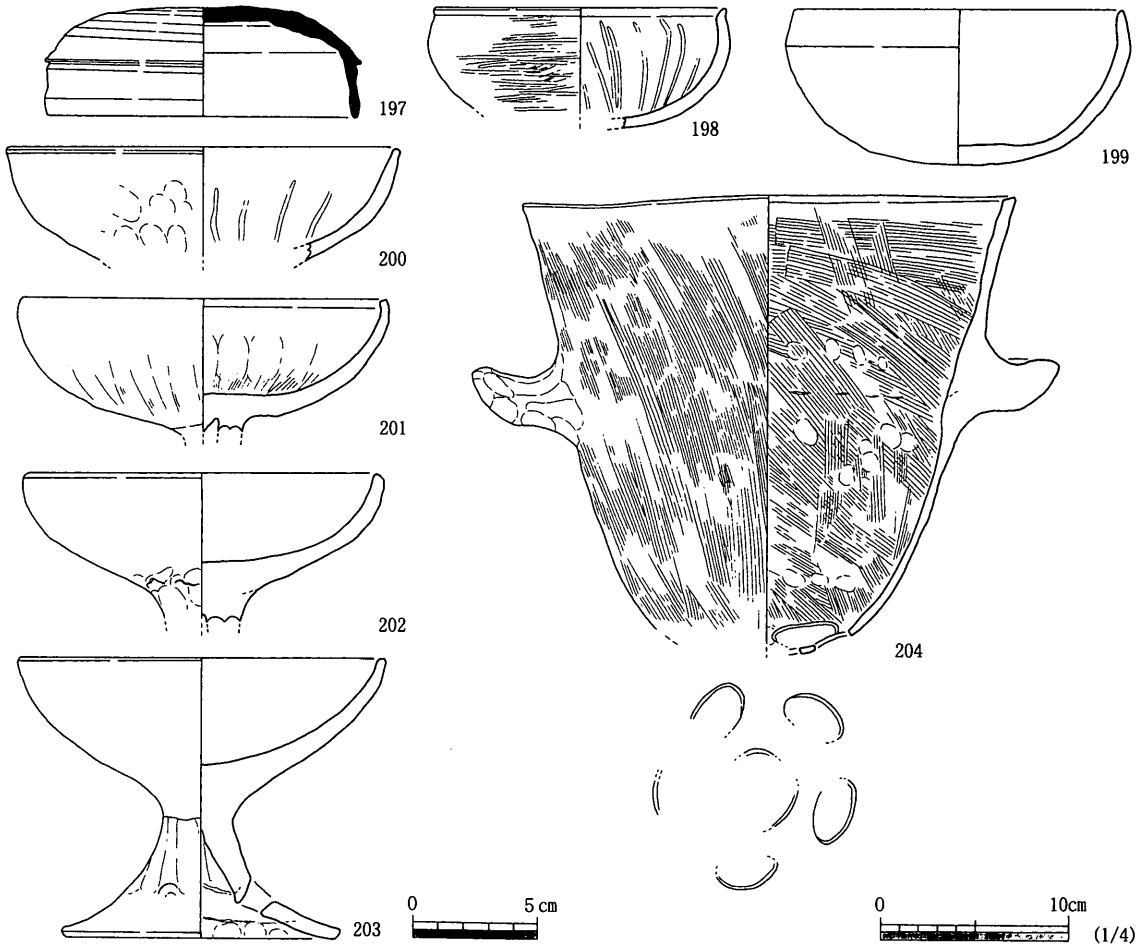
遺物は床面直上から土師器椀・高坏が出土し、土坑内から須恵器坏蓋・土師質土器甑が出土している。検出状況は竪穴住居内周囲（壁際）に土師器椀・高坏が出土するという状況を呈していた。

これらの遺物の内図化したのは以下の８点である（第148図）。

197は須恵器坏蓋で、口径12.2cm、器高4.2cmを測る。平らな天井部から緩やかに屈曲し、体部に到る。天井部と体部の境には鋭く突出した稜を持つ。口縁端部は稜を持たず、四角く終わらせる。天井部外面には5～10mm程度のヘラ削りを丁寧に施し、天井部に占める範囲も広い。このヘラ削りは中心がずれており、丁寧さの中にも粗略化の傾向が認められる。ヘラ削りは逆時計回転である。天井部内面は横ナデの後不定方向の指ナデが施されている。天井部外面には前面及び体部の一部まで濃緑色の自然釉がかかっている。焼成は硬質である。

この須恵器坏蓋は天井部と体部の境の鋭く突出した稜や天井部に施されたヘラ削り単位が細かいことなどから、ＴＫ208～23型式併行期と考えられ、時期は５世紀後～末である。

198は土師器椀で、口径11.2cm、器高推4.6cmを測る。内湾する体部から口縁部に到り、端部は外方に短く屈曲する。口縁端部内面には面を持ち、体部との境には明瞭な稜を持つ。体部外面には横方向のヘラ削りの後、横方向のヘラ磨きが施され、口縁部外面には横ナデの後体部同様ヘラ磨きが施されている。体部内面には横ナデの後内底面から口縁部方向に放射状のヘラ磨きがやや粗く施されている。色調は淡い黄褐色を呈し、胎土は0.5～2.0mm程度の石英・長石粒を含む。



第148図　県道原間遺跡(H13)出土遺物実測図(1/3)

199は土師器椀で、口径12.7cm、器高推6.0cmを測る。内湾する体部から口縁部に到り、やや内方に屈曲する。底部は湾曲するが、内底面は平坦である。口縁部内外面は横ナデが施され、それ以外は指ナデが施されている。内外面にヘラ磨き等は認められない。色調は褐茶色を呈し、胎土は0.5～1.0mm程度の石英・長石粒を含む。

200は土師器高坏で、口径15.3cmを測る。坏部下及び脚部は欠損しているため不明である。高坏坏部は直線的に延びる下半から内湾しながら口縁部に到り、端部は小さく外反気味に丸く終わらせる。体部外面には指頭痕が僅かにみられ、後に指ナデが施されている。内外面に幅２mm程度の放射状のヘラ磨きがかなり間隔をあけ、粗く施されている。色調は茶褐色を呈し、胎土は細かい石英・長石粒を含む。

201は土師器高坏で、口径14.4cm、器高（坏部）4.5cmを測る。脚部は欠損しているため不明であるが、高坏坏部は内湾する体部から口縁部に到り、やや内湾する。口縁端部はやや内傾する面を持ち、内側を僅かに膨らませる。体部外面には縦方向の板ナデが施され、体部内面には縦方向の指ナデの後板ナデが施されている。内外面にヘラ磨き等は認められない。色調は明褐茶色を呈し、胎土は0.5～1.0mm程度の石英・長石粒、細かい金雲母を含む。

202は土師器高坏で、口径13.6cm、器高（坏部）約4.3cmを測る。脚部は欠損しているため不明であ

る。高坏坏部は直線的に延びる下半から内湾気味に口縁部に到る。口縁端部は外傾し、面を持つ。坏部内外面は指ナデが施され、内面は板ナデが施されており、ヘラ磨き等は認められない。色調は淡黄褐茶色を呈し、胎土は0.5～2.0㎜程度の石英・長石粒を含む。

203は土師器高坏で、口径14.4cm、器高10.7cm（坏部5.7cm、脚部5.0cm）、底径11.0cmを測る。脚部は「ハ」字状に緩やかに広がり、脚部ほぼ中央の３方向に穿孔が認められる。高坏坏部はやや直線気味に体部から口縁部に到り、端部はやや内湾する。口縁端部は丸く収め、内側を僅かに膨らませる。坏部内外面は摩滅しているが、ヘラ磨き等は認められない。脚部外面には縦方向の板ナデが施され、内面には粘土紐の接合痕が顕著に認められる。色調は淡黄褐茶色を呈し、胎土は0.5㎜以下の細砂粒の石英・長石粒を含む。

204は土師質土器甑で、口縁部が両側の取っ手方向に広い楕円形状を呈しているために、最大で口径25.8cm、最小で22.5cm、器高約23.7cmを測る。体部は上方に開き、口縁端部は内傾する面を持つ。体部中位やや上側の左右対称になる位置に上方に湾曲する取っ手が付く。底部は丸く収められ、中心部分に隅丸方形（円形）状の透かしを中心に、周りに楕円形状の５つの透かしが認められる。体部外面にはやや斜め方向の刷毛目が施され、内面にはかなり斜め方向の刷毛目が施されている。

これらの遺物は竪穴住居SH07から出土しており、時期は須恵器坏蓋の特徴からＴＫ23形式併行期、５世紀末頃と考える。またその他の器種は土師器椀・高坏、土師質土器甑が出土している。特に高坏は坏部が椀形のもので、かなり器高の浅いものや体部が直線的になっている。

須恵器には若干の幅を持たせたが、土師器高坏をみるとＴＫ208形式併行期の須恵器が出土している川上古墳出土土師器高坏をみると坏部は依然深く、体部は内湾を呈していることから、川上古墳出土土師器高坏よりは後出するものと考える。したがってこの竪穴住居の時期はＴＫ23型式併行期と考える。

以上のように大内町・白鳥町内から古墳時代中期の土器が確認されていることから、かなり古墳時代中期の遺構（古墳）が所在するものと考えられる。また原間・樋端古墳群も調査区外にも所在する可能性があることから、香川県内でも最大規模の古墳群であることが解り、また前山周辺にも同様な古墳群が点在した可能性が指摘できる。特に原間・樋端古墳群と同様に古墳群形成初期段階から古墳群が形成されていたことは注目できる。

また平成13年度の原間遺跡の調査により、造墓集団の居住域が確認されたことは、居住域と墓域の位置的な関係を理解するのに重要なものとなる。この原間遺跡で検出した竪穴住居居住者は位置的な関係から原間古墳群の造墓集団居住域と考えられる。

ここでは出土遺物の紹介を主として、あまり両町の古墳群の意義について論じることはできなかったが、今後の検討資料としては重要な資料と考える。

第３節．須恵器出現前後の土師器について

香川県内において古墳時代の土師器については大久保（大久保1997）、蔵本（1999）両氏によって詳細な検討が行われている。しかし両氏とも古墳時代前期（布留４式）までを中心としており、それ以降の検討は行っていない。これは資料数の制約及び弥生時代後期から古墳時代前期初頭という時期に古墳出現という政治的な画期を土器様相の面から追求しようとする着眼点によるためである。

両氏の研究以降、近年の大規模調査によりこの時期に後続する資料が増加しつつある。

そこでこれらの資料と両氏の研究成果を基に須恵器出現前後の土師器を中心に若干の考察をしたい。その際特に型式的な変化が追える高坏を基軸に編年案を作成し、坏部が椀形を呈する椀形高坏の出現時期と系譜について検討したい。またこれ以降の土師器の様相と７世紀に盛行する土師器高坏の系譜についても若干触れたい。

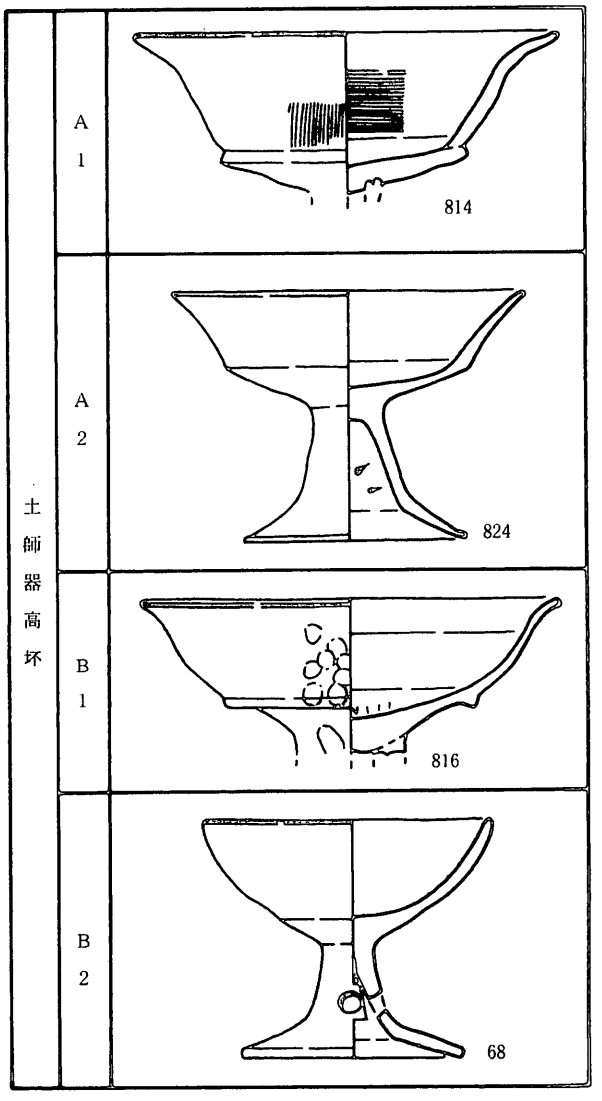
１．各期の様相

須恵器出現前後の土師器の編年に当たり、検討する資料は本報告書掲載の原間遺跡、樋端遺跡とこれ以外に県内では前田東・中村遺跡、尾崎西遺跡、川上古墳、平成13年度県道原間遺跡、太田下・須川遺跡、空港跡地遺跡Ⅴ、財田古墳、下川津遺跡の出土資料を使用し、県外では主として大庭寺遺跡出土資料を参考にしたい。

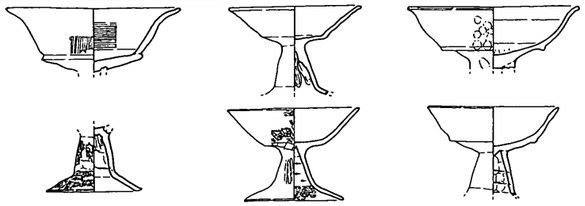
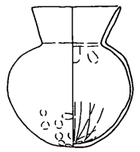
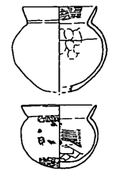
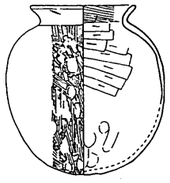
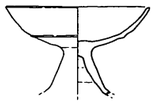
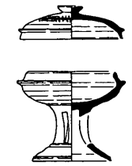
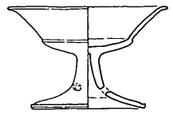
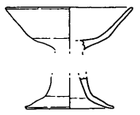
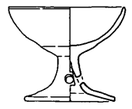
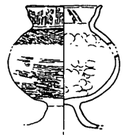
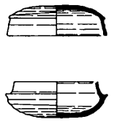
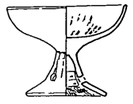
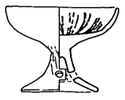
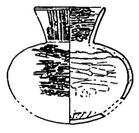
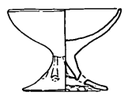
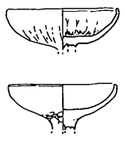
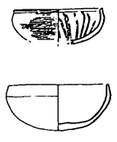
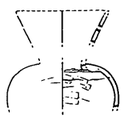
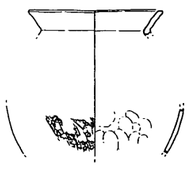
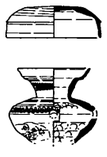
基軸となる土師器高坏は坏部の形態により大きく２つに分類できる。

土師器高坏には坏部の途中に屈曲部を持ち、坏部底部がほぼ水平に延び、体部が口縁部に向けて僅かに外反するもの「土師器高坏Ａ」、坏部が内湾しながら口縁部に至るもので、坏部が所謂「椀形」を呈するもの「土師器高坏Ｂ」がある（第149図）。

土師器高坏Ａでは坏部の底部と体部の接合部が段状に残るものを高坏Ａ1とし、接合部が屈曲し、稜を持つものを高坏Ａ2とし、この稜の形骸化と脚部穿孔の位置、法量を基準として前後関係を決定した。この土師器高坏Ａ1は大久保氏の器種分類の「高坏４」に、蔵本氏の器種分類の「高坏Ｃ1」に相当し、高坏Ａ2は大久保氏の「高坏５」に、蔵本氏の「高坏Ｃ2」に相当し、布留式期で主体を占める器種である。一方土師器高坏Ｂは坏部が椀形を呈するもので、坏部外面に接合部の痕跡が明瞭な稜として突帯状に残るものを高坏Ｂ1とし、坏部外面に稜を持たないもの（典型的な坏部椀形の高坏）



第149図　高坏形土器の分類

	高坏 A1	高坏 A2	高坏 B1	高坏 B2	椀	直口壺	小型丸底壺	甕	その他	共伴須恵器
Ⅰ期										
Ⅱ期										
Ⅲ期										
Ⅳ期										
Ⅴ期										
Ⅵ期										

第150図　古墳時代中期の土師器編年(試案)

を高坏Ｂ2とし、坏部の形態、法量（第５表）、特に体部の内湾度と坏部の深さ（坏部の口縁端部から内底面までの計測値）、脚部穿孔の位置を基準として前後関係を決定した。さらに補完的な要素として坏部内面のヘラ磨きの出現、成形の粗雑化、その他の器種を考慮した。

この基準で作成したのが第150図の編年案で、Ⅰ期～Ⅵ期が設定できる。

Ⅰ期

Ⅰ期は前田東・中村遺跡Ｃ区SR02出土遺物を指標とする。この流路から出土した遺物をみると壺・直口壺・小型丸底壺・甕・高坏が出土している。

土師器高坏は高坏Ａのみで、屈曲部の形態により３種類（高坏Ａ1・Ａ2、Ｂ1）が確認できる。

高坏Ａは屈曲部の坏底部が直線的にやや上方に延び、体部から口縁部にかけての部分を坏底部端の上に乗せ、接合しているために、その接合部分が段状に残り、屈曲部が明瞭に残る高坏Ａ1、やや上方に延びる坏底部と体部の境が屈曲し稜を残す高坏Ａ2があり、高坏B1では坏部椀形を呈するが、口縁部は外反し、外面下位に突帯状の突出部（稜）を持つ高坏Ｂ1がある。

高坏Ａ1は坏底部が直線的にやや上方に、体部は内湾気味に外上方に延び、口縁部を外反させ、口縁端部は丸く終わらせる。屈曲部の段は接合痕跡が明瞭に認められ、坏部底部の端部が段として残る。脚は軸部下方がやや開き、脚部の中心からやや下で屈曲し、開く。定量出土するが、土師器高坏の主体は占めない。法量は口径22.4cm、坏高（坏部と脚部の境の屈曲部から口縁端部までの計測値）8.0cm、坏部の深さ7.0cmを測る。高坏Ａ2は坏部底部と体部の境が屈曲し、稜を持つもので、体部は口縁端部まで直線的に外上方に延びるものと外反するものがあり、口縁端部は基本的に丸く終わらせる。脚部は高坏Ａ1と同様な形態で、軸部内面にヘラ削り、屈曲部から下位には刷毛目が施され、かなり丁寧に作られている。当概期の土師器高坏の主体をなすものである。法量は口径16.8～18.6cm、器高12.0～12.9cm、底径11.7～12.5cm、坏高5.0～6.6cm、坏部の深さ4.4～5.4cm、脚高7.0～7.2cmを測る。

高坏Ｂ1は坏部が椀形を呈し、口縁部が外反し、口縁端部を方形に終わらせる。外面下半に突帯状の突出部を持つ。脚は軸部下方がやや開き、下位で屈曲する。軸部内面に粘土紐の接合痕が認められ、やや雑な作りである。法量は口径16.7～22.0cm、坏高6.0～7.2cm、坏部の深さ5.2～6.4cmを測る。

高坏Ａ1・Ａ2、Ｂ1とも脚部に穿孔は認められない。

壺は体部がやや胴長の球形を呈し、口縁部は直線的に外上方に延びる。外面には刷毛目が、内面には指頭痕・指ナデが施されている。直口壺は体部が球形で、口縁部は長く直線的に外上方に延びる。小型丸底壺は体部がやや胴の張る球形を呈し、底部に僅かに平底を残すものもある。口縁部は直線的に短く外上方に延びる。甕は大小があるが、全てやや胴長の球形を呈し、口縁部は外反気味に外上方に延びる。口縁端部が肥厚する布留式甕は確認できない。また土師器高坏は高坏Ａのみで、高坏Ｂは確認できない。

この時期に須恵器は共伴せず、布留式新段階古相に相当する。

Ⅱ期

Ⅱ期は稜遺跡SK－40～42出土資料を指標とするもので、これらの土坑から土師器高坏しか出土しておらず、資料数が少ない。また当概期の資料として尾崎西遺跡SR-5101がある。

土師器高坏は坏部が椀形を呈し、坏部底部と体部の境に突帯状の突出部を持つ高坏B1である。脚は軸部下方が開き、下位で屈曲する。脚部に穿孔は認められない。法量は口径18.3cm、坏高5.6cm、坏部の深さ4.5cmを測る。

Ⅰ期の高坏Ｂ1に比べると坏部外面の突帯状の突出部の形骸化傾向と坏高、坏部の深さの縮小化が認められる。また尾崎西遺跡で高坏Ａ1が出土している。Ⅰ期の高坏Ａ1より接合部が明瞭でなくなるが、依然段状として残っている。体部のやや内湾気味、口縁端部は外方に屈曲する点はⅠ期と同じである。法量は口径13.6cm、坏高6.5cm、坏部の深さ6.0cmと坏高・坏部の深さは依然深い。共伴する土師器高坏の脚には穿孔は認められない。

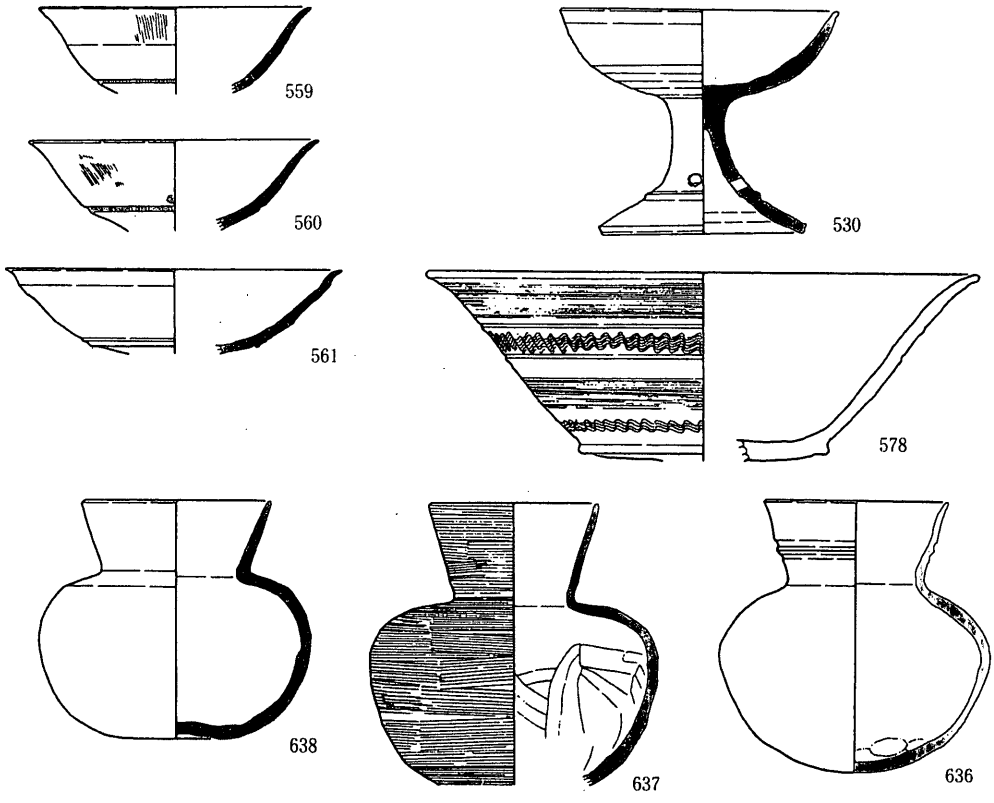
この時期は布留式新段階新相に相当し、共伴する須恵器はＴＧ232型式併行期である。

この時期の県外の参考資料としてはほぼ同時期と考えられる陶邑・大庭寺遺跡がある（第151図）。

土師器高坏Ｂ1と類似する器形が陶邑・大庭寺遺跡Ⅳ第77図561須恵器無蓋高坏３、陶邑・大庭寺遺跡Ⅴ第75図559土師器高坏がある。須恵器無蓋高坏３（561）は坏部が椀型で、坏部底部と体部の境に突帯状の稜があり、また土師器高坏（559）は突帯状の稜ではないが、代わりに沈線がある。両者とも脚部に穿孔は認められない。

Ⅱ期は須恵器出現期で、陶邑・大庭寺遺跡資料も含めて後述したい。

このように稜遺跡出土土師器高坏は県内に同様なものはないが、県外で確認でき、しかも須恵器の初現期と考えられるＴＧ232号窯須恵器と共伴していることは注目できる。



第151図　大庭寺遺跡ＴＧ232号窯出土須恵器(1/3)

Ⅲ期

Ⅲ期は原間６号噴墓壙内埋土出土資料を指標とする。この古墳からは土師器高坏・甕が出土している。

土師器高坏は坏部が坏部下位と体部の接合部分に段状の屈曲部が明瞭に残る高坏Ａ1と屈曲し稜を残す高坏Ａ2がある。また高坏Ｂ2が新たに加わり、高坏Ｂ1は確認できない。

高坏A1は坏底部がほぼ直線的にやや上方に延び、体部は外反気味に外上方に延び、口縁部を外反させ、口縁端部は丸く終わらせる。屈曲部の段はⅠ・Ⅱ期に比べるとかなり形骸化している。脚部は軸部の下方がやや開き、脚部の中心からやや下で屈曲し、開く。脚部内外面は丁寧に作られており、粘土紐の接合痕跡は確認できない。脚屈曲部のやや上側に3箇所の穿孔が認められる。法量は口径20.7cm、器高13.3cm、底径11.6～14.6cm、坏高6.4cm、坏部の深さ5.2cm、脚高6.9cmを測る。高坏A2は坏部下位と体部の境が屈曲し、稜を持つもので、体部は口縁端部まで直線的に延び、口縁部は丸く終わらせる。脚部は高坏A1と同様な形態である。法量は口径16.0cm、底径11.2cm、坏高5.5cm、坏部の深さ4.3cmを測る。

土師器高坏B2は坏部が椀形を呈するもので、口縁部をそのまま終わらせるものとやや外反させるものがある。脚屈曲部からやや上側に3箇所の穿孔が認められる。法量は口径14.8～16.6cm、器高12.3cm、底径10.7～11.4cm、坏高5.7～6.3cm、坏部の深さ4.6～5.0cm、脚高7.0cmを測る。

この時期にはTK216型式併行期の須恵器が共伴する。

屈曲部が突帯状の突出部を持つ高坏B1がⅡ期で消滅し、代わって高坏B2が出現する。

形態的に高坏A1はⅠ・Ⅱ期と比較すると坏部の段状の屈曲部が明瞭ではなくなり、口縁部の外反度も少なくなる。このⅢ期から脚部に穿孔が施され、法量では坏高・坏部の深さの縮小化が認められる。高坏A2は坏部体部の外反するものがなくなり、直線的なもののみとなる。法量は坏高はほぼ同じであるが、口径・底径の縮小化が認められる。また高坏B2では高坏A2と同じであるが、坏部が若干深い傾向がある。

量的には高坏A1は依然主体を占めるものではなく、当概期では高坏A2と高坏B2がほぼ同等量確認できるが、高坏A2は徐々に少なくなる。

Ⅳ期

Ⅳ期は川上古墳出土資料を指標とする（第152図）。この古墳からは土師器壺・甕・高坏・椀が出土している。

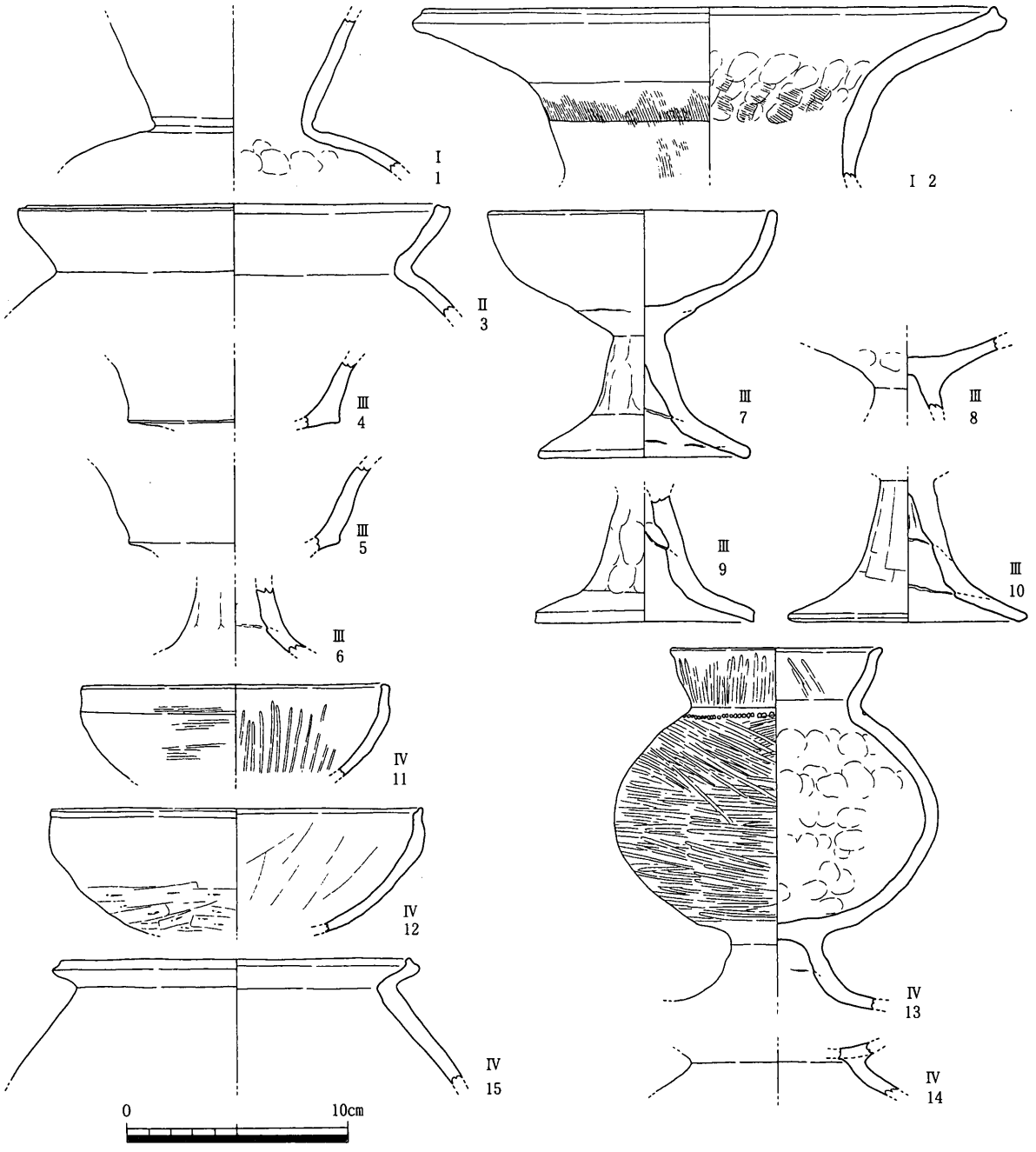
土師器高坏は坏部が坏部下位と体部の接合部分に段状の屈曲部が明瞭に残る高坏A1と坏部が椀形を呈する高坏B2で、高坏A2は確認できない。

土師器高坏は坏部が坏部底部と体部の接合部分に段状の屈曲部が明瞭に残る高坏A1のみで、高坏A2はない。当概期の高坏A1は坏部下位がほぼ直線的にやや上方に延び、体部は外反気味に外上方に延びる。屈曲部の段はⅢ期に比べるとかなり形骸化し、シャープな稜となる。脚部は軸部は下方がやや開き、脚部高の中心からやや下で屈曲し、開く。脚部内面に粘土紐の接合痕が認められ、Ⅲ期に比べると粗雑化の傾向がある。法量は破片のため計測不能である。

土師器高坏B2は坏部が椀形を呈するもので口縁部をそのまま終わらせる。脚屈曲部に穿孔は認められない。脚部内面に粘土紐の接合痕が認められ、高坏A1と同様に粗雑化の傾向がある。法量は口径13.2cm、器高11.1cm、底径9.5cm、坏高5.6cm、坏部の深さ4.3cm、脚高5.5cmを測る。

土師器壺はⅠ期で小型としたもので、体部は胴の張る球形を呈し、口縁部は直線的に外上方に延びる。また壺には脚のつくものもあり、体部は胴の張る球形で、口縁部は内湾し、端部で外反する。甕は布留式甕で、内湾する口縁部から端部は内方に小さく摘み出す。頸部内面の屈曲は丸く、明瞭な稜を持たない。全体にやや厚い作りである。

この時期にはTK208型式併行期の須恵器が共伴する。



第152図　川上古墳出土遺物実測図(1/3)

Ⅲ期と同様に土師器高坏には高坏A1と高坏B2があり、高坏A2は確認できない。高坏A1の坏部外面の段も形骸化し、シャープな稜となっている。

形態的にⅢ期と比較すると高坏A1は坏部外面の段が形骸化し、シャープな稜となる。脚部の穿孔は認められないが、例外的なものと思われる。法量は不明であるが、縮小化があるものと思われる。高坏B2はⅢ期に比べると全ての面において小型化の傾向が認められ、また脚部内面に粘土紐の接合痕が認められることや胎土が粗雑化する傾向が認められる。

Ⅴ期

Ⅴ期は樋端2号墳周溝出土資料を指標とする。樋端2号墳からは土師器壺・高坏・椀が出土している。

土師器壺は小型のもので、体部は胴の張る球形を呈し、口縁部は直線的に外上方に延びる。土師器高坏は坏部外面に稜のある高坏Aがなくなり、主としては高坏B2のみとなる。また当概期の資料として

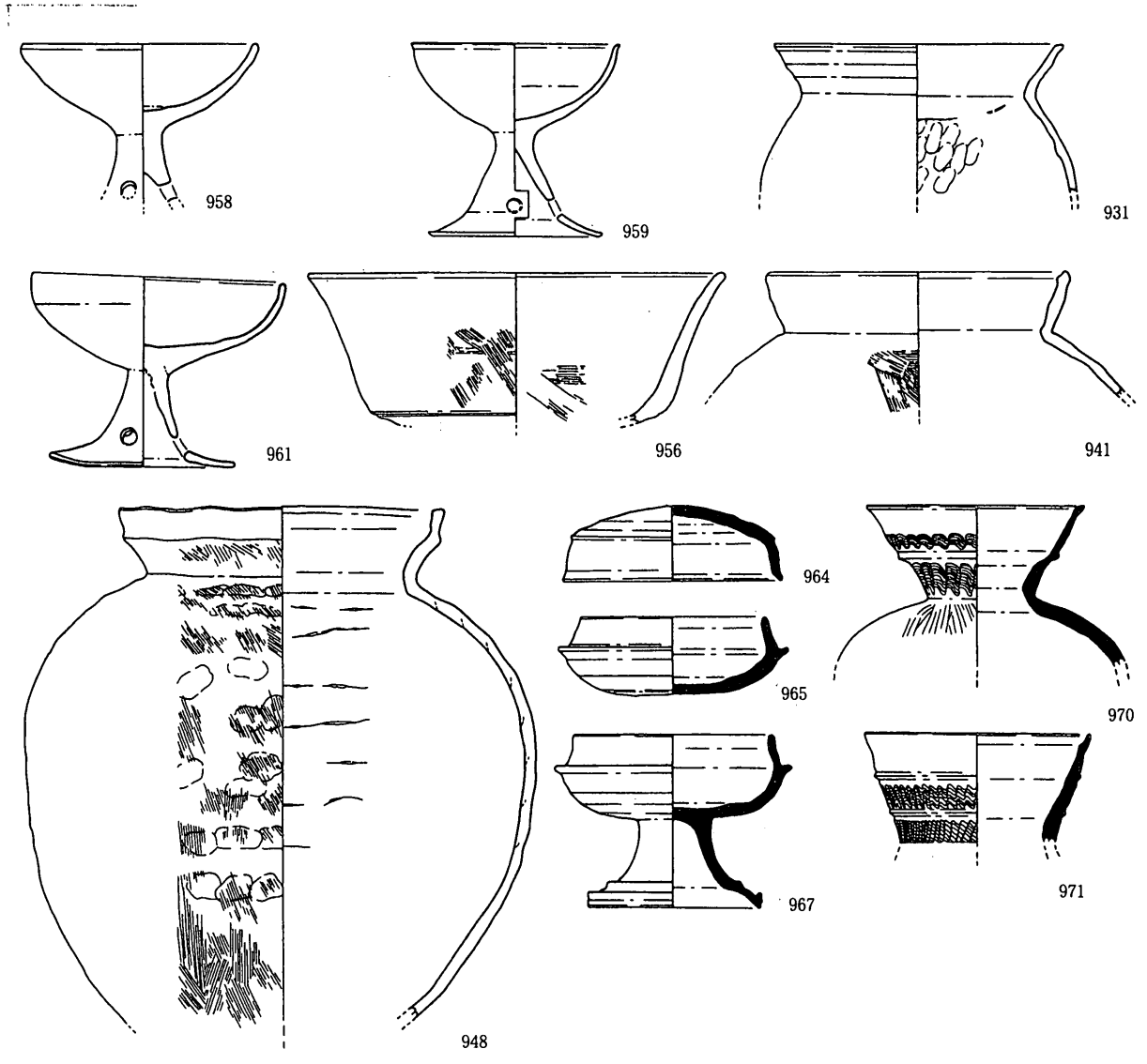
太田下・須川遺跡がある。

土師器高坏Ｂ2は坏部が椀形を呈するもので、口縁部をそのまま終わらせる。この時期の高坏Ｂ2をみると坏部が内湾するものの坏部底部と体部の屈曲がかなり強くなるために坏高の浅いものが出現する。脚部の穿孔は屈曲部の直上に３箇所の穿孔が認められ、脚部内面にヘラ削りを施すなど若干丁寧に作られている。法量は口径14.4～15.0cm、器高11.1～11.9cm、底径9.7～10.0cm、坏高5.7～6.0cm、坏部の深さ3.7～4.3cm、脚高5.4～5.9cmを測る。

この時期に共伴する須恵器は不明である。

この時期には土師器高坏Ａ1が消滅し、高坏Ｂのみとなる。形態的にⅣ期と比較すると高坏Ｂ2は依然坏部が椀形を呈するものもあるが、Ⅳ期に比べると坏部の底部から口縁部にかけての屈曲が強くなるものが出現し、坏高が低くなる傾向を示している。脚部の穿孔は依然屈曲部から上にあるがⅢ期に比べると屈曲部に近づく傾向が認められる。また坏部内面にヘラ磨きが施されるようになる。脚部内面のヘラ削りがこの時期に再び認められるが、傾向としては粗雑化傾向であることには違いない。

県内で当概期の資料として太田下・須川遺跡竪穴住居出土資料（第153図）がある。太田下・須川遺



第153図　太田下・須川遺跡ＳＨ02出土遺物(1/3)

跡では竪穴住居SH02～06がほぼ同時期と考えられ、この資料をみると土師器高坏の中に口径24.0cmを測るものがある。形態的には土師器高坏A2に分類されるが、高坏A2が確認できるⅠ期～Ⅲ期にこれほど口径の大きいもの（第153図956）が存在せず、系譜的にも追えないことからここでは土師器高坏Cとする。また坏部の屈曲部に形骸化した段状の痕跡がある土師器高坏A1が僅かに認められる。Ⅳ期では確認できなかったが、高坏A1が僅かながらⅤ期まで残ることが確認できた。

これ以外の土師器高坏をみると坏部の形態に依然椀形を呈し、坏高のやや深いものと体部の屈曲が強く、器高の低いものがある。また脚部の穿孔も屈曲部直上に認められること及び法量から樋端２号噴出土資料に代表されるⅤ期相当するものと思われる。

この竪穴住居からは土師器の他にＴＫ23型式併行期の須恵器が共伴する。

Ⅵ期

Ⅵ期は平成13年度県道原間遺跡竪穴住居出土資料を指標とする。県道原間遺跡の竪穴住居からは土師器高坏・椀・甑が出土している。また当概期の資料として空港跡地遺跡SHa08がある。

土師器高坏は坏部が椀形を呈する高坏Ｂ2のみで、口縁部をそのまま終わらせるものである。

この時期の高坏Ｂ2はⅤ期で出現した坏部が内湾するものの坏部底部と体部の屈曲がかなり強くなるものが目立つ。また坏部が内湾するものの直線的に延びるようなものも出現する。また脚部に明瞭な屈曲部がなくなり、脚部の穿孔は僅かな屈曲部の直下に認められる。脚部内面に粘土紐の接合痕が認められる。法量は口径13.6～15.3cm、器高10.7cm、底径11.0cm、坏高4.5～4.6cmのものと6.3cmのもの、坏部の深さ3.4～4.0cm、脚高4.4cmを測る。

この時期にはＴＫ23型式併行期の須恵器が共伴する。

この時期には土師器高坏はⅤ期同様主としては高坏Ｂのみである。

形態的にⅤ期と比較すると高坏B2は坏部の屈曲が強くなるものとやや直線的になるものが認められ、前者は坏高が低くなる傾向を示し、後者は坏高が深くなる傾向を示すが、坏部の深さは低くなっている。このことから出現期の椀形を呈するものは認められなくなり、椀形の形骸期に位置付けられる。脚部の屈曲も不明瞭になり、穿孔も屈曲部直下になる。

また空港跡地遺跡では竪穴住居SHa08が同時期と考えられ、この資料をみると土師器高坏に坏部が屈曲する高坏A2・Ｃがあり、高坏A2は坏部の屈曲がかなり形骸化し、緩やかに屈曲する。法量は口径14.0cm、器高11.2cm、底径9.5cm、坏高4.6cm、坏部の深さ3.6cm、脚高6.6cmを測る。坏部の屈曲と法量、特に坏部の深さが縮小している。Ⅳ・Ⅴ期では確認できなかったが当概期まで高坏A2及び高坏Ｃが残るようで、量的には少ない。

以上土師器高坏を中心に各期の特徴をまとめた。

共伴する須恵器の前後関係も田辺編年と矛盾はなく、土師器壺・甕・椀においても矛盾しない結果となった。

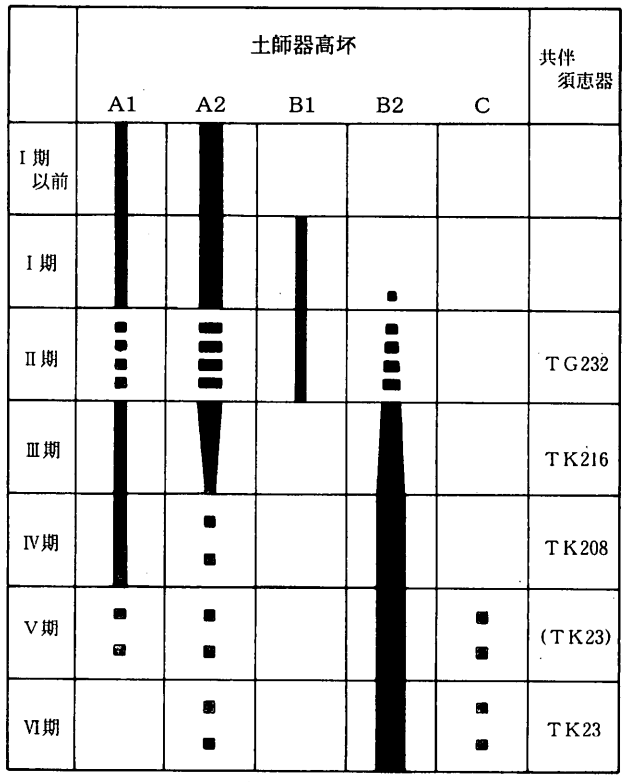
２．土師器高坏の様相（第４表）

前述した各期の様相から土師器高坏の消長が判明した。

土師器高坏A1はⅠ期から存在し、Ⅴ期まで確認できる。出土量はⅠ期では高坏A2と共に主流を占めるが、高坏Ｂ2の出現により、その量は減じ、Ⅴ期に消滅する。各期を通して土師器高坏の主体は占めていない。高坏A2はⅠ期から存在し、Ⅵ期まで確認できる。出土量はⅠ期で高坏A1と共に主流を占

め、Ⅳ期遺構出土量を減じ、Ⅵ期に消滅する。高坏Ｂ2が出現するまで主体を占めている。高坏Ｂ1はⅠ・Ⅱ期に確認できるだけで、出土量も少ない。高坏B2は現在のところⅢ期から出現し、徐々に多くなり、Ⅴ期には主体を占める。Ⅵ期以後この土師器高坏B2しか存在しなくなる。

このことにより坏部が椀形を呈する高坏の出現時期は現在のところⅠ期からとなるが、須恵器出現期以降主流となる高坏Ｂ2はⅢ期から出現する。



第４表　土師器高坏消長表

３．土師器高坏の形態・法量変化

第158図で提示した編年案で、その基軸とした土師器高坏の形態的変化、法量をまとめたい。

土師器高坏の形態的な変化の特徴として高坏Ａ1は坏部外面の段状の突出部の形骸化、高坏Ａ2は坏部屈曲の形骸化、高坏Ｂ1は突帯状の稜の形骸化、高坏Ｂ2は椀形坏部の矮小化があげられる。またⅢ期から高坏Ａ・Ｂについては脚部に穿孔が施され、その穿孔位置が脚部屈曲部より上部であったものが徐々に下降する傾向が指摘でき、さらに土師器高坏の変化を確実なものとした。

このように土師器高坏の形態変化は屈曲部の形骸化が主として認められるが、特に坏部が椀形を呈する高坏Ｂ2は坏部が深い椀形のものから坏部下半が水平に延び、口縁部に向けて強く屈曲する形態になるために徐々に坏部の深さを減じることが判明した。

一方第５表で土師器高坏の法量変化を見ると第Ⅰ期では口径が16.7cmを越えるもので、中には20.0cmを越すものもある。Ⅱ期以降は口径・器高・坏部の深さを中心として全てにおいて法量の縮小化傾向が認められ、小型化してくる。

以上の結果土師器高坏には全ての形態において形態的の変化と法量の変化が認められ、土師器高坏の編年基準となることが明確となった。

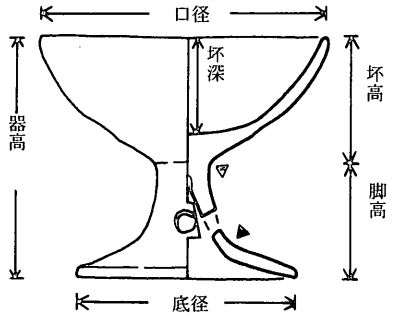
４．土師器高坏Ｂの系譜

次に椀形高坏の系譜であるがここで重要になってくるのが、Ⅰ・Ⅱ期で出現する土師器高坏Ｂ1の資料である。この時期の指標とした遺跡は県内では三木町前田東・中村遺跡、長尾町稜遺跡、参考資料として県外の大阪府陶邑・大庭寺遺跡出土資料（第151図）を提示した。

Ⅰ期の資料は前田東・中村遺跡Ｃ区SR02出土遺物（第216図817）があり、Ⅱ期の資料は稜遺跡SK－40～42出土遺物（第36図81）がある。

これらは全体的に椀形に近い形態を呈するが体部から口縁部にかけて内湾し、口縁部が外反する形態

第５表　各期高坏形土器法量

	土師器高坏A				土師器高坏B				共伴須恵器
	A１		A２		B１		B２		
Ⅰ期	口径 (cm)	22.4	口径 (cm)	16.8～18.6	口径 (cm)	16.7～22.0			
	器高 (cm)		器高 (cm)	12.0～12.9	器高 (cm)				
	底径 (cm)		底径 (cm)	11.7～12.5	底径 (cm)				
	杯高 (cm)	8.0	杯高 (cm)	5.0～6.6	杯高 (cm)	6.0～7.2			
	杯部深 (cm)	7.0	杯部深 (cm)	4.4～5.4	杯部深 (cm)	5.2～6.4			
	脚高 (cm)		脚高 (cm)	7.0～7.2	脚高 (cm)				
Ⅱ期					口径 (cm)	18.3			TG232
					器高 (cm)				
					底径 (cm)				
					杯高 (cm)	5.6			
					杯部深 (cm)	4.5			
					脚高 (cm)				
Ⅲ期	口径 (cm)	20.7	口径 (cm)	16.0			口径 (cm)	14.8～16.6	TK216
	器高 (cm)	13.3	器高 (cm)				器高 (cm)	12.3	
	底径 (cm)	11.6～14.6	底径 (cm)	11.2			底径 (cm)	10.7～11.4	
	杯高 (cm)	6.4	杯高 (cm)	5.5			杯高 (cm)	5.7～6.3	
	杯部深 (cm)	5.2	杯部深 (cm)	4.3			杯部深 (cm)	4.6～5.0	
	脚高 (cm)	6.9	脚高 (cm)				脚高 (cm)	7.0	
Ⅳ期							口径 (cm)	13.2	TK208
							器高 (cm)	11.1	
							底径 (cm)	9.5	
							杯高 (cm)	5.6	
							杯部深 (cm)	4.3	
							脚高 (cm)	5.5	
Ⅴ期							口径 (cm)	14.4～15.0	
							器高 (cm)	11.1～11.9	
							底径 (cm)	9.7～10.0	
							杯高 (cm)	5.7～6.0	
							杯部深 (cm)	3.7～4.3	
							脚高 (cm)	5.4～5.9	
Ⅵ期							口径 (cm)	13.6～15.3	TK23
							器高 (cm)	10.7	
							底径 (cm)	11.0	
							杯高 (cm)	4.5～4.6,6.3	
							杯部深 (cm)	3.4～4.0	
							脚高 (cm)	4.4	

大田下・須川遺跡　ＳＨ０２

Ⅵ期							口径 (cm)	12.0～14.7	TK23
							器高 (cm)	10.6～10.8	
							底径 (cm)	9.5～10.8	
							杯高 (cm)	4.9～5.5	
							杯部深 (cm)	3.8～4.3	
							脚高 (cm)	5.1～5.9	

大田下・須川遺跡　ＳＨ０４

Ⅵ期							口径 (cm)	13.7～14.4	TK23
							器高 (cm)	9.1～10.6	
							底径 (cm)	4.3～5.4	
							杯高 (cm)	3.2～3.9	
							杯部深 (cm)		
							脚高 (cm)		

で、坏部外面に突帯状の稜を持つ高坏Ｂ1である。この土師器高坏Ｂ1は外面に突帯状の稜を持つことから形態的には土師器高坏Ａに類似するが、坏部が椀形を呈することから別系譜と考えられ、どちらかというと土師器高坏Ｂ1は土師器高坏Ａと高坏Ｂ2の折衷形態の感が強い。

この土師器高坏Ｂ1と同形態のものは大阪府陶邑・大庭寺遺跡出土の資料があり、この資料が重要なポイントになってくる。

陶邑・大庭寺遺跡出土土師器高坏は坏部が椀形を呈し、坏部下位部分に沈線を持つもので、突帯状の稜と沈線と屈曲部分の形状が異なるが、坏部が椀形を呈することは同じである。

また同遺構からＴＧ232型式の須恵器高坏が出土している。ＴＧ232型式の須恵器高坏は坏部が椀形を呈するもの（陶邑・大庭寺遺跡Ⅴ　第60図456・457）、突帯状の稜を持つもの（陶邑・大庭寺遺跡Ⅴ　第60図459）、沈線を持つもの（陶邑・大庭寺遺跡Ⅳ　第77図559・560）があり、口縁部が外反するものもあるがこれらは全て内定面が深い椀形を呈する。このように陶邑・大庭寺遺跡では土師器高坏と須恵器高坏に同形態のものが存在することが解る。

陶邑・大庭寺遺跡の報告ではこれらの須恵器無蓋高坏Ａ・Ｇ類は陶質土器に類似例が認められないこと、また土師器高坏に同形態のものが出土していることから土師器の模倣としている。つまりＴＧ232型式段階の須恵器高坏は土師器の模倣であるとしている。しかし果たして無蓋高坏Ａ・Ｇ類は陶質土器のなかに類例が求められないのであろうか。大庭寺遺跡の報告の中に提示した陶質土器（第194図）をみると馬山縣洞36号墓出土の陶質土器の形態は坏部が椀形を呈し、体部外面に突帯状の稜線を持つものが存在することから、陶質土器の模倣も一概に比定できないと考える。

陶邑・大庭寺遺跡では土師器の模倣としたが、県内ではⅠ期以前に遡る資料中にこの３つの形態、土師器高坏Ｂ1・Ｂ2が確認できないことから、県内においては何らかの影響下で成立した器種であることは疑いないものである。

土師器高坏Ｂ1・Ｂ2が直ちに出現期の無蓋高坏（ＴＧ232号窯）の影響を受けて成立したとは言い難いが、なかでも特にⅢ期から出現する土師器高坏Ｂ2についてはこの坏部の形態とⅠ・Ⅱ期段階の土師器高坏脚部に穿孔がなく、高坏Ｂ2成立時に穿孔が施されるようになることからＴＧ232号窯出土の無蓋高坏の影響を受けている可能性が高い。

またⅡ期段階の土師器高坏Ｂ1もＴＧ232号窯出土の無蓋高坏の影響下で成立した可能性があり、大庭寺遺跡の報告で、ＴＧ232号窯が最古の須恵器窯ではない可能性を指摘していることから、Ⅰ期段階で成立する高坏Ｂ1もＴＧ232号窯より遡る須恵器窯製品の影響の可能性がある。

以上の状況から土師器高坏Ｂ1はⅠ期から、高坏Ｂ2はⅢ期から出現しており、これら土師器高坏Ｂは須恵器（ＴＧ232号窯及びそれ以前の須恵器窯）の影響を受けて成立したと考えたい。

しかし県内には三谷三郎池西岸窯と最古の窯跡が構築されていることから県内で生産された須恵器の模倣である可能性も考えられる。

５．７世紀（ＴＫ217型式併行期）に盛行する土師器高坏までの系譜

Ⅵ期以降県内ではほとんど土師器高坏は出土していない。Ⅵ期以降は古墳に須恵器が多量に副葬される時期で、土師器はほとんど出土していない。

その数少ない資料として原間２号墳出土土師器高坏（原間遺跡Ⅱ　第95図241）・財田古墳群SK01出土土師器高坏（財田古墳　第34図18・19）を取り上げる。両者ともＴＫ209型式併行期の土師器高坏と

考えられ、坏部が椀形を呈する高坏Ｂに分類できる。Ⅵ期段階の高坏Ｂがかなり法量が縮小、小型化した形態からかなりの期間は空くもののⅥ期土師器高坏の口径13.7～15.6cmに比べると口径18.4～19.6cm、坏高5.3～6.2cmと大型化していることから土師器高坏Ｂが６世紀段階にかなり形態変化をしたことが窺われる。また脚部穿孔は認められず、坏部内面のヘラ磨きも施されていない。しかし形態的には高坏Ｂの系譜で考えられ、量的には須恵器に凌駕されるが、須恵器出現期から古墳時代を通じて土師器高坏のなかでは高坏Ｂが主体を占めていることは疑いのないことである。

一方ＴＫ217型式併行期の土師器高坏（下川津遺跡第２分冊　第59図８）をみると坏部が浅い椀形を呈するもので、高坏Ｂに分類できるが、坏部下半部の接合痕跡の形状及び坏部内面の放射状ヘラ磨き・内底面の連結輪状のヘラ磨きはＴＫ209型式併行期では認められず、新たに出現した器種であることが解る。また法量は口径16.2cm、器高11.8cm、底径11.4cm、坏高4.2cm、脚高7.4cmを測り、Ⅵ期の土師器高坏とほぼ同じ法量を持つが、脚の形態がかなり細く、高いという点で異なる。したがって須恵器出現期に成立した土師器高坏Ｂと７世紀（ＴＫ217型式併行期）に多量に認められる土師器高坏とは系譜が異なるものと考えられる。つまり土師器高坏Ｂは現状でⅢ期（おそらくⅡ期）に出現し、ＴＫ209型式併行期まで存続し、高坏Ｂの系譜は消滅するものと考えられ、ＴＫ217型式併行期段階の土師器高坏は畿内の影響下に成立したものと考える。

参考文献

大久保徹也「讃岐地方における古墳時代初頭の土器について」『財団法人香川県埋蔵文化財調査センター　研究紀要Ⅰ』財団法人香川県埋蔵文化財調査センター 1993.3

蔵本晋司　「中間西井坪遺跡谷７出土土器について」『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告　第三十二冊　中間西井坪遺跡Ⅱ』香川県教育委員会他 1999.3

「陶邑・大庭寺遺跡Ⅳ」『(財)大阪府埋蔵文化財協会調査報告書　第90輯』大阪府教育委員会他 1995

「陶邑・大庭寺遺跡Ⅴ」『(財)大阪府埋蔵文化財調査研究センター調査報告書　第10集』大阪府教育委員会他 1996

「尾崎西遺跡」『県道長尾大内線道路改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査概報』香川県教育委員会他 1993.3

「財田古墳群、四ツ塚２号墳」『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告　第四冊』香川県教育委員会他 1987.10

「下川津遺跡」『瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告Ⅶ』香川県教育委員会他 1990.3

「前田東・中村遺跡」『高松東道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告　第３冊』香川県教育委員会他 1995.3

「太田下・須川遺跡」『高松東道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告　第４冊』香川県教育委員会他 1995.3

「空港跡地遺跡Ⅴ」『空港跡地整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告　第５冊』香川県教育委員会他 2000.12

「原間遺跡Ⅱ」『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告　第42冊』香川県教育委員会他 2002.12

第６表　樋端遺跡土器観察表

遺物No.	図版No.	旧遺構名	器種	口径	器高	底径	残存量	調整	焼成	色調	胎土	備考
11		A地区	土師器（口縁部）				口縁部破片	(外)横ナデ (内)横ナデ	普通	(外)明赤褐2．5YR5／8 (内)橙5YR6／6	0.1mm～1mmの砂粒を少量に含む 石英・長石含む	
12		A地区	土師器 椀	13.4			1/8	(外)ナデ・磨滅 (内)ナデ・磨滅	普通	(外)明赤褐2．5YR5／8 (内)橙5YR6／6	0.1mm～1mmの砂粒を含む 石英・長石含む	
13	166	A地区	土師器 高坏	15.0	11.9	10.0	7/8	(外)ナデ・板ナデ・穿孔3カ所 (内)ヘラ磨き・磨滅・ヘラ削り・刷毛目	普通	(外)橙5YR6／6 (内)橙5YR6／6	0.1mm～1mmの砂粒を少量に含む 石英・長石含む	
14	166	A地区	土師器 高坏	14.4	11.1	9.7	7/8	(外)ナデ・板ナデ・穿孔1カ所 (内)ヘラ磨き・板ナデ・磨滅	普通	(外)橙5YR6／6 (内)橙5YR6／6	0.1mm～1mmの砂粒を少量に含む 石英・長石含む	
15	165	A地区	土師器 短頸壺	9.2	15.3	4.7	1/8	(外)ナデ・ヘラ磨き (内)指ナデ・指頭痕・ヘラ磨き	普通	(外)明赤褐2．5YR5／8 (内)橙5YR6／6	0.1mm～1mmの砂粒を少量に含む 石英・長石含む	
16	166		弥 壺	6.5	11.7	4.0	8/8	(外)刷毛目後ヘラ磨き・沈線1条・ナデ (内)ナデ・指頭痕後・ヘラ削り後指ナデ	普通	(外)にぶい赤褐5YR5／3 (内)にぶい黄褐10YR5／4	0.1mm～1mmの砂粒を含む 石英・長石含む	
17		D－ ST11	（底部）			3.0	底部3/8	(外)板ナデ・ヘラ磨き (内)摩滅・板ナデ	普通	(外)にぶい橙7．5YR7／6 (内)浅黄橙10YR8／4	0.1mm～1mmの砂粒を含む 石英・長石含む	
18		D－No.237	鉢			4.3	底部8/8	(外)板ナデ・穿孔1カ 所指頭痕 (内)板ナデ・ヘラ削り	普通	(外)にぶい黄橙10YR7／4 (内)にぶい黄橙10YR7／4	0.1 mm～3mmの砂粒を含む 石英・長石含む	
19	168	D－ ST06	壺棺			8.3	3/8	(外)板ナデ・線刻・摩滅・刷毛目 (内)摩滅・刷毛目・剥離・指頭痕・指ナデ	普通	(外)にぶい橙7．5YR7／6 (内)にぶい橙7．5YR7／6	0.1mm～10mmの砂粒を含む 石英・長石含む	
20		D－ ST06	鉢				口縁部破片	(外)ナデ・指頭痕・摩滅 (内)刷毛目	普通	(外)にぶい黄橙10YR7／4 (内)にぶい黄橙10YR7／4	0.1mm～2mmの砂粒を含む 石英・長石含む	
21	167	D－ ST08	鉢	42.6		8.4	7/8	(外)刷毛目・ナデ・磨滅 (内)板ナデ・指頭痕・摩滅・刷毛目・ヘラ磨き	普通	(外)橙7．5YR6／6 (内)橙7．5YR6／6	0.1 mm～3mmの砂粒を含む 石英・長石含む	
22	167	D－ ST08	壺棺		58.2	9.7	5/8	(外)ヘラ磨き・タタキ・刷毛目・穿孔1カ所 (内)指ナデ・刷毛目	普通	(外)明赤褐5YR5／6 (内)明赤褐5YR5／6	0.1mm～7mmの砂粒を含む 石英・長石含む	
23		D－ SX01・No.208 223	壺	23.6			口縁部破片	(外)沈線3条・2条・刻み目 (内)剥離	普通	(外)橙5YR6／6 (内)橙5YR6／6	0.1mm～1mmの砂粒を少量に含む 石英・長石含む	
24		D－No.141 119 236	短頸壺	27.2			口縁部破片	(外)ナデ・刷毛目 (内)ナデ・ヘラ削り	普通	(外)橙5YR6／6 (内)橙5YR6／6	0.1mm～2mmの砂粒を少量に含む 石英・長石含む	
25		D－ ST03・No.151	鉢				口縁部破片	(外)ナデ・磨滅 (内)ヘラ磨き・ナデ	普通	(外)橙7．5YR7／6 (内)にぶい黄橙10YR7／4	0.1mm～1mmの砂粒を含む 石英・長石含む	
26	167	D－ ST03・No.151	壺棺			8.5	底部4/8	(外)板ナデ・ヘラ磨き (内)板ナデ	普通	(外)明黄褐10YR7／6 (内)灰黄2．5Y7／2	0.1mm～4mmの砂粒を含む 石英・長石含む	
27	167	D－ ST02・No.148	壺棺			9.0	1/8	(外)摩滅 (内)摩滅・刷毛目・ヘラ削り・指ナデ	普通	(外)橙7．5YR6／6 (内)橙7．5YR6／6	0.1mm～7mmの砂粒を多量に含む 石英・長石含む	
28		D－ ST05	高坏	26.7			3/8	(外)摩滅・穿孔4カ所 (内)摩滅・刷毛目	普通	(外)にぶい橙7．5YR7／6 (内)にぶい橙7．5YR7／6	0.1mm～3mmの砂粒を含む 石英・長石含む	
29		D－ ST05	壺棺		45.4	6.7	7/8	(外)刷毛目・ヘラ磨き・櫛描き沈線14条・穿孔1カ所 (内)刷毛目・指ナデ	普通	(外)浅黄2．5Y7／3 (内)浅黄2．5Y7／3	0.1mm～5mmの砂粒を含む 石英・長石含む	
30		D－ ST04	壺棺			8.6	底部8/8	(外)摩滅・ヘラ磨き (内)摩滅	普通	(外)にぶい黄橙10YR6／4 (内)黄灰2．5Y5／1	0.1mm～7mmの砂粒を含む 石英・長石含む	
31	168	D－ ST04	壺棺	47.0		10.4	1/8	(外)刷毛目後ヘラ磨き・指ナデ・飯指紋 (内)指ナデ・刷毛目	普通	(外)赤褐5YR4／6 (内)赤褐5YR4／6	0.1mm～3mmの砂粒を含む 石英・長石含む	
32		D－ ST04	壺	20.6			口縁部1/8	(外)刷毛目 (内)ナデ	普通	(外)浅黄2．5Y5／3 (内)浅黄2．5Y5／3	0.1mm～3mmの砂粒を含む 石英・長石含む	
33		D－ ST04	壺			6.0	底部1/8	(外)ナデ (内)ナデ	普通	(外)浅黄2．5Y5／3 (内)浅黄2．5Y5／3	0.1 mm～3mmの砂粒を含む 石英・長石含む	
94	170	D地区神越2号墳	須 蓋	12.8	4.3		8/8	(外)回転ナデ・ヘラ削り (内)回転ナデ	普通	(外)灰N4／ (内)灰N5／	0.1mm～1mmの砂粒を多量に含む 石英・長石含む	
95	170	D地区神越2号墳	須 蓋	13.0	5.1		8/8	(外)回転ナデ・ヘラ削り (内)回転ナデ	普通	(外)灰N5／ (内)灰白N7／	0.1mm～1mmの砂粒を含む 石英・長石含む	
96	171	D地区神越2号墳	須 蓋	12.7	4.4		8/8	(外)回転ナデ・ヘラ削り (内)回転ナデ	普通	(外)灰N4／ (内)灰N4／	0.1mm～1mmの砂粒を含む 石英・長石含む	
97	171	D地区神越2号墳	須 蓋	12.8	4.7		8/8	(外)回転ナデ・ヘラ削り (内)回転ナデ	普通	(外)灰N5／ (内)灰白N7／	0.1mm～1mmの砂粒を含む 石英・長石含む	
98	171	D地区神越2号墳	須 身	12.2	3.8	5.1	8/8	(外)回転ナデ・ヘラ削り (内)回転ナデ	普通	(外)黄灰2．5Y6／1 (内)黄灰2．5Y6／1	0.1mm～1mmの砂粒を含む 石英・長石含む	
99	170	D地区神越2号墳	須 身	11.1	4.9	5.1	8/8	(外)回転ナデ・ヘラ削り (内)回転ナデ	普通	(外)灰N6／ (内)灰7．5Y6／1	0.1mm～1mmの砂粒を含む 石英・長石含む	
100	170	D地区神越2号墳	須 高坏	10.1	7.5	8.2	8/8	(外)回転ナデ・ヘラ削り後指ナデ・沈線1条 (内)回転ナデ	普通	(外)灰N6／ (内)灰N6／	0.1mm～1mmの砂粒を多量に含む 石英・長石含む	
101	171	D地区神越2号墳	須 高坏	10.3	8.1	8.2	8/8	(外)回転ナデ・ヘラ削り後指ナデ・沈線1条 (内)回転ナデ	普通	(外)灰N6／ (内)灰N6／	0.1mm～1mmの砂粒を多量に含む 石英・長石含む	

遺物No.	図版No.	旧遺構名	器種	口径	器高	底径	残存度	調整	焼成	色調	胎土	備考
102	171	D地区神越2号坑	須 高坏	11.7	8.3	9.7	8/8	(外)回転ナデ (内)回転ナデ	普通	(外)灰5Y6／1 (内)灰5Y6／1	0.1mm～2mmの砂粒を含む 石英・長石含む	
103	171	D地区神越2号坑	須 台付壷	17.6	16.6	7.6	8/8	(外)回転ナデ・沈線2条・ヘラ削り後回転ナデ (内)回転ナデ	良	(外)紫灰5RP5／1 (内)紫灰5RP5／1	0.1mm～2mmの砂粒を含む 石英・長石含む	
104	171	D地区神越2号墳	須 平瓶	5.2	12.7	5.7	8/8	(外)カキ目後指ナデ・刷毛目後指ナデ・ヘラ削り (内)回転ナデ	普通	(外)灰白5Y7／1 (内)灰N5／	0.1mm～3mmの砂粒を含む 石英・長石含む	
105	173	D地区神越2号墳	須 有蓋高坏	12.3	7.2	8.7	7/8	(外)横ナデ・ヘラ削り後指ナデ (内)横ナデ	普通	(外)灰5Y6／1 (内)灰5Y6／1	0.1mm～1mmの砂粒を含む 石英・長石含む	
106	173	D地区神越2号墳	須 ハソウ	12.8	15.6	4.0	8/8	(外)回転ナデ・ヘラ削り・沈線1条2カ 所穿孔1カ所 (内)回転ナデ	普通	(外)灰N5／ (内)灰N5／	0.1mm～1mmの砂粒を含む 石英・長石含む	
107	172	D地区神越2号墳	須 壷			6.0	底部1/8	(外)回転ナデ・横ナデ・ヘラ削り (内)回転ナデ	普通	(外)黄灰2．5Y6／1 (内)黄灰2．5Y6／1	0.1mm～1mmの砂粒を多量に含む 石英・長石含む	
108	172	D地区神越2号墳	須 台付壷	6.5	14.8	6.9	7/8	(外)回転ナデ・ヘラ削り後指ナデ・沈線1条・沈線2条 (内)回転ナデ	普通	(外)灰N4／ (内)灰N5／	0.1mm～1mmの砂粒を含む 石英・長石含む	
109	174	D地区神越2号墳	須 蓋	13.4	3.6		8/8	(外)回転ナデ・ヘラ削り後指ナデ (内)回転ナデ	普通	(外)灰N4／ (内)灰N4／	0.1mm～1mmの砂粒を含む 石英・長石含む	
110	174	D地区神越2号墳	須 蓋	13.1	4.2		8/8	(外)回転ナデ・ヘラ削り・ヘラ削り後指ナデ (内)回転ナデ	普通	(外)灰N4／ (内)灰N5／	0.1mm～1mmの砂粒を含む 石英・長石含む	
111	174	D地区神越2号墳	須 有蓋高坏	11.9	7.6	9.4	8/8	(外)回転ナデ・ヘラ削り・ヘラ削り後指ナデ (内)回転ナデ	普通	(外)灰N4／ (内)灰N4／	0.1mm～1mmの砂粒を含む 石英・長石含む	
112	174	D地区神越2号墳	須 有蓋高坏	11.9	7.0	8.7	8/8	(外)回転ナデ・ヘラ削り (内)回転ナデ	普通	(外)灰N4／ (内)灰N5／	0.1mm～2mmの砂粒を含む 石英・長石含む	
113	173	D地区神越2号墳	土師質 甕	12.5	10.1	8.7	8/8	(外)刷毛目・ナデ (内)刷毛目・ナデ	普通	(外)にぶい黄橙10YR7／4 (内)にぶい黄橙10YR7／4	0.1mm～1mmの砂粒を含む 石英・長石含む	
114		D地区神越2号墳	須 高坏	8.7	13.1	9.6	7/8	(外)回転ナデ・自然釉・沈線1条・沈線2条 (内)回転ナデ・自然釉	良	(外)紫灰5RP6／1 (内)灰N5／	0.1mm～1mmの砂粒を含む 石英・長石含む	
115	173	D地区神越2号墳	須 平瓶	4.7	13.2	5.3	8/8	(外)横ナデ・回転ナデ・横ナデ後カキ目・ヘラ削り・ヘラ削り後刷毛目 (内)回転ナデ	普通	(外)灰N5／ (内)灰N5／	0.1mm～1mmの砂粒を含む 石英・長石含む	
116	173	D地区神越2号墳	瓦器 椀	14.9	4.9	5.3	8/8	(外)暗文・磨滅・指頭痕・貼付高台 (内)暗文・磨滅	普通	(外)灰白2．5Y7／1 (内)灰白2．5Y7／1	0.1mm～1mmの砂粒を含む 石英・長石含む	
117	174	D地区神越2号墳	土師器 皿	17.1	2.5	14.6	8/8	(外)ナデ・手持ちヘラ削り (内)ヘラ磨き・磨滅・ナデ	普通	(外)橙5YR7 ／1 (内)橙5YR7 ／1	0.1mm～5mmの砂粒を多量に含む 石英・長石含む	
118	174	C地区	弥 壷	7.4	11.8	3.6	7/8	(外)ナデ・磨滅 (内)ヘラ削り	普通	(外)にぶい褐7．5YR5／4 (内)にぶい褐7．5YR5／4	0.1mm～4mmの砂粒を含む 石英・長石含む	
119		C地区	弥 甕				体部破片	(外)磨滅 (内)ナデ・ヘラ削り	普通	(外)黒10YR2／1 (内)橙5YR6／6	0.1mm～3mmの砂粒を含む 石英・長石含む	
122		C－SK27	土師器 高坏			13.5	脚部1/8	(外)磨滅・ヘラ磨き (内)ナデ・刷毛目・磨滅	普通	(外)にぶい橙7．5YR7／4 (内)にぶい橙7．5YR7／4	0.1mm～3mmの砂粒を含む 石英・長石・金雲母含む	
124		C－SK11	土師器 (口縁部)				口縁部破片	(外)ナデ (内)ナデ	普通	(外)橙5YR7／6 (内)橙5YR7／6	0.1mm～1mmの砂粒を少量に含む 石英・長石含む	
127		C－SK07	壷				破片	(外)磨滅 (内)指頭痕	普通	(外)明褐7．5YR5／8 (内)黄褐10YR5／6	0.1mm～1mmの砂粒を含む 石英・長石含む	
128		C－SK04	土師器 鉢	14.8			1/8	(外)磨滅・ヘラ磨き (内)ヘラ磨き・磨滅	普通	(外)橙7．5YR6／6 (内)にぶい橙7．5YR7／4	0.1mm～1mmの砂粒を含む 石英・長石含む	
129		C－SX03	壷棺	19.8			口縁部1/8	(外)ナデ (内)磨滅	普通	(外)明黄褐10YR6／6 (内)明黄褐10YR6／6	0.1mm～2mmの砂粒を含む 石英・長石含む	
130	175	C－SX03	鉢	31.0			口縁部2/8	(外)磨滅 (内)指頭痕・ナデ	普通	(外)明黄褐10YR7／6 (内)黒褐2．5Y6／4	0.1mm～2mmの砂粒を含む 石英・長石含む	
131	175	C－SX03	壷棺			10.5	5/8	(外)剥離・板ナデ (内)指頭痕・板ナデ・指ナデ・磨滅	普通	(外)橙5YR6／8 (内)にぶい黄2．5Y6／4	0.1mm～16mmの砂粒を含む 石英・長石含む	
132		C－ST03	鉢	42.5	20.8	9.6	6/8	(外)磨滅 (内)指頭痕・ヘラ磨き	普通	(外)橙5YR6 ／6 (内)明赤褐5YR5／6	0.1mm～4mmの砂粒を含む 石英・長石含む	
133		C－ST13	壷棺		46.9	7.6	6/8	(外)板ナデ・刷毛目・ヘラ磨き (内)板ナデ・刷毛目	普通	(外)にぶい黄橙10YR7／3 (内)にぶい黄橙10YR7／3	0.1mm～5mmの砂粒を含む 石英・長石含む	
134		C－ST03	(底部)			9.6	底部3/8	(外)磨滅 (内)剥離	普通	(外)橙2．5Y6／8 (内)褐灰10YR4／1	0.1mm～11mmの砂粒を含む 石英・長石含む	
135	176	C－ST15	鉢	45.0	6.7	20.8	8/8	(外)磨滅・板ナデ (内)指頭痕・ヘラ削り	普通	(外)にぶい橙7．5YR7／4 (内)にぶい黄橙10YR7／3	0.1mm～3mmの砂粒を含む 石英・長石含む	
136	176	C－ST12 15	壷棺			7.0	6/8	(外)刷毛目後ヘラ磨き・穿孔1カ所 (内)指ナデ・ヘラ削り・刷毛目・剥離	普通	(外)橙7．5YR6／6 (内)灰黄2．5Y5／1	0.1mm～9mmの砂粒を含む 石英・長石・金雲母含む	
137	175	C－ST14	高坏	27.6			5/8	(外)ナデ・磨滅 (内)ナデ・磨滅	普通	(外)にぶい橙7．5YR7／4 (内)にぶい橙7．5YR7／4	0.1mm～4mmの砂粒を含む 石英・長石含む	

遺物No.	図版No.	旧遺構名	器種	口径	器高	底径	残存量	調整	焼成	色調	胎土	備考
138	175	C−ST14	壺棺	17.6	42.1	8.0	7/8	(外)指ナデ・刷毛目・板ナデ・ヘラ磨き (内)指頭痕・ヘラ削り	普通	(外)橙7．5YR6／6 (内)灰黄褐10YR4／2	0.1mm～2mmの砂粒を含む 石英・長石含む	
139	176	C−ST12 D−ST02	鉢	29.8	20.9	6.6	4/8	(外)摩滅・刷毛目 (内)板ナデ	普通	(外)にぶい黄橙10YR6／4 (内)にぶい黄橙10YR6／4	0.1mm～4mmの砂粒を含む 石英・長石含む	
140	176	C−ST12	壺棺			9.5	7/8	(外)ナデ・摩滅・ヘラ磨き・穿孔1カ所 (内)指頭痕後ナデ・刷毛目	普通	(外)にぶい黄橙10YR7／4 (内)にぶい黄橙10YR5／2	0.1mm～7mmの砂粒を含む 石英・長石含む	
141		C−ST01	甕	15.8			口縁部1/8	(外)ナデ (内)ナデ	普通	(外)にぶい黄橙10YR7／4 (内)にぶい黄橙10YR7／4	0.1mm～1mmの砂粒を含む 石英・長石・金雲母含む	
142		C−ST01	(底部)		5.8		底部4/8	(外)摩滅 (内)摩滅	普通	(外)暗灰黄2．5Y5／2 (内)暗灰黄2．5Y5／2	0.1mm～5mmの砂粒を含む 石英・長石含む	
143		C−ST02	壺				体部1/8	(外)刷毛目後ヘラ磨き (内)刷毛目後ヘラ磨き	普通	(外)にぶい黄橙10YR7／4 (内)にぶい黄橙10YR7／4	0.1mm～4mmの砂粒を含む 石英・長石含む	
144	176	C−ST02	壺棺		56.6	8.2	6/8	(外)刻み目・ヘラ磨き・刷毛目・指頭痕 (内)指ナデ・刷毛目・ヘラ磨き	普通	(外)にぶい橙7．5YR6／4 (内)暗灰黄2．5Y5／2	0.1mm～6mmの砂粒を含む 石英・長石含む	
145		C−ST07	大型鉢				口縁部破片	(外)凹線・ヘラ削り (内)ナデ・摩滅・刷毛目	普通	(外)橙7．5YR7／6 (内)褐灰7．5YR4／1	0.1mm～1mmの砂粒を含む 石英・長石含む	
146	177	C−ST07	壺棺			9.6	5/8	(外)摩滅・ヘラ磨き・指頭痕・穿孔1カ所 (内)摩滅	普通	(外)にぶい橙7．5YR7／4 (内)にぶい橙7．5YR7／4	0.1mm～8mmの砂粒を含む 石英・長石含む	
147		C−ST07	鉢	27.6			1/8	(外)摩滅・ナデ・タタキ目後刷毛目 (内)ナデ・刷毛目・摩滅	普通	(外)橙7．5YR7／6 (内)橙7．5YR7／6	0.1mm～4mmの砂粒を含む 石英・長石含む	
148	177	C−ST07	壺	17.8	51.0	6.8	1/8	(外)ナデ・櫛描き刺突文・指頭痕・タタキ目・刷毛目・摩滅 (内)摩滅・ナデ・指頭痕・指ナデ	普通	(外)にぶい黄橙10YR7／3 (内)にぶい黄橙10YR7／3	0.1mm～7mmの砂粒を含む 石英・長石含む	
149	177	C−ST05	鉢(片口)	40.2	17.8	8.5	7/8	(外)ナデ・刷毛目・指頭痕 (内)ナデ・刷毛目後ヘラ磨き	普通	(外)浅黄2．5Y7／3 (内)浅黄2．5Y7／3	0.1mm～4mmの砂粒を含む 石英・長石含む	
150	177	C−ST05	壺棺			9.5	7/8	(外)摩滅・刷毛目後ヘラ磨き・穿孔1カ所 (内)指頭痕・刷毛目・ナデ	普通	(外)にぶい黄橙10YR7／3 (内)褐灰10YR4／1	0.1mm～6mmの砂粒を含む 石英・長石含む	
151	178	C−ST04	壺棺			7.5	6/8	(外)ヘラ磨き・刷毛目 (内)指ナデ・板ナデ・剥離	普通	(外)にぶい橙7．5YR7／4 (内)にぶい黄橙10YR7／4	0.1mm～4mmの砂粒を含む 石英・長石・金雲母含む	
152	178	C−ST19No.1 3 4 6・ST19	鉢(片口)	35.6	25.1	7.2	8/8	(外)ナデ・摩滅 (内)指頭痕後ナデ・ナデ・摩滅・ヘラ磨き	普通	(外)にぶい橙7．5YR7／4 (内)橙7．5YR7／6	0.1mm～8mmの砂粒を含む 石英・長石含む	
153	178	C−ST19	壺棺			7.5	7/8	(外)摩滅・ヘラ磨き (内)指頭痕・指ナデ・ヘラ削り	普通	(外)にぶい橙5YR7／4 (内)黄褐2．5Y5／3	0.1mm～8mmの砂粒を含む 石英・長石含む	
154	178	C−ST21・ST23①②④・ST23	鉢	36.5	18.5	7.5	4/8	(外)刷毛目・板ナデ (内)刷毛目	普通	(外)にぶい橙7．5YR7／4 (内)明黄褐10YR7／6	0.1 mm～3mmの砂粒を含む 石英・長石含む	
155		C−ST21・ST23 ①～④(底部)	壺棺			6.4	2/8	(外)ヘラ磨き・板ナデ (内)刷毛目・板ナデ	普通	(外)にぶい黄橙10YR6／4 (内)にぶい黄橙10YR6／4	0.1mm～3mmの砂粒を含む 石英・長石含む	
156		C−ST16 No.9・ST16	甕	16.2		5.2	1/8	(外)刷毛目・ナデ (内)ヘラ削り・指頭痕	普通	(外)赤褐2．5YR4／6 (内)赤褐5YR4／6	0.1mm～2mmの砂粒を含む 石英・長石含む	
157		C−ST14 15	壺棺			8.6	1/8	(外)刷毛目・ヘラ磨き・摩滅・穿孔1カ所 (内)指頭痕・刷毛目・摩滅	普通	(外)にぶい黄橙10YR7／3 (内)褐灰10YR4／1	0.1mm～4mmの砂粒を含む 石英・長石含む	
158		D− ST04 07 08	高坏	41.1			口縁部1/8	(外)ナデ・摩滅・ヘラ磨き (内)ナデ・摩滅・ヘラ磨き	普通	(外)浅黄橙10YR8／4 (内)浅黄橙10YR8／4	0.1mm～2mmの砂粒を含む 石英・長石・金雲母含む	
159	179	C−ST17 No.2 35 50・ST17	壺棺			8.8	底部8/8	(外)ヘラ磨き・摩滅・ナデ (内)摩滅・刷毛目・板ナデ	普通	(外)橙7．5YR7／6 (内)褐灰10YR4／1	0.1mm～8mmの砂粒を多量に含む 石英・長石含む	
160	179	C−ST18	鉢	29.7	5.9	15.4	8/8	(外)ナデ・タタキ目後板ナデ (内)刷毛目・ヘラ磨き	普通	(外)にぶい黄橙10YR7／4 (内)にぶい黄橙10YR7／4	0.1mm～5mmの砂粒を含む 石英・長石・金雲母含む	
161	179	C−ST18	壺棺			8.1	7/8	(外)摩滅・ヘラ磨き (内)摩滅・ナデ	普通	(外)淡黄7．5Y8／3 (内)淡黄7．5Y8／3	0.1mm～3mmの砂粒を含む 石英・長石含む	
162		C−ST20	鉢				口縁部破片	(外)摩滅 (内)摩滅・ナデ	普通	(外)にぶい橙7．5YR7／4 (内)明黄褐10YR7／6	0.1mm～4mmの砂粒を含む 石英・長石含む	
163		C−ST20	壺棺			7.3	1/8	(外)摩滅・板ナデ (内)指頭痕・指ナデ・摩滅	普通	(外)黄橙7．5YR7／8 (内)にぶい黄褐10YR4／3	0.1mm～6mmの砂粒を含む 石英・長石含む	
164		C−SD01 No.22	弥 壺	21.2			口縁部1/8	(外)刻み目・ナデ・ヘラ磨き (内)ナデ・摩滅	普通	(外)浅黄橙10YR8／4 (内)浅黄橙10YR8／4	0.1mm～2mmの砂粒を含む 石英・長石含む	
165		C−SD01 No.31	弥 高坏				脚部破片	(外)摩滅 (内)摩滅	普通	(外)浅黄橙10YR8／4 (内)黒褐10YR3／1	0.1mm～3mmの砂粒を多量に含む 石英・長石含む	
169		C−SX01・No.1	(底部)			5.0	底部7/8	(外)板ナデ (内)指頭痕	普通	(外)浅黄2．5Y7／4 (内)浅黄2．5Y7／4	0.1 mm～3mmの砂粒を含む 石英・長石含む	
175		C−No.219	壺	19.8			口縁部2/8	(外)摩滅 (内)刷毛目・ナデ	普通	(外)橙7．5YR7／6 (内)橙7．5YR6／6	0.1mm～4mmの砂粒を多量に含む 石英・長石含む	
176		C−No.022	壺				破片	(外)ナデ・刻み目・刷毛目・摩滅 (内)ナデ・板ナデ・刷毛目	普通	(外)にぶい黄橙10YR7／4 (内)暗灰黄2．5Y5／2	0.1mm～1mmの砂粒を多量に含む 石英・長石含む	

遺物No.	図版No.	旧遺構名	器種	口径	器高	底径	残存率	調整	焼成	色調	胎土	備考
177		No.488	弥 壺	17.6			口縁部1/8	(外)刷毛目・磨滅 (内)ナデ・磨滅・指頭痕	普通	(外)にぶい赤褐5YR5／4 (内)にぶい赤褐5YR5／4	0.1mm～1mmの砂粒を含む 石英・長石含む	
178		No.536	弥 (底部)			4.4	底部1/8	(外)板ナデ・板ナデ後指頭痕 (内)磨滅・板ナデ	普通	(外)明黄褐10YR7／6 (内)明黄褐10YR7／6	0.1mm～1mmの砂粒を含む 石英・長石含む	
185		C－不明遺物	壺棺	8.1			口縁部1/8	(外)ナデ (内)板ナデ・磨滅	普通	(外)明黄褐10YR7／6 (内)明黄褐10YR7／6	0.1mm～1mmの砂粒を含む 石英・長石含む	
186		C－不明遺物	(底部)			7.8	底部2/8	(外)板ナデ (内)板ナデ	普通	(外)にぶい橙7．5YR6／4 (内)にぶい橙7．5YR6／4	0.1mm～1mmの砂粒を少量に含む 石英・長石含む	
187		C－不明遺物	壺	11.8			1/8	(外)ナデ・タタキ・ヘラ削り (内)ナデ・板ナデ	普通	(外)にぶい橙7．5YR6／4 (内)にぶい橙7．5YR6／4	0.1mm～1mmの砂粒を少量に含む 石英・長石含む	
188		C－不明遺物	(底部)			3.7	底部2/8	(外)板ナデ (内)板ナデ	普通	(外)にぶい橙7．5YR6／4 (内)にぶい橙7．5YR6／4	0.1mm～1mmの砂粒を少量に含む 石英・長石含む	
189		C－不明遺物	鉢				口縁部破片	(外)刷毛目 (内)板ナデ	普通	(外)にぶい橙7．5Y6／4 (内)にぶい黄橙10YR6／4	0.1mm～1mmの砂粒を含む 石英・長石含む	

第７表　樋端遺跡鉄器・金属観察表

遺物No.	図版番号	旧遺構名	器種	現存長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	備考
1	164	2号墳	鏃	4.5	4.1	0.2	
2	164	2号墳	鏃	6.9	3.8	0.2	
3	164	2号墳	鏃	16.7	1.2	0.4	
4	164	2号墳	鏃	16.15	1.1	0.4	
5	165	2号墳	刀	104.4	4.0	0.9	
6	164	2号墳	鏃	9.9	1.2	0.3	
7	164	2号墳	ヤリガンナ	10.0	0.9	0.35	
8	165	2号墳	鍬・鋤先	17.6	18.5	0.6	
9	164	2号墳	ヤス	8.5	1.1	0.4	
10	164	2号墳	ヤス	14.8	1.1	0.3	
34	168	2号墳	鉸具	8.4	4.4	0.9	
35	168	2号墳	鉸具	8.7	1.0	0.85	
36	168	2号墳	鏃	8.3	2.4	0.6	
37		2号墳	鏃	9.8	0.7	0.3	
38		2号墳	鏃	13.8	1.1	0.4	
39	168	2号墳	刀子	0.8	5.4	0.9	
40	168	2号墳	不明遺物	5.9	1.4	0.1	
123		C区	鏃	7.6	2.55	0.25	
126		C区	鏃	3.2	10.8	0.2	
166		C区	不明遺物	4.9	2.3	0.3	
174	179.180	3号墳	ヤリガンナ	14.1	0.7	0.2	
181		C区	鏃	2.1	8.1	0.3	
182		C区	鏃	2.3	3.7	0.3	
183		C区	不明遺物	4.9	0.4	0.3	
184		C区	鏃	4.0	0.7	0.35	
金属							
120	174		破鏡	10.9	3.4	6.0	

第８表　樋端遺跡石器観察表

遺物No.	図版No.	器種	現存長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	材質	整形・調整の特徴	備考
121		台石	13.4	13.2	5.8				
125		石鏃	3.5	1.4	0.6		サヌカイト		
167		楔形石器	6.0	4.1	1.4		サヌカイト		
168		石鏃	3.9	2.3	0.6		サヌカイト		
180		石包丁orスクレイパー	5.4	3.8	0.7		サヌカイト		
179		石鏃	2.7	2.1	0.8	4.78	サヌカイト		

第９表　樋端遺跡玉類観察表

遺物番号	図版番号	旧遺構名	器種	直径(mm)	長さ(mm)	孔径(mm)	重量(g)	色調	穿孔	材質	備考
41	168	神越２号墳	ガラス玉	3.0	2.0	上1.0　下1.0	0.08	青（空色）	焼成前		
42	168	神越２号墳	ガラス玉	3.5	1.5	上1.0　下1.0	0.05	青（空色）	焼成前		
43	168	神越２号墳	ガラス玉	3.5	1.5	上1.0　下1.0	0.05	青（空色）	焼成前		
44	168	神越２号墳	ガラス玉	3.0	2.5	上1.0　下1.0	0.07	青（空色）	焼成前		
45	168	神越２号墳	ガラス玉	4.0	2.5	上1.5　下1.5	0.08	青（空色）	焼成前		
46	168	神越２号墳	ガラス玉	4.0	2.5	上1.5　下1.5	0.02	青（空色）	焼成前		
46	168	神越２号墳	ガラス玉	4.0	2.5	上1.0　下1.0	0.06	青（空色）	焼成前		
47	168	神越２号墳	ガラス玉	3.5	3.0	上1.0　下1.0	0.06	青（空色）	焼成前		
48	168	神越２号墳	ガラス玉	4.0	2.5	上1.5　下1.5	0.16	青（空色）	焼成前		
49	168	神越２号墳	ガラス玉	4.0	2.0	上1.5　下1.5	0.08	青緑	焼成前		
50	168	神越２号墳	ガラス玉	3.5	2.5	上1.0　下1.0	0.06	紺	焼成前		
51	168	神越２号墳	ガラス玉	4.5	3.0	上2.0　下2.0	0.12	紺	焼成前		
52	168	神越２号墳	ガラス玉	4.5	3.0	上1.5　下1.5	0.1	紺	焼成前		
53	168	神越２号墳	ガラス玉	4.5	2.5	上1.5　下1.5	0.13	紺	焼成前		
54	168	神越２号墳	ガラス玉	5.0	3.0	上1.5　下1.5	0.16	紺	焼成前		
55	168	神越２号墳	ガラス玉	5.0	3.0	上1.5　下1.5	0.14	紺	焼成前		
56	168	神越２号墳	ガラス玉	5.0	3.5	上1.0　下1.0	0.18	紺	焼成前		
57	168	神越２号墳	ガラス玉	4.0	3.0	上1.5　下1.5	0.07	紺	焼成前		
58	168	神越２号墳	ガラス玉	5.5	3.5	上2.0　下2.0	0.2	紺	焼成前		
59	168	神越２号墳	ガラス玉	5.5	3.5	上1.5　下1.5	0.19	紺	焼成前		
60	168	神越２号墳	ガラス玉	5.5	3.0	上2.0　下2.0	0.18	紺	焼成前		
61	168	神越２号墳	ガラス玉	6.0	3.0	上1.5　下1.5	0.25	紺	焼成前		
62	168	神越２号墳	ガラス玉	5.5	3.5	上1.5　下1.5	0.18	紺	焼成前		
63	168	神越２号墳	ガラス玉	6.0	3.5	上2.0　下2.0	0.17	紺	焼成前		
64	168	神越２号墳	ガラス玉	6.5	3.5	上2.0　下2.0	0.35	紺	焼成前		
65	168	神越２号墳	ガラス玉	6.0	4.5	上1.5　下1.5	0.29	紺	焼成前		
66	168	神越２号墳	ガラス玉	6.5	4.5	上1.5　下1.5	0.36	紺	焼成前		
67	168	神越２号墳	ガラス玉	6.0	5.5	上2.0　下2.0	0.28	紺	焼成前		
68	168	神越２号墳	ガラス玉	7.0	4.5	上1.6　下1.6	0.4	紺	焼成前		
69	168	神越２号墳	ガラス玉	7.5	4.0	上2.0　下2.0	0.38	紺	焼成前		
70	168	神越２号墳	ガラス玉	7.5	4.5	上1.5　下1.5	0.41	紺	焼成前		
71	168	神越２号墳	ガラス玉	7.0	5.0	上1.5　下1.5	0.38	紺	焼成前		
72	168	神越２号墳	ガラス玉	7.0	4.5	上2.0　下2.0	0.34	紺	焼成前		
73	168	神越２号墳	ガラス玉	7.0	5.5	上1.5　下1.5	0.51	紺	焼成前		
74	168	神越２号墳	ガラス玉					紺	焼成前		
75	168	神越２号墳	ガラス玉	8.5	5.5	上2.5　下2.5	0.6	紺	焼成前		
76	168	神越２号墳	ガラス玉	8.0	7.5	上1.8　下1.8	0.82	紺	焼成前		
77	168	神越２号墳	ガラス玉	9.5	6.5	上2.0　下2.0	0.89	紺	焼成前		
78	168	神越２号墳	ガラス玉	5.5	3.0	上1.0　下1.0	0.08	緑	焼成前		
79	168	神越２号墳	ガラス玉	4.5	3.0	上1.5　下1.5	0.11	緑	焼成前		
80	168	神越２号墳	ガラス玉	4.0	2.5	上1.5　下1.6		黄	焼成前		
81	168	神越２号墳	ガラス玉	5.5	3.5	上1.0　下1.0	0.18	黄	焼成前		
82	168	神越２号墳	管玉	8.0	23.5	上2.5　下1.0	2.78	濃緑	焼成前		

83	168	神越２号墳	管玉	7.5	22.0	上1.5	下2.0	2.36	濃緑	焼成前
84	168	神越２号墳	勾玉	10	28.0	上3.0	下2.0	6.39	半透明	焼成前
170	180	神越３号墳	ガラス玉	3.5	3.0	上1.5	下1.5	0.09	濁緑青	焼成前
171	180	神越３号墳	ガラス玉	4.0	4.0	上2.0	下2.0	0.11	青	焼成前
172	180	神越３号墳	ガラス玉	3.0	4.5	上1.5	下1.5	0.03	緑青	焼成前
173	180	神越３号墳	ガラス玉	4.0	3.0	上1.5	下1.5	0.06	濁青	焼成前

遺物番号	図版番号	旧遺構名	器種	現存長(cm)	現存幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	色調	穿孔	材質	備考
85	169	神越２号墳	耳管	3.1	3.4	0.8	31.65				
86	169	神越２号墳	耳管	3.1	3.5	0.9	31.53				
87	169	神越２号墳	耳管	3.1	3.5	0.9	35.15				
88	169	神越２号墳	耳管	3.1	3.5	0.9	31.27				
89	169	神越２号墳	耳管	3.0	3.5	0.8	33.74				
90	169	神越２号墳	耳管	3.2	3.4	0.9	35.28				
91	169	神越２号墳	空玉	0.9	1.0	0.1			焼成前		
92	169	神越２号墳	空玉	1.2	1.1	0.1			焼成前		
93	169	神越２号墳	空玉	1.2	1.2	0.1			焼成前	紐残存	

図　　版

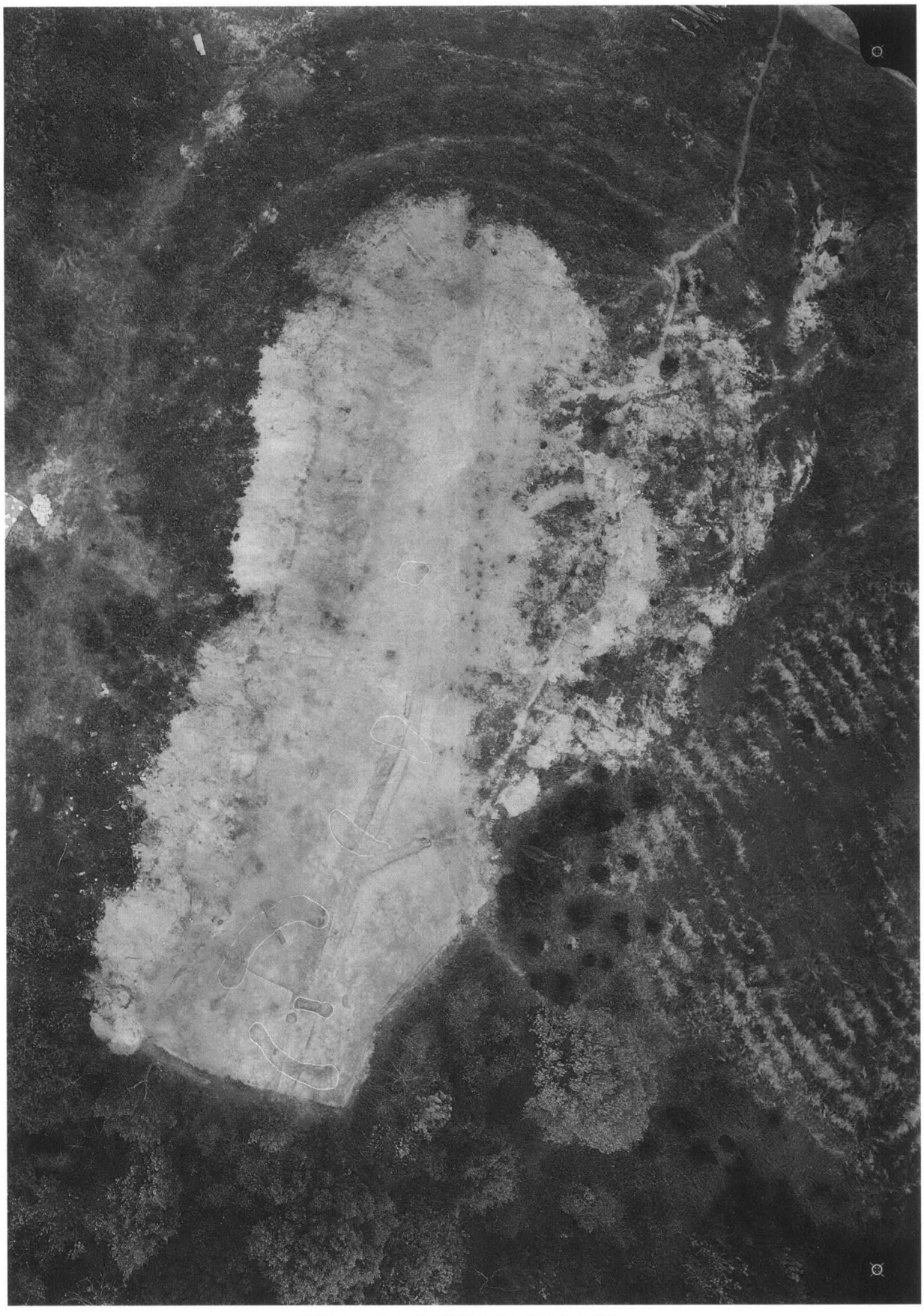
① 樋端１・２号墳調査前風景（西より）

② 樋端１・２号墳調査前風景（北西より）

図版２

① 樋端１・２号墳完掘状況（西より）

② 樋端１・２号墳完掘状況（北西より）



樋端１・２号墳完掘状況（真上より）

図版４

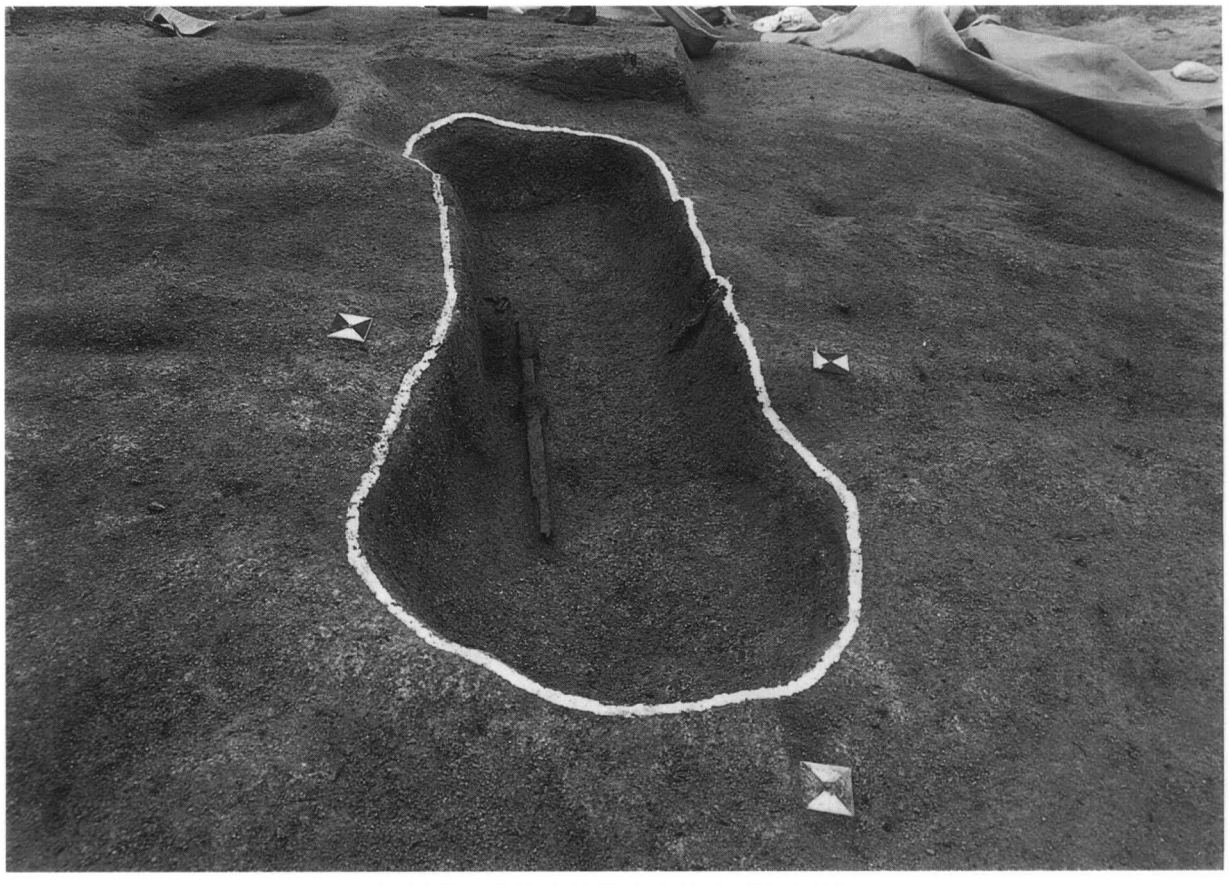
① 樋端２号墳D-D’土層断面（北より）

② 樋端２号墳C-C’土層断面（北東より）

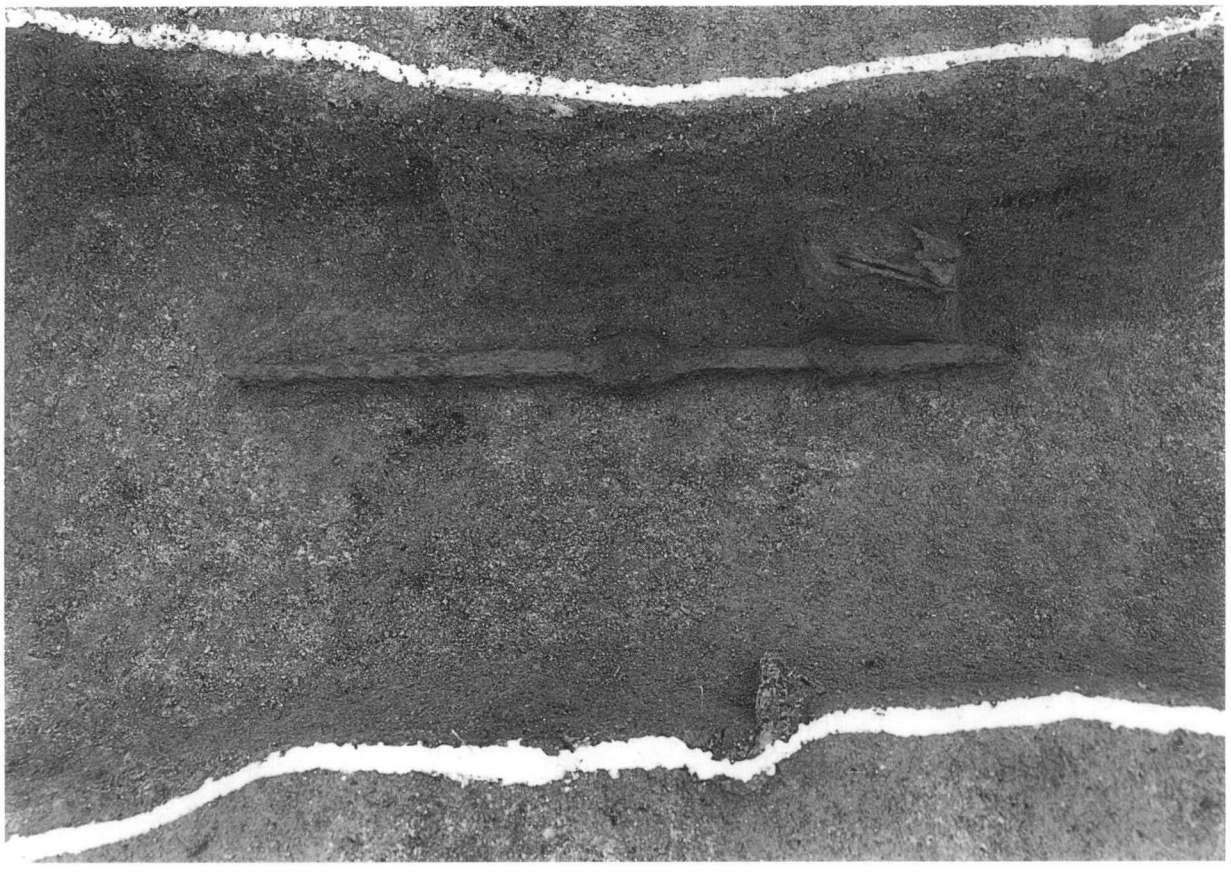
① 樋端 2 号墳完掘状況（北より）

② 樋端 2 号墳主体部土層断面（東より）

図版 6

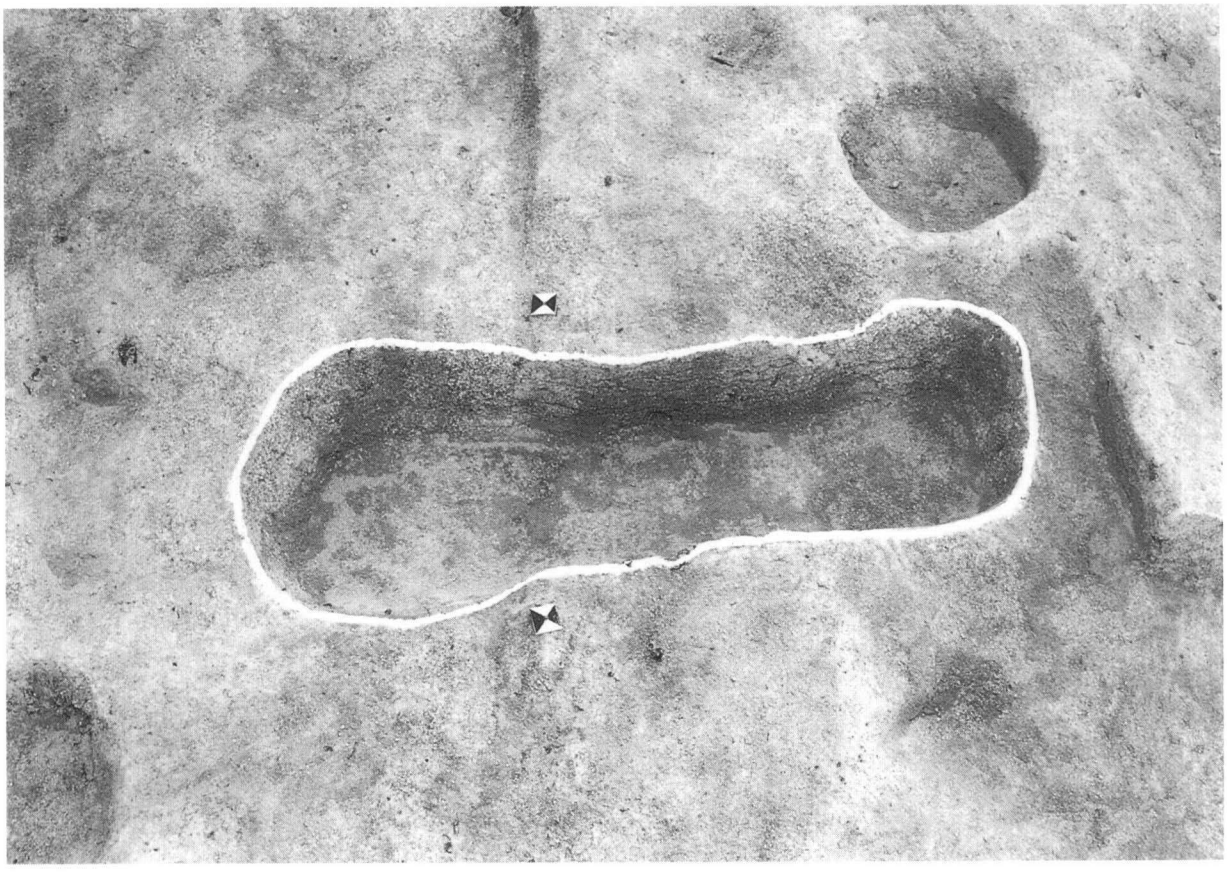


① 樋端 2 号墳主体部完掘状況（東より）



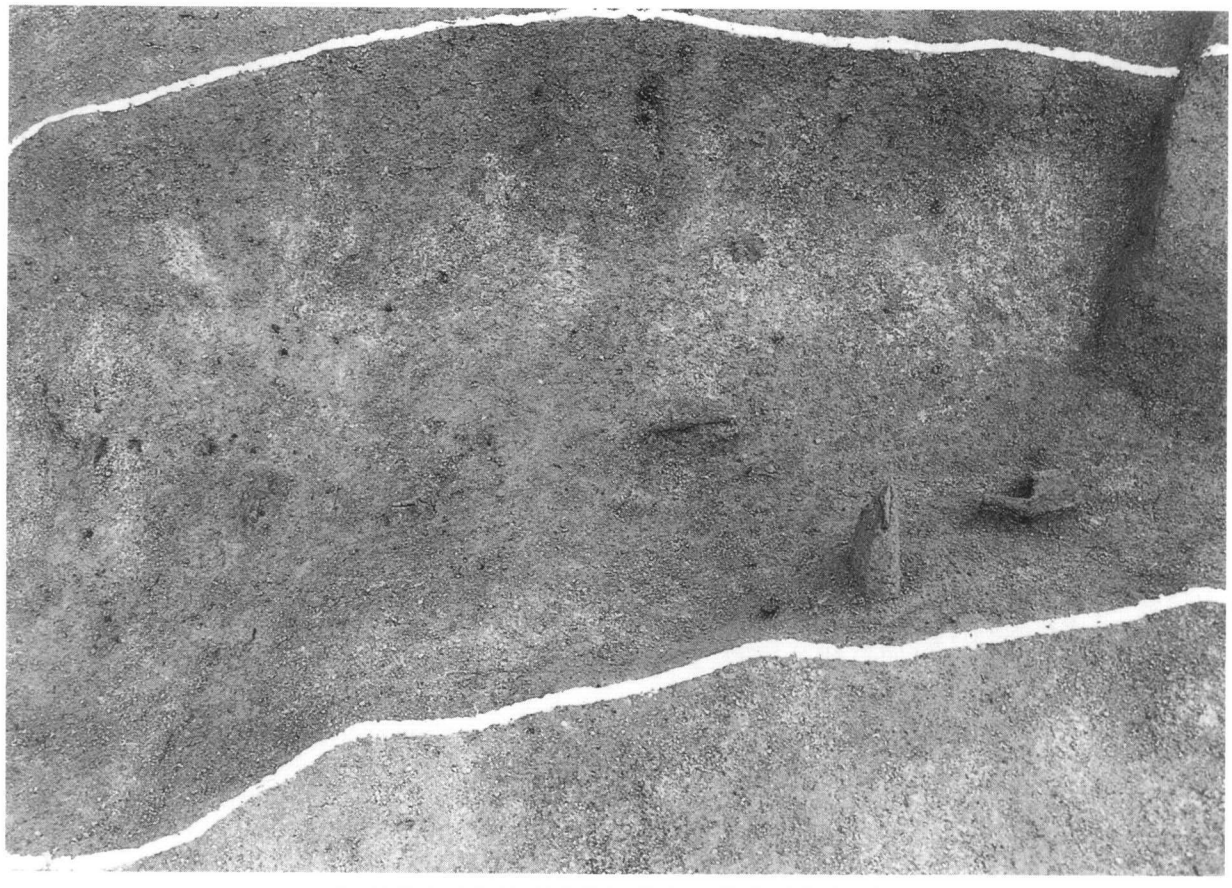
② 樋端 2 号墳主体部遺物出土状況（北より）

① 樋端 2 号墳主体部遺物出土状況拡大（北より）



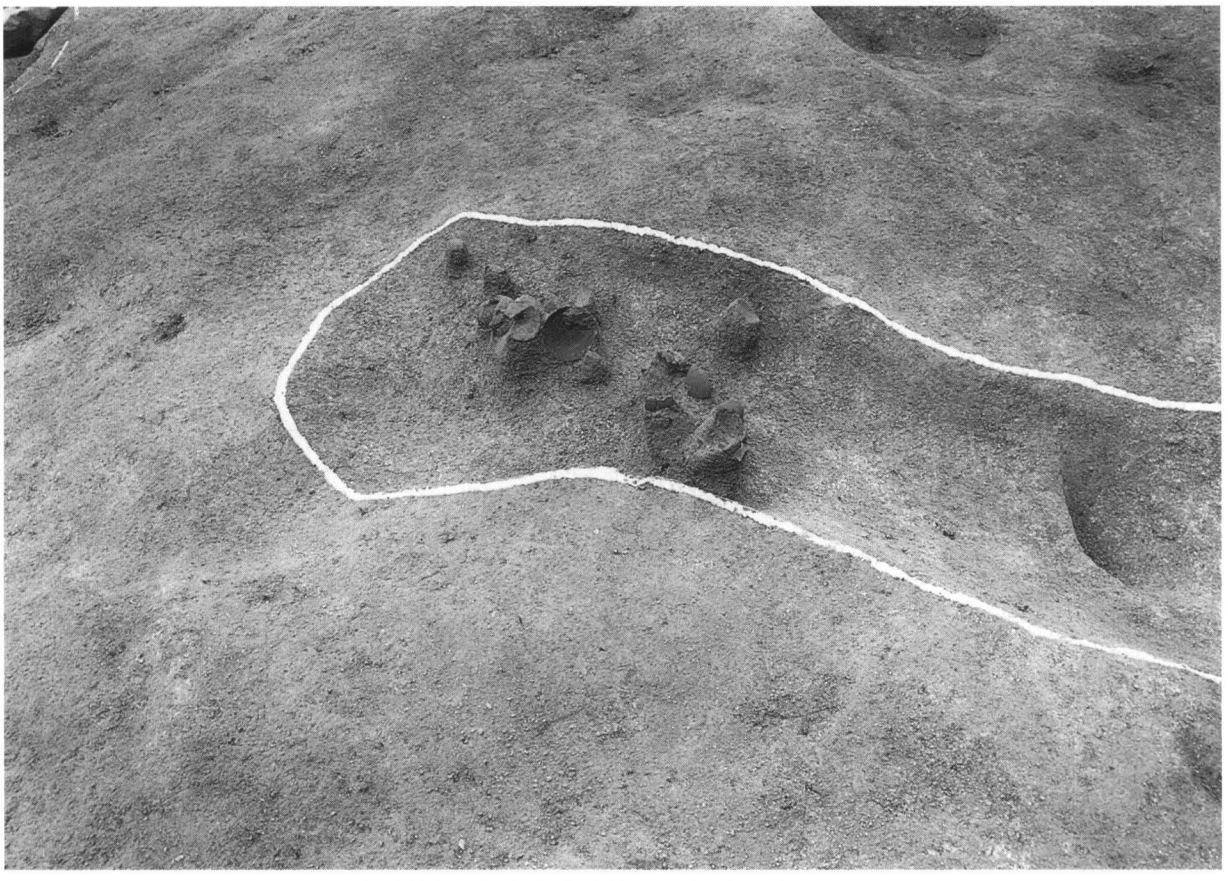
② 樋端 2 号墳主体部完掘状況（北より）

図版８



① 樋端２号墳南側周溝遺物出土状況（北より）

② 樋端２号墳南側周溝鋤・鍬先出土状況（南より）



① 樋端 2 号墳周溝遺物出土状況（南より）

② 樋端 2 号墳周溝土師器出土状況（南より）

図版10

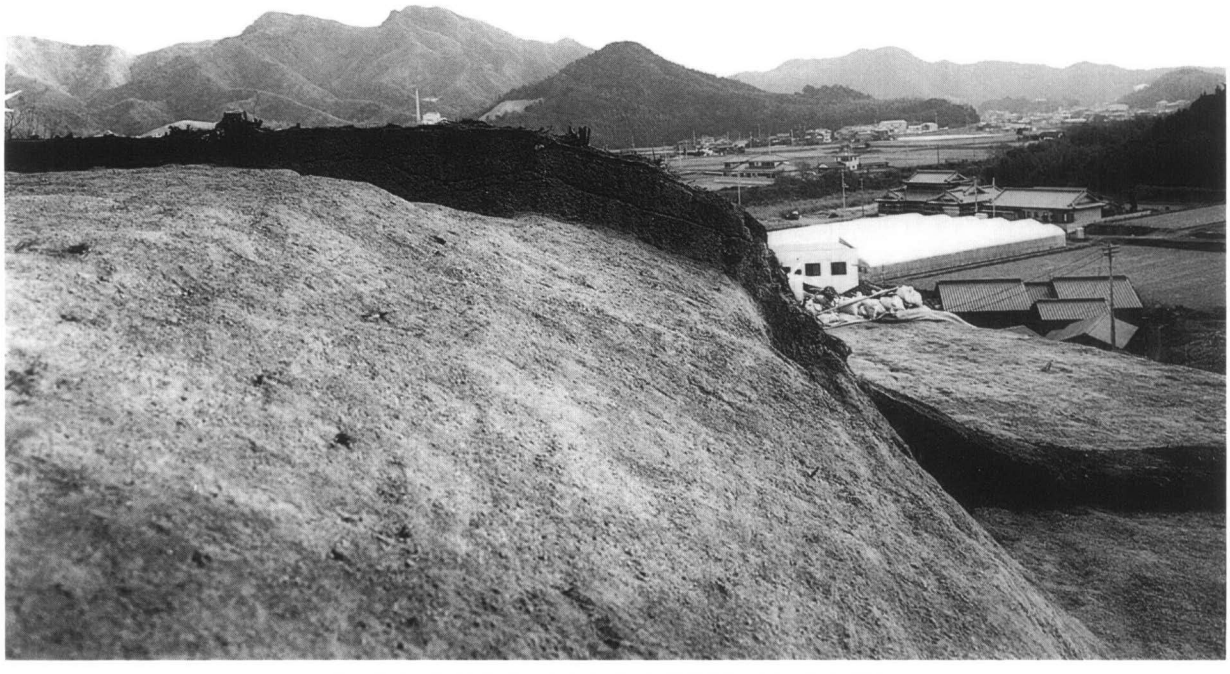
① 樋端２号墳Ｅ'－Ｅ土層断面（北より）

② 樋端１・２号墳、原間５・６号墳遠景（東より）

① 第Ⅱ調査区Ｂ－Ｂ'北側土層断面（北西より）

② 第Ⅱ調査区Ｂ－Ｂ'土層断面（北より）

図版12



① 第Ⅱ調査区Ｂ－Ｂ'中央土層断面（北西より）

② 第Ⅱ調査区Ｂ－Ｂ'南西側土層断面（北西より）

第Ⅱ調査区完掘状況（真上より）